

I S S N      0563-8461  
東水試出版物通刊 No.364  
東水試調査研究要報No.203

# 八丈管内漁業関連史料

平成 3 年 3 月

東京都水産試験場

## 序

漁獲中心の時代から 200海里時代へ、そして資源管理培養型漁業の時代へと時代を経るに従い、漁業の方向は大きな変貌を遂げてきた。

その大きな流れの中で、島の発展とそこで営まれた漁業の歴史は諸先駆者の生活そのものであり、食文化の歴史でもあったといえよう。

ながい島の漁業史のうちで、東京都水産試験場の諸先輩が手がけてきた足跡は、ほんの小さな点にしか過ぎないが、点から滲み、継がれ、描かれた痕跡は、その時代、時代への漁業を支え、発展させてきた礎になったものと確信する。

歴史は正しく誰かが伝えてゆかなければならないものであり、過去を知ることによって、現在を見詰め、そこで自づと展望が開けて来る。

東京都水産試験場では、昭和59年3月に「伊豆大島漁業史料」を発行した。このはしがきで、大島の漁業が島という特殊条件のもとで、どのような経過をたどったかを知ることが、今後の漁業の在り方を検討していく上で極めて重要と判断したためと記している。

八丈島では、昭和59年頃より始まったハマトビウオの大不漁が、漁家経営を圧迫し、その打開策として今までと異なった視野での検討が要求されている。このためには八丈管内漁業の発展の経緯を解析することも重要と判断し、伊豆諸島での第2弾として「八丈管内漁業関連史料」を編纂した。

日常での職場では、直面する試験研究に追われ、貴重な史料を繙く余裕のない昨今、幸いに水産行政を経験し、精通した嘱託員の配属があったのを機に、取りまとめたものである。

この史料が21世紀の漁業展望を検討する上で、有効に活用されることを期待したい。

平成3年3月

東京都水産試験場長 三村 哲夫

## 編纂にあたって

- 1 八丈管内の水産史を編纂する目的で、年表作成に着手したが、分量が多いため利用者の利便を考慮し、10章に分類編纂した。
- 2 内容は年表的なものから、史料的なものとし、史実を多く残すようにし、将来の水産史研究の一助となるようにした。
- 3 古いものについては、記述内容から「何故」という疑問の生じるものもおおいが、前述の理由で今後の解析を待ちたい。
- 4 年代により内容・分量に統一性がないが、収集した史料の量によるため、そのまま編纂した。そのため、現代に近づくほど分量が増加している。
- 5 使用語句について
  - 1) 昭和20年以前については、極力文献の語句を残した。
  - 2) 敬称は原則として省略させていただいた。
  - 3) 「竣工」と「進水」。八丈管内では、進水と表現するが、一般には、進水後に艀装を行うため、「竣工」に統一した。
  - 4) 「春とび」「春飛魚」はハマトビウオ、「石花菜」「天草」はテングサのことであり、詳細は方言集を参照されたい。
  - 5) 第7章（漁業の調整）昭和25年の項の「私案」は、通常は「試案」とすべきであろうが、漁業改革時の利害は、「試案」が出せず「私案」で調整を行ったと言う経緯を生かしたものである。
  - 6) 第3章「漁業の変遷」の水揚量の地区別記述は原則として、第2章「漁業団体の沿革と活動」の漁協と整合性をもたせた。



# 目 次

1	指導機関の沿革と活動	1
2	漁業団体の沿革と活動	2 4
3	漁法の変遷	4 2
4	水産加工の変遷	7 2
5	生産基盤の整備	7 7
6	漁港等の整備事業	8 6
7	漁業の調整	1 0 5
8	遭難等	1 2 1
9	水産生物等のトピックス	1 5 0
1 0	その他	1 5 9
1 1	使用文献	1 7 4
	編纂を終えて	1 7 5

## 編纂担当者

東京都水産試験場八丈分場

分場長 西村 和久\*

嘱託員 角谷 正幸\*\*

---

\* 現奥多摩分場長  
\*\* 元八丈支庁水産係長

# 1 指導機関の沿革と活動

・指導体制の沿革・・国（測候所・農水省等）・都（水産課・水試・支庁・物価局等）・町等の水産に関連する施策

・水産指導・助言

西暦	年号	特記事項
----	----	------

- 1901 明治34年6月：八丈島庁、気象観測囑託さる。
- 1906 明治39年4月：八丈島測候所、中央气象台付属測候所として開設。  
4月：（小笠原水産経営事業開始）
- 1907 明治40年1月：八丈島測候所、大賀郷村字楊梅ヶ原に庁舎を新築、1日6回観測実施。
- 1913 大正2年4月：（小笠原水産経営第二期事業開始）
- 1918 大正7年：本年度から向う5ヶ年間（大正11年度迄）内務省より、伊豆七島水産経営事業として、継続事業費57,941円69銭の支出を受け、指導船（33,950円）、知音丸（51t）・青雲丸（19t）を建造、漁業の指導奨励に当たり、かつ、八丈島三根村に現業場を設置、製造面の指導開始、節類・缶詰製造指導試験、その他魚介藻類の移殖、増殖を図る事となる。  
大正7～8年度・事業施行の調査諸準備（指導船2隻建造、漁具の買入れ、製造根拠地の選定、根拠地宮造物の建設、機械器具の設備、養殖適地の調査）。  
・八丈現業場、半くさや（塩抜きを必要とするくさや）製造。
- 1919 大正8年10月：指導船、知音丸・青雲丸竣工。大島波浮港を基地とし、伊豆七島近海の鰹・鮪を主体に秋刀魚・底魚・珊瑚等の調査及び漁業者育成を実施。  
11月7日：伊豆七島水産経営八丈現業場発足、費用は国費（内務省）小笠原水産経営と共に東京府経済局農務課水産係に所属。
- 1920 大正9年1月：八丈現業場、試験事業開始。  
・伊豆七島水産経営事業内容（大正9年～11年度）：鰹釣漁業試験、漁船船員の養成、鰹餌料の供給、鮪延縄漁業試験、秋刀魚流網漁業試験、深海漁業試験等実施。漁獲物の大部分は、八丈現業場で製造試験材料に供す。  
4月：（小笠原水産経営第三期事業開始）  
5月：知音丸、秋刀魚漁操業試験。八丈漁民を乗船させ大島近海で操業（大正12年12月以降秋刀魚回遊希薄のため中止）。  
9月：八丈島測候所、暴風警報信号標識掲揚開始。  
・八丈現業場、トコブシ缶詰試験及び職工養成。
- 1921 大正10年：知音丸・青雲丸、大正10年～12年餌料イワシ供給試験（波浮港・神

湊港・伊ヶ谷に生簀を設置)。

・八丈現業場、缶詰製造試験(メバチ・カジキ油漬・メカジキ水煮・バラムツ味付)・はんぺん(鱻・鱈)・鱻切肉製造試験及び職工養成

・三根村において農業・水産補習学校が大正から昭和の初期にかけて開設され、三根小学校に「大正10年・11年・12年の水産講義」及び「松本茂雄講述・昭和5年度・同6年度水産科講義」なる資料保存さる。

1922 大正11年：八丈現業場、節類製造試験(鯉節・鯉亀節・鮪本節・物太亀節)及び職工養成。

1923 大正12年4月：伊豆七島水産経営事業第二期事業開始(大正12年4月1日～昭和3年3月31日)。  
第一期事業内容の外、漁船船員講習、機関士講習、珊瑚漁場探査試験、製造試験に於ては製造業の指導開発、節類・缶詰職工養成。飛魚回遊に関する調査、沿岸観測。養殖にあつては、魚介藻類の移植、増殖事業の指導を実施。

1924 大正13年7月：伊豆七島水産経営事業、八丈島西北水深100尋で白珊瑚を発見。

・八丈現業場、遠洋漁夫の養成。参加者八丈島1名(七島全体4名)。

1925 大正14年7月：東京府知事の「漁業組合振興方策に関して」の諮問に、業界各  
界から、水産試験場の設置促進の答申あり。

1927 昭和2年11月4～17日：八丈現業場、発動機機関講習会を開催。受講者15名。

・八丈現業場、集魚灯予備試験末吉地先において実施

・八丈現業場、遠洋漁夫の養成・鯉漁八丈島41名(七島全体285名)。

1928 昭和3年1月25日：(東京府水産試験場及び大島現業場、農林省指令水第5020号により設立認可)。

4月：伊豆七島水産経営、第三期事業開始。

7月7日：静岡県水産試験場魚群偵察飛行機「白竜号」飛来。

8月24日：(東京府水産試験場庁舎完成、業務開始)

10月13日：(大島現業場庁舎完成、業務開始)

1931 昭和6年八丈現業場、目鯛延縄漁業導入試験実施。

1932 昭和7年：八丈現業場業務内容：珊瑚漁場調査・緒長鮪延縄漁業試験・章魚壺漁業試験・目鯛延縄試験・トコブシ水煮缶詰製造試験・乾トコブシ製造試験・夏飛魚・青鯛加工試験・岩海苔佃煮缶詰製造実地指導・雲丹塩辛製造講習・岩海苔増殖試験・甲板部講習会・海洋定地観測その他。

・八丈現業場、昭和7年～10年：岩海苔増殖試験(コンクリート塗布)実施。

1933 昭和8年1月16～23日：八丈現業場、甲板部船員講習会開催、受講者19名。

6月25日～7月9日：東京府・水産会主催によるマスク式潜水器講習会、八丈現業場で開催。受講者は17名、3等潜水夫の資格を獲得。尚、潜水器はマスクのみでは60余円、一式では6～7百万円にして60尋以上潜水可能。

9月：中央气象台、伊豆諸島に対する地方暴風警報ならびに地方天気予報の発布開始。

12月8日～9年2月18日：八丈現業場、蛸壺漁業試験実施すれども、波浪のため破損激しく中止。

・（大島現業場、八丈島産トコブシ稚貝 100貫を大島4ヶ所に放流）

1934 昭和9年3月2～30日：八丈現業場、ウツボ漁業試験実施。

9月13～21日：東京府の主催により八丈現業場において漁船技術員養成所技師橋本徳寿を講師として船匠講習会開催、受講者8名。

・東京府水産試験場調査船「武蔵丸」で、伊豆七島漁民先進地視察のため神奈川・四国（徳島）等を視察。社会党代議士浅沼稻次郎の父親が三宅島から同行、盛んに息子の自慢をしたとか。

・八丈現業場、ムロ焚火網漁業試験すれど、集魚灯への魚群誘導なし。

1935 昭和10年1月24日～2週間：八丈島水産会幹旋、東京府主催発動機機関士講習会中之郷漁業組合事務所を会場として開催。

1月：八丈島測候所、沿岸海洋観測（水温・比重）を開始。

2月16日：伊豆七島の沿岸漁業指導のため、東京府が建造を進めていた七島丸が竣工、八丈現業場において・漁業組合による竣工披露協賛会が盛大な披露式を開催。同船は44t、ディーゼル機関75馬力、無線電信・電話・探照灯を装備、漁民の期待高まる。

3月：末吉村菊池昇・沖山幸吉の両名、将来八丈島の漁業界に雄飛すべく、伊豆七島漁業指導船七島丸に乗船、実地研究の成果が期待さる。

・東京府水試「七島丸」、漁況放送実験開始。

5月2～17日：八丈現業場、イカ釣漁具魚法講習会実施。受講者16名。

8月11日：専用漁業権調査のため来島した農林省技師柴戸雅一を囲み、石花菜増殖座談会を末吉・三根両村で開催。その結果マスク式潜水器を使用し磯掃除及び投石を行なう。漁業経営の中で増殖に力を入れることを強調。

8月23日：東京府水試・八丈現業場・八丈島水産会、合同開催で、八丈くさやの製造に関する座談会開催。①八丈くさやの製造方法、②新島くさやとの比較検討、③荷造り移送方法の改良、④取引方法の改善等について意見交換し、今後十分研究して行くことを協議。

1936 昭和11年7月：八丈現業場、缶詰業振興の為サザエ移植試験、三根カトレイ鼻・イデサリ鼻に実施（三宅島坪田より 117貫。1個6匁、1829個、内移送中5貫 400匁斃死）。

・八丈現業場、漁業調査（飛魚流刺網・イカ・底棲魚・横断観測「神

湊～黒瀬」・定地観測「神湊・藍ヶ江」)実施。

7月：八丈島測候所、中央气象台の付属から、中央气象台八丈島測候所となる。

1937 昭和12年1月5～25日：八丈現業場、甲板部講習会（丙種航海士）を開催。受講者は24名。

4月29日：漁場探索中の七島丸から三根漁業組合宛に「新島で飛魚が大漁」の連絡あり、翌30日大黒丸急遽出漁。

7月：八丈現業場、養殖試験、サザエ再捕55個（重量で1.8倍に成長）5割内外棲息と推断。

10月：八丈島測候所、気象放送受信用として、無線受信機を設置。

・八丈現業場、漁場試験及び調査（鱈漁業・イカ釣漁業・底魚・飛魚流網）。

・八丈現業場、海洋観測・海流調査（4回/年）700本投壘。12年10月の1本、13年5月沖繩宮古で回収。定地観測を実施。

・八丈現業場、製造試験（広瀬貝野菜入缶詰・飛魚魚団缶詰・飛魚手塩干物・飛魚燻製・ムロくさや・ムロ手塩干物）の指導のため、東京府水産試験場大島現業場より技師来島。

・八丈現業場、ウツボ鞣革加工試験を昭和7年より4年継続して、農林省水産講習所に依頼したところ、完全に成功し婦人靴・ハンドバック・ガマグチ・ステッキ等作成、米国よりも注文あり。但し、隣県で産業化。

1938 昭和13年1月5～9日：八丈現業場、漁船従事者素質改善講習会開催、受講者45名。

7月：八丈現業場、マスク式潜水夫養成講習会開催、受講者22名（朝鮮半島より海女80人以上招致していた経費節減のため）。

1939 昭和14年2月：八丈島測候所、天気予報・警報等規定改正により、担当地域は大島を除く伊豆諸島となる。

7月11日：東京府水産試験場の石丸技手、芝園丸で来島、島で初めて天草の磯掃除を三根・末吉海岸で、12日から予算600円で開始。

8月25日：林府議会議員・農林省水産講習所学生一行、三根をかわきりに、水産講演会と映画会を開催、水産思想の普及に努める。

1940 昭和15年2月：八丈島測候所の担当地域、八丈島一円となる。

7月30日～8月12日：八丈現業場、マスク式潜水講習会開催。受講者19名。

・東京府水産試験場「七島丸」、府漁連・八丈島水産会と共同で孀婦岩八丈島間の珊瑚調査をせしも有用珊瑚得られず。

1941 昭和16年：八丈現業場、漁撈試験（底棲魚・春飛魚流刺網）、重要水族調査（飛魚生態調査）、海洋観測（定地観測・横断観測・海流壘）を実施。

- 11月26～27日：八丈現業場、ウツボ鞆革講習会開催。受講者10名。
- 1942 昭和17年1月：八丈島測候所、区内観測所として末吉気候観測所を開設。
- 1943 昭和18年7月：（都制施行により府から都へ）
- 3月12日：八丈現業場、初飛魚操業試験実施。25反の網で日暮前10尾、日暮から5尾。16日は、28反の網で1回に150尾を水揚。
- 1944 昭和19年1月6～24日：応召のため発動機船の機関士が払底、八丈現業場、機関士の養成講習会を開催。受講者は22名、全員合格。
- 3月17日：八丈現業場では、第三神港丸・日吉丸を借り上げ春飛魚の試験操業を実施。47尾を漁獲。
- 7月：第二次大戦により八丈現業場、軍の宿舎となり業務中断。主たる備品は大島分場倉庫へ移送。東京都八丈支庁経済課内で執務、業務内容は、漁民の実地指導及び水揚統計。
- 8月：八丈島測候所、沿岸海洋観測を中止。
- 1945 昭和20年：八丈現業場の備品の大部分大島分場倉庫で焼失。
- 1946 昭和21年2月：八丈島測候所、毎時24回観測通報を開始。
- 2月：八丈島測候所、官庁用無線送受信設備(A1A)を設置、16日23時から気象通信業務を開始。
- 3月：八丈島測候所、沿岸海洋観測を開始。
- 10月：八丈支庁に水産課新設。初代課長に森田未蔵赴任。八丈現業場同課内において執務。
- 1947 昭和22年4月：八丈現業場、国庫補助80万円で庁舎の復旧工事執行、第8都水丸丸(4.35t 17馬力)無償借用(監督者1、船長・機関長・他に臨時漁夫5名)春トビウオ調査実施。
- 5月16日：魚類も主食同様に統制、本島への割当は第一・四半期40,000貫の20%に当たる8,000貫。1人当て3ヶ月に500匁。
- 5月20日：敗戦によって南方諸島を失い、火の島「鳥島」は気象観測地点として重要となり、気象観測所を開設することになり、この施工のため、本島からも若人28名が、凌風丸で神湊を出港。
- 6月1日：中央气象台、鳥島測候所を開設、30余名常駐。
- 6月13日：魚介類の供出割当量が第一・四半期当て30,000貫になったことから、配給基準量も20%の6,000貫となる。なお冠婚葬祭・公式宴会及び業務用は、大賀郷村：100貫、三根村：100貫、樫立村：40貫、中之郷村：60貫、末吉村：40貫、鳥打村：15貫、宇津木村：15貫。
- 8月21日：物価庁、新物価体系に沿う物価を提示。魚類は平均8割、貝は6割の値上げとなる。
- 9月1日：大賀郷村役場前の天気予報掲示板は、戦時中一時中断していたが測候所の手により復活。

12月：臨時漁船取締規則により実施されている漁船登録、連合軍の指令により、府県名の頭文字を2字ローマ字で冠する方式となる。

・魚介類供出割当実施。八丈島は160,000貫。統制と共に漁業資材・燃料もリンク制となり強化さる。

1948 昭和23年 2月21日：支庁会議室において出荷予定協議会開催、漁獲物の島内消費を除いた残量漁獲高の6割を塩乾魚、2割を塩蔵、2割を鮮魚として出荷決定。

2月25日：農林省の統計課が農林省統計調査局として拡充独立し農林省東京作物報告事務所八丈島出張所が支庁内に設置され、初代所長は支庁産業課勤務の浅沼幸秀就任。

2月：テングサ生貫6,000貫に対し1tの油が割り当てになり、昨年迄の加配米は天草生貫5貫に対し7勺だったのが1合となる。

3月8日：魚価の統制価格が4割5分引き上げらる。

3月8日：支庁会議室において、各関係者代表が集い、春トビウオについて協議。昭和22年6月より12月に至る島内の鮮魚配給状況が、大賀郷1,825貫、三根153貫、檜立178貫、中之郷1,050貫、末吉530貫、合計3,736貫の家庭配給の不足のため、トビウオに換算して約4本の平均不足であり、今年度分も含めて島民1人当たり8本を配給することに決定価格は統制価格12円50銭。

3月26日：関東海運局東京支局八丈島出張所、八丈支庁内に看板を掲げ発足。初代所長峯元寿郎。

5月1日：海上保安庁新規発足、三根村の神湊灯台同庁の所管運営となる。

9月20日：「重要物資輸送証明規則」が制定公布され、鮮魚介及び指定水産物の出荷輸送には証明書が必要となる。個人の島外搬出は1貫以内となる。

12月：八丈現業場、漁業海岸局開設（指導用）。無線による漁況・海況速報開始。

・八丈現業場、島周観測（2回/年）・定地観測（毎日10時、神湊）、海洋横断観測（神湊北100mを起点とし、5～10哩及び黒瀬1回/年・12月）を実施。

1949 昭和24年 1月：八丈島測候所、区内観測所として青ヶ島気候観測所を設置。

2月15日～3月10日：八丈現業場、丙種航海士・機関士の講習会を開催。受講生、甲板21名・機関39名。同合格者、甲板19名、機関34名。

3月：八丈島測候所、小島鳥打に雨量観測所を設置、観測開始。

4月1日：八丈現業場、庁舎復旧し引越。

4～5月：八丈現業場、トビウオ塩乾品実地指導。

6月：八丈島測候所、中央气象台から東京管区气象台に移管。

6月：八丈現業場、テングサ漂白法実地指導。

7月11日：八丈現業場、海洋横断観測実施。

7月21日：八丈現業場試験船・拓洋丸（3t、焼玉17馬力、乗組員・正職員3名、臨時4名）竣工。新漁場の開拓に期待集まる。

8月：八丈現業場、サメ利用製造試験（ハンペン）実施。

9月：八丈現業場漁業海岸局、キテイ台風により大島漁業海岸局送受信不能となり、その間代行。

9月：八丈現業場、ギンタカハマ肉利用委託製造試験（佃煮）実施。販売価格に問題あり実働せず。

・「東京都水産製品検査規程」に基づく検査（テングサ）開始。

1950 昭和25年 1月1日：出版用紙・木炭・魚・肥料などの統制が次々と廃止。9月には衣料切符制度も無期限停止。

1月：八丈現業場、底魚塩蔵製造試験（ハマダイ）実施。

4月1日：水産庁東海区水産研究所八丈島支所、大賀郷八重根に開設。初代駐在員梅林脩、5月19日着島赴任。尚、この支所はその後試験地・臨時試験地と名称が変更されながら昭和26年9月駐在員は召還され、駐在員不在のまま、昭和35年3月末日をもって閉鎖。

4月：八丈現業場主要業務計画  
漁業試験：春トビウオ流刺網・ムロアジ棒受網・底魚一本釣  
製造試験：春トビウオ塩乾品・トコブシ輸出缶詰・ムロくさや・底魚粕漬  
漁業海岸局・海洋定地観測（以後継続）

5月23～31日：八丈現業場、漁具構成及び修繕方法講習会を中之郷青年館に於て開催。受講者72名、全員女子。

6月：八丈現業場、底釣用沈子の改良（沈降速度早く、回転なく、沈子が海底に絡まない等）実施。大いに普及。黒瀬の水深図作成（ハマダイ・ヒメダイ・アオダイ・メダイ・サバの生息水深を明記）。

6月：八丈現業場、トコブシ輸出向け缶詰製造試験実施。ハワイへの試験輸出好成績。民間の缶詰工場創立、トコブシ1貫目150円のもの、240円となる。

8月1日：八丈現業場、機構改革で東京都経済局農務課水産係の所管から、東京都水産試験場の管轄下に入り、東京都水産試験場八丈現業場となる。初代場長、松本太郎。

8月25日：八丈現業場、ムロくさや東京への出荷試験（3回）実施。

1951 昭和26年 2月27日：東京都、産業振興対策協議会開催。構成は水産生産部19名加工部11名。

2月：八丈現業場、底魚粕漬製造試験。（メダイよりアオダイが好成績）

3月4日：八丈現業場、漁船発動機系統の講習会開催。

4月16日：（船舶職員法制定。5t以上20t未満の漁船にも海技免許者を乗せる事となる）。

4月26日：八丈現業場、「八丈島近海海況旬報（表面水温は八丈島測候所から入手）」発行。

4月：（配給並びに価格統制撤廃）

5月18日：八丈現業場、海流板漂流試験を、三根沖で5月20日まで実施。  
6月23日：産業振興協議会開催、規程及び運営方針の審議実施。参加者は都水産担当部長・支庁水産課長・専任委員は生産部で菊池勇・小崎一右衛門。加工部で西浜惣五郎・松岡光太郎。学識経験者で松本太郎・梅林脩。

7月10日：八丈現業場、太平洋学術委員会の八丈島近海各種調査観測の内、海洋観測部門で協力。

7月中旬：八丈現業場、東京水産大学神鷹丸と八丈島近海・新黒瀬を共同調査。

10月：八丈現業場、三陸沖のサンマ漁況及び海況図を発行（10月11日、10月16日、10月24日）。

12月：八丈現業場、底魚の体型（魚体の大きさハマダイ1貫前後・アオダイ平均150匁・ヒメダイ平均150匁・キントキ平均200匁・メダイ平均1貫500匁）漁場地形推定図を作成配布。好漁場順位は①洞輪沢沖漁場②成金漁場③浅礁漁場④地山漁場⑤東山漁場。

・（注）底魚の漁獲がトビウオを凌ぐ事さえ珍しくなくなり、漁船の増加により漁場が狭隘、新漁場の開発が急務となる。八丈現業場の拓洋丸が発見した神湊北北東1.5哩の瀬は好漁場。

・八丈現業場、漁具改良として、人造テグスを茶葉で煮ると手が滑らず、餌付き良好となる事を確認。

1952 昭和27年：（水産製品検査条例の一部改正、主な品目は、寒天原藻・乾ノリ・魚類乾製品・ラッコ・オットセイ・獣皮及びその製品等となる。）

3月：八丈現業場、トビウオ流刺網にナイロン系網導入試験を実施。

6月21日：東京都水産試験場、「都南丸」サンゴ試験調査に関する打合せ、八丈現業場で開催。

6月26日：八丈現業場、水産指導研究会を開催、週間天気予報・バッテリーの保存取扱い・強風特報を漁民に知らせる方法・灯台の利用方法につき協議。

7月18日：東京水産大学「神鷹丸」新黒瀬で長さ1.5寸、太さ約1分のシロサンゴを採取。

8月：八丈現業場、大島分場と共同で黒瀬及び鳥島のサンゴ調査。

9月：八丈島測候所、「八丈島の天気俚言」を作成。

12月1日：八丈支庁、水産課を廃止、産業課水産係となる。

- 1953 昭和28年 4月：八丈現業場、春トビウオの燻製を製造。  
 5月：八丈現業場、トビウオ練製品試験開始。  
 12月：八丈現業場「拓洋丸」、ナイロン系テグスの導入により漁獲成果を挙ぐ（2日三根出漁船20隻水揚総額 221貫、内「拓洋丸」98貫を水揚）  
 ・船舶職員法制定に伴う、海技免状取得講習会開催。
- 1954 昭和29年 1月15～25日：八丈現業場、機関士養成講習会を開催、受講者45名。  
 2月7～9日：八丈現業場、丙種機関士講習会を開催、合格者16名。
- 1955 昭和30年 3月：東京都水試「豆南海域におけるサンマ稚魚の分布」（要報No.3）を刊行。  
 4月：八丈現業場主要業務計画  
 漁業試験：ムロアジ棒受網・底魚一本釣・春トビウオ流刺網・夏トビウオ旋網、製造試験：トビウオ燻製品・トコブシ粕漬・ギンタカハマ塩詰・くさや、重要水産物資源調査：稚魚調査・トコブシ調査。  
 9月：八丈現業場、トコブシ粕漬試験、原料入手困難なため本年度中止。ギンタカハマ塩詰製造試験開始。  
 10月：水産製品検査条例を寒天原藻等非製品検査条例に改め、対象品目は寒天原藻のみに限定（乾オニクサ・乾ヒラクサ・乾ドロクサ・乾トリアシ）。  
 11月1日：東京都水産試験場2級廨に昇格、3部6課制となり、同時に大島分場3級廨となり、八丈現業場を管轄下に置く。  
 11月：八丈現業場、くさや液の塩度と糖度の変化について、9加工場を調査。
- 1956 昭和31年 2月24日：八丈現業場「拓洋丸」昼網で春トビウオ 320尾漁獲。翌25日全島一斉に出漁するも、荒天のため低調。  
 4月：（漁業用労務加配米制度廃止。尚、漁船乗組員用漁業米制度は存続）。  
 6月：八丈現業場、底魚一本釣りの餌として、生イカ・油付イカを比較試験、漁獲少なく良否の判定不可。  
 昭和31年度寒天原藻検査数量、25,697貫（手数料1貫当たり1円）。
- 1957 昭和32年 2月：東京都水試「伊豆諸島近海におけるハマトビウオの生態」（要報No.6）刊行。  
 4月：東京都訓令第84号により、八丈現業場、大島分場より分離、本場直属の八丈分場（4級廨）となる。初代分場長、阿部正太郎。  
 12月14日：八丈分場拓南丸（14.67t）竣工。この拓南丸は分場としては、初めて島外の造船所において建造、ジーゼルエンジンを搭載、最新式の無線電話・魚群探知機・棒受網用捲揚機を装備。
- 1958 昭和33年 6月：八丈分場、大島分場よりサザエ 350個を取り寄せ神湊前に放流

8月：八丈分場「拓南丸」、八丈島NE-Eに海図に無い浅瀬を発見。黒瀬に劣らぬ漁場である事が確認され、漁業者がこの礁を「拓南山」と命名。

9月5日：小島断水でSOS、拓南丸で100石の水を輸送救援。

11月25日：八丈分場拓南丸、方向探知機を装備。

- ・八丈分場、テングサ成長調査開始。
- ・八丈分場、製造試験部門を廃止、増殖部門に力を入れる事となる。
- ・八丈分場「拓南丸」、台風避難のため波浮港に回港。

1959 昭和34年 3月：東京都水試「伊豆諸島におけるハマトビウオの生態第2-6報」(要報No.18)刊行。

5月27日：神湊漁港船揚場完成。八丈分場指導船拓南丸(15t)の試験上架に成功、今後の漁船大型化の可能性大となる。

5月：八丈分場、「八丈島近海海況旬報」と「漁況・海況報告書」を発行。

6月20日：八丈分場、新黒瀬漁場発見。(注)後の「中の黒瀬」。黒瀬・新黒瀬の中間N33°30' E 139°52'。八丈島漁船40隻・他県船10~15隻出漁。八丈分場拓南丸、方向探知機・魚群探知機の無い小型漁船の誘導を都南丸とで実施。魚群探知機利用の関心著しく向上。

7月下旬：拓南山、夏期視界不良のため、拓南丸が連日20~25隻の漁船を誘導。多い日は約6,000kgの漁獲。

7月下旬：拓南丸サンゴ漁場(黒瀬)調査すれども採取不能。

9月23日：八丈分場拓南丸(15t)、八丈小島の水飢饉に対し、飲料水4斗樽2樽、ハッチに11tを2回に互り輸送。

1960 昭和35年 1月15~19日：八丈分場、電気講習会を開催、講師は都電気研究所、受講者は69名。

4月：東京都水試「伊豆諸島近海における黒潮の消長と春季漁況」(要報No.21)刊行。

- ・八丈分場主要業務計画  
漁業試験 : ムロアジ棒受網・サンゴ漁業・深海底釣漁業・春トビウオ流刺網・サメ漁業  
資源基本調査 : テングサ成長調査・サザエ標識放流。

6月2~8日：八丈分場、大島分場と共同でテングサ採取調査、定点10ヶ所。

6月：八丈分場、ウェットスーツ(潜水衣)の保存・修理方法・値段等を啓蒙。

7月13~22日：拓南丸、サンゴ漁場調査。拓南山で石化桃サンゴ10cm。黒瀬で赤サンゴ枯木径5cm、長さ20cm。桃サンゴ生木2本採取。

9月：八丈分場、底釣について麻糸・ナイロン道糸・ハイゼックス道糸の比較試験実施。

・八丈分場、「春トビウオ漁況・海況」三根34隻、大賀郷15隻につき、早朝聞取調査を実施、5日毎に船主宛に資料を配布、3月3日から5月5日迄に9号を発行。37年以降42年まで毎年調査を行い、トビウオ漁の盛期には毎日「速報」を発行した。

1961 昭和36年 1月6～25日：丙種機関士講習会開催、講師は大日本水産会漁船技術員養成所、森隆三。受講者は47名、合格40名。

1月28日：八丈島測候所長講師となり、気象講習会開催、受講者47名。

2月8日：八丈分場、中之郷漁協で春トビウオ漁況説明会を開催、参加者65名。

2月24日：大島分場・漁業指導船「あづま」竣工披露のため来航、翌25日神湊漁港で一般公開。「あづま」の性能、62t、ジゼルエンジン250馬力、時速9ノット、最高出力11ノット、方探、魚探、旋回窓、補助エンジン30馬力。

4月：八丈島測候所、3課制（業務課・技術課・高層課）0なる。

6月：八丈分場、曳縄漁業を新規漁業として育成するため、中村寅男（和歌山）を講師として招き講習会開催、潜航板による上曳飛行機漁法実習、受講133名。

7月：八丈島には八重根に東大地震研究所の津波計と、神湊に簡単な検汐儀があったが、気象庁は八重根に新型のフース型検汐儀を新設、結果は測候所で無線受信記録のもの。これで津波被害の未然防止に期待大。

・八丈分場、島内水産研究会に、本年の春トビウオ漁期から各船別に操業日誌をつけさせ、八丈分場で集計し、毎日漁況速報を出す事とす。

1962 昭和37年 1月5～25日：八丈分場主催により、丙種航海士講習会・丙種船長講習会を、大日本水産会漁船技術員養成所、亀山盛一郎を講師として開催、船長13名・航海士36名が国家試験に合格。

4月：八丈分場、35年1月より実施のテングサ調査結果、旬報で発表。  
(注) 生長12月頃より盛ん、3～4月最盛、9～10月一番生長が悪し、収穫は4～5月の水温低き年程良好。胞子は5～6月に形成。

6月5～14日：八丈分場、中村寅男（和歌山）講師を招き、中層のシャビキ漁法を研修、受講者140名。その後、地元船6隻三宅島に出漁、好成績を納む。

6月27日：八丈分場、海難防止講習会（講師海上保安庁）開催、受講者140名。

6月：八丈分場、テングサ漁期前、枠取りを実施（三根5、大賀郷2末吉2、共有地2の計11ヶ所）。

6月：八丈分場、水産業の発展向上と漁民指導のため、「八丈島近海海況旬報」を10年前から発刊していたが、10周年を記念し、タイトルを「八丈分場ニュース」と改め6月、第1号を発刊。

7月5～10日：八丈分場、下田よりサザエ187kg 移殖（169gのもの 590

個、46g のもの 1,950個)。

7月22日：八丈分場、異常水位低下を観測。前年比で80cmも低下。

7月：八丈島測候所、検潮儀による検潮観測を開始。

7月：八丈分場指導船拓南丸、ロラン受信機を装備。

8月：大島分場「あずま」による先進地視察を実施、和歌山のすさみ漁協、土佐清水窪津漁協を訪問。

1963 昭和38年 1月14～23日：八丈分場、都経済局電気研究所、栗林宏技師を講師に「一般電気についての学理及び実地指導」の講習会を開催。受講者40名。

3月：八丈分場、海光棚（鉛沈子の要らない沈子網）試験実施。

4月：春トビウオ漁業で昨年来人手不足の状況が見られるため、八丈分場指導船拓南丸、揚網機（ネットホーラー）を試験装備、良好な結果を得る。

10月：東京都水試「浅海増殖開発事業効果認定調査」（要報No.44）を46年の第9報まで刊行。

1964 昭和39年 2月13日：太陽活動の静かな年の国際観測の八丈島測候所、超上空の気象観測を実施しているが、地磁気と黒潮の変動調査も八丈で実施。地磁気観測は神湊の松林内で、向こう2年間観測することに決定。一方黒潮観測は東海区水研の阿部宗明博士が読売新聞科学報道本部とタイアップ、空から近く実施。

・12月：八丈島測候所、三根無線中継所を開設。

1965 昭和40年 1月15日から向こう6週間：24時間制で、ロランCの誤差測定を専ら無線受信により、モニター車で実施。

4月：八丈分場主要業務計画

拓南丸事業：春トビウオ漁業調査・深海漁場調査・アオムロ漁場調査・浅海漁場調査（テングサ・イセエビ）  
波高観測：（以後継続）

4月：八丈分場では、昨年からアワビの養殖研究を続けているが、メガイアワビの受精卵300ヶを千葉県小湊から取り寄せ育成、その成育が良く今後が期待される外、資源枯渇化のトコブシについても、人工受精で増殖を図る計画。

1966 昭和41年 4月1日：海上保安庁水路部、黒潮調査の一環として大賀郷ナズマドに八丈島多層水温連続観測所を設置。同観測所は4.84㎡の鉄筋コンクリートブロック平家建、無人水温観測所として機能することとなる。

4月5日：八丈分場、トコブシ標識放流試験実施。

4月7日：八丈分場、伊豆一号によるテングサ施肥試験実施。

6月：東京都水試「漁況海況予報事業報告」（要報No.50）刊行。  
（以後継続）

7月1日：三原山頂に海上保安庁、ロランA局を設置完成開局。午前9

時に正式電波発信開始。これにより大島のロラン局は撤去となる。アンテナ塔は80m、電力はP0 130KW(P-P)1850キロサイクルの電波を1000分の49.5秒毎に発射。有効範囲は昼間約700海里、夜間は1400海里。建設総予算1億6700万円。これで日本の周辺のロラン網完成、航空機・漁船・商船等の船舶の運航、漁場の確認等に多大の効果期待さる。

7月6～7日：海上保安庁、国際黒潮共同観測の一環として黒潮の位置を正確に掴むため、八丈島に永久観測装置を設置、水温の連続観測を行なう事となる。これは世界でも初めてのもので、この装置は、神湊港1500m沖合の海面下50mの観測機を太さ4cmの海底ケーブルで繋ぎ、深さ120mの水温を50m間隔で測定、八丈分場に備え付けの機械で、自動的に記録されるもの。観測は8日から正式に開始。

8月：八丈分場、ムロアジ棒受網漁業の代用餌料「豊漁」の試験を実施、効果を認む。

1967 昭和42年 1月6～17日：東京都主催による漁業特殊無線技術者修練会、八丈分場で開催、講師として関東電波監理局の柴田・若月・山下・鈴木の4氏が当たり、最終日に日本電波協会の菅原試験官によって認定試験を実施、60名全員見事合格。殊に女性として参加した堀口ツヤは、本島第1号の女性無線士となる。

3月：東京都水試「磯根資源調査」（要報No.67）を44年の第3報まで刊行（フクトコブシ）。

7月1日：第三海上保安本部所属、三原山頂にある電波灯台三根航路標識事務所、八丈島ロラン航路標識事務所と名称変更。

12月20日：八丈分場拓南竣工。（19.52t、長さ15.7m 幅3.80m 深さ1.65m、速力8.5ノット、機関ヤマジーセル 160馬力、補機関20馬力、発電機7kw 1台、3kw1台、SSB10w無線電話、小型レーダー（30マイル可視）、ローラン・魚群探知機（200KC、75KC、28KC、の三周波切替）、油圧操作で作動する漁撈器具を装備）。

1968 昭和43年 2月：東京都水試「キンメダイの生態」（要報No.62）を刊行。

2月：東京都水試「底魚資源調査」（要報No.61）を、48年の第7報まで刊行（メダイ・アオダイ）。

・八丈分場、耐水段ボールの効果を紹介。トビウオをトロ箱から耐水段ボールに変更。（長崎で27時間の郵送に耐えた先例による。）

11月9日：気象記念日に当たり三根第五幸栄丸（39t、船主浅沼一幸）栄丸（15t、船主小崎佐一郎）、東京管区气象台長から晴れの表彰を受く。理由はこの2船が過去2ヶ年間鳥島方面に操業中、毎日の天候・気圧・気温・水温等気象の観測資料を、一日に1回か2回八丈分場の漁業海岸局を通じ、八丈島測候所へ通報してきたもの。鳥島の観測体制が無くなった現在、大変貴重なものでその功績は大。

1969 昭和44年 3月：八丈分場のSSB2MHZ局、都漁連へ漁業用局の免許おりたため、二重免許（指導用・漁業用）で運用するようになった。DSB27MHZ局も同9月、同じ運用となった。

8月：八丈分場、棒受網用揚網機、宇之丸で試験。明神丸は委託を受け、棒受網代用餌料を試験。

9月25日：八丈町議会第2回定例会開催、神湊漁港拡張に伴う八丈分場の移転のため、町有地三根カトウレ 3,371㎡を、無償で東京都経済局へ譲渡することを決定。

12月1日：八丈分場、増殖部門強化のため組織改正、1室増設（4人増員）3級麻に昇格。分場長阿部正太郎。

1970 昭和45年 1月：八丈分場、インダイの回游や棲息状況調査のため、二匹に標識を付けて神湊漁港内に放流。

2月27日：八丈島測候所職員が講師となり、八丈分場で気象講習会を開催、受講者60名。

3月：八丈漁業海岸局（漁業用）に業務通信士として女性が配置となり、管内漁業無線船40隻を喜ばす。

4月：八丈分場主要業務計画  
拓南・漁業指導：春トビウオ漁業調査・底魚一本釣調査。  
近海漁業合理化試験：底釣捲上機開発廃油等産業廃棄物調査・漁業取締

磯根資源調査：テングサ・トコブシ・イセエビ

7月11～13日：和歌山すさみ漁協から講師を招き、曳縄漁業につき講習会を開催、受講者100名。

7月：東京都水試「底魚一本釣捲揚機実用化試験報告」（要報No.85）を刊行。

9月：底棲魚の漁法は従来一本釣り漁法が主体のところ、数年前から九州の漁船による、メダイ樽流し漁法を開始、八丈島漁船も漁獲効果を上けているが、多量の縄を手で引き揚げるには、重労働となり、この改善を求められていた処、八丈分場ではこの検討に入り、指導船拓南梅田福夫の改良により簡易捲揚機が完成、価格も安く取付けや取扱も簡単で、縄もひとりで樽の中へ捲き入れられ、一人で同時に2台が操作出来、人手不足に大いに役立つものとして好評。

10月6日：八丈島測候所職員講師となり、気象講習会を開催。受講者50名。

11月：八丈周辺の廃油公害につき、支庁水産係・八丈分場の調査結果判明。廃油被害の特に酷い処は北浦・汐間・藍ヶ江・八重根・前崎で、被害は島の周辺全域に及び、入江に特に多し、垂土の例を挙げれば、廃油の量は1㎡に直径10cmの球に換算して20個、1,000㎡に1㎡の量があるという事となる。

12月：(東京都水産試験場一羽田一水元分場を併合して同場に移転)

1971 昭和46年 1月7日：八丈分場、東海大学の佐藤孫七船長を招き、海洋講習会を開催。

4月：八丈分場、庁舎改築に着手。

4月：「八丈分場ニュース」壁新聞型に改訂。

4月：八丈分場、アオダイ試験研究開始（水産庁補助）。

6月8日：漁業海岸局庁舎移転（神湊漁港拡張工事に伴う三根 4,222番地への八丈分場移転の一環）。

7月：八丈分場、青ヶ島の東南岸金太ヶ浦水深10～14mの海底で磯根資源調査を実施。

8月20日：八丈分場、三根漁協二階に仮移転。

8月20日：八丈分場磯根調査船・拓洋（1.08t, F R P船）竣工。

11月30日：八丈分場、勤労福祉会館において東海区水産研究所・野口栄三郎を講師とし、鮮度保持講習会を開催。

12月25日：八丈分場、千葉県産ノリ網を洞輪沢に張り込み試験。高温のため成果悪るし。

1972 昭和47年4月1日：八丈町産業課に水産係新設、初代係長菊池徳和就任。

4月5日：八丈分場、新庁舎落成式。同日漁業「近代化展」開催、磯村副知事他多数来島。敷地 6,483㎡、建物本館鉄筋コンクリート平家建 557.2㎡、無線局舎48.6㎡の近代建築、総予算84,660千円。（注）本館玄関ホールには展示用水槽5槽。漁業無線関係は鉄塔25m、送信機SSB 50w 2基、全波受信機1基、中短波受信機2基、送受信機D S B 1w。

4月25日：八丈分場、ハマトビウオ人工受精実施。

6月25日：八丈分場、アオダイ7尾を水槽で展示。全国で初めての事例。

8月：八丈分場の展示用水槽で、春トビウオが約6cmにもなり、スイスイと泳ぎ参観者をすっかり喜ばす。

12月11日：八丈分場、東京医科歯科大学梨本教授を招き、潜水講習会を開催。

・八丈分場、拓南梅田福夫、「リール式底魚一本釣捲揚機の考案」で科学技術庁長官賞を受く。

1973 昭和48年3月：東京都水試「太平洋中区栽培漁業漁場資源生態調査」（要報No.101）を、50年の第3報まで刊行（マダイ・インダイ）。

3月：東京都水試「廃油等による伊豆諸島近海の汚染実態との防除対策」（要報No.103）を刊行。

9月：八丈分場、アオダイの成長や回遊経路を知るため、標識放流を今根沖と大根沖で4回63尾を実施。

9月：八丈分場、電殺曳縄漁具試験実施。

11月：八丈分場、末吉の蓄養施設でクルマエビ養殖試験。

1974 昭和49年1月29～30日：八丈分場、エンジン・電気講習会を開催。

3月25日：八丈町会議室で、消費者代表・鮮魚組合幹部・八丈島漁協役員・支庁・町役場物対本部関係者等20余人が会合、「春トビウオの値段について」の話し合いを実施、八丈産春トビウオの高値について次の通りの発言あり。

- ①八丈産だといって、島外産の春トビウオを買わされた。
- ②卸は組合の付け値で買わされる。
- ③組合の付け値は、市場価格より高い。生産地で何故高いのか。組合の建値は築地の建値が基準になっている。
- ④築地の建値から市場手数料・輸送費・荷造費は、差し引けるのではないか。
- ⑤春トビウオの生産コストは、市場手数料5分5厘、組合歩合8分、箱代8円60銭、運搬船手数料1割を除き、更に大中経費を差し引いた残りを船主4割5分、乗子5割5分で割り振る。魚屋は平均2割5分から3割掛ける。
- ⑥4年がかりで開いて貰った会議なのに、三根漁協が出席しないのはおかしいではないか。
- ⑦組合では昨日の価格を参考にせざるを得ない。

4月1日：八丈分場、都の勤務体制の改変により日曜・祭日・夜間の宿日直廃止、休日の施設の見学・利用は出来なくなる。漁業海岸局は、従来通り午前6時15分～午後9時10分の間当直制。

6月9日：八丈分場三木誠、「伊豆七島のフクトコブシ」の題名で、南海タイムスに9回連載。

6月：八丈分場、大島分場からの人工生産アワビ（メガイアワビ）フカミの試験区へ放流（1,000個）。

6月：八丈分場でアサヒガニの人工孵化に成功。孵化した幼生（ゾエア）には、餌としてエビの子供（ブラインシュリンプ）や天然プランクトンを採取して与え、育成観察に努める。

9月30日：神湊の拡張工事のため、拓南その間八重根を基地とす。

1975 昭和50年 3月19日：八丈漁協の金比羅丸、青ヶ島漁場で標識春トビウオを漁獲。これは八丈分場がトビウオの成長や回遊の経路を知り、漁況予測その他の資料とするために、春トビウオの標識（アンカータグ）放流したもので、昨年4月27日に放流された134尾中のもので、経過日数は327日。体長36.1cm、重さ465gのもの。

3月：東京都水試「八丈島のフクトコブシ増殖に関する研究」（要報No.119）を刊行。

3月：東京都水試「伊豆諸島における貝類増殖に関する研究」（要報No.120）を、51年と2報刊行（フクトコブシ・サザエ・アワビ）。

4月：八丈分場主要業務計画  
 指導事業：ハマトビウオ漁業調査・回遊性魚類調査・沿岸性魚類調査・底魚漁業調査・漁業取締  
 魚貝類種苗化試験：フクトコブシ・ギンタカハマ・アサヒガニ  
 資源調査：ハマトビウオ・アオダイ・クサヤモロ  
 漁業技術改良試験：テングサ採取機  
 有害物質環境調査：PCB・水銀（以後継続）

4月：八丈島測候所、8回観測通報となる。

4月：東京都、春トビウオの生産・消費供給安定のため4月1日から5月20日まで、孀恋方式的な契約を結び安定供給事業を実施することに決定。この方法は市場価格を、1尾当たり170円に押える替わりに、基準価格以下に暴落した時には東京都が補償。また漁協の島内売り（小売店

・加工用分)については、東京市場価格から16% (出荷経費)を差し引いて販売。小売店の販売は消費者に対して、4月1日から手数料を含め1尾当たり200円以下で販売。

6月11日:新年度初の消費者会議、町役場で開催、都が初めての試みとして実施している春トビウオの孀恋方式は、卸値の最高は142円、最低が88円で、小売価格は最高200円、最低150円となる。これに対し高値安定だとの発言も出る。

6月13日:八丈分場、大島分場からのアワビ人工稚貝5,000個、中之郷小岩戸鼻に放流。

・八丈分場、春トビウオあば揚網機(ボール・ローラ)試験実施。

1976 昭和51年2月8日:南海タイムスに「八丈水産の問題点」の題名で、八丈分場長仲村正二郎の寄稿文載る。

3月4日:都物産局、春トビウオの安定供給を図るため、八丈支庁会議室において、地元側との協議会を開催。都側が昨年度の方式で価格の安定を図りたいとしたのに対し、両漁協は昨年並の1尾125円(下限補償価格で、これ以下になれば差額を補償し、上限は170円)の補償価格を不満とし、次の5項目を要望す。

- ①契約期間は4月1日から5月25日まで。
- ②プール方式でなく、取引の都度補償する(昨年はプール方式であったため、実質的には無補償)。
- ③上限価格210円、下限価格を160円とする。
- ④島内販売単価を東京市場相場の中値の1割引きとする(昨年は1割6分引き)。
- ⑤当日市場売りがない場合には上限価格以内で、両漁協が協議して決定する。

これに対し結論は、孀恋方式で契約を結び安定供給事業を行なうこととなる。この内容は次のとおり。

- ①契約期間は、4月1日から5月15日まで。
- ②東京市場の競価格を1尾当たり170円に押える代わりに、基準価格(130円)以下に暴落したときにはその差額を都が補償する。
- ③島内売り(小売店・加工用)については東京市場価格から10%を差し引いた金額で販売する。

このことから島内の小売店では1尾当たり208円(3枚におろす迄の手数料を含む)以内で、消費者に販売されることとなる。

7月:近年春トビウオ漁や底釣漁業でサメによる被害が多くなり、更にサメを対象にした漁業は殆ど行なわれていないことから、八丈分場では、今後サメは益々増加する傾向にあるとして、漁法・餌料について試験を開始。第1回は延縄の浮子綱を長くし、日中や夜間の漁獲試験を黒瀬漁場で実施したところ、7尾のヒラガシラ(平均2m、100kg)を漁獲。今後も餌料や漁具を変えて実施の予定。

7月:八丈分場、アカハタの移動・成長・資源状態の解明の手掛かりとして、標識放流を実施。標識方法は背びれの後方にダグピン(赤色)の打ち込み。放流地点は、石積ヶ鼻・大根・大平潟・マルイシの島周辺で40尾。

8月13日:大島分場指導船「みやこ」アワビ5,000ヶ(殻長1.63cm)を八丈島へ輸送、八丈分場に高橋吉武が協力垂土湾のフグリに放流。

8月22日：南海タイムスに「海中砂の採取と漁業」の題名で仲村正二郎八丈分場長の寄稿文載る。

9月12日：海上保安庁水路部、水路業務創始記念日に当たり、水路業務に協力、貢献のあった功労者の表彰を実施。八丈島関係では、八丈分場職員一同・八丈分場調査船拓南乗組員一同。

1977 昭和52年 1月15日：八丈分場、キンメ釣講習会開催。講師は静岡県稲取の喜平丸船主山田勝。受講者は70人余で講習内容は、移動の性質・漁況・漁法等。

3月15日：第三管区海上保安本部八丈水路観測所発足。庁舎は中之郷に建設され、地磁気の観測が7月1日から開始さる。業務内容は次の通り。

- ①地磁気絶対観測（地磁気変化観測の基準値を求めるための観測で、G S I型等磁気儀を用いて週2回実施。）
- ②地磁気変化観測（磁力の三成分〈水平磁力・鉛直磁力及び偏差〉の変化について地磁気変化針を用い1日単位で連続観測。）
- ③その他の観測（1・2の観測に関連する、地磁気変化度・脈〈U L F〉観測・地磁気全磁力精密観測及び比較観測〈年1回〉を実施する。）

4月5日：都内の市場へ昨年に引き続き、魚類価格安定供給事業の春トビウオが出回る。上限価格は1尾（380g以上）180円。下限は135円。市場価格が下限を下回ったときは都が差額を補償。漁協の島内売り（小売店・加工用）は市場価格の1割引で販売。従って島内小売価格、1尾当たり217円以内。

5月31日：気象庁観測船の観測で、遠州灘沖の冷水塊が細長い形に変形しながら西進していたものが、黒潮のため南北二つに分断され、黒潮の蛇行がやや元に戻っていることが判明。観測史上冷水塊が南北に分断された記録無し。

6月19日：南海タイムスに「トコブシの稚貝、1年で3倍に成長、採り放題やめて」の題名で記事載る。内容は八丈分場三木誠の中之郷汐間漁場の指導成果について報道、作る漁業への奨め。

7月17日：南海タイムスに「二百カリ 余話」と題して八丈分場長今井丈夫の八丈島経済水域（漁業専管水域）設定の提案載る。

7月：伊豆諸島海域では49年頃よりサメの被害が顕在化、底魚一本釣り漁業や春トビウオ漁業に被害甚大。八丈分場、昨年度サメの予備調査を実施、今年から3ヶ年計画で国の指定研究として、被害防除の研究を行なう事となる。

10月：八丈分場、水産庁にサメ被害防除の中間報告を為す。これによると①伊豆諸島・小笠原諸島海域に棲息するサメは、17科44種（大島・新島・神津島海域で27種、三宅島海域7種、八丈島海域21種、小笠原海域27種。）。②被害を与えるサメは、ドタブカ・ヨシキリ・イタチザメ・ヨゴレ等とみられ、中でもドタブカは東京都海域全域に分布し、被害随一の模様。

1978 昭和53年 1月15日：八丈分場、東海区水産研究所内山均を講師として招き、鮮度保持講習会開催。

1月3日：昨年の12月横間海岸で沖縄海洋博の記念ブイを拾った大賀郷

田村義男（34才）、南原で釣りをしていたところ、またはがき大の物を拾得、これは兵庫県水産試験場が昨年5月、瀬戸内海の海流・魚類資源の分布・回遊を調査するための「漂流はがき」と判明。

3月14日：電波灯台（ロランA）は、我が国で昭和25年頃から利用されているが、硫黄島局が昨年から廃止され、本年からは沖縄慶佐次局と八丈局との組局で運用が開始されたものの、沖縄慶佐次局からの電波は全然受信出来ず、本島漁船は困り果てる。そこで三根水産研究会員約30人は、八丈分場に瀬下ロラン所長を招き協議会をもち、沖縄慶佐次局の出力アップについて陳情する事を決定。

3月：東京都水試「サメ被害防除対策研究」（要報No. 136）を、55年の3報まで刊行。

5月28日：八丈分場によるトコブシ口開け前調査によれば、作柄は昨年並。原因はトコブシが食用としている海草の成育が悪いこと。「このままでは、資源が枯渇してしまう。」と、中之郷の水産研究会では、50年、三根の水産研究会では52年から、稚貝を集めて海草の成育の良いところへ、放流するなどの対策を実施。

6月9日：共同購入運営委員会（会長浅沼さわ子）開催、物流センター入庫のトビウオ（1万尾）を、15日までに消費者の希望を取り、今月20日1尾 230円で販売することを協議決定。

6月16日：今年度第一回の消費者会議で、共同購入運営委員会から、これまでの春トビウオの放出は、5,300尾で、残りの4,700尾に付いては、7月末に放出することについて報告。

7月：八丈分場、毒ガニについて注意喚起。「この2～3年八丈島周辺の水温は冬季でも高く、このため造礁サンゴが増加、それに伴い南方系のカニ類も増加している。スベスベマンジュガニ・ウモレオウギガニ・ヒラアシオウギガニは、食べると有毒なので注意を」。

8月7日：八丈分場、大規模増殖場のための基礎調査の一環として、八丈島の西・大越鼻灯台の北・夕間沖の3地点で、「海流はがき」千枚を放流。

9月19日：八丈分場、蓄養池で飼育中のギンタカハマの産卵に成功。受精卵の大きさは、フクトコブシよりは少し大きく、濃い緑色をし、卵膜の中で分裂を繰り返し、受精後約10時間で孵化。受精後18時間で卵殻を形成、孵化後60時間では頭部・触角・足部を形成、70～80時間すると繊毛も無くなり着底。2日後に斃死。

10月24日：水産研究会の要請により、東海区水産研究所内山均博士来島、ムロアジの保蔵試験開始。

10月26日：八丈分場に、東京都港湾局委託により超音波式波高計設置。

10月：八丈分場、東海汽船「すどれちや丸」による水温観測開始（東海区水産研究所補助）。

1979 昭和54年1月8日：「春トビウオ・ムロアジの鮮度保持試験結果報告講演会」が、東海区水産研究所内山均博士によって、島嶼会館を会場として開催。

3月：東京都水試「大規模増殖場開発事業調査報告」（要報No. 140）を55年と刊行（フクトコブシ）。

7月12日：三根公民館において「お金を掛けないで、島の魚を美味しく食べる料理を作ろう」と八丈町・八丈島調理師会主催で講習会を開催、約150人が参加賑う。

7月：八丈分場、「オニヒトデ」について注意を喚起。

11月6日：水産物利用加工試験研究全国連絡会議海藻班現地会議（従来の寒天原藻協議会）、三根公民館で開催、八丈分場三木誠、「八丈島のテングサの豊凶と黒潮流軸の変動について」発表。

1980 昭和55年 4月10日：八丈分場調査指導船「たくなん」（FRP製、トン数39.4t、長さ18m 幅4.5m 深さ1.6m、ディーゼルエンジン480馬力、最高速力14.5ノット 水深水温計（DBT）、電磁海流計（GEK）等装備、建造費142,800千円）竣工披露。

4月19日：黒潮が八丈島の南側を北上、潮位約1m下がる。

4月：八丈分場主要業務計画

指導事業：ハマトビウオ漁業調査・回遊性魚類調査・底魚漁業調査新漁場開発調査・サメ被害防除調査・漁業取締  
魚貝藻類生息環境調査：テングサ生育状況調査・フクトコブシ浮遊幼生調査・ギンタカハマ調査・青ヶ島磯根資源調査。  
種苗化試験：フクトコブシ・ギンタカハマ  
漁業公害調査：鳥島油濁状況調査

7月9～11日：八丈分場、鳥島の油濁調査を実施。

7月16～17日：八丈分場、青ヶ島磯根資源調査。

8月：昭和50年夏頃から発生した遠州灘沖の大型冷水塊が東進、黒潮の流れが久し振りにN型となった事が、海上保安庁水路部と気象庁から発表。

9月30日：八丈島測候所において、両漁協から15人・漁業海岸局2人・測候所10人の構成で「天気談話会」を開催、大盛況。

1981 昭和56年 3月：八丈分場でロランチャートを作成配布。

・八丈分場、春トビウオ昼間操業の試験を実施。

3月：八丈分場、第12幸漁丸の協力を得、春トビウオ漁業に被害を与えるイルカ撃退に花火（品名：ビックラー）を使用、効果あることを確認。

4月：八丈分場、漁場油濁影響調査（漁場油濁被害救済基金委託・2年間に着手、テーマは油濁のイワノリ・ハバノリ着生・繁茂に対する影響調査。

4月：八丈分場、組織的調査研究活動推進事業（水産庁補助、2年間に着手、テーマは多獲性魚類（ムロアジ）の有効利用方策。

9月9日：八丈分場、ギンタカハマ漁獲減少傾向の対策試験のため、600ヶに標識し垂土湾に放流。

10月7日：多獲性魚類（ムロアジ）の有効利用検討会開催。構成員は八丈島漁協・三根漁協・加工協・八丈町・八丈支庁・都水産課・都水試・八丈分場。

10月：八丈分場、春トビウオ漁業用ネットホーラー改良試験実施。

1982 昭和57年 2月：東京都水試「ハマトビウオ漁具漁法改良試験」（要報No.155）を59年まで3報刊行。

3月30日：八丈分場、ねり製品に関する講習会開催。テーマ：八丈島における多獲性魚類のねり製品原料としての可能性。講師：水産ねり製品技術研究会山本常治。助言者：東京水産大学橋本周久。

8月4日：八丈分場、三根地先底土に476ヶ、東浦に436ヶ、8月17日中之郷地先汐間に1,196ヶ、フクトコブシ稚貝放流。これは大島分場で育成されたものを地元漁業者の協力を得て実施したもの。作る漁業への第一歩か。

11月15日：天皇陛下八丈分場御視察。親しく顕微鏡を覗かれる。

11月18～20日：八丈分場、水中ビデオカメラ、水中カメラにより投入魚礁調査。石積沖（水深80～130m）・三根沖（水深50～60m）。

11月：八丈分場、メットウ（ギンタカハマ）種苗化に成功。

11月：東京都労働経済局農林水産部、「東京都農林水産業関係試験研究推進構想」を発表。

1983 昭和58年 1月1日：南海タイムスの年頭の辞欄に、八丈分場長石川吉造の「効率漁業を目指して」の記事載る。

4月18日：八丈島近海で操業中の三宅漁船1尾、5月7日三宅島近海で1尾と、4月5～6日八丈分場試験船がハロース海域で標識放流した春トビウオ漁獲。

4月：八丈分場、表層浮魚礁の調査を開始。

6月：海上保安庁、八重根接岸港、八重根漁港海域海図測量開始（現在のものは、大正12年に旧海軍によって作成されたもの）。

9月30日：八丈分場、人工孵化した「トコブシ」の採苗に成功（大島分場は昭和42年に成功）。

1984 昭和59年 2月：東京都水試「多獲性魚類の有効利用対策」（要報No. 171）を刊行（ムロアジ）。

3月：八丈分場、トコブシ稚貝4万個（大島分場産3万個、八丈分場産1万個）を4月～5月にかけて放流計画。

6月：八丈分場、フクトコブシ早期採卵に成功。

6月：東京都水産試験場、「長期研究計画」を発表。

9月：八丈町は、国の補助を受け、昭和56年～57年、サメ駆除を実施し、その効果が大きい事から59年度も実施決定。

1985 昭和60年 4月20日：漁業海岸局オールワッチ体制となり、6月1日から都職員2名増員で5人（都4人、漁連1人）となる。

4月：八丈分場主要業務計画  
八丈海域漁業調査指導：漁況調査・漁海況速報・ハマトビウオ・ムロ

アジ・カツオ・底棲性魚類・天然礁・人工礁・浮魚礁・漁業取締。  
魚貝藻類生息環境調査：テングサ成育状況・フクトコブシ口開・フクトコブシ人工種苗放流・フクトコブシ漁獲率・フクトコブシ食害。  
種苗化試験：ギンタカハマ・アサヒガニ。  
事業化試験：放流技術・中間育成。  
人工礁漁場造成事業効果調査。

10月：八丈島測候所、午前予報を開始。

1986 昭和61年 3月：八丈島測候所、降水確立予報を開始。

8月13日：日本初の測地実験衛星「あじさい」が2時間毎に日本上空を通過する軌道観測を、八丈水路観測所が開始。

9月18日：八丈分場の磯根調査船「拓洋（1.1t）」、竣工。

10月：八丈島測候所、簡易型雲画像受信装置の運用を開始。

11月：海上保安庁水路部、八丈島周辺の海底地形図（1,200円）と海底地質構造図（750円）を刊行、縮尺20万分の1。

10月：八丈分場、アサヒガニの稚ガニまでの飼育に、全国で初めて成功。

10月：八丈分場竹之内卓夫、「しんかい 2000」で黒瀬の水深 257m まで潜水、底魚類を観察。

1987 昭和62年 1月：八丈分場、「昭和61年度第2回東海長期漁海況予報会議」の結論として、黒潮は3月末迄A型海況であるという事を発表。

2月10日：八丈町、「八丈島での栽培漁業の可能性」をテーマに、(株)港湾土木設計北原敏雄を講師に、栽培漁業研修会を開催。対象者は、町議会経済企業委員、八丈島・三根漁協の役員、八丈分場職員等30人。内容は、漁港はただ単に生産基地としてだけでなく、養殖場など多角的な機能を持つ漁港造りを目指すべきとして、21世紀へ向けて「意識革命」を訴う。

4月26日：昭和62年以來からの春トビウオの大不漁に対し、東京都水産試験場（大島・八丈分場の共同研究。）、昭和62年度から向こう4年間「ハマトビウオ資源動向調査」を実施することに決定。ハマトビウオについては漁業として長い歴史を持つものの、その生態や動向は不明。

6月26日：八丈支庁水産係、水産関係実務者会議で「遊漁船の扱いについて」のテーマで、最近の遊漁船の現況は、島外の大型遊漁船が八丈島を基地化、遊漁船事業を展開、種々の問題点が発生、内部的にも安全性の確保・組合経営の点から問題が顕在化している。この解決の為には、島内の遊漁船は船主が組合員、船は漁船という情況下、今の内に、この遊漁船事業は漁業の延長線上の副業と把握、組合に遊漁船部会を設置、対外的に又は内部的に組織固めと経営の安定化を計るべきと強調。

6月28日：鹿児島産トコブシ関連の町の補正予算（10万円）確定、稚貝を購入、1ヶ年間八丈分場で試験飼育を実施する事となる。

6月：八丈島測候所、注意報・警報の地域細分発表を開始。

7月2日：八丈支庁水産係、水産関係実務者会議で「第4種漁港を取り巻く考察」と言うテーマで、第4種漁港という格付けを十分理解し対外

外的・内部的に開放的で前進的な活力ある対応をと強調。

9月13日：南海タイムスに八丈分場の「漁況週報」掲載開始。

11月：八丈分場伊東二三夫、「しんかい2000」で相模湾の水深1,260mまで潜水、深海性甲殻類を観察。

1988 昭和63年 1月1日：南海タイムス「年頭所感」欄に、八丈分場長西村和久の所感「新しい漁業の時代」の標題で載る。

4月7日：去る2月に完成した大島分場調査指導船「みやこ」の一般公開を神湊で開催。全長：38.77m、最大速力：13.8ノット、科学魚群探査機・海底地形探査機・STD装置等を装備した新鋭船。

5月：八丈分場千野力、「しんかい2000」で駿河湾の水深2,000mまで潜水、深海生物の摂餌生態を観察。

8月31日：大島分場「みやこ」、ハマトビウオの夏期棲息域解明のため三陸沖を調査、漁獲なし。

9月：八丈分場では、バイオテクノロジーの最先端技術を用いて、三倍体のトコブシを作るための試験研究を5年計画で開始。

## 2 漁業団体の沿革と活動

- ・ 漁業協同組合等組織の変遷・・ 設立変遷（水産加工協は別掲）
- ・ 活動状況・・・・・・・・・ 諸問題・活動・水産研究会

西暦	年号	特 記 事 項
1912	明治45年1月	大賀郷村漁業組合設立。この後大正4年迄に各村の漁業組合設立。
1912	大正元年8月18日	三根村漁業組合設立。
1914	大正3年6月26日	三根村漁業組合臨時総会開催。飛魚・鮪漁期中、共同販売所に対する業務妨害に伴う役員総辞職。 ・ 八丈島漁業組合連合会設立。
1915	大正4年6月25日	三根村漁業組合臨時総代会開催、次の件議決。 △垂土及び古那ヶ浦に於ける定置漁業、7年間無条件で、北海道函館市笹森角太郎に許可する件。△海苔採取権を三根村より借受け、採取を奨励する事とする件。△神湊漁港、年々住民の増加と、飛魚漁期や夏期発動機船の出入頻繁にして用水不足。村役場水道の架設に組合も補助金を出金する件。
1925	大正14年1月25日	三根村漁業組合第13回総会開催、4月1日に天草の口開けを為すは、漁業の発展上、且つ、天草の繁殖上不利なりとし、5月25日迄天草口止め。 3月：東京府水産会設立（東京府内務部農林課内、主事1、技師2、書記・主事補技手若干名を置く）。
1930	昭和5年2月20日	三根村漁業組合第18回総会において、小笠原島大暴風による漁民の遭難等に対し、寄付金173名から76円確保。 ・ 天草組合結成。
1932	昭和7年10月12日	大賀郷村漁業組合総会開催。組合員の梅田馬之助・広江広多の2名漁獲物を三根村へ水揚げし販売したことにより、組合規約により除名決議。
1933	昭和8年	大賀郷村漁業組合長菊池常広、湯屋・本屋・東京湾汽船取次人・その他多方面に手を伸ばし、多忙を極め組合長としての職責を果たせぬと辞意を表明、現に施行中の港工事完成迄と遺留されるも固辞、理事辻直兵衛代理。
1934	昭和9年11月12日	八丈島水産会が計画していた、マスク式潜水機3名分を設備した総噸数6t余の無水式15馬力の漁船の建造に対し、農水省から漁業共同施設奨励金として1,467円、東京府から農山漁村共同施設助成金917円、計2,384円の助成。経費総額5,000円。この船は翌年1月17日黒潮丸と命名さる。
1935	昭和10年1月20日	かねてから計画されていた、大賀郷村漁船船員組合結成。初代組合長は菊池広司。 2月27日：八丈島水産会総代会開催。決算・予算・事業報告・事業計画

の審議決定のほか、・製品検査規定改正・黒潮丸使用規程・八重根港修築促進請願・東京府水産係の課への昇格請願を審議決定。

3月6日：八丈島水産会の黒潮丸竣工式神湊港で挙る。

12月23日：中之郷村においては昨年漁友会を結成、船主を除く漁民30余名で漁師間の親睦・品位の向上・漁撈上の研究を目的に漁業組合の了解の下に活動して来たが、1周年を迎え総会を開催。

1936 昭和11年1月：三根村漁業組合、三根村漁業協同組合と改称。

3月19日：三根村漁業組合長より農林省へ水産物貯蔵設備（3t 製氷・25坪冷蔵）を要請。

8月12日：大賀郷漁業組合が改組し、保証責任大賀郷村漁業協同組合となり、かつ菊池義範辞任にともない臨時総会開催。補充選挙は菊池勇当選。

10月3日：三根村漁業協同組合、製氷所の補助を農林省に申請していたところ、設立補助の許可あり着工。

10月22日：三根村採藻組合総会開催。一部役員の変更の後、相撲大会並びに全村民の懇談会を開催。

10月30日：本島沿岸に於ける漁業が発展するのに伴い、機関士の責任は重大であるとして、会員の親睦救済・機関技術の研磨養成・もって漁業に貢献することを目的として、大賀郷で機関士会発足、初代会長に片野吉太郎就任。

1937 昭和12年10月1日：三根村漁業協同組合従業員浅沼末一、製氷所のクラッシャーに挟まれ重傷を負う。

1938 昭和13年2月12日：三根村漁業協同組合、保証責任三根村漁業協同組合となる。

3月12日：八丈島水産会総代会開催。昭和13年度経費分賦収入方法及び同年度営業割を賦課すべき者の等級決定の件並びに同年度収入支出予算総額 6,116円を可決。

4月23日：保証責任大賀郷村漁業協同組合総会開催。役員改選。

5月15日：八丈島水産会総代会議員選挙各村で施行。

5月25日：中之郷村潜水組合、組合員の懇親会を開催。席上国防献金をすることを決議、他日トコブシを一日潜水採集、その総額30円を献金。同組合員は60名で組頭は奥山春三郎。

1939 昭和14年：末吉村天草組合、時局下経費を節減し、陸海軍宛50円を献金。

1月18日：水産会、支庁会議室で総代会を開催、次の件を審議決定。

- ①昭和14年度経費分賦収入方法
- ② " 営業割を賦課すべき者の等級決定
- ③ " 八丈島水産会経費収支予算
- ④黒潮丸売却
- ⑤珊瑚漁業の許可制限

地区別	大	三	檜	中	末	計
配当隻数	5	5	1	2	2	15

出願隻数 6 7 1 2 4 20  
\*販売は東京府漁連に水揚の2%で委託。

10月3日：大賀郷村漁業協同組合臨時総会を開催。八丈島製氷冷蔵株式会社工場建物1棟他機械器具一式を1万8千円で買収方決定。これはこの会社が昨年11月閉鎖し、漁民の損害が莫大なる事への対応。

1940 昭和15年 2月12日：保証責任三根村漁業協同組合通常総会において、時局に照らし、無駄の排除と必需品確保の観点から、購買事業開始の議案承認（ゴム合羽・ゴム長靴・釘・針金・地下足袋等）。

10月11日：大賀郷村漁業協同組合臨時総会を開催。定置漁業権の申請と役員改選が議題。組合長に浅沼勤選ばれる。

1942 昭和17年 2月16日：保証責任三根村漁業協同組合通常総会において、昭和16年度の漁業に対し、漁獲物の増産奨励の見地から賞状並びに副賞授与の件承認、底魚一本釣・春飛魚流刺網・夏飛魚流網・鯉一本釣・ムロ建網・赤魚手釣・アオリイカ・エビ網・トコブシ・ササヨ投釣の部門で夫々賞状並びに副賞を授与。

1946 昭和21年 2月9日：中之郷村漁業協同組合、中之郷村青年館に於て通常総会を開催、任期満了による役員改選を実施。組合長に魚取文太夫選ばれる。

2月22日：八丈支庁に各村漁業組合長及び役員が参集、水産会各村支部強化・配給物資の円滑等を話し散会。

6月24日：檜立村漁業組合総会開催、理事の改選を行う。会長太田道寿。

6月25日：大賀郷村漁業組合総会開催、理事の改選を行う。

12月12日：伊豆七島振興委員調査団の前衛隊一行として来島した、社会党代議士渋谷昇次（日本漁民新聞社長）の講演に刺激され、島内有志八丈島水産株式会社設立を画策、認可さる。社長：山田喜与吉。常務取締役：大沢市助・菊池勇・山本林一・松岡光太郎。操業物資の調達協力は、愛国産業株式会社重役野間新吉。出資金は島内から12万円、内地6万円の総額18万円。

1947 昭和22年 1月：中之郷の船主7名が合同して中之郷村船主合同組合を結成、組合単位で合理的に操業し、経営の合理化を図り水産業の発展に寄与しようとするもの。ために船主の漁船・資材設備の半額を買取り、岡野功、代表者となる。

2月23日：大賀郷村漁船全機関員が会合、技術の研究向上・機関士の養成・機関士の斡旋を目的に、大賀郷村漁船機関士従業員組合を結成。堀口靖男会長となる。

7月9日：末吉村漁業会、臨時総会開催、理事3名辞任による補欠選挙を実施。

8月20日：大賀郷村漁業会長菊池勇に三根村漁業会の幹部2名が同行で上京、漁具等資材関係・燃料・製氷設備等について、関係当局に陳情、生産団体のこの傾向が盛んになる。

1948 昭和23年 7月13日：春トビウオ代 470万円（三根34万円、中之郷13万円）、テングサ前渡金 150万円の処理につき、都水・同支部・漁民・森田水産課長立

会のもと会議開催。

7月30日：支庁会議室において森田水産課長が世話人となり、東京都水産業会八丈島支部整備委員会開催。委員は

大賀郷：菊池勇・稲葉又三郎・見山吉太郎・広江桑松・杉原修一・西浜大吉

三根：田代豊春・小崎一右衛門・持丸猛夫・浅沼雪春・本橋熊一・田村金一

檜立：矢田惣五郎・笹本玉男

中之郷：佐々木正三・大沢市助・西條新平

末吉：沖山寅蔵・沖山環・沖山明治郎

水産課：森田末蔵・持丸秀

無記名投票により委員長・副委員長の選出で委員長に森田末蔵・副委員長に大沢市助・稲葉又三郎が選ばれる。今後は支部の機構を一新して進むこととなり、浅沼常道支部長と山下静雄主任の辞表は受理さる。これで解決への方向が出るも、森田水産課長に転任辞令電報が届く等、波乱多し。

8月4日：支庁会議室において東京都水産業会支部整備委員会開催。委員長転任による選挙で、支部長に沖山寅蔵。主任に小宮山兼太選任。再建に向け動き始める。

・（12月15日：水産業協同組合法制定）

1949 昭和24年 1月14日：支庁会議室で東京都水産業会八丈支部整備委員会開催。本部の清水総務課長その他関係者が参加、①支部の存廃の件②職員の件③工場の件について協議。この席で沖山寅蔵支部長・小宮山兼太主任も「前支部長等責任者が上京不在で、半年経過するも事務の引き継ぎも受けられない。これでは、責任を持って事業を進められない」として、辞意を表明紛糾する。しかし、連合会の結成の動きもあり、それまでは現体制で目前の春とびうお漁に対し、資材の調達等に努力すべきであるということに決定。

2月20日：三根村漁民は、春トビウオ漁を目前に汐祭を開催、21日には三根公会堂で、青年団主催による演芸大会盛大に開催。

3月5日：三根村漁業会はテングサ倉庫において漁業協同組合設立のための、解散準備総会と漁業協同組合創立準備総会を開催。

7月20日：三根村漁業協同組合設立総会開催。定款承認・事業計画承認・役員選挙（理事・監事・総代）を実施。

8月4日：三根村漁業協同組合総会開催。理事山本林市辞退に伴う次点者が法定得票数に満たないため選挙を実施、小崎一右衛門当選するも更に辞退、次点者浅沼末一理事となる。尚、役員会の結果、組合長には浅沼常道就任。

9月7日：中之郷村漁業協同組合創立総会開催。定款の承認・事業計画・役員選挙を実施。

9月15日：大賀郷村漁業会長菊池勇・稲葉又三郎等約2ヶ年の努力により製氷所（1,400万円、内80%都補助、126建坪、日産5t、急速冷凍1.5t、冷蔵75t・貯氷設備90t・機械設備は原動機ヤンマーディーゼル50馬力1台、池貝の35馬力1台、補機ヤンマーディーゼル16馬力・6馬力各1台、コンプレッサー6吋2台）完成業務開始。

9月28日：大賀郷村漁業協同組合創立総会開催。定款・事業計画承認・役員選挙を実施、組合長に菊池勇を選任。

- ・各村に漁業協同組合結成、設立認可状況は次の通り。
  - 9月5日：末吉村漁業協同組合（組合員 235名、組合長沖山寅蔵）
  - 10月8日：三根村漁業協同組合（組合員 488名、組合長浅沼常道）
  - 10月10日：中之郷村漁業協同組合（組合員 133名、組合長魚取文太夫）
  - 10月27日：檜立村漁業協同組合（組合員41名、組合長磯崎丈右衛門）
  - 11月15日：大賀郷村漁業協同組合（組合員 436名、組合長菊池勇）
  - 11月28日：鳥打村漁業協同組合（組合員64名、組合長浅沼富士男）

12月31日：三根村漁業協同組合常務理事浅沼雪春辞任。

1950 昭和25年 1月7日：三根村漁業協同組合組合長浅沼常道辞任。

1月17日：都水八丈支部、決算報告ならびに連合会結成に関する案件で、都水支部整備委員・各漁協組合長・常務理事会を開催。決算（赤字60万円）を承認、連合会結成は見合わせ。

1月21日：三根村漁業協同組合、テングサ倉庫で総会開催。組合長・常務理事の辞任に伴う状況を説明。定款変更の件承認。24年度決算承認の件は資料不備のため、お流れ。役員選挙では組合長に小宮山兼太当選。理事の浅沼常道・浅沼雪春の2名は当選、承認が得られず。

1月：三根村漁業会（旧）、三根村漁業協同組合（新）幹部の対立激化。（注）三根村漁業会の精算遅延。旧会長・新組合長は共に浅沼常道、資産処理委員長兼組合常務は浅沼雪春。

2月8日：三根村漁業協同組合第1回臨時総会を開催。24年度決算承認・理事2名の補充選挙を実施。理事に浅沼末一・田代豊春当選。建設的な雰囲気で終る。

3月8日：中之郷村漁業協同組合第1回通常総会開催。事業報告・決算報告を承認、役員改選を実施、魚取文太夫組合長に押さる。

漁業協同組合員の現況（25.3.31 現在）

組合名	正組合員	准組合員	合	計
三根	401名	55名	456名	
大賀郷	255名	181名	436名	（含宇津木）
檜立	28名	13名	41名	
中之郷	132名	0名	132名	
末吉	207名	33名	240名	
鳥打	28名	34名	62名	
計	1051名	316名	1367名	

4月15日：末吉村漁業協同組合第1回通常総会開催、役員改選は再選で、組合長も沖山寅蔵再選。

5月2日：都水産連合会長松原、支庁会議室で各村漁協・その他関係者を集め水産協議会を開催、連合会結成の状況・都水と連合会のその後の状況について、次の通り説明を行なう。

- ①島と内湾は別に連合会を作れとの島側の要望から、内湾だけの連合会を結成した処、八丈島を除く他島はこれに加入した。連合会は都内一本化した方が力強くなる。大同団結が必要だ。
- ②都水の赤字は300万円位で、これを連合会が引き継げば各漁協の未

収金の回収が困難だ。未払い分は請求が厳しいので、清算の見通しが付く迄引き継がない

これに対し、都水が清算解散すれば、連合会加入も考えられるという意見が強く、また連合会に対しては、都水の例から運営方法について、多くの意見が出る。

6月28日：大賀郷村漁業会・大賀郷村漁業協同組合総会開催。大賀郷村漁業会では、24年度事業報告を承認、漁業協同組合では定例の案件のほか、冷蔵運搬船の建造について承認。冷蔵運搬船については、先般のトビウオについては、内地の業者を信頼して運搬契約を行なった、しかし、サバの漁期と競合し、サバの運搬の方が利潤が多いため、トビウオの運搬を渋り大漁のトビウオは製氷所に溢れ、鮮度が落ちたため、大きな損害を被った。これからは鮮度を第一に考え、他力依存ではなく、自力で対処しなければならない。70t級、210馬力（東京一八丈15時間）を2隻建造し、10ヶ年位で償還する見通しが立てば実行する。

7月15日：末吉村テングサ倉庫午前3時頃全焼、消防ポンプ4台も焼失。

・海底に眠る薬莢引き揚げに絡み、三根村漁協・三根村・業者数社大いに揉める。

7月18日：三根村漁業会解散総会開催。浅沼常道会長から精算遅延の報告説明があり、41万2千円の赤字については、一部資産を再評価するなど赤字無しに精算、引き継ぐこととなる。

12月10日：三根村漁協臨時総会開催。組合長小宮山兼太を迎えて、①薬莢問題経理について②組合員の除名について協議されたが、組合長も村も信用出来ないとして、検察庁に任せるという発言もあり、組合長は辞職を申し出、役員総辞職となる。

12月11日：農水産物品評会、中之郷で開催。

1951 昭和26年：三根村漁業協同組合、役員改選あり組合長に浅沼常道当選。

1月8日：奥山勝造13時30分頃神湊防波堤付近で、破甲榴弾の解体作業中誤って爆死。

7月8日：東京都漁協連合会総会開催（24年10月14日法定解散した東京都水産業会の財産一切を、適切な負債整理の完了後引き継ぎ、負債は連合会が各種の事業を強力に実施することによって完済計画）。

1953 昭和28年：三根村漁業協同組合役員改選あり、浅沼常道組合長に再選。

1954 昭和29年11月：中之郷漁協（組合長大沢市助）、樫立漁協（組合長笹本玉男）を吸収合併。組合長は大沢市助。

1956 昭和31年2月：中之郷漁業協同組合、永く組合長として功労のあった魚取文太夫翁の頌徳碑を建立。

・三根漁業協同組合役員改選あり、浅沼常道組合長に再選。

1959 昭和34年6月8日：町議会議長・三根漁協組合長浅沼常道（59才）急逝。10日八丈町議会・三根漁協の合同葬執行。

7月20日：三根漁協、前組合長浅沼常道亡き後の理事補選を、臨時総会

で実施、組合長に山本林市（55才）当選。

9月6日：南海タイムス「気焔欄」に「三根漁協新組合長に望む」の三洋生の投稿文掲載。

1960 昭和35年2月8日：三根漁協定期総会において、勤労意欲が旺盛で漁獲の多かった船に表彰状と金一封贈呈開始。

10月14日：三根漁業研究会発足（会長浅沼和仁、副会長石田武徳、会計持丸真喜男）。

1961 昭和36年1月31日：末吉漁協通常総会において役員改選、組合長沖山武一。

2月1日：三根漁協通常総会において役員改選、組合長菊池長二郎。

2月7日：中之郷漁協通常総会において役員改選、組合長大沢市助。

2月18日：船主を除く三根漁民、「三根漁民若衆組合」を結成、相互扶助を目的として、海に働く人達の生活向上を図る事となる。

4月16～25日：八丈町議会陳情議員団一行8名、重要懸案12件につき、政府等関係当局に陳情。内水産関連事項は次の通り。

①藍ヶ江港接岸整備の件

本島に今以て接岸港なし、予算的にも軽微で済む藍ヶ江港の接岸港としての整備を。

②暴風雨探知レーダー建設の件

気象観測の前進基地としてレーダー建設の計画もあり、検討されている状況に合せ実現の促進を。

11月3日：三根若衆組合、共同でサンゴ漁業を操業、その収益の一部を文化の日を記念し、70才以上の老人に敬老記念品として贈る。

1962 昭和37年1月30日：大賀郷漁協通常総会開催、役員改選の結果、菊池勇圧倒的多数で組合長に再選。

2月19～23日：水産庁、全国漁業研究発表大会を農林省内で開催、八丈からは、三根漁業研究会の堀口孝男・浅沼則元の2名参加。

5月25日：新農山漁村建設総合対策7周年に当たり、同対策の推進に功労があったとして、三根漁協（組合長菊池長二郎）が農林大臣表彰を受く。

12月7日：三根漁民若衆組合第三回通常総会開催、役員改選の結果、組合長持丸正信、副組合長浅沼藤吉を再選。

1963 昭和38年2月6日：三根漁協通常総会開催、役員改選の結果、菊池長二郎を組合長に再選。

10月17日：都漁信連、4年前から毎年10月17日の国民貯蓄日を「一日皆貯金日」と定めて各漁協を指導、八丈の本年度実績次の通り。

三根漁協	1,923,400円
大賀郷漁協	764,435円
中之郷漁協	1,622,527円
末吉漁協	655,550円
計	4,965,912円

1964 昭和39年 1月17日：午後3時50分頃中之郷方面から末吉海岸付近を、風速60mの突風が竜巻を伴って吹き抜け被害甚大。家屋全半壊56戸、破損漁船16隻、ビニールハウス20棟全半壊。その他道路破損、園芸農作物に甚大な被害を与え、被害総額約 6,259万円、19人の重軽傷者発生。この竜巻は、中之郷上浦方面で発生し、小岩戸鼻に向かいながら、更に強力になり洞輪沢地区に大きな被害を与えたもの。末吉漁協の事務所、まともにこの被害を受け、沖山武一組合長、この事務所と共に背後の崖の上に捲き上げられ、重傷を負うも命を取り止める。

2月3日：三根漁協定期総会開催、総代50名の改選、定款一部変更の外、優秀漁船の表彰を実施、結果は次の通り。

春トビウオの部	1位	明神丸	船頭	玉置弘志
	2位	新栄丸	船頭	小崎芳男
	3位	栄徳丸	船頭	浅沼和仁

底物一本釣の部	1位	新栄丸	船頭	小崎芳男
	2位	栄徳丸	船頭	浅沼和仁

ムロ棒受網の部	1位	明神丸	船頭	玉置弘志
	2位	鶴丸	船頭	玉置勘次
	3位	貫徹丸	船頭	長田一市

2月11日：大賀郷漁協第15回通常総会開催、役員改選あり、組合長に菊地勇9期目の再選。

2月20日：中之郷漁協通常総会開催、役員改選の結果、組合長に大沢市助再選。

2月：全国漁村技術改良研究発表大会開催、「三根漁業研究会」持丸真喜男入賞。

6月3日：竜巻問題で開催が遅れていた末吉漁協の通常総会開催、役員改選の結果、理事・監事とも再選。組合長沖山武一再選。

1965 昭和40年 1月17日：竜巻の被害で全壊した末吉漁協荷捌所、昭和39年12月28日完成、落成式を来賓多数の参加を得て開催。同荷捌所は鉄筋ブロック2階建、総建坪555.25坪、総工費1,029万9千円。この実現には、中之郷出身、菊池民一都議の奔走尽力大なり。

2月2日：三根漁協第十六回通常総会開催。役員改選の結果、菊池長二郎を新組合長に再選。

昭和39年度漁獲高優秀船の表彰は次の通り。

総合漁獲高の部	1位	新栄丸	船頭	小崎芳男
	2位	明神丸	船頭	玉置弘志
	3位	鶴丸	船頭	玉置勘次

春トビウオの部	1位	新栄丸	船頭	小崎芳男
	2位	神栄丸	船頭	小崎幸男
	3位	弁天丸	船頭	本橋熊一

底物一本釣の部	1位	新栄丸	船頭	小崎芳男
	2位	栄徳丸	船頭	浅沼和仁
	3位	第五宇之丸	船頭	小崎保

ムロ棒受網の部	1位	明神丸	船頭	玉置弘志
	2位	鶴丸	船頭	玉置勘次

3位 第三宇之丸 船頭 山田継男

2月3日：大賀郷・鳥打両漁協の話し合いが持たれ、5月1日を期し、合併する合意が得られ、2月5日開催の大賀郷漁協通常総会で、鳥打漁協合併の案件議決。これを契機に八丈の各漁協の合併・大同団結は大きく前進。

2月24～27日：水産庁において、農林省・全漁連主催の第11回全国漁村技術改良研究発表大会開催、全国から43名の代表が研究発表。八丈の持丸真喜男、東京代表として6年前から同好の青年達で研究を続けていた、「八丈島の春飛魚流刺網漁業における漁具漁法の改良について」の演題で研究発表。受賞者5人の中の一人として水産庁長官・全漁連会長から表彰状・優勝盾外多数の賞品を受賞。

3月18日：「清漁丸生産組合」都から認可。この組合は、大賀郷、宮沢敏雄外8人が発起人となり、千葉県から19tの大型漁船を購入、飛魚・底魚一本釣を主に、三陸沖のサバ漁にまで、進出する計画のもの。

6月2日：入院療養中の菊池勇急逝。時に67才。同氏は昭和24年漁協設立以来、9期18年も組合長を勤めた八丈水産界の重鎮。大賀郷漁協で組合葬として6月10日葬儀執行。

7月4日：大賀郷漁協臨時総会開催、理事補欠選挙と組合長選挙を実施、組合長に西浜嘉幸（50才）を選出。

7月19日：東京都信用漁業協同組合役員会開催、前会長福本虎雄の辞表承認、会長選挙の結果、菊池長二郎（55才、三根漁協組合長）会長に当選就任。

1966 昭和41年 2月5日：三根漁協通常総会開催、優秀漁船の表彰を実施、結果は次の通り。

総合漁獲高の部	1位	第五明神丸	船頭	玉置 弘志
	2位	新栄丸	船頭	小崎 芳男
	3位	第五天恵丸	船頭	菊池忠二郎
春トビウオの部	1位	新栄丸	船頭	小崎 芳男
	2位	第五明神丸	船頭	玉置 弘志
	3位	第五天恵丸	船頭	菊池忠二郎
底魚一本釣の部	1位	栄徳丸	船頭	浅沼 和仁
	2位	新栄丸	船頭	小崎 芳男
	3位	安全丸	船頭	高橋 吉武
ムロ棒受網の部	1位	第五明神丸	船頭	玉置 弘志
	2位	第五天恵丸	船頭	菊池忠二郎
	3位	海幸丸	船頭	冬木 録郎

2月10日：中之郷漁協通常総会開催、漁民の先達として大沢辰三郎を表彰、同氏は大正12年から漁業を自営、過去36年間組合の幹部として、第一線に立ち漁業指導に当りその功績大。

8月20日：三根漁協はかねてから、組合と組合員を密接に繋ぐため組合活動の広報と、組合員の声を全組合員に知らせ、理想の漁村を建設せんと「漁協広場」を去る7月から発刊。

10月：水産庁主催先進地視察（兵庫・大分・長崎）、八丈各漁協より、持丸真喜男・喜田武・石井栄一の3名参加。

12月6日：大賀郷公会堂で、八丈支庁主催各漁協後援の、八丈島水産祭開催、漁村青壮年活動実績発表大会として、三根漁協持丸真喜男「先進地の一本釣漁業（ワカリ釣）を導入して」の演題で、大賀郷喜田武「佐賀関地域の一本釣操業を視察して」の演題で発表。八丈分場仲村正二郎、「イワノリ」について特別研究発表を行ない、水産課長崎亀人は「漁船の船長」と題し講演、特別講演として東海区水産研究所野口栄三郎、「水産物の処理販売方法について」の演題で講演。

12月：末吉漁協、末吉中学校へ「チャイム」を寄贈、ウエストミスター 寺院の音色に生徒達喜ぶ。

1967 昭和42年 2月5日：三根漁協通常総会開催、役員改選あり、組合長に菊池長二郎再選。

2月10日：中之郷漁協通常総会開催、役員改選あり、組合長に大沢市助再選。

2月13日：大賀郷漁協通常総会開催、役員改選あり、組合長に西浜嘉幸再選。

2月14日：末吉漁協通常総会開催、役員改選あり、組合長に沖山武一再選。

5月2日：三根漁協、菊池長二郎、組合長辞任のため臨時総会を開催、補欠選挙を実施、新組合長に浅沼一幸当選。

5月29～30日：都漁連・都漁業共済組合・都信連・都漁船保険組合の四団体、定期総会開催、役員改選の結果八丈関係では、都漁連会長・都漁業共済組合理事に沖山武一、都信連・都漁船保険組合の理事に浅沼一幸の2名が当選。

・三根漁協、製氷冷蔵庫建設。製氷能力日産8t、冷蔵能力200t（-20℃）、鉄筋コンクリート2階建、工費2億3千万円。

1968 昭和43年 2月13日：大賀郷漁協通常総会開催、西浜嘉幸組合長辞任に伴い、改選の結果、西浜晴美、組合長に当選。

6月11日：大賀郷漁協臨時総会開催、西浜春美組合長辞任に伴う役員選挙を実施、宮沢敏雄、組合長に当選。

6月18～19日：東京都水産課の担当者が漁協合併の件で来島、大賀郷・三根・末吉・中之郷の各漁協に対し、漁協合併助成法につき説明会を開催、各漁協とも合併に対する関心は強く、概ね大綱的には賛意を得られた模様。八丈町でもこの促進のため、この協議会として各関係者を集め協議が始まる。

9月24日：第1回八丈地区漁業協同組合合併推進協議会開催。

構成員（会長	池田 要太	副会長	武藤 真一）
八丈町長	池田 要太	同助役	山下 晴永
議会議長	奥山文一郎	経済委員	持丸喜久郎
海区委員	小宮山松夫		
漁協役員	浅沼 一幸	漁協役員	持丸 正信
漁協役員	宮沢 敏雄	漁協役員	菊池 忍

漁協役員	大沢 市助	漁協役員	佐々木正三
漁協役員	沖山 武一	漁協役員	沖山明治郎
学識経験	武藤 真一	学識経験	沖山 勇雄
地域代表	沖山 達雄	地域代表	金田善右衛門

1969 昭和44年 1月13～22日：大賀郷公会堂において、小型船舶操縦士国家試験受験資格講習会を開催、23日身体検査、24日学科試験を実施、受講者83人、全員合格。

1969 昭和44年 3月：10W 無線装備船10隻となる。漁業用SSB2MHz局、都漁連の免許で開局（八丈分場指導局との二重免許）。

9月：漁業用DSB27MHz局同じく開局。

11月：水産業協同組合法施行20周年を記念し、東京神田の九段会館で全国漁業協同組合大会を開催、同席上優良漁協と多年組合運動に尽くした功労者の表彰が行なわれ、八丈関係では中之郷漁協の大沢市助組合長が全漁連会長から表彰さる。

12月13日：第5回八丈地区漁協合併推進協議会開催、組織を発展的に解消、八丈島漁協合併委員会として発足、合併に関する諸問題を審議煮詰める事となる。委員構成は、各組合から各3人、協力委員、支庁長・町長・町議会議長・農協組合長・支庁産業課長・支庁産業観光課長。

1970 昭和45年 1月6～15日：特殊無線技士講習会開催、合格者61名。

1月7日：第1回八丈島漁協合併委員会開催、正副委員長選任、委員長沖山武一・副委員長浅沼一幸。

1月26日：東京都漁業協同組合連合会（会長沖山武一）、創立20周年記念式典を各界の来賓参加のもと開催。連合会の運営に協力した組合と関係者、それに永年勤続者に感謝状・表彰状の贈呈を実施。八丈関係では、中之郷漁協組合長大沢市助・同専務佐々木正三・末吉漁協組合長沖山武一が永年勤続で受賞、大沢・沖山両組合長は、組合運動功労者として都知事から褒状を受く。

2月14日：末吉漁協通常総会開催、役員改選の結果、組合長に沖山武一再選。

2月16日：三根漁協通常総会開催、役員改選の結果、小宮山松夫、組合長に当選。

2月20日：大賀郷漁協通常総会開催、役員改選の結果、宮沢敏雄再選。

2月24日：中之郷漁協通常総会開催、役員改選の結果、組合長に大沢市助再選。

5月28日：第39回東京都漁業協同組合連合会総会開催、役員改選の結果、組合長に沖山武一再選。

1971 昭和46年 2月9日：漁村青壮年活動実績発表大会、八丈温泉ホテルで開催。発表者：菊池保雄（三根、建切網の協業化）、奥山度泉（中之郷、カンパチの活餌釣漁法）、持丸真喜男（三根、底魚釣漁業捲揚機活用に伴う省力化）、広江卓男（大賀郷、メダイ釣漁法）、浅沼進（三根、F・R・P漁船の使用効果）、三木誠（八丈分場、伊豆七島のフクトコブシについて）、沢畑久雄（東京、鮮度保持及び流通について）。

3月2日：中之郷水産研究会発足。初代会長に西条梅健を選出。

6月15～24日：勤労福祉会館において小型船舶操縦士講習会を開催。

9月25日：第8回八丈島漁協合併委員会、八丈支庁会議室で田中支庁長、峰元町長、長戸路議長、都水産課木下係長、都漁連三木常務、都信連大場専務の出席のもと開催、合併基準日は昭和47年12月31日。合併は昭和48年7月1日と決議、合併への力強い第一歩を記す。

1972 昭和47年 1月14日：漁村青壮年活動実績発表大会、三宅観光ホテルで開催。発表者：持丸真喜男（建切網漁業の協業化・底魚釣漁業捲揚機の使用に伴う省力化）。

2月1～4日：先進地（三重）視察、八丈から3名参加。

8月3日：八丈支庁会議室で漁協合併委員会開催、慎重審議の結果、合併基準日：昭和46年12月31日、合併仮契約締結日：昭和47年10月10日、合併総会開催日：昭和47年11月1日、新組合発足月日：昭和48年1月1日等重要事項を決定。

10月5日：漁協合併仮契約締結日を数日後に控え、三根漁協から「合併案について」の要望書の提出があったため、町役場会議室で委員会を開催。三根側は「要望が入れられなければ、1月合併に同意出来ない」というもの。

要望書の内容

- ①47年の事業決算を基礎として合併を推進すること
- ②漁港毎に販売事業の取扱経費を負担し清算すること
- ③船揚利用料は、港毎に徴収基準及び方法を明確にすること

この事で6日協力委員（支庁長・町長・農協組合長等）は三根漁協の理事会へ出席、調整を計るも徒労に終る。

10月10日：町役場会議室で漁協合併委員会開催、小宮山松夫合併委員、大沢市助中之郷漁協組合長・宮沢敏雄大賀郷漁協組合長・沖山慶喜末吉漁協理事は、関係者の見守る中、末吉・中之郷・大賀郷と合併契約書に調印を実施。これで、かすかに期待を寄せていた三根漁協は調印に応ぜず、全島漁民の大同団結の願い、儂くも消え去る。

この現象に対する世論は次の通り。

- ①三根は我田引水が強すぎる
- ②神湊港は三根だけのものではない、全漁民のものだ
- ③漁港整備を三根だけでやったと思ったら、思い上がりも甚しい
- ④合併の大眼目は全島漁民の福祉の向上にある、自分だけ良ければの考え方はエゴだ
- ⑤互譲の精神がなければ今後も難しい
- ⑥島でこそ三根だ、中央では八丈は一つだ
- ⑦果して三根全漁民の意志だろうか疑わしい
- ⑧三根幹部は決断に欠けている

10月15日：南海タイムスに、「漁協の合併に思う」の題で“島を思う仲間”の投稿載る。

10月22日：南海タイムスに、「漁協合併について」の題で‘海に生きる男’の去る10月15日の“島を思う仲間”に対する反論載る。

11月5日・12日：南海タイムスに、「漁協合併について」の題で八丈支庁産業課長山下進也の意見連載。

1973 昭和48年 1月8～19日：東京都、漁村青壮年育成対策事業として八丈分場に於て、特殊無線従事者養成講習会を開催、受講者64名で認定試験に全員合格。尚、20日～24日にレーダーの講習会も実施、受講者48名認定試験に全員合格。

2月9日：八丈町主催第1回産業研究会の研究発表会開催、水産関係研究発表者：持丸真喜男・石田種男・岡野洋明・田村和夫。

2月14日：町役場において開催された第11回漁協合併委員会で、三根と大賀郷・中之郷・末吉の漁協の話し合いがつかず、遂に大同団結は出来ず流産、同委員会は解散。大賀郷・中之郷・末吉3漁協はその後新規の八丈島漁業協同組合合併委員会を発足、合併の方法は新設合併・合併基準日は昭和47年12月31日・合併仮契約締結日昭和48年2月16日・合併総会は昭和48年2月26日・新組合の発足は昭和48年5月1日と審議決定。

2月20日：三根漁協第24回通常総会開催、役員改選あり小宮山松夫組合長に再選。

5月1日：八丈島漁業協同組合発足。（大賀郷・中之郷・末吉が合同、三根漁協のみ加盟せず。組合長沖山武一・専務理事宮沢敏雄）

8月27～30日：八丈島水産研究会（20名）、三宅島・神津島・式根島・大島を視察。

・（石油ショックに依り日本の経済界大混乱）

1974 昭和49年 1月20日の南海タイムスに「万丈カゴの収集について」の三根漁協の広告載る。

1月31日：中之郷水産研究会、三根水産研究会員を講師として、曳縄講習会を開催。

2月5日：漁村青壮年活動実績発表大会、八丈分場で開催、発表者：岡野洋明（中之郷、中之郷地先のトコブシ）・田村和夫（三根、八丈の曳縄漁業）。

2月25日：三根漁協第25回通常総会開催、組合の総水揚高は512,810千円で、伊豆七島で随一となる。

2月26日：八丈島漁協第1回通常総会開催、合併後初の総会の為、役員改選あり、組合長は近々の理事会で互選の予定。組合の総水揚高299,553千円で三根漁協に次ぎ伊豆七島で第2位。

3月4日：八丈島漁協第1回理事会開催、佐々木稜喜（51才）を組合長に選出。

6月15日：第2回伊豆諸島漁業視察実施。

1975 昭和50年 2月9日：勤労福祉会館で、八丈島産業研究大会開催、水産関係で小栗卯雄・岡野洋明の2名研究発表。

10月1日：中小漁業融資保証法に基づき、金融機関の中小漁業者等に対する貸付について、その債務を保証し、もって、中小漁業者等が必要とする資金の融通を円滑にし、中小漁業の振興を図ることを目的として、東京都漁業信用基金協会設立。この協会設立に当たっての出資状況は次のとおり。

漁協（都漁連：500千円。漁協19組合：13,250千円。水産加工協：100千円。）：13,850千円。都信漁連：15,000千円。東京都：20,000千円。町村：8,700千円。合計57,550千円。

1976 昭和51年 1月26～27日：都漁連・八丈島・三根両漁協主催による、潜水士免許試験予備講習会、八丈支庁会議室で開催。

2月22日：三根漁協、第27回通常総会を開催、役員改選の結果組合長に小宮山松夫再選、専務に小栗清吉選出。

昭和50年度水揚高優秀船の表彰結果次の通り。

総合漁獲高の部	1位	第五稲荷丸	船主	浅沼	一幸
	2位	第三明神丸	船主	玉置	清春
	3位	第五宇之丸	船主	小栗	清吉

春トビウオの部	1位	第五稲荷丸	船頭	浅沼	則元
	2位	住吉丸	船頭	浅沼	功
	3位	雄飛丸	船頭	重田	一馬

底魚一本釣の部	1位	栄徳丸	船頭	浅沼	和仁
	2位	漁運丸	船頭	小宮山	行雄
	3位	第五稲荷丸	船頭	浅沼	則元

ムロ棒受網の部	1位	第3明神丸	船頭	玉置	清春
	2位	第五宇之丸	船頭	持丸	正平
	3位	第八幸丸	船頭	田村	一雄

7月25日：南海タイムスに「万丈カゴを返そう」の記事掲載。両漁協の万丈カゴ（通称「万漁」）が少なくなり、魚の集荷にも影響が出ているとして、見掛けた場合は、道端の見える所に出して置くようにとの要請。

1977 昭和52年 1月7～8日：三根水産研究会（36名）、先進地視察を実施。一行は、築地市場・荷受会社・中卸組合を視察、中卸組合では今後の問題点・出荷の現状について2時間の懇談会を持つ。また島嶼会館会議室では、都水産課・都水試・都港湾局・都漁連・都信漁連の各代表者と長時間に亘る陳情を含む意見交換が行なわれる。

1月10～21日：特殊無線技士講習会開催。

1月22～26日：レーダー講習会開催。

1月27日：八丈島漁協本所の17人は市場を視察、荷受業者3社と「如何に魚を高く買ってくれるか」を焦点に話し合いを実施、この結果、品揃え・規格統一について感銘を受く。航海の安全を願い金毘羅参りを兼ね、漁具仕入れのため南紀白浜・潮ノ岬方面を視察。中之郷支所の10人も、市場視察後成田山参詣を兼ね千葉外房の造船所を視察、船体研究に努め、漁港視察ではアワビの養殖を見学、つくる漁業への関心を強めて帰島。

2月25日：八丈島漁協通常総会を開催。決算報告の中で受託販売品の中に2,680万円の“アシタバ”を取り扱っているのが注目される。又役員改選があり、翌26日の理事会で佐々木樨喜、組合長に再選。3月3日の役員会で宮沢敏雄、専務理事に決定。

2月28日：三根漁協第28回通常総会開催。240t 収容の貯氷庫の増設・昨年引き続きトコブシを対象とした投石事業(2,040千円)・水族の増繁殖を図る魚礁事業(5,700千円)を決定。昭和51年度優秀漁船次の通り。

総合水揚高の部	1位	神天丸	船主	石田武徳
	2位	雄飛丸	船主	奥山夫男雄
	3位	第三明神丸	船主	玉置清春
春トビウオの部	1位	神天丸	船頭	浅沼 巧
	2位	雄飛丸	船頭	重田一馬
	3位	第五稲荷丸	船頭	浅沼則元
底魚一本釣の部	1位	漁運丸	船頭	小宮山行雄
	2位	第五貫徹丸	船頭	長田義治
	3位	吉栄丸	船頭	浅沼吉次郎
ムロ棒受網の部	1位	第三明神丸	船頭	玉置清春
	2位	雄飛丸	船頭	重田一馬
	3位	第五稲荷丸	船頭	浅沼則元

1978 昭和53年 1月15日：エンジン講習会開催。

1月22日：鮮魚出荷話し合い、中央・大都魚類の課長と実施。

3月5日：中之郷藍ヶ江漁港の船揚機関場で菊池伊助（65才）、ウインチの試運転中、機械に巻き込まれ死亡。

3月17日：末吉洞輪沢佐々木英（63才）方から出火、木造平家建て住宅24.16㎡全焼したうえ、隣の八丈島漁協末吉支所の倉庫木造モルタル二階建て464.4㎡をも全焼。

3月25日：八丈島郷土物産共進会、勤労福祉会館を会場として開催。

6月13日：三根の水産研究会（会長持丸真喜男）、八丈分場の職員と共に5月末に木枝を束ねた“巣”を9個作成、底土や垂土の6ヶ所の海底に設置、アオリイカ（別名バショウイカ）が産卵しているのを確認。アオリイカは一度産卵すると毎年同じ場所で産卵する習性があると言わる。

7月11日：中之郷藍ヶ江漁港で三原中学校生徒、潜水漁業を体験。これは、中之郷水産研究会（会長西条梅健）が発案、中之郷潜水組合（組合長山下治昭）が賛同、昨年から実施。このため、3日前にはメットウ（ギンタカハマ）1,000ヶが漁港内に放流済。生徒はメットウ・テングサを採集、潜水漁業を十分生体験。

1979 昭和54年 2月：三根漁業協同組合、総会において役員改選あり、小宮山松夫組合長に再選。

8月23日：青ヶ島村漁業協同組合（組合員34人、漁船5隻）都知事から設立認可。

三根漁業組合長、八丈町議会議長に専念のため辞任。組合長職務執行者に専務理事小栗清吉従事。

1980 昭和55年 1月7～10日：三根水産研究会一行29名、築地中央市場、小名浜漁協視察、市場関係から出荷魚の規格徹底等を提言さる。

2月：八丈島漁業協同組合の通常総会で役員改選あり、佐々木樺喜組合長に再選。

5月20～23日：中之郷・末吉水産研究会一行21名、三宅島の定置網を現

地視察実施。

11月28日：底土接岸港、第6次整備計画に伴う漁業権の放棄につき、三根漁業協同組合、臨時総会を開催、同意する事を議決。また、この臨時総会で発泡スチロール容器の製造工場を都漁連が事業主体となり、三根漁協が運営することを了承。

1981 昭和56年 1月5日：三根漁協船主組合、総会を開催、無謀な釣り客や遊泳客に対する怒りの声高まる。

申し合わせ事項として

①地元民の遭難者に対する捜索は2日間協力。

②外来の遭難者に対する捜索は1日間協力、2日目から有料とする。

尚、該当民宿・ホテル・観光協会に対し、安全指導について強い要望出る。

1月8～9日：八丈島水産研究会三根分会、築地市場・横浜卸売市場を研修視察。カツオのドブツケに依る鮮度保持等につき意を強くす。

1月14日：八丈島水産研究会、島外から講師を招き「漁業における省エネルギー講習会」を開催。

2月5～6日：東京都漁業協同組合連合会主催の「島嶼漁業者研修会」、八丈島で開催、約120人参加。

2月8日：八丈町主催による第五回産業研究発表大会、中之郷公民館で開催、水産の部で夏トビウオの夜間流刺網について効果発表。

3月17日：八丈町定例町議会で「魚の生産地であるのに、日本一高い魚を食べている。市場値の最高価格で売られているのではないか。鮮度が高いだけでは理屈にならない。新鮮な魚を食べたいと言う観光客に民宿では提供出来ないのが実情だ。」との意見出る。

3月31日：東京都漁業信用基金協会出資状況次の通りとなる。  
漁協（都漁連：500千円。漁協20組合：21,150千円。水産加工協：100千円。）：21,750千円。生産組合：3,500千円。個人：250千円。都信漁連：31,000千円。東京都：60,000千円。町村：30,500千円。合計147,000千円。

5月3日：南海タイムスに「何故高い島の魚」・朝市・謝魚祭で安売をの主張記事載る。

5月：八丈島水産研究会中之郷分会、3年前から夏トビウオ漁について検討、夜間流刺網（網目1寸7分）でホントビの漁法について、一応成案を得る。ホントビは5月頃から漁獲出来、アカトビより先に来遊する模様。

6月9日：神湊に建設中の「発泡スチロール魚箱製造工場」が落成、稼働開始。規模は、鉄筋コンクリート建て床面積340平方m、能力は、15kg・10kgの魚箱で1時間に100個、都漁連からの委託で三根漁協が管理運営に当たる。

8月23日：ムロアジ漁獲制限とムロくさやの価格等について、消費者サイドから論議発生。

1982 昭和57年 1月1日：三根の若い漁民の仲間達の集まり風間会を八丈町教育委員会、青年の模範であるとして表彰。同会は、昭和48年1月発足、社会を明る

くする運動の推進に協力、社会運動が実ったもの。

1月31日：末吉地区で三根水産研究会員を講師として曳縄漁業の講習会を開催。

2月28日：八丈島漁協の第9回通常総会において、指導事業の一環として、漁業無線の不感地帯解消のため、三根漁協と共同で無線鉄塔施設設置事業を行なうことを発表、予定地は中之郷の線が強し。また、この総会で本年度から運搬船5隻が3隻になることを報告。

・三根漁業協同組合、役員改選あり組合長に小栗清吉再選。

1983 昭和58年1月10～11日：三根水産研究会員22名築地・横浜市場視察。

2月：八丈島漁協通常総会で役員改選あり、組合長に沖山武一選らばる。

7月1～3日：東京都八丈勤労福祉会館において、東京都漁協職員協議会主催による「昭和58年度漁協職員研修会」開催。出席は八丈21人、神津・若郷・波浮・三宅・12人。その他水産関係者を併せて40人。

内容としては、

「漁船乗組員の所得税・源泉徴収について」	芝税務署
「信用事業の推進について」	農林中金 東京支店
「単協における指導事業について」	全漁連
「現地漁協の現状報告」	八丈町 ・三根漁協

11月27日：南海タイムス「サンデージャーナル」に、「多い深夜のSOS・望まれる24時間体制（漁業海岸局）」載る。

1984 昭和59年3月23日：都漁連会長佐久間雅之外7名から都に対し、「島しょ海域における安全操業対策促進に関する請願」提出。主旨は漁業海岸局の24時間開局体制。

1985 昭和60年1月26日：三根神湊海岸で昼火事発生、三根漁協倉庫木造平家建(78.4㎡)全焼。

・三根漁業協同組合、役員改選あり、組合長に小栗清吉再選。

12月28日夜：三根漁協購買部売店が荒らされ、20数万円盗まる。

1986 昭和61年2月25日：八丈島漁協、第13回通常総会を開催、沖山武一組合長、61年度において、共同作業場・漁具倉庫の建設と事務所の建設の計画を明示。役員改選実施、新組合長に沖山明治郎を選任。

10月31日：三根漁協、信用事業整備強化対策事業の指定を受け、向こう10ヶ年の財政再建に入る。

1987 昭和62年1月16日：水産航空株式会社が「航空機観測体験飛行」を実施。これは昨春以来漁民間に要望の動きがあった事に応じたもの。

1月25日：第8回産業研究発表大会を開催、サメ被害対策について菊池一郎、ムロ漁の現状について小栗清光、発表を行なう。

2月26日：八丈島漁協、通常総会開催。

2月28日：三根漁協、通常総会を開催、信用事業整備強化対策事業の強

力な推進と、今後の貸出の合理的厳正化を強調。

4月9日：八丈島漁協の事務所と、漁船漁業用共同作業場と漁具保管倉庫が完成、新事務所での営業を開始。漁船漁業用共同作業場と漁具保管倉庫は、地域沿岸漁業構造改善事業として設立したものであるが、永年懸案であった事務所は自力で事業費15,000千円をもって建造したもの。1階は事務所・2階は会議室で、冷暖房完備の近代的なもの。

9月2～3日：全国漁業協同組合連合会、全国漁協婦人部連絡協議会主催で第24回全国婦人水産業従事者グループ研修会を開催、「私達漁協婦人部の活動と魚食について」等のテーマで熱心な討議。

1988 昭和63年1月18日：東京都島嶼無線漁業協同組合の設立総会、八丈島国際観光ホテルで開催。これまで漁業海岸局（漁業用）は、都漁連が免許人となり、八丈島漁業無線協会（会長・沖山武一・島内会員144名）が運営して来たが、昨年6月都漁連から今年度限りで免許人を返上すると一方的に通告があり、協会は任意団体のため免許を受ける資格がなく、地元ではこの海岸局が昼夜、漁船と漁船・漁船と陸上を結ぶ漁業通信業務の中核であり、漁船漁業経営の効率化・安全性の確保という立場から必要不可欠であるとして、八丈・三根両漁協、新組合設立のため昨年の11月には、三根漁協の小栗組合長を代表として発起人会を発足、12月21日には第1回設立準備会を開催、新組合の定款作成に着手したもので、この18日には先ず八丈島漁業無線協会が、発展的解散を行ない、全会員が東京都島嶼無線漁業協同組合に加入、設立となったもの。役員選挙の結果、組合長に小栗清吉・副組合長に沖山明治郎当選、今後は発起人会で組合の設立認可申請・海岸局の免許申請を行ない、来る4月1日からは正式の東京都島嶼無線漁業協同組合として発足活動することとなる。

2月28日：三根漁協通常総会開催。決算では7,900千円の黒字を計上、累積赤字を13,700千円に圧縮。役員改選では、組合長に小栗清吉が当選する等現職が全員当選。

2月29日：八丈島漁協通常総会開催。決算では8,000千円の黒字を計上、累積赤字を14,500千円に圧縮。また今年度から増産奨励として、漁獲高優秀船の表彰制度を創設、62年度漁獲高優秀船は次の通り。

1位	栄丸	船主	菊池	正直
2位	いち丸	船主	菊池	一郎
3位	金生丸	船主	稲葉	靖充

4月14日：八丈町議会議員全員協議会開催、陳情項目について審議され、水産関係では①漁業用海況調査に航空機による航測を導入②第九次漁港整備計画に蓄養施設等が出来る漁港の整備等を決定、町長・議長・両漁協組合長、4月21日知事に陳情。

### 3 漁法の変遷

・参考資料（水産物方言集）

西暦	年号	特記事項																								
1708	宝永5年	宝永年中菊池采女、網を拵え前崎新島ヶ沖にて、むろ鰯・鰯を初めて獲る。それより村々にて網で獲る事を覚ゆ。																								
1753	宝歴3年12月	「伊豆七島調書」に「青ヶ島漁船3艘御座候」とあり。																								
1783	天明3年6月1日	天気北風、青ヶ島、3隻で鰯500本程釣る（青ヶ島御船中日記）。																								
1835	天保6年	地役人高橋長左衛門が代官羽倉外記に提出した「青ヶ島大概記」に青ヶ島における水産関係として、次の通り記載あり。 海産之品：海苔・はんば・さひみ・亀はんば・鰯・笹魚・赤魚・鮫・亀・なだ・さびれ・あふとふ・鰻・はらふ・からふ・ますの魚・油魚・はと魚・阿ひす・蟹・尾白・たこ・かじかみ。 貝乃類：ひらみ・たばこ・蛤・せのかみ・鴈貝。親ねらみ・磯ざる。																								
1873	明治6年	三宅島で飛魚網漁法始まり、同島からの漂流者により青ヶ島に伝わる。																								
1877	明治10年	「明治9年度青ヶ島物産取調書」青ヶ島副戸長佐々木次郎太夫より静岡県令に提出あり。鮮魚関係は次の通り。 <table style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>鰯</td> <td>2,500尾</td> <td>1尾に付</td> <td>3銭換</td> </tr> <tr> <td>鮫</td> <td>30尾</td> <td>1尾に付</td> <td>50銭換</td> </tr> <tr> <td>鰯節</td> <td>215貫</td> <td>1貫に付</td> <td>1円換</td> </tr> <tr> <td>海苔</td> <td>500枚</td> <td>1枚に付</td> <td>3銭5厘換</td> </tr> <tr> <td>鰯塩辛</td> <td>90貫</td> <td>1樽6貫</td> <td>1樽1円換</td> </tr> <tr> <td>鰯塩梅</td> <td>300貫</td> <td>1樽6貫</td> <td>1樽70銭換</td> </tr> </table>	鰯	2,500尾	1尾に付	3銭換	鮫	30尾	1尾に付	50銭換	鰯節	215貫	1貫に付	1円換	海苔	500枚	1枚に付	3銭5厘換	鰯塩辛	90貫	1樽6貫	1樽1円換	鰯塩梅	300貫	1樽6貫	1樽70銭換
鰯	2,500尾	1尾に付	3銭換																							
鮫	30尾	1尾に付	50銭換																							
鰯節	215貫	1貫に付	1円換																							
海苔	500枚	1枚に付	3銭5厘換																							
鰯塩辛	90貫	1樽6貫	1樽1円換																							
鰯塩梅	300貫	1樽6貫	1樽70銭換																							
1883	明治16年	青ヶ島海域にまで焼玉エンジン発動機船が出没、島民大変驚く。島民は「ドッドコ船」と呼び、八丈島では「ポッポッコ船」と呼ぶ。																								
1887	明治20年	青ヶ島で漁獲される鰯は年間約5万本から10万本にも及びしが、「ドッドコ船」の出現を機として、次第に漁獲高は減少する事となる。																								
1912	明治45年	分銅潜り（フンドンモグリ）が導入さる。																								
1916	大正5年	青ヶ島からの移出品、節類100貫、乾物250貫、飛魚600貫。																								
1919	大正8年4月	青ヶ島名主、佐々木初太郎、日本水産（株）に漁業経営を提案採用するよう申し入れるも採用されず。その経営案は次の通り。 ①漁業時期に運送船を差し向け、生魚を市場に直送する。 ②漁具・餌を歩合で青ヶ島漁船に支給し、多漁の方法を図る。 ③氷蔵庫・加工製造場を設置し、島周辺に集まる内地発動機船の漁獲物を引き受ける。 ④青ヶ島の漁獲物は一手に日水に売り渡す。 ⑤島民は漁業や製造に必要な場合、相応な賃金で応ずる。 ⑥将来は発動機漁船で青ヶ島・鳥島間に漁場を拡張したい。																								
1921	大正10年6月4日	大賀郷大里網組合、むろ85.300本も漁獲。従事したのは漁船16隻と舢舨2隻。このため、菊地初五郎・大里網組合、発起人となり、優婆夷宝明神社の境内に大漁記念碑を奉納。																								

- 1922 大正11年：海藻類水揚高：石花菜15,703貫、サイミ 4,430貫、その他 511貫。
- 1923 大正12年6月9日：底土で建網により鱒大漁。
- 1925 大正14年：海藻類水揚高：石花菜17,411貫、サイミ 2,580貫、その他 1,160貫。
- 1926 大正15年：海藻類水揚高：石花菜24,768貫、その他 5,145貫。
- 1927 昭和2年：漁船用有水焼玉エンジン初めて導入。
- 1931 昭和6年6月13日：八丈製氷会社、八重根で上棟式。

・村別漁業者数・漁船数

	戸数	人口	機械船	鱸船他
三根	338戸	553人	18隻	65隻
大賀郷	136戸	231人	12隻	17隻
樫立	15戸	20人	0隻	5隻
中之郷	38戸	44人	4隻	7隻
末吉	75戸	68人	2隻	28隻
宇津木	17戸	51人	1隻	2隻
鳥打	30戸	56人	2隻	1隻
青ヶ島	40戸	58人	0隻	9隻
合計	689戸	1,081人	39隻	134隻

- 1932 昭和7年2月：三根天草組合では、昨年の収穫が例年になく多く、売り上げ価格13万円、村へ納めただけでも1万円と、大漁だったため祝宴を張り、役員改選を行った処、旧役員が殆ど落選、騒然となる。尚、新役員20名中15名が脱退、更に騒然となる。

8月29日：中之郷の天草代が昨年分から未払いとなり、山下村長上京督促、昨年分だけは支払いとなる。

9月：大賀郷・三根両漁協9月分の伊勢えびを入札に付し、三根分は100匁10銭7厘で草刈学、大賀郷分は10銭8厘で小林誠一落札。

- 1933 昭和8年4月12日：末吉村では、一部村民から天草漁場については村経営にして欲しいと要望があるも、高収入を計るため、入札を実施。大勢押し掛けた入札者のうち、福井準平、3ヶ年間で26,040円で落札。

・春飛魚水揚高次の通り。

大賀郷	16隻	155,638尾	18,401円
三根	21隻	144,582尾	18,391円
中之郷	8隻	88,093尾	10,145円
末吉	7隻	52,069尾	5,885円
計	52隻	441,382尾	52,822円

1位	金生丸 (船主稲葉金之助)	16,561尾	2,013円	(大)
2位	神湊丸 (船主山本 林市)	15,372尾	1,915円	(三)
3位	大沢丸 (船主大沢 市助)	12,098尾	1,408円	(中)
4位	富士丸 (船主冲山 貢)	11,611尾	1,304円	(末)

- 1934 昭和9年5月22日：三根村漁業組合飛魚大漁につき、村民一戸毎2尾あて配付(総計1,430尾)。

11月6日：末吉石花菜組合、信州・伊豆方面の天草需要地並びに東京地方生産地経営の視察のため、210円の予算を計上、会計主任佐々木国夫

・同幹事冲山寅蔵・同評議員冲山芳平上京。

12月：末日現在の発動機付き漁船数は次の通り。

地区別	焼玉式	電火式	計	総噸数	平均噸数	平均馬力
大賀郷	10	7	17	30.37	1.786	6.029
三根	18	5	23	35.02	1.522	4.261
檜立	-	-	-	-	-	-
中之郷	2	8	10	17.66	1.766	5.900
末吉	2	10	12	21.41	1.784	5.000
宇津木	-	1	1	1.80	1.800	5.000
鳥打	-	2	2	3.50	1.750	6.000
青ヶ島	-	-	-	-	-	-
計	32	33	65	109.76	1.689	5.170

・各地域別水揚高

	飛魚	鯉	むろ	底魚	合計
三根	23,144円	9,485円	9,106円	3,429円	45,164円
大賀郷	19,323円	10,898円	0円	12,053円	42,274円
中之郷	3,567円	1,528円	599円	0円	5,694円
末吉	226円	0円	0円	0円	226円
合計	46,260円	21,911円	9,705円	15,482円	93,358円

・石花菜水揚高：122,101円

・八重根港に発動機械片野鉄工所開業。

・末吉、大沢丸・福寿丸に無水焼玉エンジン八丈で初めて導入。

1935 昭和10年6月1日：大賀郷漁業組合春飛魚漁成績優良者を表彰。

1位	二号金生丸	1,335円36銭	石田博
2位	二号金栄丸	1,327円62銭	西浜春美
3位	三号金生丸	1,226円52銭	稲葉金之助
4位	一号金生丸	1,054円69銭	刈草金太郎
5位	一号惣栄丸	1,002円58銭	星野寅吉

石田博は、3年継続優勝旗を獲得。

9月19日：大賀郷大里網組合専属漁船、八重根において竣工。

12月18日：末吉オデ海岸地先から耳ち根地先海岸の天草入札は、三根採草組合・辻直兵衛・東京西之宮商店・信州坂本盛三・三宅島浅沼道之助・同吉田兼松が入札に参加するも予定価格に達さず、辻直兵衛と協議の上、向こう5ヶ年間で47,500円で契約成る。

・国勢調査結果：八丈小島漁業者90名（宇津木58名、鳥打32名）発動機付き漁船2隻。青ヶ島漁業者36名、漁船5隻。

1936 昭和11年10月11日：大賀郷で第五金生丸（船主稲葉金之助）竣工。総噸数7.2t、無水式重油発動機20馬力、和洋折衷型漁船で総建造費6千円余。

12月6日：大賀郷第五金生丸と同形の新造船末吉丸（船主冲山末喜）洞輪沢で竣工。

・黒瀬の青鯛・姫鯛、棲息状況濃厚、数ヶ年後迄も本島の宝庫。

・昭和11年度：水産水揚額 263,614円。

大賀郷	50,453円	末吉	88,726円
三根	103,289円	宇津木	3,998円
檜立	938円	鳥打	2,850円
中之郷	12,749円	青ヶ島	611円

1937 昭和12年6月9日：三根神港丸竣工。長さ16.85m、幅3.425m、深さ1.7m、総噸数19.14t、和洋折衷型、速力8浬、馬力60、無水式重油發動機、総工費16.847円90銭。

1938 昭和13年2月2日：大賀郷八重根で見山吉太郎等が造船計画中の海幸丸が新造竣工。島では初めての大型船。長さ16m、幅3.333m、深さ1.636m、60馬力、19tの西洋型機帆船。総工費18,000円余。

5月2日：三根田中幸作外21名の乗組になる建網船は、午後2時頃より1時間足らずの間にサビレ1,000本、大鯛300余を漁獲。金額にして1,370円。1人当たり約50円位となる。

5月29日：大脇旅館で大賀郷漁業協同組合による春飛魚漁の表彰式開催。優勝は3号金生丸。13,311尾、1,687円10銭。

6月6日：静岡県松崎で建造中の第六神港丸（船主山本林市）竣工。総噸数29.7t、公称馬力120馬力。

6月：岩手県宮古町の舟木忠治と末吉村、松本絹二共同経営で、舟木の所有する一丸（7t）を使用し、八丈島を根拠地として底魚一本釣に従事中、鳥島の北3かり半・水深180尋で広江平次（青ヶ島）が約四百匁の桃色珊瑚を釣り揚ぐ。

8月14日：末吉佐々木武雄が伊豆伊東で建造中の東京府補助大型漁船第三平穩丸竣工。

・本年度の漁船数：三根27、大賀郷18、末吉14、中之郷9、計68隻（伊豆七島で214隻）

1939 昭和14年3月10日：弁天丸、初飛魚水揚139尾、島内価格52銭。

3月：鳥島の人口28人（7戸）。漁船5隻、内2隻發動機船。

5月22日：中之郷で鮑（トコブシ）の入札が実施され、初めの100貫迄を1円に付985匁を以て、次の150貫を1円に付1貫で三根村赤松源吉に、その次の250貫は1貫85匁を以て中之郷佐々木正三に、次の100貫は1貫95匁を以て中之郷青木清松にその他の水揚は全部1貫70匁で赤松源吉となる。

6月19日：三根天草入札、甲草は1円に付113匁6分で辻直兵衛、乙草は118匁で小飼宇佐衛門が落札、未曾有の高値となる。

6月：三根第三弁天丸（船主本橋弥三兵衛・乗組6人）は、春飛魚漁終漁後経費を節約し、陸海軍へ10円を献金。

7月20日：珊瑚入札打合会、支庁で府漁連・珊瑚漁業者・水産会の三者開催。府漁連の一方的・独断的な発案に地元は大反発、協議は成立せず。

7月25日：7月15日までの採取珊瑚第一回入札、支庁に於て開催、全国から仲買業者47名参加、6日間に亙り実施。総貫数1,268貫210匁、総金額307,945円。各村別は次の通り。

村名	隻数	数量	金額
三根	6隻	623貫 420匁	150,991円
大賀郷	6隻	349貫 170匁	86,106円
末吉郷	3隻	151貫 975匁	36,462円
中之郷	2隻	143貫 645匁	34,386円

7月：三根貫徹丸乗組員11名、10日間毎日1人抜き宛の天草を売却し、10円を陸海軍へ献金。

8月：各村メットウ入札、1貫に付三根1円7銭、大賀郷96銭、中之郷83銭、末吉86銭。

・昭和14年珊瑚漁獲高  
2,140貫 962匁、 505,967円 操業船19隻

10月：珊瑚の第2回入札について、仲買人が集まり易い東京でとする三根・末吉の当事者と、これほど価値あるものについては、仲買人は八丈までも来島する。何も経費を掛けて上京することはない。足下を見透かされるだけだと大賀郷・中之郷の当事者の意見が真っ向から対立。10月5日から4日間、三根・末吉は、東京で入札に付し、これに大賀郷側の辻直兵衛変節し反対側に同調入札に付す。入札結果は次のとおり。

三根	320貫 522匁	59,407円
末吉	133貫 125匁	23,066円
辻	41貫 510匁	8,888円
計	495貫 157匁	91,361円

・末吉地区天草水揚資料

昭和元年	1,844貫	6,684円	・	7年	9,353貫	19,485円
2年	3,479貫	9,520円	・	8年	9,411貫	26,954円
3年	2,829貫	11,233円	・	9年	14,399貫	34,453円
4年	6,410貫	28,351円	・	10年	7,507貫	21,770円
5年	6,751貫	18,861円	・	11年	10,827貫	38,985円
6年	11,306貫	47,160円	・	12年	4,177貫	18,111円
			・	13年	4,243貫	21,000円

1940 昭和15年：昭和15年珊瑚漁獲高  
3,306貫 970匁、 661,944円、 操業船20隻

1941 昭和16年1月：中之郷（菊池石次郎）、ササヨ1夜網に78枚、17貫の大漁。

5月 春飛魚漁結果は次の通り。

順位	船名	船主	漁獲高	金額
1位	貫徹丸	長田正治	3,472貫700	6,723円44銭
2位	弁天丸	本橋熊一	3,345貫900	6,513円53銭
3位	第三海栄丸	浅沼朝由	3,299貫200	6,368円59銭
4位	改福丸	宮内竹次郎	3,168貫230	5,975円07銭
5位	八十八丸	西條新平	3,040貫440	5,899円17銭
6位	宇之丸	小栗清吉	2,894貫400	5,599円82銭
7位	海進丸	小林誠一	2,867貫600	5,572円04銭
8位	大沢丸	大沢市助	2,714貫630	5,260円53銭
9位	成田丸	大沢辰三郎	2,602貫690	5,103円39銭
10位	正徳丸	吉田政吉	2,548貫350	4,948円40銭
総水揚高			65,422貫余	総水揚金額 126,431円

6月5～13日：珊瑚の第一回入札実施。結果は次の通り。

三根	6隻	563貫 500匁	137,833円
大賀郷	8隻	746貫 360匁	183,229円

中之郷	2隻	202貫 360匁	56,289円
末吉	3隻	241貫 395匁	56,955円
計	19隻	1,753貫 615匁	434,306円

- ・昭和16年珊瑚漁獲高  
2,831貫 570匁、818,721円、操業船19隻  
(第二次大戦のため昭和16年12月をもって操業中止。)

1942 昭和17年 3月17日：大賀郷第二金生丸（船主稲葉又三郎）初飛魚 1,000尾余を水揚、意気高まる。

- ・春飛魚水揚高次のとおり。
- |     |     |              |             |
|-----|-----|--------------|-------------|
| 大賀郷 | 14隻 | 45,932貫 600匁 | 110,295円03銭 |
| 三根  | 15隻 | 61,891貫 300匁 | 144,915円14銭 |
| 中之郷 | 7隻  | 35,221貫 650匁 | 85,266円28銭  |
| 末吉  | 4隻  | 15,924貫 400匁 | 38,231円83銭  |
| 合計  | 40隻 | 158,969貫950匁 | 378,708円28銭 |

・中之郷成田丸は、春飛魚中鱈その他の大物を 300貫余も釣り、700余円を上げ、大物では今年の島内随一。

5月29日：珊瑚会議開催。珊瑚業者の中には入札を急ぐ者と、持ち堪えようとする者と意見が相違するものの、入札は本島で実施することに決定。

10月1日：八重根片野鉄工所の片野吉太郎は、品行方正・技量熟達・職務勉勵の模範会員として、東京産業報国会から表彰さる。氏の技量は島内機械所有者にとり、砂漠のオアシス的存在。

10月：サワラの大群が押し寄せ、洞輪沢ではカヌーでさえ20~30本も水揚。塩は無し、氷は間に合わず運搬船は無く、そのため節を製造して大忙し。

1943 昭和18年 3月：珊瑚の入札東京で開催、総売上高38万4千円。

5月：春飛魚漁終漁。結果は次の通り。

順位	船名		漁獲高	金額
1位	三号海栄丸	(三)	7,560貫 000匁	18,834円56銭
2位	一号神港	(三)	7,383貫 900匁	18,468円59銭
3位	改福丸	(中)	6,936貫 450匁	17,560円02銭
4位	八十八丸	(中)	6,133貫 450匁	15,534円35銭
5位	三号日吉丸	(末)	5,813貫 400匁	14,736円97銭

1945 昭和20年：春トビウオ年別・島嶼合計水揚高

昭和15年	358,500貫
昭和16年	644,400貫
昭和17年	465,986貫
昭和18年	256,843貫
昭和19年	102,337貫

1946 昭和21年 2月16日：春トビウオ初出漁の三根海栄丸（船主浅沼朝義）、初トビウオ20尾を、17日には 100尾を、18日には50尾を水揚。

3月15日：今春のトビウオの大漁を祈願する中之郷船主組合・乗子に依る潮祭で、「昨年は疎開や召集等のため、毎日の如く思い暮したトビウオの味覚を今年は十分味わって貰いたい」と、1万本以上水揚のあった

最初のトビウオを1万本村内へ無償配布を決議、4月15日公約通り配布を実施。村民を感激さす。

3月30日：先に船名募集が行なわれていた奥山武巳の新造漁船は「八千代丸」と大賀郷漁業組合の幹部の選考により決定。応募者は273名、船名400種。一等（賞金500円）は同名2名のため抽選で冲山典子（末）。二等（賞金200円）は都南丸で同名が31人のため抽選で赤坂富子（大）。三等（賞金100円）は曙丸で福島勉。

5月9日：中之郷成田丸（船主菊池多伝）、カツオの初漁に出漁、300貫を水揚。今年度のトビウオの不漁の補いにと一同張り切る。

5月：日本の最南端にあり、帝都の食料補給の一翼を担わんと、漁業会は今後の活躍を期して、大賀郷11隻、三根12隻、樫立3隻、中之郷7隻、末吉8隻の新造船の建造申請。重油70本・経由その他43本も確保、積極的活動を開始。

6月：今年のテングサ漁は中之郷6月1日、末吉6月21日、大賀郷6月15日、三根7月1日に口開けを決定、増産が予想され、価格は次の通り決定。（表・10貫当たり）

品名	1等	2等	3等
マグサ晒	660円	605円	506円
〃 汐赤	456円	410円	363円
〃 汐抜	479円	430円	381円
オニクサ晒	576円	523円	440円
〃 汐赤	397円	374円	
ヒラクサ晒	204円	191円	
〃 汐赤	185円	173円	
〃 汐抜	194円	179円	
ドラクサ晒	261円	237円	
〃 汐赤	237円	216円	195円
〃 汐抜	249円	227円	

7月：テングサ価格改定につき都から次の通り通牒あり。

品名	1等	2等	3等
マグサ晒	720円00銭	660円00銭	252円00銭
〃 汐赤	497円45銭	447円27銭	396円00銭
〃 汐抜	522円55銭	469円09銭	415円63銭
オニクサ晒	630円55銭	570円59銭	480円00銭
〃 汐赤	433円09銭	408円00銭	
ヒラクサ晒	222円55銭	208円36銭	
〃 汐赤	201円82銭	188円73銭	
〃 汐抜	211円64銭	195円27銭	
ドラクサ晒	284円73銭	298円55銭	
〃 汐赤	258円99銭	225円64銭	212円73銭
〃 汐抜	271円64銭	247円64銭	

10月1日：連合国向けの貿易見返産物として、テングサ7,000貫が八重根港から高千穂丸で積み出さる。各村内訳は次の通り。

村名	数量	金額
三根	6,211 貫	361,839 円
大賀郷	939 貫	59,349 円
中之郷	46 貫	2,542 円
樫立	32 貫	2,304 円

末吉村分は天候の都合で荷役不能の為次回となる。

10月：中之郷村の田持組合、新米3俵を、春のトビウオの礼として中之郷漁業組合へ届け、「持ちつ持たれつ」の格言を実行。

春トビウオ漁操業体制

村名	隻数	網数	乗組員数
大賀郷	17隻	554反	151名
三根	12隻	300反	105名
中之郷	9隻	230反	64名
末吉	6隻	210反	48名
檜立	1隻	不明	不明
計	45隻	1,294反	368名

11月11日：檜立村多和瀉海岸でダイナマイトで漁をしようとして、佐藤久弥（35才）、操作を誤り死亡。

12月：戦争中連合軍の潜水艇部隊では、水面下にある物象を探知する器具の開発を期して、連合軍潜艦装置調査委員会を設け開発の結果、反応物体の大きさ・それが何であるか迄が判断出来る装置を完成、更にその装置を操作すると、付近の魚が集まってくるというおまけ迄付いて、漁民を喜ばせる情報が流れる。

- ・（注）漁船数三根15、大賀郷19、中之郷8、末吉7、檜立2、計51隻（伊豆七島163隻）

1947 昭和22年2月27日：世界的な寒気の冬で、海の方も水温低く、藍ヶ江漁港ではサメが大量に漁獲されるようになる。魚種はツノザメ・ヒラガンラが主で、シュモクザメ・ネコザメ・サカタザメ・ナヌカザメも水揚げあり。出漁すると1日300～600貫の漁獲。海岸には一面のサメ干しが広げられ、この干物が大変美味。この干物は「べっこう干し」として中々好評。鰯類は中国向け出荷。初トビウオを待つ間の賑い。

5月7日：春トビウオ漁終漁。結果は次の通り。

組合別水揚げ			
三根	21,345貫	中之郷	9,390貫
大賀郷	12,982貫	末吉	7,300貫
			合計 51,017貫
各船別水揚げ			
順位	船名	漁獲高	船主
1位	第一神港丸	1,941貫	山本 林一
2位	改福丸	1,874貫	宮内竹次郎

6月：洞輪沢漁港で興産株式会社八丈支社、カツオ漁船（6.5t、25馬力）新造竣工、水産復興への意気を示す。

8月5日：八千代丸（船主奥山武巳・6t、農林25馬力）が三根山下造船所で完成、田代田之助の指揮による牽引車で八重根港まで、船体はコバルト色に白線入りのスマートな容姿を見せながら輸送される。

8月：末吉テングサ豊漁。末吉漁民は、テングサは見返り物資として重要な状況下、全力を挙げて増産せんと、漁業会が水揚げと同時に引受け、乾燥・踏込み・選別・荷造り等一切の工程を行ない、漁民は生産一途に、水揚げ伸びる。

9月上旬：末吉村の福寿丸（10t、乗組6名）、静岡県白浜方面へイカ漁に出漁活躍。

9月28日：末吉で、不漁続きのところムロ3,000貫、サワラ40貫を水揚げ、

早速村内にお月見用にと配給、喜ばれる。

10月：末吉村引揚者開拓組合、組合員の熱望と村民の後援で、八丈興産(株)の持ち船第一日吉丸を購入、第一開拓丸と仮称、漁業への進出を画す。

12月：八丈島からのサンマ漁出漁船は、10隻となり1隻は大島海域で、9隻は房州海域で操業。

1948 昭和23年 1月：八丈小島のテングサの入札実施、南洋水産の田崎末松、十萬円で落札。テングサ原草は日本の主要見返り品として、今や世界市場の寵児。

2月11日：三根村では嘗てテングサ16,000貫の水揚記録があるが、昨年は20,000貫を突破、金額にして4,000千円の記録更新、テングサ倉庫に約500名の生産者が集い盛大な増産祝を開催、今夏の増産を期す。

5月1日：動力船63隻、無動力船148隻、水産加工場15軒。

・春トビウオ漁結果次の通り

地区別水揚高

三根	22隻	42,230貫	700匁	中之郷	10隻	16,428貫	485匁
大賀郷	19隻	23,689貫	600匁	末吉	7隻	14,374貫	300匁
檜立	2隻	435貫	000匁	青ヶ島	不明	750貫	000匁

各船別順位

1位	第三神港丸	4,533貫	800匁	(三)
2位	弁天丸	3,967貫	800匁	(三)
3位	清浪丸	3,386貫	500匁	(末)
4位	幸丸	3,111貫	100匁	(三)
5位	第五宇之丸	3,092貫	200匁	(三)

5月29日：支庁会議室でサンゴ採取組合協議会開催、次の事項が協議される。

戦後対外貿易の花形として期待されるサンゴ漁業については、その許可の方法を、本島では組合を設立して既成業者を含めて、1本で許可を申請するようにしていたが、水産課ではサンゴは非食料品だということで許可せず、今年になって一方的に1部業者に許可が出たため、昨年結成された組合で許可運動を起こす。既に許可になった業者については、その撤回を求めてゆく。

7月17日：本島天気予報ラジオ放送開始。

1949 昭和24年 1月26日：水温18℃、春トビウオ初漁。三根海栄丸(船主浅沼朝由)が試験的に操業、180尾の水揚。

5月：春トビウオ漁終漁、結果は次の通り。

地区別水揚高

三根	22,380貫	中之郷	5,839貫
大賀郷	7,659貫	末吉	8,561貫
檜立	372貫	計	44,811貫

各船別順位

1位	弁天丸	船主	本橋熊一	(三)
2位	海栄丸	船主	浅沼朝由	(三)
3位	第五宇之丸	船主	小栗清吉	(三)
4位	第五幸丸	船主	田村金一	(三)
5位	第三日吉丸	船主	冲山環	(末)

9月15日：大賀郷漁業会長菊池勇等約2ヶ年の努力により製氷所（1,400万円、内80%都補助、126建坪、日産5t、急速冷凍1.5t、冷蔵75t）完成、業務開始。

11月3日：三根漁業協同組合では、文化の日を記念し、小売値100匁50円のアオゼを30円で村民に配給、喜ばる。

・昭和24年度伊豆七島、戦後初めて魚類水揚100万貫突破。

1950 昭和25年2月15日：八丈島製氷株式会社、三根において事業開始。（製氷能力15t×2。島内は電力不足により、2億円をかけてダムを築き、発電所を建設。）

12月11日：昭和25年度春トビウオ漁業増産者、表彰式開催。

月別水揚高

3月	49,771貫	5月	20,227貫
4月	150,913貫	合計	220,911貫

漁船別

1位	八十八丸	船主	西條新平	6,111貫
2位	安全丸	船主	小崎一右衛門	6,020貫
3位	第八漁栄丸	船主	広江桑松	5,959貫
4位	第八喜久丸	船主	菊池勇	5,867貫
5位	日吉丸	船主	沖山環	5,668貫

・（注）漁船数大賀郷32、三根28、末吉10、中之郷10、樫立6、計86隻、（伊豆七島279隻）

1951 昭和26年1月：サンマ漁業の衰微と共に伊豆諸島近海方面に出漁する他県の延縄漁船増加。

6～8月：内地船、黒瀬でカツオ豊漁。

10月23日：春トビウオ漁業増産者、表彰式開催。

地区別

大賀郷	257,810尾	中之郷	168,389尾
三根	315,000尾	末吉	113,201尾
樫立	82,080尾	計	936,480尾

各船別

1等	3,414貫	第一金生丸	船主	稲葉又三郎	・船頭	大沢啓（大）
2等	3,024貫	だいたく丸	船主	大沢市助	・船頭	奥山度泉（中）
3等	2,800貫	弁天丸	船主	本橋熊一	・船頭	本橋熊一（三）

11月：漁場水温が若干低く、300尋以深に生息するハマダイが150尋前後の浅海で漁獲。但し魚群は疎。

1952 昭和27年4月：トビ網事故防止のため、他県漁船の泊地を神湊・八重根・洞輪沢に限定。

・本年度の春トビウオ漁業操業船66隻。

7月10日：春トビウオ漁業振興表彰式、八丈支庁を会場として開催。受賞者は三根栄徳丸（船主浅沼石之・船頭小崎芳男）3,165貫、悪天候・冷水塊のため不漁の年であった。受賞船はラジオ受信機を積載、青ヶ島方面に数十回も出漁した結果。

10月25日：三根、幸丸（船主田村金一）、黒瀬南東側水深80～120尋で底魚釣中重量16g、長さ10cm、太さ7mmのアカサngoを採取。

・東京都漁連、テングサの共販制を実施。（昨年の一等最高値 6,000円（10貫当たり）に比べ、本年は11,700円の高値付く。）

1953 昭和28年：春トビウオ漁獲実績次の通り

地区別水揚高					
大賀郷	18隻	516,236尾	中之郷	12隻	406,867尾
三根	27隻	587,444尾	末吉	10隻	190,561尾
榎立	4隻	65,268尾	合計	隻	1,766,376尾
各船別順位					
1位	八十八丸	56,012尾		(中)	
2位	成田丸	54,958尾		(中)	
3位	改福丸	46,896尾		(中)	
4位	和吉丸	42,361尾		(大)	
5位	末丸	42,361尾		(末)	

・サngo水揚高、159貫 760匁、（大賀郷75貫 476匁、三根74貫 829匁、中之郷9貫 455匁、）

1954 昭和29年6月2日：春トビウオ漁業優秀船、表彰式開催。

地区別水揚高					
大賀郷		698,882尾		16,228千円	
三根		1,027,674尾		23,000千円	
中之郷		521,523尾		11,861千円	
末吉		354,648尾		7,062千円	
合計		2,602,727尾		58,151千円	
各船別順位					
1位	成田丸	船主菊池多伝	・船頭山下直利	88,802尾	(中)
2位	八十八丸	船主西條新平	・船頭石井栄一	71,278尾	(中)
3位	弁天丸	船主本橋熊一	・船頭同	68,775尾	(三)
4位	改福丸	船主宮内竹次郎	・船頭菊池辰秀	61,349尾	(中)
5位	正栄丸	船主佐々木篤行	・船頭菊池定	59,078尾	(大)

1955 昭和30年9月28日：春トビウオ漁業優秀船、表彰式開催。

地区別水揚高					
三根		849,787尾	中之郷	527,908尾	
大賀郷		667,277尾	末吉	345,883尾	
			合計	2,390,855尾	
各船別順位					
1位	成田丸	75,980尾		(中)	
2位	八十八丸	62,646尾		(中)	
3位	改福丸	60,307尾		(中)	
4位	第五正栄丸	56,904尾		(大)	
5位	新栄丸	55,293尾		(三)	

1956 昭和31年：春トビウオ漁、上旬平均 299尾（操業延 204隻）、中旬平均 409尾（操業船19隻）、下旬平均 794尾（操業延 362隻）。このため、青ヶ島への出漁を督促、中旬平均 3,012尾（操業延 8隻）、下旬平均 3,343尾（操業延 49隻）となる。青ヶ島出漁、42万尾。

・3月末より海況回復、平年84万尾（30年間平均）に対し、396万尾と豊漁。（ナイロン系網普及 100%となる。）

7月13日：春トビウオ漁業優秀船、表彰式開催。

地区別水揚高

大賀郷	18隻	1,014,515 尾	中之郷	12隻	800,544尾
三根	27隻	1,372,405 尾	末吉	15隻	775,731尾
			合計	72隻	3,963,195尾

各船別順位

1位	八十八丸	船主西條新平	・船頭沖山伊平	109,815尾 (中)
2位	第二成田丸	船主菊池多伝	・船頭山下直利	93,151尾 (中)
3位	第一金生丸	船主稲葉又三郎	・船頭関本糸一	92,410尾 (大)
4位	第五正栄丸	船主佐々木篤行	・船頭菊池義光	90,481尾 (大)
5位	第三正栄丸	船主佐々木篤行	・船頭菊池定	89,084尾 (大)

本年の春トビウオ漁の成果は、ナイロン系網の普及・漁船設備の向上・漁船の大型化といわれる。

8月24日：八丈支庁において、第一ゴム（株）、合成浮子奨励のため説明会開催。

・弁天丸・福寿丸にジーゼルエンジン搭載。

1957 昭和32年 4月：春トビウオ、大正11年来の好漁。これは冷水塊が八丈島以北に停滞、魚群の北上を拒んだもの。

7月20日：春トビウオ漁業、表彰式挙行。

地区別

三根	26隻	1,004,382 尾	中之郷	12隻	576,832尾
大賀郷	19隻	816,408 尾	末吉	16隻	696,994尾
			合計	73隻	3,094,616尾

各船別順位

1位	第一金生丸	船主稲葉又三郎	・船頭関本糸一	96,848尾
2位	第五武洋丸	船主沖山武一	・船頭菊池昇	93,170尾
3位	八十八丸	船主西條新平	・船頭沖山伊平	79,515尾
4位	第五正栄丸	船主佐々木篤行	・船頭菊池義光	78,904尾
5位	弁天丸	船主本橋熊一	・船頭本橋熊一	75,000尾

8月：静岡県所属漁船、八丈小島でムロ棒受網漁業操業。（他県の許可枠、静岡 152、千葉 122、神奈川82隻）

・魚群探知機の件で、産研（沼津市）度々来島。

10月：神湊漁港整備が進むに従い、新漁船続々竣工。（三根）貫徹丸・新栄丸・昭栄丸・栄徳丸・住吉丸、（大賀郷）正栄丸。（注）正栄丸（船主佐々木篤行）、八丈島所属漁船として最初の小型無線電話機（価格20万円）を設備。

1958 昭和33年：春トビウオ漁結果次の通り

地区別水揚高

三根	29隻	1,745,205 尾	末吉	15隻	832,398 尾
大賀郷	21隻	908,699 尾	中之郷	12隻	749,073 尾
			合計	77隻	4,235,375 尾

各船別順位

1位	幸栄丸	船主浅沼一幸	・船頭同	99,193尾 (三)
2位	正栄丸	船主佐々木篤行	・船頭菊池定	84,472尾 (大)
3位	第五武洋丸	船主沖山武一	・船頭沖山昇	84,737尾 (末)
4位	栄徳丸	船主浅沼石之	・船頭浅沼和人	83,678尾 (三)
5位	岡野丸	船主岡野米司	・船頭森下忠直	83,358尾 (中)

7月：6月下旬に接岸せる低温水（19～20℃、平年より－4℃）が7月中旬迄続き、三根地区ではテングサ潜りが出来ず、一時禁漁状況となる。

1959 昭和34年2月5日：春トビウオ漁開始。本年の操業隻数は82隻（末吉16、中之郷14、大賀郷20、三根32、）の予定。

・春トビウオ漁、三根漁協の5月5日を最後に全船終了、水揚高は次の通り。地区別水揚高

三根	33隻	1,599,110尾	中之郷	14隻	578,543尾
大賀郷	20隻	804,888尾	末吉	16隻	637,918尾
			合計	83隻	3,620,459尾

昨年より 614,939尾減（△14.5%）。

8月1日：八丈支庁主催、読売新聞社後援の第10回春トビウオ漁増産奨励競技大会による表彰式、午前10時から支庁会議室で開催、結果は次の通り。各船別順位

1位	弁天丸	船主本橋熊一	・船頭同左	74,915尾（三）
2位	新栄丸	船主小崎芳男	・船頭同左	72,161尾（三）
3位	第五正栄丸	船主佐々木篤行	・船頭菊池義光	71,218尾（大）
4位	神天丸	船主石田武徳	・船頭同左	68,855尾（三）
5位	第一金生丸	船主稲葉又三郎	・船頭関本栄一	68,121尾（大）

9月：大賀郷勝利丸、スミスでサンゴの赤（200匁）を釣獲。

1960 昭和35年2月1日：三根漁協第三神港丸・高漁丸により初春トビウオ水揚。本格的には20日頃か。

2月24日：末吉漁協富士丸（船主冲山富士男、船頭服部友二）、222kgのクロマグロを漁獲、15万4千円の売り立て。25日中之郷漁協千歳丸（船主西条家安）、クロマグロ267kg 漁獲、約24万円の売り立て。

3月10日：三根漁協第八幸丸（船主田村金一）、クロマグロ 300kg余を、第五幸丸（船主田村金一）も 300kg余を漁獲。

3月13日：八丈分場拓南丸、204kg のクロマグロ。三根漁協明神丸、300kg、末吉漁協ふさ丸、265kgと一晩に3尾も漁獲。

3月7日：昨年9月頃八丈南方97マイル のスミス付近で底魚釣操業中の大賀郷漁協第三勝利丸（船主西浜義一、6t）が約75gモモイロサンゴを釣り挙げる。

5月1日：サンゴ漁の解禁、八丈島から5隻出漁。

5月11日：サンゴ漁船第三明光丸（46t）、八重根漁港に帰港、漁獲、375kg～560kg。

5月15日：春トビウオ漁終漁。水揚実績、次の通り。

三根	34隻	1,236,001尾	中之郷	15隻	332,913尾
大賀郷	18隻	495,095尾	末吉	16隻	566,516尾
			合計	83隻	2,630,525尾

5月：サンゴ豊漁。

6月10～20日：八丈サンゴの第一回入札、東京銀座大栄荘大広間で、40数社の参加で開催。

売立結果、次の通り。

三根	3隻	5,400万円
大賀郷	2隻	800万円

中之郷	1 隻	1,100 万円		
末吉	1 隻	600 万円		
共同船	1 隻	560 万円		
合計	8 隻	8,460 万円		
総貫数平均価格	貫当たり			
赤生木	55,200円		桃ピン	29,500円
赤枯木	18,200円		白	49,100円
赤ピン	12,600円		マガイ	151,000円
桃生木	83,400円		スカッチ	165,700円
桃枯木	33,800円		ボケ	346,500円

6月：九州・四国方面の底釣船、神湊漁港を基地に30隻程拓南山・中の黒瀬で操業。

6月：須美寿のサンゴ、10～15日の航海で、160～200kgの漁獲。

7月25日：八丈支庁主催、読売新聞社後援の第11回八丈島春トビウオ漁増産奨励競技会表彰式、支庁会議室で開催。

1	明神丸	船主玉置吉清	船頭玉置啓	59,327尾 (三)
2	第三恵比寿丸	船主冲山秋作	船頭冲山一男	55,061尾 (末)
3	貫徹丸	船主長田政治	船頭持丸光春	51,721尾 (三)
4	新栄丸	船主小崎芳男	船頭同左	51,582尾 (三)
5	弁天丸	船主本橋熊一	船頭同左	47,849尾 (三)

1961 昭和36年2月3日：三根漁協高漁丸、春トビウオの初物 220尾漁獲。

・春トビウオ漁業、3月20日より水温急激に上昇、漁況も一斉に好漁、4月中に270万尾、合計440万尾と今迄にない最高の漁獲。

5月10日：春トビウオ漁終漁。大漁の新記録樹立。水揚高次のとおり。

地区別					
三根	35隻	2,035,025 尾	末吉	15隻	777,764 尾
大賀郷	18隻	947,123 尾	中之郷	12隻	620,720 尾
			計	80隻	4,380,632 尾
漁船別					
1位	第三勝利丸	船主西浜義一	船頭関本栄一	119,334尾 (大)	
2位	第十二正栄丸	船主佐々木篤行	船頭菊池定	106,740尾 (大)	
3位	神栄丸	選手小崎佐一郎	船頭小崎幸雄	95,215尾 (三)	
4位	弁天丸	船主本橋熊一	船頭大場善之	94,850尾 (三)	
5位	第五武洋丸	船主冲山武一	船頭菊池昇	91,584尾 (末)	

1962 昭和37年2月13日：三根漁協高漁丸、初トビウオ15尾漁獲。

5月15日：春トビウオ漁終漁。水揚高、次の通り。

三根	32隻	1,363,822尾	中之郷	11隻	302,689尾
大賀郷	18隻	611,177尾	末吉	15隻	364,806尾
			計	76隻	2,642,494尾

7月上旬：今根沖に木付きメバチの大群出現、操業船14隻で3tの水揚。

8月17日：八丈支庁主催、島内各漁協協賛、読売新聞社後援の昭和37年度春トビウオ漁増産競技会表彰式、八丈支庁会議室で来賓多数参加のもと開催、優勝旗（八丈支庁）、優勝杯（読売新聞社）、大賀郷漁協所属漁恵丸に、続いて入賞船5位迄賞状・賞品をを授与。

1位	漁恵丸	船主関本栄一	船頭奥山安久	96,320尾 (大)
----	-----	--------	--------	-------------

2位	第三神港丸	船主山本 勝	・船頭堀口孝男	67,300尾	(三)
3位	栄徳丸	船主浅沼石之	・船頭浅沼和仁	61,811尾	(三)
4位	弁天丸	船主本橋熊一	・船頭大場善之	60,877尾	(三)
5位	第三勝利丸	船主西浜義一	・船頭赤坂太郎	58,652尾	(大)

尚、同会場で、八丈製氷KKによる優秀漁獲船を表彰、結果は次の通り。

全島優秀船	1位	明神丸	船主 玉置 吉清	(三)
	2位	栄徳丸	船主 浅沼 石之	(三)
	3位	漁恵丸	船主 関本 条一	(大)
単協優秀船	1位	岡野丸	船主 岡野 米司	(中)
	2位	一栄丸	船主 冲山 守一	(末)

8月：夏トビウオ、昨年の29kgに比べ、17tの豊漁。

1963 昭和38年2月16日：大漁を祈願する三根の汐祭りに、三根青年団・同婦人会が漁民慰安汐祭り演芸会を開催。

3月3日：青ヶ島方面で操業中の漁船、初トビウオの漁獲。

5月17日：春トビウオ漁終漁。結果、次の通り。

三根	30隻	2,351,859尾	中之郷	11隻	512,140尾
大賀郷	15隻	1,026,461尾	末吉	13隻	830,942尾
			合計	69隻	4,721,402尾

7月6日：八丈支庁主催、読売新聞社後援春トビウオ漁業増産奨励競技会表彰式開催、結果は次の通り。

1位	漁恵丸	船主関本条一	・船頭奥山安久	(大)
2位	第三金生丸	船主稲葉えい	・船頭菊池 暎	(大)
3位	明神丸	船主玉置吉清	・船頭玉置弘志	(三)
4位	新栄丸	船主小崎芳男	・船頭小崎芳男	(三)
5位	第三喜久丸	船主菊池 勇	・船頭大場善之	(大)

10月：小島の周辺は、ムロアジの漁場として八丈本島漁船の独り舞台であったが、宇津木漁民は昨年から定置漁法による置網で、漁獲するようになり、本年は昨年と比べて漁獲高が増大、益金の一部で小学校へ電池式テープレコード(2万5千円)を寄贈。

1964 昭和39年：春トビウオ流刺網漁業全船ネットホーラを装備。

3月5日：各組合長会議、支庁会議室で開催、春トビウオの島内小売店卸値は全島を統一、当日市場値の1尾当たり3円引と決定。

3月6日：島内各魚屋に、1尾100円の初トビウオ出回る。これは三根漁協第五幸栄丸が鳥島で漁獲した6,000尾。

5月8日：春トビウオ漁終漁。結果は次の通り。

三根	28隻	756,467尾	中之郷	11隻	101,952尾
大賀郷	14隻	406,746尾	末吉	13隻	214,919尾
			計	66隻	1,480,084尾

6月29日：八丈支庁主催、各漁協協賛・読売新聞社後援の第15回春トビウオ漁増産奨励競技会表彰式を開催、結果は次の通り。

1位	漁恵丸	船頭 奥山安久	(大)
2位	新栄丸	船頭 小崎芳男	(三)

3位 第三喜久丸 船頭 大場善之 (大)  
 4位 神栄丸 船頭 小崎幸男 (三)  
 5位 第三金生丸 船頭 菊池 暎 (大)

(注) 漁恵丸(船主関本栄一)は3年連続の優勝となる。

1965 昭和40年2月10日：三根幸栄丸(40t、船主浅沼一幸)鳥島方面で初トビウオ 500尾水揚。更に11日には三根新栄丸小岩戸鼻沖で30尾の初水揚。

5月16日：春トビウオ漁終漁、結果は次の通り。

三根	28隻	1,376,377尾	中之郷	10隻	305,157尾
大賀郷	12隻	727,046尾	末吉	11隻	424,788尾
			合計	61隻	2,833,368尾

各船別順位(7月19日の増産競技会で表彰される。)

1位	漁恵丸	船頭 奥山泰久 (大)	103,937尾
2位	新栄丸	船頭 小崎芳男 (三)	97,893尾
3位	第三喜久丸	船頭 大場善之 (大)	95,826尾
4位	清漁丸	船頭 西浜栄許 (大)	95,750尾
5位	第三金生丸	船頭 菊池 暎 (大)	86,538尾

(注) 漁恵丸はこれで、4年連続優勝となる。

11月1日：NHKのテレビ放送による天気予報、1日2回八丈を含めて放送されるようになる。

1966 昭和41年5月8日：春トビウオ漁終漁。結果は次の通り。

地区別

三根	26隻	604,853尾	中之郷	12隻	89,720尾
大賀郷	12隻	236,370尾	末吉	10隻	112,131尾
			合計	60隻	1,043,074尾

漁船別

1位	第五天恵丸	船主浅沼 猛	51,867尾
2位	第五新栄丸	船主小崎芳男	49,808尾
3位	第三喜久丸	船主西浜惣五郎	48,936尾
4位	栄徳丸	船主浅沼石之	48,696尾
5位	第五明神丸	船主玉置吉清	41,417尾

各年別春飛び魚水揚高

31年	3,963,195尾	35年	2,630,525尾	39年	1,480,084尾
32年	3,094,616尾	36年	4,380,632尾	40年	2,833,368尾
33年	4,235,375尾	37年	2,642,494尾	41年	1,043,074尾
34年	3,620,459尾	38年	4,721,402尾		

6月6日：春トビウオ漁に影響を与えた冷水塊も5月下旬から解消、黒潮の本流が八丈近海を覆い、黒瀬・新黒瀬の下層(200m)水温も18℃で底物漁好調。

10月：ロラン装備漁船8隻(三根漁協・新栄丸・栄徳丸・神栄丸・安全丸。大賀郷漁協・清漁丸・喜久丸・金生丸。指導船拓南丸。)尚、SSB10W 漁業無線電話装備船2隻(天恵丸・宇之丸)となる。

11月：テングサ漁水揚高は近年にない豊漁で次の通り。

三根	53,138,5kg	45,350,292円
大賀郷	46,350,9kg	38,679,960円
中之郷	5,725,3kg	3,797,121円
末吉	78,434,9kg	60,247,223円
合計	183,649,6kg	148,074,596円

・テングサ漁獲高初めて1億円を超過。

11月：SSB10w 無線電話施設、大賀郷第十二正栄丸(7t)・三根幸栄丸(35t)・拓南丸(指導船)に新設、これで5隻となる。

・末吉漁協。テングサ梱包機導入。

1967 昭和42年5月7日：春トビウオ漁終漁、結果は次の通り。

三根	1,258,971尾	1位	第三貫徹丸	85,112尾(三)
大賀郷	463,381尾	2位	第三喜久丸	81,300尾(大)
中之郷	292,648尾	3位	第五新栄丸	75,693尾(三)
末吉	307,338尾	4位	栄徳丸	74,064尾(三)
合計	2,322,338尾	5位	神栄丸	72,047尾(三)

9月：神湊の菊池造船所で、半キール漁船きく丸(45馬力、9.03t 船主山下洋一)竣工。八丈島の漁船は従来和船型で、7t以上は機関が60馬力であったが、半キール漁船きく丸は、速力でそれを上回る事を立証。

1968 昭和43年2月14日：三根漁協第五幸栄丸(39t、船主浅沼一幸)、鳥島において春トビウオ、約5,000尾初漁獲、島内店頭売り一尾170円～200円。

5月8日：春トビウオ漁終漁、結果は次の通り。

三根	678,342尾	1位	第三明神丸	60,542尾(三)
大賀郷	278,985尾	2位	栄徳丸	48,961尾(三)
中之郷	149,198尾	3位	新栄丸	45,828尾(三)
末吉	179,752尾	4位	第三喜久丸	63,311尾(大)
その他	83,446尾	5位	清漁丸	62,563尾(大)
合計	1,508,125尾			

6月：小笠原返還と同時に大型船3隻同海区に出漁。

5月：三根、明神丸(10t、船主浅沼義清)竣工。棒受網用に船首・船尾にスラストル(船外機)を装備。

・FRP船竣工。三根、漁運丸(2t、船主小宮山行雄)。

1969 昭和44年2月5日：八重根沖で大賀郷清漁丸、春トビウオ初漁。

5月8日：春トビウオ漁終漁。結果は次の通り。

三根	678,342尾	1位	第三明神丸	60,542尾(三)
大賀郷	278,985尾	2位	栄徳丸	48,961尾(三)
中之郷	149,198尾	3位	新栄丸	45,828尾(三)
末吉	176,145尾	4位	安全丸	43,837尾(三)
合計	1,282,670尾	5位	清漁丸	42,759尾(大)

6月：三根漁協曳縄船(1人乗組)18隻は、水温低下で漁模様が芳しくないカツオ漁に変えて、6月頃から3隻に分乗して建網漁法で八丈島周辺に多い、三の字(ニザイダイ・カリキヌ)漁を計画、販売先を三重県鳥羽市の業者(丸紅水産)に、活魚として取引契約を結び、操業したところ、連日の大漁で遂に50,000kgを漁獲、短期間に10,000千円の売り上げを達成。

8月：全船魚群探知機を装備。ロラン10隻に装備。

8月：中旬頃からムロアジが獲れ始め、11隻の漁船が操業、全船スラストルを装備、棒受網漁業の代用餌料、全船で使用開始。

1970 昭和45年1月：SSB10w 装備漁船12隻、DSB1w 装備漁船26隻となる。

2月：昨年は12月一杯ムロアジが漁獲されたが、今年は2月になって、末吉沖に大群が押し寄せ大漁。10年振りの珍しい現象。

5月4日：春トビウオ網でカツオ 1,000kg漁獲。

5月6～7日：三根小型漁船2隻の夜刺網でメダイ(大) 7,000kg漁獲。その他底物の漁獲多し。これは低水温(13℃)の影響と見らる。

春トビウオ漁水揚結果

地区別

三根	480,653尾	中之郷	125,461尾	合計	848,942尾
大賀郷	138,967尾	末吉	103,861尾		

漁船別

1位	第三明神丸	67,168尾	4位	神栄丸	45,704尾
2位	栄徳丸	50,580尾	5位	天恵丸	44,329尾
3位	新栄丸	49,277尾			

8月4～6日：東京都島嶼町村会、関係機関に陳情実施。水産関係は「伊豆諸島における廃油による海水汚染防止に関する規制等」要望。

9月3日：廃油による海の汚染激しく、島嶼町村会で廃油投棄規制を要望、海上保安庁より現地調査。

・八丈島にも廃油公害発生。漁民の中に防止対策の声高くなる。

9月15日：大賀郷ツナ号船長苧草忠一(52才)、敬老の日に水揚げしたばかりの新鮮なソーダカツオ70尾(トロ箱2箱)を八丈老人ホームに寄贈、入園者や関係者感激。

11月下旬：八丈近海に異常冷水塊出現停滞、3年ぶりの低水温続く。

1971 昭和46年5月28日：春トビウオ漁終漁、結果は次の通り。

三根	541,550尾	1位	新栄丸	52,196尾	(三)
大賀郷	151,489尾	2位	稲荷丸	49,826尾	(三)
中之郷	149,007尾	3位	宇之丸	47,930尾	(三)
末吉	91,385尾	4位	栄徳丸	47,260尾	(三)
合計	933,431尾	5位	明神丸	46,820尾	(三)

6月下旬：去る昭和27年、タンカー・アラビヤ丸(10,000t)が、アメリカからの帰途、八丈島の東沖北緯33°、東経141°を中心とした広い範囲に、深さ150～400mの浅瀬があると、海上保安庁水路部に報告があり、事実であれば有望な新漁場が開発出来ると、大きな期待が掛けられたが、八丈分場の指導船拓南が2日間にわたり調査したところ、同場所は1,600mの深海で、浅瀬は全然確認することは出来ず、新漁場の夢は一瞬にして消え去り一同落胆。

7月10日：共有地のトコブシの口開け実施、試験的に三重県鳥羽の丸紅水産の活魚輸送船で、同地へ初の出荷を行ない成功。このためトコブシ採取に際しては、鮮度を守るためイソガネ使用を禁止することとなる。

・八丈島における3t以上のFRP漁船、9隻となる。

1972 昭和47年5月21日：春トビウオ漁終漁。結果は次の通り。

三根	16隻	1,518,203	尾	1位	稲荷丸	161,820	尾	(三)
大賀郷	5隻	366,905	尾	2位	栄徳丸	149,182	尾	(三)
中之郷	7隻	321,191	尾	3位	明神丸	147,649	尾	(三)
末吉	4隻	191,031	尾	4位	漁運丸	138,598	尾	(三)
合計	32隻	2,397,330	尾	5位	貫徹丸	114,435	尾	(三)

7月3日：夜半八重根港に流れ込んだ廃油、船揚場まで押し寄せ、長さ25m、幅約20m、廃油の厚さ15cm近くもあり、特に船着き場と新港が酷し。量にしてドラム缶5～6百本分はあると見られる事から、八丈支庁では、地元大賀郷漁協と協議、組合員約50人の協力で処理、従来の廃油とは相違した原油状のため、保安庁と都に連絡、保安庁の巡視船「げんかい」が来航、油の性質を調査、6日には都公害局から廃油処理の専門官来島、調査が行なわれたが、現状から中和剤や吸収剤等では処理出来ないことが判明。最も原始的な手による汲み取り方式で処理することになり、11日から建設業協会の協力も得、処理に当たり、処理に10日余も費やす。

1973 昭和48年5月13日：春トビウオ漁終漁、結果は次の通り。

三根	1,000,001	尾	1位	天恵丸	111,101	尾	(三)
大賀郷	271,186	尾	2位	明神丸	97,979	尾	(三)
中之郷	233,140	尾	3位	稲荷丸	96,894	尾	(三)
末吉	114,765	尾	4位	正栄丸	94,085	尾	(大)
合計	1,619,92	尾	5位	宇之丸	80,326	尾	(三)

・廃油の漂着甚だしくその処理に困惑。

7月：伊豆七島産の魚が水銀公害・PCB汚染問題で市場価が下落、各島漁協代表者、東京に集合「非汚染魚対策合同会議」を開催後、都と問題で対策会議を持ち、次の方針を発表。

- ① 7日頃発表予定の検体に大島イサキの他、八丈島のアオダイを入れる。
- ② 7～8月、200検体のチェック計画に、七島産の魚を優先的に入れる。
- ③ 魚価が回復するまで、産地直売方式を考慮されたい。

(注) 水銀量

・式根ヶ浜 0.1ppm ・大島伊井 0.08ppm ・八丈島アオダイ 12ppm。

12月：八丈島漁協、今春洞輪沢に完成した蓄養施設で「クルマエビ」の養殖を開始。これは八丈島での養殖の可能性を探るためのもので、今回は山口県産の種苗(体長6cm、体重2.5g)の稚エビ390尾で試験。

1974 昭和49年2月11日：初春トビウオ水揚 331尾(三根漁船が鳥島沖で漁獲)。卸値4～500円となる。

2月26日：三根明神丸(浅沼正男・篠崎良夫・土屋鉄男乗組)、小島の南でのトロリングで、300kgもあるクロマグロを漁獲。価格にして150万円～200万円の代物。

5月17日：春トビウオ漁終漁。結果は次の通り。

三根	12隻	1,370,010	尾	1位	稲荷丸	158,700	尾	(三)
八丈	14隻	881,598	尾	2位	貫徹丸	153,296	尾	(三)
合計	26隻	2,251,608	尾	3位	明神丸	140,603	尾	(三)
				4位	天恵丸	132,948	尾	(三)
				5位	栄徳丸	124,334	尾	(三)

5月：トビウオ漁や、カツオ一本釣船からの情報によると、八丈島周辺

海域はすっかり廃油で汚染。この廃油は近い所で1.5km から2 km、さらに20~50kmの到る所に漂流、黒潮に乗って来るものも多く、廃油の状態はボール大・こぶし大・泡粒のほか、今年はゼリー状の物が増加。漁具の汚染はもとより、海水浴シーズンを控え危慮さる。

1975 昭和50年 5月13日：春トビウオ漁終漁、結果は次の通り。

三根	1,026,392 尾	1位	稲荷丸	131,403 尾	(三)
大賀郷	226,676 尾	2位	住吉丸	103,251 尾	(三)
中之郷	199,776 尾	3位	雄飛丸	93,000 尾	(三)
末吉	211,088 尾	4位	貫徹丸	92,849 尾	(三)
合計	1,663,932 尾	5位	明神丸	87,579 尾	(三)

7月：神湊漁港前に小規模赤潮発生。

1976 昭和51年 2月初旬：春トビウオの初水揚、住吉丸 1,080尾、稲荷丸 500尾。店頭小売価格は 500円～ 600円もする。

2月4日：三根多摩丸（6t、船主持丸玉男、3人乗組）300kgもあるクロマグロを水揚、1,000,000 円の売上。更に11日にも 300kgを、更に12日には69kgのマカジキを水揚。

3月4日：三根漁協勝運丸（船主小宮山勝、4t）、250kgのクロマグロを水揚、kg当たり4,000円。

5月16日：春トビウオ漁終漁。結果は次のとおり。

三根	1,006,064 尾	1位	神天丸（石田武徳）	127,088尾	(三)
大賀郷	215,502 尾	2位	雄飛丸（奥山夫男雄）	119,716尾	(三)
中之郷	166,176 尾	3位	稲荷丸（浅沼一幸）	102,744尾	(三)
末吉	177,742 尾	4位	明神丸（玉置清春）	83,155尾	(三)
合計	1,565,484 尾	5位	貫徹丸（長田義治）	65,525尾	(三)

各年別水揚高

昭和45年	850,342 尾	・	昭和48年	1,619,092 尾
昭和46年	933,456 尾	・	昭和49年	2,259,632 尾
昭和47年	2,397,326 尾	・	昭和50年	1,663,932 尾

9月：ムロアジ漁は8月1日から操業されているが、連日好漁を続け、加工能力以上の漁獲であるため、連日漁獲制限を続ける結果となる。

12月：本年度トコブシの水揚は 44tで、昨年 の 64tに比べてもその69%と激減。原因としてトコブシの餌料となる海藻の繁茂が悪い・冬場の荒れが続いたと挙げられたが、特に三根地先の減少が激しく、乱獲との評価も出る。

1977 昭和52年 2月6日：三根第三大祐丸（4.99t、船主小宮山英春）クロマグロ236kgを水揚、1kg当たり 7,500円。

2月6日：永郷地区の岩場に油が大量に打ち上げられ、イワノリ・ハバノリの油濁被害発生。

2月8日：三根第三大祐丸（4.99t、船主小宮山英春）クロマグロ 123kg、大勝丸（4.84t、船主大場善之）、クロマグロ136kg、成丸（4.88t 船主石田種男）、クロマグロ268kg を水揚。

2月8日：春トビウオ、鳥島方面漁獲もの初水揚。

3月4日：現在で早くもクロマグロ36本水揚。

4月15日：NHKテレビ第一チャンネル番組「明るい農村」に八丈島の“春とびうお漁と兄弟”の様子が放映。（稲荷丸兄弟）

5月11日：春トビウオ漁終漁。結果は次の通り。

三根	17隻	1,238,216尾	1位	第二稲荷丸	120,010尾	(三)
大賀郷	5隻	255,431尾	2位	雄飛丸	115,321尾	(三)
中之郷	6隻	186,260尾	3位	神天丸	108,353尾	(三)
末吉	6隻	235,089尾	4位	第三稲荷丸	101,463尾	(三)
合計	34隻	1,914,996尾	5位	第三明神丸	93,907尾	(三)

6月10日：三根トコブシ口開け。末吉5月19日、大賀郷5月27日、中之郷6月5日。

12月：綺麗な海を売り物に、豊かな漁業生産を挙げている八丈島も、黒潮に乗って来遊する廃油ボールの増加傾向が止まず、海水浴場の汚染のほか、漁網や曳縄漁業に与える被害は目に余るものとなる。八丈支庁では監視員4名（坂上2名、坂下2名）を置き、定期的に清掃を実施するも、投棄者不明の廃油被害の除去に要する費用は、全額「財団法人漁場油濁被害救済基金」からの支払いとなる。

1978 昭和53年 1月29日：八丈島鮮魚商組合（組合員30人）定期総会開催、「春トビウオ安定供給」等について熱心な討議を行なう。役員改選の結果、金城昌光再選。

2月5日：三根漁協第八住吉丸（19.33t、船主西井弘）、鳥島近海で、初トビウオ水揚。

2月6日：永郷地区の岩場に油が大量に打ち上げられ、イワノリ・ハバノリの油濁被害発生。

3月9日：永郷アカサリ沖で操業中の三根和吉丸（5t、船主浅沼正男）、100kg以上もあるクロマグロを釣り揚げ、今年度の初物。

3月26日：八高教員から漁師に転向して、4年漁業に励んでいる大倉徳則、NHK総合・番組「明るい漁村」で放映。

5月21日：春トビウオ漁終漁。結果は次の通り。

三根	17隻	1,436,649尾	1位	第二稲荷丸	129,116尾	(三)
大賀郷	4隻	263,626尾	2位	第五稲荷丸	125,691尾	(三)
中之郷	6隻	243,270尾	3位	第五明神丸	117,215尾	(三)
末吉	5隻	234,986尾	4位	漁運丸	108,994尾	(三)
合計	32隻	2,178,531尾	5位	第三稲荷丸	102,348尾	(三)

6月15日：三根トコブシ口開け。中之郷10日、末吉12日、大賀郷は先月28日。

1979 昭和54年 1月：春トビウオ出荷、木箱からろう引ダンボールに変更決定。

1月29日：三根漁船神天丸（船主石田武徳）、春トビウオ初水揚げ50尾・30日67尾・31日250尾。

2月22日：須美寿海域で漁獲されたクロマグロ278kg1尾三根漁協に水揚、1kg当たり7,500円の漁獲。

3月～5月：カツオ漁好漁、魚槽を改良（水氷使用）、魚価も安定高値。

5月14日：春トビウオ漁終漁、結果は次の通り。

地区別					
三根	985,873 尾	中之郷	149,722 尾	合計	1,430,413 尾
大賀郷	159,729 尾	末吉	135,089 尾		
漁船別					
1位	神天丸 100,200 尾	4位	漁運丸 76,577 尾		
2位	稲荷丸 97,009 尾	5位	第五稲荷丸 61,271 尾		
3位	明神丸 81,572 尾				

9月3日：三根漁協に500kg余（売り正味484kg）のクロカジキ水揚、漁獲したのは、丈栄丸（9.5t船主小宮山壤司）で、一人操業のため、船まで引き寄せるのに4時間を要したとの事。

10月21日：大神宮例大祭に三根神湊の「風間会（漁業者22人）」演劇奉納。

1980 昭和55年 2月5日：大越灯台沖5マヰルにおいて三根漁協の多摩丸（船主持丸玉男）初クロマグロ（約200kg余）漁獲。

2月21日：ナズマド、油濁被害を受く。

5月21日：春トビウオ漁終漁。集計は次の通り。

地区別					
三根	1,304,616 尾	中之郷	167,473 尾	合計	1,801,929 尾
大賀郷	187,944 尾	末吉	141,896 尾		
漁船別					
1位	第二稲荷丸 135,200 尾	4位	第五稲荷丸 110,354 尾		
2位	漁運丸 120,094 尾	5位	貫徹丸 108,542 尾		
3位	神天丸 111,045 尾				

1981 昭和56年 1月27日：三根漁協住吉丸、鳥島近海産春トビウオ200尾水揚。店頭価格1尾800円。

2月3日：三根漁協大祐丸、神湊沖1～2マヰルでクロマグロ（302kg）初漁獲、240万円余の売り立て。

2月26日：NHKテレビでニュースワイドの「春トビウオの水揚げ風景」が放映。

2月：クロマグロ豊漁

三根	3日 302kg、9日 207kg、10日 215kg、12日 192kg、
	215kg、217kg、206kg、149kg、
八丈島	9日 183kg、10日 192kg、

5月15日：春トビウオ漁終了。実績は次の通り。

地区別					
三根	1,901,592 尾	中之郷	237,370 尾	合計	2,592,301 尾
大賀郷	248,519 尾	末吉	204,820 尾		
漁船別					
1位	第五明神丸 173,333 尾	4位	第五貫徹丸 162,301 尾		
2位	第五稲荷丸 169,815 尾	5位	雄飛丸 160,792 尾		
3位	神天丸 166,926 尾				

7月26日：ムロアジ漁操業開始。

12月26日：三根漁協第二稲荷丸、神湊沖10マルの海域において、延縄漁業でクロマグロ（168kg）を漁獲。時期的に又、漁法としても珍しく話題となる。

12月：ムロアジの不漁により、需要期の年末にかけムロくさやの小売価格が急上昇し問題化。（注くさやkg当たり 2,000円→3,500円）

1982 昭和57年2月8日：三根漁協第二稲荷丸・住吉丸、春トビウオ初水揚。5,000余尾。

2月17日：本日までにクロマグロ16本水揚、トンボ等とともに曳縄漁業好調。

5月17日：春トビウオ漁終了。結果次の通り。

地区別					
三根	1,603,695尾	八丈島	719,207尾	合計	2,322,902尾
漁船別					
1位	第二稲荷丸	163,350尾	4位	貫徹丸	123,406尾
2位	漁運丸	157,352尾	5位	雄飛丸	110,119尾
3位	第五明神丸	140,773尾			

1983 昭和58年1月27日：石積鼻沖8マールで三根漁協新洋丸（9.8t）クロマグロ（200kg）初漁獲。

・（注）クロマグロ各年別漁獲尾数

51年	3尾	54年	12尾	57年	87尾
52年	32尾	55年	11尾		
53年	12尾	56年	14尾		

2月1日：三根漁協第二稲荷丸 3,480尾（鳥島近海産）の初トビウオを水揚。

5月11日：春トビウオ漁終漁、結果次の通り。

地区別					
三根	16隻	1,073,150尾			
八丈島	12隻	398,959尾			
他（たくなん）	1隻	1,225尾			
合計	29隻	1,473,334尾	（昨年の6割）		
漁船別					
1位	第二稲荷丸	130,021尾	4位	神天丸	90,134尾
2位	漁運丸	113,185尾	5位	雄飛丸	83,968尾
3位	第五明神丸	100,020尾			

1984 昭和59年2月2日：初春トビウオ水揚、三根漁協第二稲荷丸（船主浅沼信広19.6t）593尾（鳥島）。

5月初旬：八丈近海で赤潮の発生確認。

5月20日：春トビウオ漁終漁、結果は次の通り。

三根 295,065尾、八丈島 41,348尾、合計 336,413尾

9月：八丈島でもトサカノリの採取が本格化の傾向となる。

1985 昭和60年2月3日：三根漁協第二稲荷丸（船主浅沼信広）、鳥島産初春トビウオ 443尾水揚。

5月15日：春トビウオ漁終了。結果は次の通り。  
三 根 436,757尾、八丈島 117,678尾、合 計 554,435尾

1986 昭和61年 1月29日：八丈島漁協に、第一幸漁丸（船主西浜盛成7.4t）、本年度初水揚げのマグロ約 300kgがあり、同日弁天丸（船主広江佐喜夫 9.8t）も約 130kgの水揚。

4月：カツオ漁（曳縄）776tの漁獲で過去最高を記録。

6月3日：春トビウオ漁終了。結果は次の通り。過去30年間の最少を記録した59年（236,413尾）を大きく下回る大不漁となる。  
三 根 52,259尾、八丈島 600尾、合 計 52,859尾

11月15日：月夜の晩には、イセエビは掛からないものとされていたが、末吉で満月に40kgも漁獲あり、この理由として指摘されたのは、①深度30mの海域で操業した。②近海に暖流が流入し、表面23℃、水深100mで23℃、水深200mで21℃であった事である。

12月14日：南海タイムス「ざつおん」にムロアジ漁・くさやについて経済原則として某町議及び町長の発言が紹介さる。

12月21日：南海タイムス「読者コーナー」に、12月14日南海タイムス「ざつおん」に対するものとして“ムロアジの漁獲調整、無くす方法は何か”の漁民の投稿載る。

1987 昭和62年 2月15日：1月半ばから始まったマカジキの曳縄漁好調、本日までに両漁協で水揚 600尾。1月中の漁場は八丈島南方約 100マイル、2月には次第に南下の傾向。

3月6日：三根漁協97尾（2隻）初春トビウオ水揚。7日には71尾（2隻）、10日 313尾（4隻）。

3月26日：今年八丈島での11本目のクロマグロ（重さ 200kg）、末吉石積沖24kmで第3海生丸（船主沖山均・4.98t）漁獲。市場値はキロ当たり 15,000円。

4月：曳縄漁業によるカツオの水揚、好調であった昨年よりも更に好漁。春トビウオ流刺網漁業からの転換もあり好漁。これに反し春トビウオの来遊は少なし。

5月17日：春トビウオ漁終漁。水揚げは次の通り。  
八丈島周辺海域 82,472尾  
青ヶ島・須美寿海域 1,013尾  
鳥島海域 3,302尾  
計 86,787尾

5月28日：クルマエビ養殖場の上棟式、南原で地元関係者の参加のもとに挙行。施行主は、林清（66才、熱帯魚協同組合、日本観賞魚振興会の理事、東京赤羽専門店「熱帯魚センター海河苑」経営）。

5月：トサカノリ漁が7日の三根地先を皮切りに、10日大賀郷、11日中之郷と昨年より約1ヶ月早い解禁で開始。八丈島では、2年前からの本格操業で、トサカノリは海藻サラダや酢のものとしてして需要大。

6月5日：沖縄県八重山漁協一行8名来島、春トビウオ漁について三根漁協・八丈分場と話し合いを実施。

8月18日：汐間のトコブシ大規模増殖場の解禁日、午前9時から午後3時迄。三根漁協組合員27人、八丈島漁協組合員23人の50人が操業。成果は、トコブシ438.5kg。

1988 昭和63年8月1日：洞輪沢港にテングサの寄り草が大量に流れ着き、漁業者約20人が岸壁や堤防から網で掬い上げる。出荷量は推定で4tか。

10月19日：テングサ漁は第7回漁連入札で終了。水揚結果は、次の通り。

三宅 坪 田	2,327 本	八丈 大賀郷	1,411 本
八丈 末 吉	1,980 本	大島 岡 田	606 本
八丈 三 根	1,454 本		

1本（晒し・鬼草等は30kg, その他は40kg）  
八丈島地区からの出荷は4,845本で、近年稀に見る大豊漁。

12月11日：南海タイムス「読者コーナー」欄に「ことしのムロ事情」の題名で三根浅沼進の投稿文載る。

1989 昭和64年1月1日：南海タイムスに「魚っちゃんぐ」連載開始。第1回はクロマグロ。

# 八丈管内水産物方言集

方 言	和 名	方 言	和 名
<b>魚 類</b>			
(ア)			
アイス	メジナ オキナメジナ	エチオピア エッチドミ エンキュウ (オ)	クロヒラアジ チョウチョウウオ オキナメジナ
アイッパラ	スマ	オアカ	オアカムロ
アオトビ	ツクシトビウオ	オーカミ	シマアジの大
アオヒフキダケ	アオヤガラ	オウギョウ	ツバメウオ
アオムロ	クサヤモロ	オウトウ	ニシキベラ
アカエイ	シビレエイ	オウノヨ	ブリ
アカエース	クロメジナ	オオノマ	ブチスズキベラ
アカサバ	チビキ	オオマス	アカカマス
アカズモリ	ササノハベラ	オオムロ	クサヤモロ
アカゼムロ	ムロアジ	オキガリキタ	テングハギ
アカドミ	ゴトウハギ	オキタカベ	タカベ
アカドロ	ナメモンガラ	オキドミ	ソウシハギ
アカナダ	キンメモドキ	オキブリ	ツムブリ
アカバ	トラウツボ	オキブリキヌ	テングハギ
アカハラ	アカハタ	オグロ	タカサゴ
アカヒフキダケ	クマササハナムロ	オゴ	ヒメダイ
アカカマス	アカヤガラ	オコジョガヒデ	ミノカサゴ
アカマンボウ	オオヒメ	オコゼ	ハナオコゼ
アカムツ	マンダイ	オジイサン	ヒメジ
アカムロ	アカマンボウ	オジサン	アカヒメジ
アカメダマ	ハチジョウアカムツ	オジロ	ギンユゴイ
アカヤシ	クマササハナムロ	オチョボガヒデ	ゴンズイ
アカヨ	タカサゴ	オデコ	アオブダイ
アナウック	チカメキントキ	オナガ	ハマダイゴ
アブラダイ	シマガツオ	オバナガ	ツムブリ
アブラヨ	アカハタ	(カ)	
アサミ	ミノカサゴ	カガミダイ	イトヒキアジ
(イ)	オキナメジナ	カゲキヨ	クニエソ
イサギ	ゴクラクメジナ	カサゴ	チカメキントキ
イシガンモン	イサキ	カシカミ	イズカサゴ
イソギス	ミノカサゴ	カジキ	ブダイ
イソネズミ	オキエソ	カスエース	マカジキ
イタ・イタキン	キタマクラ	カチョウ	クロメジナ
イナダ	ナンヨウキンメ	カツ	キツネベラ
イモガチョウ	ウツボ	カツ	カツオ
(ウ)	イラ	カツポレ	クロヒラアジ
ウサバ	ウバザメ	カツヨ	ギンユゴイ
ウズラ	スマ	カツヨフゲ	カナフゲ
ウチワドミ	ツバメウオ	カトーフゲ	カナフゲ
ウック	ミノカサゴ	カナダ	トラウツボ
ウマメハギ	ウマズラハギ	カマス	イボダイ
ウメイロ	ウメイロモドキ	カマツカ	オキエソ
(エ)		カラケーザメ	ギンギエイ
エース	オキナメジナ	カリキヌ	ニザダイ
エーゾー	セナギベラ	カルイシ	ゲンジクイサキ
		カワナダ	ウナギ
		カンペ	ウツボ
		カンペイナダ	モンガラドウシ

方言	和名	方言	和名
ガンモン	イソカサゴ	ササギ	テンジクイサキ
カンナギ	マハタ	ササヨ	イスズミ
(キ)		サトウバ	スズメダイ
キュウテン	スマ	サビレ	シマアジ
キサシヨウ	タカノハダイ	サメクサ	コバンアジ
キサシヨウ	タカノハダイ	サワラ	カマスザワラ
キツネ	ハガツオ	サンノジ	ニザダイ
キチメンドリ	ノミノクチ	(シ)	
キハタ	イヤゴハタ	シヤナダ	ユリウツボ
キヌドミ	ウスバハギ	シュモク	シュモクザメ
キミコワシ	キビナゴ	シヨクダイ	ガンギエイ
キミナゴ	キビナゴ	シヨゴ	カンパチの子
キンギョーヨ	イットウダイ	シヨナクチ	フエフキダイ
ギンダイ	メイチダイ	シリフゲ	キタマクラ
キンメ	ナンヨウキンメ	シロアオゼ	シマアオダイ
ギンヤシ	カタクチイワシ	シロカワ	シロカワカジキ
キントキ	チカメキントキ	シロムロ	マルアジ
キンムツ	クロムツ	(ス)	
(ク)		スカエース	メジナ
クサヤモロ	モロ	スギブリ	ツムブリ
クシロ	クロメジナ	スジガツオ	ハガツオ
クソダイ	ヘダイ	スナムグリ	テンスモドキ
クチジロ	イシガキダイ	スマ	スマ・ヤイト
クチブト	モロ	スミガチョウ	ササノハベラ
クマノミ	ススキベラ	スミヤキ	ウメイロ
クロ	クロマグロ	スンバオウトウ	イトベラ
クロエイ	トビエイ	(セ)	
クロカワ	クロカワカジキ	セミトビ	アヤトビウオ
クロシマ	クロヒラアジ	(ソ)	
クロトミ	クロモンガラ	ソーダー	ソーダーガツオ
クロナダ	コケウツボ	(タ)	
クロムツ	ムツ	タカサゴ	クマササハナムロ
(ケ)		タカッパ	タカノハダイ
ケールメ	タネギンポ	タツノコ	タツノオトシゴ
ケーロメ	トビハゼ	タノゴ	ウミタナゴ
	カエルウオ	タバコイレ	ミヤコテング
ゲドウ	カマス類	タバコボン	ツノダシ
ケンケン	クサカリツボダイ	タバミ	フエフキダイ
ゲンゴロウメ	スズメダイ	ダボハゼ	ドロメ
(コ)		タンゴヨ	ハナフエダイ
コウシャビレ	ギンガメアジ	(チ)	
コッペ	ツマグロアゴナシ	チキ	バラハタ
コヒメ	ヒメダイ	チギ	ユカタハタ
コブダイ	カンダイ	チキノメンドリ	アカイサキ
コブタエイ	アカエイ	チキリ	イットウダイ
コマス	ヒメダイ	チビキ	ハチビキ
ゴマナダ	ユリウツボ	チョウザメ	シュモクザメ
コムロ	クサヤモロ	(ツ)	
ゴンゴロウ	イソスズメダイ	ツノムツゴ	ミナミヒメジ
(サ)		ツノメ	ツノザメ
サクラダイ	ハナフエダイ	ツバメ	ヘビギンポ
ササウオ	メジナ		

方言	和名	方言	和名
(ト)			
トウヤク	シイラ	フエ	フエダイ
トーゴ	イソイワシ	フエフキ	ハマフエフキ
ドクガツオ	マルソーダ	フエヤッコ	フエヤッコダイ
ドクフグ	カナフグ	フグメ	ハリセンボン
トミ	カワハキ類		イシガキフグ
ドンジョメ	ドジョウ	ブタザメ	アオザメ
(ナ)		ブッチ	サヨリ
ナダ	ウツボ類		テンジクダツ
ナツトビ	ホントビ	ブリ	カンパチ
ナンヨウブリ	ツムブリ		ヒラマサ
(ニ)		(ヘ)	
ニジトビ	ツマリトビウオ	ベタ	ゴクラクメジナ
ニューバイトビ	ホソトビウオ	(ホ)	
	ツクシトビウオ	ホーサン	スマ
(ネ)		ボータ	ウメイロ
ネズミザメ	ラクダザメ	ボーマス	オオヒメ
ネズミフグ	キタマクラ	ボームロ	クサヤモロ
(ノ)		ホソ	ホソトビウオ
ノミノクチ	ホンハタ	ホトケザメ	ガンギエイ
(ハ)		ホンガチョウ	ヒレグロペラ
バケカン	ヒレナガカンパチ	ホンドミ	ナメモンガラ
バケシマ	シマアジの大	ホンナダ	ウツボ
バケハギ	アミメウマズラ	(マ)	
ハコフグ	ウミスズメ	マカ	マカジキ
バザメ	ホシザメ	マクラフグ	ウミスズメ
バショウ	バショウカジキ		ハコフグ
バチ	メバチ	マルタ	マルソウダ
ハトヨ	メジナ類	マルダツ	ダツ
ハナムシロ	タカサゴ	マルッポ	スマ
ハマゴ	キビナゴ	マルテン	マルソウダ
ハマナカセ	タカノハダイ	マルポウ	ソウダカツオ
ハマフエ	ハマフエフキ	(ミ)	
バラフグ	ハリセンボン	ミズカマス	ヤマトカマス
ハルトビ	ハマトビウオ	ミヤコナダ	ンガラドウシ
ハロウ	ハウキハタ	(ム)	
ハロー	ハタ類	ムツ	クロムツ
(ヒ)		ムツゴ	ヒメジ
ヒヤキナダ	モンガラドウシ	ムネエソ	オキエソ
ヒダリマキ	タカノハダイ	ムロ	クサヤモロ
ヒフキダケ	アオヤガラ	(メ)	
ヒメ	ヒメダイ	メイチ	メイチダイ
ヒメゴ	ヒメダイ	メカ	メカジキ
ヒメマス	ヒメダイ	メジ	マグロの子
ヒラアオ	ウメイロ	メジロ	メジロザメ
ヒラガシラ	シュモクザメ	メチキ	キントキダイ
ヒラダツ	テンジクダツ	メンタマ	キンメダイ
ヒラヨ	オヤビッチャ	(モ)	
ヒレナガ	オオグチイシビキ	モウカ	ネズミザメ
ビンチョウ	ビンナガ	モロゲ	イタチウオ
(フ)		モロコ	マハタ
ブウブウメ	アカヤガラ		クエ

方言	和名	方言	和名
(ヤ)			
ヤイト	スマ	ガリマメ	イソガニ
ヤシ	カタクチイワシ	クスガリ	ヒライソガニ
(ヨ)		クソガニ	ヒライソガニ
ヨコタルミ	ヨコスジフエダイ	コガネエビ	ニシキエビ
ヨシキリ	ヨシキリザメ		ゴシキエビ
ヨツバリ	アイゴ	サクラエビ	カノコイセエビ
ヨメナカセ	タカノハダイ	ゼニガリ	トゲアシガニ
ヨロゲ	テンスモドキ	セノカミ	カメノテ
(ワ)		デーチケエビ	ゴシキエビ
ワイドー	ブチスズキベラ	テングサガニ	ケブカオウギガニ
		ハナエビ	カノコイセエビ
		ハナサキ	カノコイセエビ
<b>頭足類</b>		<b>その他動物</b>	
アオリ	アオリイカ	アサヒガメ	アオウミガメ
アカイカ	ヤリイカ	イソザル	ジンガサウニ
アナダコ	イソダコ	ガゼ	ガンガゼ
イカ	ヤリイカ	ハンザル	ジンガサウニ
	アオリイカ	ホンガメ	アオウミガメ
タツコ	マダコ		
バショーイカ	アオリイカ		
マダコ	ミズダコ		
<b>貝類</b>		<b>海藻</b>	
アカメットウ	ベニシリダカ	(ア行)	
アナマモリ	イボアナゴ	アオモク	ノコギリモク
アブキ	フクトコブシ	アカモク	キントキ
オチョコガリ	タマキビ類	アシプト	ハリガネ
コウガリ	クボガイ	イトテン	オニクサ
	オオクロツケガイ		キヌクサ
シタダミ	クボガイ類	イワノリ	マクサ
タバコ	ツタノハガイ		オニアマノリ
トコブシ	フクトコブシ		ツクシアマノリ
ハチマイ	ヒザラガイ類	オオハ	マルバアマノリ
ハマグリ	ハチジョウダカラガイ	オキグサ	タンバノリ
ヒラミ	ヨメガカサガイ	オニ	キヌクサ
ヒロセガイ	ギンタカハマ	オンジイ	オニクサ
ホラゲー	ホラガイ	(カ行)	オバクサ
メットウ	ギンタカハマ	クモバ	ヨレモク
ヨウマモリ	イボアナゴ		ホンダワラ
		ケデン	タマナシモク
		ケイカンソウ	オニクサ
		コウグサ	トサカノリ
<b>甲殻類</b>		(サ行)	キヌクサ
アオエビ	シマイセエビ	シダバ	オバクサ
アシナカエビ	ゾウリエビ	シャーミ	サイミ
イソムシ	フナムシ	セッカイソウ	カニノテ
ウッチェ	イワフジツボ	(タ行)	
エビ	イセエビ	タグサ	キヌクサ
オニイセ	シマイセエビ	テングサ	キクマサ
オキガリ	タイワンガザミ		オオブサ
オキナエビ	セミエビ	トサカ	トサカノリ

方言	和名	方言	和名
ドラ	オバクサ	ベツタリ	カバノリ
トリノアシ	オニクサ	ポンポン	カタオバクサ
(ハ行)		ポンポンゲサ	オバクサ
ハンバ	ハバノリ	(マ行)	
ヒラクサ	オオブサ	マゲサ	マクサ
ヒロバ	オオブサ		オオブサ
ヒロメ	アントクメ	モク	ヨレモク
ブド	カギイバラノリ		ホンダワラ
ヘイグサ	オバクサ		タマナシモク

## 4 水産加工の変遷

- ・水産加工方法の変遷・・・加工製品の経緯
- ・水産加工組織の変遷・・・設立変遷・活動
- ・参考資料（水産加工原材料処理数量表－昭和51～63年）

西暦	年号	特記事項																
1715	享保元年7月12日	青ヶ島船年貢の鮨を積み大賀郷着。鯉節も大量に積載。																
1770	明和7年	青ヶ島より御船渡海の折、鯉節48束（4,800本）積載。																
1877	明治10年	「明治9年度青ヶ島物産取調書」青ヶ島副戸長佐々木次郎太夫より静岡県令に提出あり。水産加工関係は次の通り。 <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>鯉節</td> <td>215 貫</td> <td>1 貫に付</td> <td>1 円換</td> </tr> <tr> <td>海苔</td> <td>500 枚</td> <td>1 枚に付</td> <td>3 銭 5 厘換</td> </tr> <tr> <td>鯉塩辛</td> <td>90 貫</td> <td>1 樽 6 貫</td> <td>1 樽 1 円換</td> </tr> <tr> <td>鯉塩梅</td> <td>300 貫</td> <td>1 樽 6 貫</td> <td>1 樽 70 銭換</td> </tr> </table>	鯉節	215 貫	1 貫に付	1 円換	海苔	500 枚	1 枚に付	3 銭 5 厘換	鯉塩辛	90 貫	1 樽 6 貫	1 樽 1 円換	鯉塩梅	300 貫	1 樽 6 貫	1 樽 70 銭換
鯉節	215 貫	1 貫に付	1 円換															
海苔	500 枚	1 枚に付	3 銭 5 厘換															
鯉塩辛	90 貫	1 樽 6 貫	1 樽 1 円換															
鯉塩梅	300 貫	1 樽 6 貫	1 樽 70 銭換															
1882	明治15年8月	宝吉丸（33人乗）青ヶ島より八丈島に渡航中、西大風に遭い19昼夜で下総沖に漂着、船体・積荷破船損失（積荷に鯉節50個、500貫塩辛270樽あり）。																
1885	明治18年	金比羅丸（15人乗）青ヶ島より八丈島に渡航中、暴風のため積荷過半打捨（鯉節50個 500貫・塩辛 150樽あり）。																
1895	明治28年	佐藤喜久市缶詰製造を開始。																
1901	明治34年	大脇旅館々主大脇繁吉、水産に志し倉山島司に献策、小島・青ヶ島・小笠原島を視察、35年八重根に鯉節等の製造場設置。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・佐藤正福と物産商店共同で鯉節製造を開始。</li> </ul>																
1913	大正2年	塩干ムロ鱈製造開始。																
1916	大正5年	青ヶ島からの移出品、節類 100貫、乾物 250貫、飛魚 600貫。																
1929	昭和4年	三根村神湊で、佐藤正福、製氷を開始。																
1931	昭和6年11月	漁獲物の有利販売、蚕種・切花等に是非必要であるとして、大日本製氷会社の後援を得て、八丈製氷会社の設立の動き出る。発起人は菊池直行・菊池弘・星野巳之助・浮田欽吉・辻直兵衛・浅沼周蔵・草刈学の7名。																
1932	昭和7年6月13日	八丈製氷会社、八重根に建築されることになり上棟式を挙げる。K・H型ホーム・シーマー捲締缶詰を開始（従来は半田付缶）。																
1934	昭和9年	八丈島水産製造組合設立。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・水産加工製品高：45,029円。内訳次のとおり。              鯉節：24,180円、くさや：16,920円、トコブシ：2,250円、広瀬貝：1,679円。</li> </ul>																
1935	昭和10年	水産加工製品高：34,942円。内訳次のとおり。																

鯉節：10,920円、くさや：19,980円、トコブシ：3,863円、広瀬貝：179円。

1946 昭和21年：島内製塩業開始。

2月15日～3月3日：三根村青年団では、村内の塩不足と闇の横行に対し、団員の男女総出で塩を炊き村内700戸に無料配布、村民一同を喜ばす。

7月：中之郷南海製塩所（代表佐々木益太郎）、大蔵省専売局から正式に認可書が交付され、島の製塩業も愈々軌道化の傾向となる。

1947 昭和22年5月上旬：大木製薬株式会社担当者来島、藍ヶ江で魚類一切の内蔵や卵・魚油等について個別的調査を完了、従来の未利用資源が、有利な輸出薬用資源になることが判明。藍ヶ江に大木製薬株式会社の八丈島工場建設の動き出る

6月19日：八丈島自給製塩組合は自主的統制の強化を図るため理事会を八丈支庁で開催、役員改選の結果、理事長に沖山達雄選ばれる。

・製塩製造高、6,480貫

1948 昭和23年4月5日：専売法の適用により八丈島の製塩業は、必然的に廃業となる。

1949 昭和24年5月15日：缶詰製造の件で日本缶詰協会・日東食品製造（株）関係者来島。

・ヒロセガイボタン工場設立。

1950 昭和25年：昨秋から製造が開始されている、渡辺権松・宮本由春・宮本茂雄共同事業の「ヒロセガイ」を材料としたボタン加工業が本格化の形勢。

4月：ハワイの業者から「トコブシを幾らでも欲しい」という情報が舞い込み、以前よりトコブシの缶詰化に努力してきた八丈興発（株）は、ボイラー・捲締機その他近代的な施設を整備、本格的製造に乗り出す。

・八丈興発株式会社ボイラー捲締機導入、近代化トコブシ缶詰製造開始。

1951 昭和26年：（注）八丈島産のムロくさや、新島産に比べ、製品1貫匁に対し、300～400円安で取引されている実情あり。加工場は21軒。

・26年水産製品検査概況

魚類乾製品	2,528貫、	イカ製品	212,135貫、
水産物佃煮	2,037,703貫、	乾ノリ	40,083,270貫、
加工ノリ	22,561,748貫、	テングサ類	237,802貫、
手数料計	3,260,579円、		

1963 昭和38年9月：八丈島水産加工業組合が結成され、組合長松岡光太郎、理事山本林市・森透・奥山為雄・浅沼岑生・監事田代孝雄・奥山隆偉。

1970 昭和45年8月18日：八丈町主催により、水産振興対策協議会開催、後継者・流通・くさやについて審議。

1971 昭和46年8月5日：7月下旬からムロの漁獲多く、くさやの生産も上昇、観光客用土産の目玉となろうとする時、八丈島水産加工業組合（組合長松岡光

太郎・組合員19名)は、臨時総会を開き、全員一致で解散決議を実施。解散の理由は、組合員の意見の相違と言う事であるが、三根漁協が、漁民の収入増と言う名目で、大部分の荷を新島へ送り、島内では船主である加工業者に、いくばくかの荷を渡している。これに対し加工組合としては、漁協が専業加工業者と相談もなく、船主加工業者だけに荷を渡している事は、組合成立の理由がなくなったというもの。水産加工業者は、専業で大規模に経営している者・片手間でやっている者・船主加工業者の三種に分類出来るが、識者は次の点を指摘。

- ①新島くさやとの製品の質の差を縮小する努力をすべきである。
- ②新島くさやとの値段の差をPRで克服すべきではないか。
- ③設備資金や運転資金を低利で導入するためには、正式な法人にするべきである。
- ④安く買って高く売るのは、商売の常道であるかもしれないが、原料の供給者である漁民も、八丈での一般消費者・加工業者と、納得のいく値段は付けられないものか。持ちつ持たれつを忘れては困る。

1972 昭和47年 7月1日：八丈島水産加工業協同組合（以下水産加工協）設立、組合長松岡光太郎、組合員24名。

11月：第4回八丈島郷土物産共進会開催、三根漁協の出品による、真空包装「アオムロ焼くさや」が町長賞を受く。

1973 昭和48年 2月12日：水産加工協、第一回通常総会開催、役員改選を実施。2月17日の役員会で新組合長に山本林市を選任。

7月4日：町長名で知事宛「水産物加工試験研究施設の促進について」を要望。

1974 昭和49年 2月27日：水産加工協、第二回通常総会開催。

1975 昭和50年 7月17日：八丈町議会、物流拠点施設（ストックポイント）建設委員会開催。昭和51～52年度で、総予算1億6千万円（都補助80%、町20%）を掛け、神湊の町有地に建設することを決定。規模は次の通り。

敷地面積：862.21㎡、急速冷凍庫：10t、マイナス35℃

冷蔵庫：200t、マイナス30℃、倉庫：150㎡、

運営：三根漁協に委託し、管理運営の調整機関として「運営委員会」を設置。

9月：ムロアジ漁は8月1日から操業されているが、連日好漁を続け、加工能力以上の漁獲であるため連日漁獲制限を続ける結果となる。

1977 昭和52年 2月24日：水産加工協、第五回通常総会を開催。神湊の町有地に独自の事務所を建設することを決定。

4月5日：都内の市場へ昨年に引き続き魚類価格安定供給事業の春トビウオが出回る。加工用卸価格は市場価格の1割引で販売。

7月23～25日：商工祭りの郷土物産コーナーで、加工協同組合・漁協が協賛、夏トビウオ 2,000本をくさやにして無料提供。

1978 昭和53年 2月22日：水産加工協、第6回定期総会を開催。くさや製品の生産は、島内売りに留まることなく島外移出をと、生産意欲盛り上がる。

4月1日：八丈島物流センター完成、供用開始。水産加工協、ムロアジ

35t を初入庫。

7月27日：水産加工協（組合長奥山隆偉）、八丈産くさやの市場出荷を既に開始。水産加工協から5名、三根漁協組合長・町水産係長の7人が築地市場・横浜市場を訪ね、八丈産くさやの市場出荷について精力的に話し合う。その内容は次の通り。

- ①八丈産くさやは新島産の物より味・香り・鮮度の点で良いが、乾燥不十分でかび易い。
- ②製品規格は1kg当たり14～15枚程度が理想。
- ③市場出荷は、9kg入1箱で、ばら詰か、2枚入ビニール詰とする。
- ④出荷は加工組合員個人が各屋号で出荷、出荷調整は加工組合で実施

八丈島のムロアジの水揚げは、漁港の整備・漁船の大型化・漁法の機械化により漁獲能力が向上、水揚げは年々増加しているが、ムロアジは鮮度が落ち易く、生魚の消費には限界があり、90%は加工用となる。島内で加工される量は50%で、40%は島外の大島・新島へ移出されるが、島外出荷は価格の点で思わしくなく、島内の加工能力を引き上げたものの、観光客の落ち込みや、島内消費の伸び悩みが見られ、ムロくさやの販路拡大が急務となっていた。また、ムロアジの冷凍品は今年から静岡漁連のマグロの釣餌用として8月29日初出荷し好評を受く。

12月30日：八潮物産（店主山下公一「34才」）は、ムロアジを原料にした蒲鉾を試作、「月桃蒲鉾」として売り出す。これは東海区水産研究所内山均の講議を受け、研究に研究を重ねた物で、防腐剤や添加物は一切使わず、漂白もしない真正物。竹を半分に割り蒲鉾を盛り付け、真空パックし月桃の葉で包んだ物。

1979 昭和54年 1月16～20日：水産加工協20人・八丈分場・八丈町役場担当者一行22名八丈くさやの販路拡大につき、市場・千葉・塩釜・松島方面視察。

10月1日：「都民の日」の大東京祭に八丈島からも参加、くさや等無料配布を行ないP・Rに努む。

1981 昭和56年 1月11日：八丈島くさやの元祖と言われた松岡光太郎死去（93才）。

10月11日：ペルー・タイの両国から、水産加工技術・同加工設備視察のため4人が、東海区水産研究所職員の案内で来島。

12月：ムロアジの不漁により、需要期の年末にかけムロくさやの小売価格が急上昇し問題化。（注くさやkg当たり 2,000円→3,500円）

1982 昭和57年 1月12日：水産加工協、ムロくさやの原料難のため九州からムロアジ約10tを導入。ムロ棒受網漁船も1月出漁。

2月22日：水産加工協、第10回通常総会を開催、経営内容としては、昨年度はムロ棒受網の漁獲が少なく、他県から原料の導入も図ったが、原料高となり、くさや製品も高くなるなど苦難の年で、赤字となる。役員改選あり組合長に奥山隆偉再選。

12月11日：九州産ムロアジ 22.5t入荷、ムロくさやの高騰対策。

1985 昭和60年 2月19日：水産加工協、総会において、加工原材料不足（ムロ・春トビウオ）の際は、他地区から導入する事を確認。役員改選あり、奥山隆偉再選。

1986 昭和61年 2月22日：水産加工協、第14回通常総会を開催、59年～60年春トビウオ。

ムロアジの不漁による原材料不足につき問題視。

11月8日：八丈町総合開発審議会において、ムロくさや生産の伸び悩みから、くさやの大衆離れが進んでいるのではないかの議論出る。

11月23日：南海タイムス「読者コーナー」にくさや問題は、行政・水産加工業者・生産者・消費者に依る四者会議をの主張載る。

1987 昭和62年 1月11日：南海タイムス「読者コーナー」に、町議奥山太一の「流通媒体者の声に耳を」という題名でムロくさやについての意見載る。

2月20日：水産加工協、第15回通常総会開催、「春トビウオの壊滅的不漁に加工生産量の伸び悩み、消費者のくさや離れ等につき意見出る。

1988 昭和63年 2月20日：水産加工協、第16回通常総会開催。62年度は春トビウオ漁の不振・観光客の伸び悩みで 795,115円の赤字を計上、累積赤字が 2,469,396円となる。この対策として組合では、63年度の原料仕入れに対する歩合金の引き上げを実施、かつ、組合員個人の仕入れについても、本人の申告により、歩合金の徴収を励行することを決議。役員改選により山本明人を組合長に選出。

12月11日：南海タイムス「読者コーナー」欄に「ことしのムロ事情」の題名で三根浅沼進の投稿文載る。

1989 昭和64年 1月：八丈町共同購入運営委員会（委員長沖山のし）、島民に家庭用くさやの提供を決定。これは都の安定供給一括買い付け事業を活用、委員会からの要請で都生鮮食品流通センターが、三根漁協からムロアジ20tを500万円(kg当たり250円)で一括代行購入、委員会が水産加工協へ同価格で卸すと共に、加工と販売を依頼、島内消費者が割引価格で購入する仕組みのもの。消費者に提供されるくさやは5tで、価格はkg当たり2,100円となる。実施は2月の予定。

(参考)

水産加工業年別原材料処理数量表

単位：生Kg、但し春トビウオは1尾430g換算

西暦	春トビウオ	冷トビウオ	夏トビウオ	青ムロアジ	冷ムロアジ
1976	142.767	0	0	337.762	0
1977	134.935	0	0	365.194	0
1978	178.736	0	450	573.137	33.810
1979	161.786	0	20.266	441.305	0
1980	166.636	0	4.986	433.888	0
1981	176.308	0	5.754	340.352	0
1982	191.982	0	3.518	300.533	36.604
1983	155.276	0	7.322	349.410	0
1984	60.449	0	9.472	226.326	0
1985	101.788	0	13.148	214.688	15.520
1986	15.698	0	20.341	292.719	33.568
1987	15.136	0	13.013	315.304	0
1988	15.321	20.510	14.289	259.784	41.248

(水産加工品について、生産高及び流通ルート等を示す纏まった資料が無く、原料処理数量について、昭和51年からの参考資料を添付する)

## 5 生産基盤の整備

- ・沿岸構造改善事業等各施策・・・増殖場・人工礁・陸上施設等
- ・水産融資事業
- ・その他水産振興施策・・・・・・・・共進会・表彰（漁協のものは別掲）

西暦	年号	特記事項		
1932	昭和7年	10月：漁村救済対策として、総額 3,000円、国庫より5割・東京府 1.7割漁業開発奨励補助金が確定。これは磯掃除・築磯が対象。大賀郷・中之郷・末吉：築磯（底釣奨励）1ヶ村の事業費 900円。宇津木・三根・檜立：磯掃除（天草繁殖）1ヶ村の事業費 450円。		
1934	昭和9年	：大賀郷村漁業組合漁獲物共同販売所新築費に対する農林省漁業共同施設奨励金 1,247円交付決定。落成は翌年1月31日。		
1951	昭和26年	：（水産資源保護法制定）		
1952	昭和27年	：27～33年度浅海増殖開発事業。（漁船損害補償法制定）		
1953	昭和28年	：都水産課、浅海増殖開発事業開始。		
		・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。	230 m <sup>3</sup>	316,000円
		・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	290 m <sup>3</sup>	300,136円
1954	昭和29年	：三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。	200 m <sup>3</sup>	277,000円
		・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	291 m <sup>3</sup>	302,078円
1955	昭和30年	：三根：魚礁（コンクリートブロック製）140個設置。	2,800坪	
			837 m <sup>3</sup>	1,075千円
		・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。	200 m <sup>3</sup>	274,085円
		・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	507 m <sup>3</sup>	526,000円
		・大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	180 m <sup>3</sup>	274,656円
		・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。	140箇	1,054,800円
1956	昭和31年	：31～37年度新農山漁村建設事業		
		2月3日：八丈支庁で魚礁設置協議会開催。		
		2月24日：八丈支庁で築磯事業打合せ開催。		
		・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。	500 m <sup>3</sup>	691,000円
		・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	650 m <sup>3</sup>	675,325円
		・大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	200 m <sup>3</sup>	317,060円
		・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	200 m <sup>3</sup>	314,556円
1957	昭和32年	：三根漁協；漁場改良造成投石事業施行。	600 m <sup>3</sup>	831,000円
		・末吉漁協；漁場改良造成投石事業施行。	830 m <sup>3</sup>	900,000円
		・大賀郷漁協；漁場改良造成投石事業施行。	250 m <sup>3</sup>	375,000円
		・中之郷漁協；漁場改良造成投石事業施行。	250 m <sup>3</sup>	375,000円
1958	昭和33年	：33～38年度沿岸漁業振興対策事業		
		・（公共用水域の保全法・工場排水等の規制法制定）		

・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。	660m <sup>3</sup>	929,500円
・大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	300m <sup>3</sup>	454,854円
・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	300m <sup>3</sup>	450,000円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	900m <sup>3</sup>	926,297円

1959 昭和34年 8月：昭和34年度八丈地域農山漁村建設総合施設特別補助金が決定。八丈島で総額 870万円。うち水産関係は次の通り。

三根漁協：水産荷捌所 115坪、事業費 480万円（うち国庫補助 192万円、公庫 230万円）

末吉漁協：水産冷凍施設冷凍機と付帯施設62万5千円（うち国庫補助 25万円）

・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。	450m <sup>3</sup>	601,230円
・大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	200m <sup>3</sup>	303,020円
・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	200m <sup>3</sup>	300,412円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	600m <sup>3</sup>	660,861円

1960 昭和35年 9月：中之郷漁協に新農山漁村建設総合対策特別助成で、水産大冷蔵庫（20m<sup>2</sup>、フロンガス冷凍機5馬力、予備室・本室・機械室、総工事費160万円）完成。

・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。	640m <sup>3</sup>	766,433円
・大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	400m <sup>3</sup>	574,047円
・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	250m <sup>3</sup>	375,000円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	700m <sup>3</sup>	756,562円
・末吉漁協：並型魚礁設置事業施行。	59箇	527,011円

1961 昭和36年：三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。 604m<sup>3</sup> 690,532円  
 大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。 394m<sup>3</sup> 462,310円  
 中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。 315m<sup>3</sup> 377,000円  
 末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。 903m<sup>3</sup> 1,033,868円  
 末吉漁協：並型魚礁設置事業施行。 279箇 1,163,998円  
 投石事業、2,216 m<sup>3</sup>、2,216 千円。

1962 昭和37年：37～48年度沿岸漁業構造改善事業

5月25日：新農山漁村建設総合対策7周年に当たり、同対策の推進に功労があったとして、三根漁協（組合長菊池長二郎）、農林大臣表彰を受く。

・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。	802m <sup>3</sup>	1,194,640円
・大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	497m <sup>3</sup>	768,400円
・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	387m <sup>3</sup>	618,491円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	732m <sup>3</sup>	1,194,723円

・東京都の島しょ浅海増殖事業として、サザエ移植事業を大賀郷・三根・中之郷・末吉の各漁協が次の計画で各地先に実施。

年度	サザエ種苗	代価	諸経費	事業費
昭和37年度	4,500kg	720,000円	280,000円	1,000,000円
昭和38年度	3,800kg	703,000円	297,000円	1,000,000円
昭和39年度	3,200kg	672,000円	328,000円	1,000,000円
計	11,500kg	2,095,000円	905,000円	3,000,000円

種苗の導入先は、伊豆の下田。

・末吉：並型魚礁設置事業施行。	100箇	1,206,882円
・三根：コンクリート面造成事業施行。	380m <sup>2</sup>	318,000円
・大賀郷：コンクリート面造成事業施行。	250m <sup>2</sup>	204,000円

1963 昭和38年：（沿岸漁業等振興法制定）

8月1日：沿岸漁業等振興法制定公布。この内容は、沿岸漁業の従事者が、他産業従事者との均衡する生活をする事が、可能なことを目的として、沿岸漁業の構造改善に必要な事業を地区の特性を生かして総合的かつ効果的に実施するため、39年度に伊豆七島全域を地域として国の指定を受け、27年計画で沿岸漁業に関する社会環境、漁業環境その他計画に必要な調査を行ない。基本計画を樹立、国の承認を受けた後、事業を施行するというもの。八丈地区にも地区構造改善協議会設置。委員7名。

・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。	222m <sup>3</sup>	504千円
・大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	192m <sup>3</sup>	402千円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	302m <sup>3</sup>	648千円
・末吉漁協：並型魚礁設置事業施行。	100箇	1,200千円

1964 昭和39年2月6日：昭和39年度沿岸漁業構造改善事業に東京都が指定され、従来の魚礁や投石事業の外に、20t未満の漁船建造資金貸付や水産施設に対し、補助貸付等が重点的に行なわれることとなる。八丈では地区協議会を作り、研究調査を行なうことを決定。

・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。	200m <sup>3</sup>	534千円
・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。	130箇	1,500千円
・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	120m <sup>3</sup>	306千円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	180m <sup>3</sup>	402千円
・中之郷漁協：コンクリート面造成事業施行。	350m <sup>3</sup>	312千円

1965 昭和40年

・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。	155m <sup>3</sup>	486千円
・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	90m <sup>3</sup>	300千円
・大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	121m <sup>3</sup>	360千円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	337m <sup>3</sup>	841千円
・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。	97箇	847千円

1966 昭和41年10月6日：沿岸漁業構造改善事業の融資を受け、漁船の大型化を目指す第一号船として、三根神湊で高漁丸（8.04t、ヤンマー・セル60馬力、船主持丸才吉）盛大に竣工式を挙げる。この船は漁船に防熱材を貼り、解氷を防止。

・経営近代化促進対策事業として次の事業が施行される。		
中之郷漁協：荷捌所・水産倉庫完成。	総工費	4,149千円
末吉漁協：圧縮機購入。	事業費	546千円
三根漁協：漁業用通信施設（SSB10W船舶局2）設置。	事業費	1,205千円
大賀郷漁協：漁業用通信施設（SSB10W船舶局1）設置。	事業費	618千円
・大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	118m <sup>3</sup>	428千円
・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	138m <sup>3</sup>	510千円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	181m <sup>3</sup>	606千円
・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。	180箇	1,384千円

1967 昭和42年1月22日：沿岸漁業構造改善事業第2号船として、三根第五神天丸（6.9t ヤンマー・セル50馬力、船主石田武徳）竣工。

3月7日：末吉漁協福寿丸（6.7t、35馬力船主沖山明治郎）、沿岸漁業構造改善事業第4船として竣工。末吉にとっては8年振りの新造船による竣工式で大いに賑う。

9月：三根漁協、経営近代化促進対策事業として、製氷冷蔵庫を建設。製氷能力日産8t、冷蔵能力200t（-20℃）、建物は鉄筋コンクリート二階建116坪、総工費30,350千円。

・大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	77 <sup>m<sup>3</sup></sup>	420千円
・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	102 <sup>m<sup>3</sup></sup>	600千円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	167 <sup>m<sup>3</sup></sup>	810千円
・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。	145箇	1,380千円

1968 昭和43年：

大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	80 <sup>m<sup>3</sup></sup>	450千円
・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	103 <sup>m<sup>3</sup></sup>	630千円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	190 <sup>m<sup>3</sup></sup>	841千円
・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。	145箇	1,480千円
・経営近代化促進対策事業として、次の事業施行さる。		
大賀郷漁協：船揚機（50PS 1基）設置。	事業費	2,429千円
中之郷漁協：船揚機（50PS 1基）設置。	事業費	2,075千円
大賀郷漁協：水揚荷捌施設（鉄筋コンクリート 198 <sup>m<sup>2</sup></sup> ）建造。	事業費	4,468千円

1969 昭和44年：

大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	155 <sup>m<sup>3</sup></sup>	939千円
・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	180 <sup>m<sup>3</sup></sup>	1,200千円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	362 <sup>m<sup>3</sup></sup>	1,801千円
・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。	250箇	2,385千円
・経営近代化促進対策事業として、次の事業施行さる。		
末吉漁協：漁業用通信施設（SSB10w 船舶局1）設置。	事業費	600千円
三根漁協：船揚施設（90PS 1基）設置。	事業費	4,299千円
大賀郷漁協：漁業用補給施設（給油タンク・円筒型30K1）設置。	事業費	1,919千円
大賀郷漁協：製氷冷蔵施設（コンクリートブロック、冷凍1t、冷蔵64.8t、貯氷50t）建造。	事業費	18,180千円

1970 昭和45年：（水質汚染防止法・海洋汚染防止法制定）

5月30日：大賀郷漁協、八重根新漁港に建設した冷蔵庫の竣工式を挙る。この施設はコンクリートブロックを主体に柱・梁は鉄筋コンクリート、床面積は156<sup>m<sup>2</sup></sup>。日産1tの急速冷凍室、65t収容の冷蔵室、氷400本を貯えられる貯氷室、その他ロッカールーム・オートメーションで砕氷を運ぶアイスクラッシャーコンベヤー等を備え、各出入口は、エアーカーテンを取り付ける等最新のもの。

・大賀郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	111 <sup>m<sup>3</sup></sup>	840千円
・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。	182 <sup>m<sup>3</sup></sup>	1,088千円
・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。	293 <sup>m<sup>3</sup></sup>	1,928千円
・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。	120箇	1,480千円

1971 昭和46年：46～58年度第2次沿岸漁業構造改善事業

・（海洋水産資源開発促進法制定）

7月26日：漁協組合長会を支庁会議室で開催、昭和47年度漁業構造改善補足整備事業として、蓄養池を設置することとなり、場所は洞輪沢で、経営主体は中之郷漁協と末吉漁協で、三根・大賀郷漁協は必要に応じて利用する事となる。

- ・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。 72<sup>m<sup>3</sup></sup> 600千円
- ・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。 86<sup>m<sup>3</sup></sup> 605千円
- ・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。 100箇 1,480千円

- ・末吉漁協：経営近代化促進対策事業として、船揚施設（50PS、1基）建設。 事業費 3,054千円

- 1972 昭和47年：中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。 62<sup>m<sup>3</sup></sup> 600千円
- ・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。 67<sup>m<sup>3</sup></sup> 602千円
  - ・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。 120箇 1,810千円

- ・末吉漁協：経営近代化促進対策事業として、かん水蓄養殖施設（コンクリート陸上池67<sup>m<sup>2</sup></sup>、上屋 108<sup>m<sup>2</sup></sup>。）建造。 事業費 7,900千円

1973 昭和48年：八丈島漁協末吉支所に蓄養施設完成。

- ・中之郷漁協：漁場改良造成投石事業施行。 57<sup>m<sup>3</sup></sup> 600千円
- ・末吉漁協：漁場改良造成投石事業施行。 54<sup>m<sup>3</sup></sup> 600千円
- ・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。 95箇 1,790千円

1974 昭和49年：（沿岸漁場整備開発法制定）

5月：沿岸漁場整備開発法制定公布。内容は200海里時代が定着し、国際的に漁業規制が強化される中で、動物性蛋白質食料を安定的に供給するため沿岸漁業の重要性が見直され、沿岸漁業の生産力を増大させるために必要な事業を総合的かつ効果的に実施するため。

- ・八丈島漁協：漁場改良造成投石事業施行。 38.40<sup>m<sup>3</sup></sup> 1,800千円
- ・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。 83.00<sup>m<sup>3</sup></sup> 1,020千円
- ・八丈島漁協：経営近代化促進対策事業として、製氷冷蔵施設（鉄筋コンクリート2階建 283.1<sup>m<sup>2</sup></sup>、製氷8t、冷蔵100t、貯氷100t）建造。 事業費 74,700千円
- ・都漁連：経営近代化促進対策事業として、八丈島に漁業用補給施設（鋼製丸型タンク100kL）建造。 事業費 14,727千円

- 1975 昭和50年：八丈島漁協：漁場改良造成投石事業施行。 152.00<sup>m<sup>3</sup></sup> 2,400千円
- ・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。 130.00<sup>m<sup>3</sup></sup> 2,040千円

1976 昭和51年：（漁業再建整備特別措置法制定）

・51～56年度第一次沿岸漁場整備開発事業

- ・八丈島漁協：漁場改良造成投石事業施行。 135.00<sup>m<sup>3</sup></sup> 2,400千円
- ・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。 112.00<sup>m<sup>3</sup></sup> 2,040千円
- ・三根：並型魚礁設置事業施行。 135箇 5,700千円

1977 昭和52年：（漁業水域に関する暫定措置法制定）（200海里漁業専管水域設定）

4月：東京都水産課・水産試験場、大規模増殖場事前調査着手。

- ・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。 455<sup>m<sup>3</sup></sup> 6,000千円
- ・八丈島漁協：漁場改良造成投石事業施行。 106箇 2,040千円
- ・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。 118箇 2,040千円
- ・都漁連：漁業近代化施設整備事業として、通信施設（電話ファクシミリ9基。気象ファクシミリ2基。）設置事業施行。

- 事業費 13,670千円
  - ・八丈島漁協：漁業近代化施設整備事業として、重油タンク（20k1）中之郷に設置。事業費 4,240千円
  - ・三根漁協：漁業近代化施設整備事業として、重油タンク（100k1）設置。事業費 12,412千円
  - ・八丈島漁協：漁業近代化施設整備事業として、製氷冷蔵施設（鉄筋コンクリートブロック造り、冷蔵5.2t、貯氷1.3t）を末吉に設置。事業費 16,841千円
  - ・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。455.6m<sup>3</sup> 5,700千円
- 1978 昭和53年：八丈島漁協：漁場改良造成投石事業施行。162箇 2,040千円
- ・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。192箇 2,040千円
  - ・三根漁協：並型魚礁設置事業施行。506.2m<sup>3</sup> 6,000千円

1979 昭和54年 3月13日：中之郷汐間のトコブシ大規模増殖場開発事業協議会を開催。  
 （注）調査期間52年～54年の3ヶ年、工事施行は55年～59年の計画。

10月16日：大規模人工礁造成計画実現のため町、議会、漁協連名で都知事及び都議会に陳情。

- ・三根漁協：漁業近代化施設整備事業として、水産物荷捌施設（鉄筋コンクリート平屋建1棟 200m<sup>2</sup>）設置。事業費 15,000千円
- ・三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。352箇 4,080千円
- ・八丈島漁協：漁業近代化施設整備事業として、製氷冷蔵施設（鉄筋コンクリート造40.8m<sup>2</sup>、冷蔵14.65t、貯氷17.46t、餌料16.91t）設置。事業費 18,000千円
- ・八丈島漁協：漁業近代化施設整備事業として、漁船用補給施設（地下式重油タンク20k1）設置。事業費 6,500千円
- ・三根漁協：沿岸漁場整備開発事業として、並型魚礁（FRP魚礁、452空m<sup>3</sup>）設置。事業費 5,800千円
- ・東京都：沿岸漁場整備開発事業として、大型魚礁（コンクリート角型、2.560空m<sup>3</sup>）設置。事業費 29,894千円

1980 昭和55年 2月26日：三根漁業協同組合、第31回通常総会を開催、55年度で製氷施設〔鉄筋コンクリート、平家 314.2m<sup>2</sup>、製氷能力日産20t、総事業費106,240千円（国庫補助50,000千円、自己資金56,240千円）〕を建造する事を決定。

2月：八丈島大規模増殖場（55年度～58年度工期、予算6億円）中之郷汐間地先に面積100ヘクタール、水深2m～6mで実施決定。目的はトコブシの増殖場。

2月：人工礁事業の設置場所について、八丈支庁と両漁協の協議により、石積ヶ鼻沖に決定、事前調査開始。

4月：東京都：汐間地先に大規模増殖場造成事業開始。

5月4日：農林水産省近藤鉄雄政務次官一行200カリ時代の、作る漁業視察のため来島。

8月：都水産課、人工礁事業の事前調査に着手。

9月29日：中之郷汐間に施行される大規模増殖場（総工費6億円、工期55～59年）の一期工事、入札に付され施工開始。

- 三根漁協：漁業近代化施設整備事業として、製氷施設（延 10.71<sup>m</sup>製氷施設日産20t）、作業場（96.51<sup>m</sup>）設置。  
事業費 131,700 千円
- 三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。564空<sup>m</sup>、  
事業費 6,000千円
- 三根漁協：沿岸漁場整備開発事業として、並型魚礁（FRP魚礁、  
417空<sup>m</sup>）設置。  
事業費 6,000千円

1981 昭和56年 2月19日：八丈島地区大規模増殖場管理委員会開催、「八丈島大規模増殖場管理規程」を決定。管理委員は地元海区漁業調整委員会委員3・八丈島漁協4・三根漁協4の計11名。

4月：都水産課、石積ヶ鼻沖の人工礁漁場造成事業に着手。  
事業費 41,160千円

6月9日：神湊に都漁連が建設中の「発泡スチロール魚箱製造工場」が落成、稼動開始。規模は、鉄筋コンクリート建て床面積 340<sup>m</sup>、能力は、15kg・10kgの魚箱で1時間に100個、都漁連からの委託で三根漁協が管理運営に当たる。事業費60,000千円。

7月：末吉石積沖に人工礁漁場造成事業（昭和56年～60年の工期、総額6億円、37,000空<sup>m</sup>、面積500ヘクタール）実施、八丈町・両漁協の陳情により確定。

- 三根漁協：漁獲物高度利用施設整備事業として、製氷貯氷施設（鉄筋コンクリート造平屋建 201.195<sup>m</sup>、貯氷能力400t）設置。事業費110,372 千円。
- 三根漁協：沿岸漁場整備開発事業として、並型魚礁（FRP魚礁、417空<sup>m</sup>）設置。  
事業費 6,600千円

1982 昭和57年：（新沿岸漁業構造改善事業57～62年度）

• （第二次沿岸漁場整備開発事業57～62年度）

- 三根漁協：漁場改良造成投石事業施行。538空<sup>m</sup>、事業費 6,000千円
- 八丈島・三根両漁協：漁業近代化施設整備事業として、通信施設（無線中継施設、局舎1棟 13.13<sup>m</sup>、送受信機一式）設置。  
事業費 16,000千円
- 三根漁協：漁場整備事業として、投石事業（自然石 538空<sup>m</sup>）施行。  
事業費 6,000千円
- 三根漁協：並型魚礁（F. R. P. AK） 402空<sup>m</sup>設置。事業費 6,930千円
- 東京都：人工礁漁場造成事業（F. R. P. AK 2m角コンクリートブロック）施行。  
事業費 53,970千円

1983 昭和58年：三根漁協：漁場整備事業として、投石事業（自然石 2,454空<sup>m</sup>）施行。事業費28,600千円。

- 三根漁協：並型魚礁（FRP AK 402空<sup>m</sup>）施行。事業費 7,344千円
- 東京都：人工礁漁場造成事業（FRP AK 2m角コンクリートブロック 3,999空<sup>m</sup>）施行。事業費 59,900千円
- 東京都：大規模増殖場造成事業（潜堤39.5m）施行。  
事業費 123,000 千円

1984 昭和59年 3月26日：都議会予算特別委員会において、栽培漁業センターの構想、概ね確実視される状況となる。

- 三根漁協：漁村生産環境整備事業として、船揚施設（ウインチ20t、

- 船台 6、機械室32.1㎡)設置。 事業費 23,100千円
- ・三根漁協：並型魚礁 (FRP AK 401空 設置。 事業費 7,420千円
- ・東京都：人工礁漁場造成事業 (FRP AK 2m 角コンクリートブロック  
3,779空㎡) 施行。 事業費 59,900千円
- ・東京都：大規模増殖場造成事業 (潜堤60.0m) 施行。  
事業費 183,720千円

1985 昭和60年 6月18日：汐間海岸の大規模増殖場につき、都水産課長一行来島、町・支庁・両漁協間で話し合いが持たれ、両漁協から代表を夫々7名ずつ出し、運営委員会の会合を6月中に開催決定。

7月31日：八丈支庁会議室で「八丈島とこぶし増殖場管理委員会」の初会合開催。

(注)55年～59年の5年間に6億1千万円(国6割、都4割)の巨費を投じて完成された、100ヘクタールにわたる汐間海岸のトコブシ大規模増殖場の管理運営は、今後、都からこの委員会に委託され運営される事に決定。

7月：三根地先に小規模増殖場の設置計画が成立、調査費が予算化。この事業は、61年～63年の工期と決定。

8月18日：八丈島大規模増殖場、第一回の口開け。(解禁)

- ・三根漁協：地域沿岸漁業構造改善事業として、築磯事業(808㎡) 施行。  
事業費 10,000千円
- ・三根漁協：並型魚礁 (F. R. P A. K ) 401空㎡設置。 事業費 7,560千円
- ・東京都：人工礁漁場造成事業 (ポリコン魚礁、2m 角コンクリートブ  
ロック 2,741空㎡) 施行。 事業費 48,200千円

1986 昭和61年 4月：東京都水産課、八丈島地区小規模増殖場造成事業開始。(三根地先3ヶ年の工期。)

9月17～18日：都水産課、三根・八丈島両漁協に対し、東京都栽培漁業センター建設計画の中間報告を実施、地元漁業者の反応は、中間育成施設の管理運営について、地元負担(赤字が大きい。)の点で難色を示す状況。

10月7日：「第三次沿岸漁場整備開発事業」に関する、関東・東海・ブロック会議、33名の参会で開催。

- ・八丈島漁協：地域沿岸漁業構造改善事業として、漁具倉庫・共同作業  
場(240㎡、2階建) 建造。 事業費 29,000千円
- ・三根漁協：広域沿岸漁業構造改善事業として、燃油タンク (100kl)  
設置。 事業費 40,000千円
- ・三根漁協：並型魚礁 (F. R. P A. K ) 401空㎡設置。 事業費 7,720千円
- ・東京都：人工礁漁場造成事業 (ポリコン魚礁、2m 角コンクリート。  
ブロック 1,311空㎡) 施行。 事業費 28,000千円
- ・東京都：小規模増殖場造成事業(1,987空㎡) 三根に施行  
事業費 49,500千円

1987 昭和62年 2月：第二次東京都長期計画発表、栽培センター1ヶ所(大島)及び中間育成施設4ヶ所の建設、61～70年度計画。 事業費 17億円

3月12日：都・八丈町・八丈島・三根両漁協4者による、トコブシの中間育成施設について会議開催、地元代表者からは運営につき、地元負担が多いとして、計画の修正要求強し。

4月9日：八丈島漁協の事務所と、漁船漁業用共同作業場と漁具保管倉庫が完成、新事務所での営業を開始。この漁船漁業用共同作業場と漁具保管倉庫は地域沿岸漁業構造改善事業として建設されたもの。また、三根漁協では、広域沿岸漁業構造改善事業として神湊漁港内に漁船補給施設（給油タンク 100k1容量）が完成使用開始。

6月8日：八丈島とこぶし増殖場管理委員会、支庁会議室で開催。操業解禁、7月15日9時～15時と決定（時化のため8月18日に延びた）。次いで東京都島部海区漁業調整委員会八丈島地区協議会を開催、漁業全般について課題討議を実施。春トビウオの不漁に対応、トサカノリへの取組・または、小型定置網の試行など新漁法の取り入れにつき話し合う。

11月19～20日：東京都水産課、町と八丈島・三根両漁協に対し、東京都栽栽漁業センター推進計画の説明会を実施。この中で中間育成施設につき、陸上施設から海面生簀や浅海利用に方式を変更する案を提示。これに対し地元漁業者の意向は、なお消極的、11月24日島嶼会館で開催された島嶼町村会第1回臨時総会でも、都の直営を望む声強し。

1988 昭和63年：（新沿岸漁業構造改善事業63～68年度）

・（第三次沿岸漁場整備開発事業63～68年度）  
東京都：小規模増殖場造成事業(3,565空<sup>m</sup>) 三根に施行：  
事業費 57.350千円  
：人工礁漁場造成事業(1.364空<sup>m</sup>) 施行。事業費 29.994千円

6月8日：八丈町経済企業委員会で、八丈町は物流センターの改造最終設計案を発表。凍結室（収容10t・-45℃）・冷蔵室（収容60t・-35℃）改造、倉庫（面積37.8<sup>m</sup>）増設。

## 6 漁 港 等 の 整 備 事 業

- ・ 漁港整備事業の沿革・・・漁港整備・漁港指定・廃止・管理・漁港に関する自然災害
- ・ 接岸港建設促進事業等・・・接岸港建設整備・底土海浜整備・離島航路

西暦	年号	特 記 事 項
1497	明応6年9月9日	：暴風、中之郷船戸の坂中より3人、漁船4艘波に払われ、他に漁船3艘、人1人払わる。
1498	明応7年9月25日	：津波にて、中倉にありし真敷出島小船の荷物・諸道具波に払わる。船員1人死亡。
1604	慶長9年12月16日	：津波、谷戸ヶ里在家残らず波に払われ75人死亡。島中田畑半損耗。年貢大きく減少。
1677	延宝5年9月9日	：大津波、谷戸ヶ里（八戸）迄襲う。
1695	元禄8年9月3日	：御蔵役船2隻着島の処、俄に大時化に相成り、御船沖に繫置、漸く荷物取り揚げ候処、同5日流失。1隻は荷物陸揚げが叶わぬ内に繫綱切断、前崎浦流れ寄り破船。
1747	延享4年2月	：大賀郷村津波、漁船流出。
1835	天保6年	：山下平次郎江戸幕府の資金援助を受け藍ヶ江開拓。（開拓前漁船2～3隻あるも山の上に引揚げ置く。）
1844	弘化元年7月	：中之郷藍ヶ江掘割資金、376両余拝借。
1859	安政6年	：八重根港掘割大普請開始。
1915	大正4年6月25日	：三根漁業組合臨時総代会開催次の案件議決。 神湊漁港、年々住民増加、かつ、飛魚漁期や夏期発動機船の出入頻繁にして用水不足。村役場による水道の架設に組合も補助金を出金する件あり。
1917	大正6年12月13日	：末吉名古屋崩壊、死者16人・負傷者10人・漁船11隻・船舶1隻、人的被害の多かりしは、当日貨客船が洞輪沢港へ入港、荷役中であつた事も大きな原因。
1925	大正14年	：神湊漁港：船溜・船揚場修築事業施行。 事業費 13,571円
1926	大正15年9月28日	：神湊港船揚場及び船溜場工事落成式。
1926	昭和元年12月25日	：神湊西港で火災発生、船小屋2、漁船5、魚網漁具焼失。
1927	昭和2年	：漁港期成会組織。
1932	昭和7年2月18日	：東京湾汽船船員突然結束して下船、不穏な動き出てくるも、下旬には円満解決。  4月20日：東京湾汽船の桐丸は、18日東京を出帆、暴風に遭い三宅へ避難、20日に入港したが積み荷の大部分が潮びたしとなり、会社は流木が船窓を破りそのための被害だと説明するも、荷主は会社の不注意だと賠

償要求の動き出る。因に損害額は煙草 2,000円、穀類 130個 1,500円、雑貨30余個 2,000円。又、大賀郷荷扱いで荷主に無断で入札処理したことも問題となる。

8月1日：神湊に三根村が灯台を設置。現在の神湊灯台の基礎となる。

11月14日：去る13日台湾東南沖合に発生した暴風八丈島直撃、最大風速 39.4m /sec に及び、家屋等建築物・陸上作物・漁船等甚大な被害を受ける。水産関係は八重根では、高波にさらわれ行方不明となった漁船・船揚場で大破したもの16隻、その他の船も修理を要する状態、南向きの中之郷・檜立の漁船にも被害多し。

・底土：船溜・船揚場造成事業実施。	事業費	3,333円
・青ヶ島三宝港：船揚場造成事業実施。	事業費	3,134円

1933 昭和8年3月：かねてより三根山田喜与吉が奔走していた、日本郵船南洋航路定期船が、年3回八丈島・小笠原両島に寄港決定。

5月10日：日本郵船会社南洋航路筑後丸、第一回八丈島寄港、地元有志歓迎会を開催。この便で本島よりの南洋サイパン島開拓移住者40名に達す。

・この頃より政府の地方助成金、島へも多額配布あり、道路・漁港非常に改修進む。

・神湊漁港	：船溜・船揚場造成事業実施。	事業費	6,667円
・八重根漁港	：船溜・船揚場造成事業実施。	事業費	10,000円
・青ヶ島三宝港	：船揚場造成事業実施。	事業費	1,566円

1934 昭和9年1月26日：洞輪沢港船揚場造成事業（事業費 5,000円。）地鎮祭。

4月23日：茂手木八百一の奔走により神湊港、内務省乙種港湾に指定、昭和9年度工事費46万円で避難港として修築施行方決定。5月3日東京府参事会において決定した港湾区域は横石鼻より正北0.2kmの点より引いた線と同点より垂土鼻へ引いた線で囲まれた、海上面積約36,000㎡。本年度工事は内務省3万円、東京府1万5千円、三根村1万5千円負担で、東京府が主体である工事は、シンガマ岬より北方海上124m東方陸上に56mの東防波堤とカタウレ鼻より東方海上48mの西防波堤築堤工事と内与左衛礁の除去作業。東京府事業7ヶ年継続、8月20日起工。

12月：政府は昭和10年度分予算に末吉洞輪沢港砂防工事費1万9千円を査定、通常議会に提案見込。

・藍ヶ江漁港	：船揚場造成事業実施。	事業費	10,716円
--------	-------------	-----	---------

1935 昭和10年1月25日：昨年9月21日及び10月8日の暴風の災害を受けた青ヶ島三宝港船揚場・神湊港の災害復旧補助申請に対して、東京府次の通り補助決定。

神湊港：防波堤－工事総額 1,076円、府補助 538円。

青ヶ島三宝港：船揚場－工事総額 1,684円、府補助 842円。

1月：八丈島随一の景勝地三根底土ヶ浜は従来官有地であったが、東京税務監督局から三根村へ払い下げ決定。

3月：東京湾汽船会社に対し、島民に対する不誠意な経営方針に関する非難の声高まり、東京大村組株式会社船舶課と八丈航路に1,000t級の優秀船を就航させる仮契約が締結され、荷主の意気上がる。

4月：近海郵船小笠原航路は従来八丈島に年間16航路寄港していたが、今年より往航26回、復航16回となる。

5月7日：荷主関係者を一丸とする八丈島汽船組合が5月7日結成され、東京大村組との本契約が締結され、6月から社外船が就航見込となる。

7月15日：八丈汽船運輸組合が建造中の博洋丸、「八」の船旗を高々とかざし八重根湾頭に到着。大脇旅館で祝賀会開催。この壮挙を聞いた青ヶ島・小笠原の島出身者からも組合船の回航を求める声高くなる。

9月29日：八丈汽船運輸組合所属船浦河丸就航に当たり、青ヶ島産業開発のため回航せんと、青ヶ島に支部結成の必要有りとして、八丈支部長渡島、支部を結成、10月3日から毎月3日便を就航させることに決定。

11月12日：八丈島汽船運輸組合荷客営業許可さる。

・藍ヶ江漁港：船揚場造成事業実施。 事業費 684円

1936 昭和11年1月：八丈島汽船運輸組合は株式組織となることに決定。

3月：八丈島汽船運輸組合は昨年7月発足以来9ヶ月、突然就航中止となる。集荷不良と経営悪化。

4月：南洋航路（近海郵船株式会社）は、従来八丈島寄港3回を5回と改善。

10月3日：最大風速40mに近い台風襲来、全島的に被害甚大。水産関係は次の通り。

漁港関係 大賀郷 6,490円、中之郷 8,000円、宇津木 150円。  
漁船関係 大賀郷26隻 6,300円、樫立3隻 250円。

10月16日：青ヶ島で荷役中の舢舨最終の荷客を積んで玉石の上から降ろした途端、積み荷の牛2頭暴れだし舢舨は浸水、客の女3人・男8人海中へ飛び込み、1人は本船の桐丸へ泳ぎ付き、他は陸へ泳ぎ上がる。木炭13俵沈下。舢舨は本船へ曳航、本船のウインチで捲いてアカを出し荷役終了。

10月31日：アオゼ釣りから藍ヶ江港に帰港した大沢丸（船主大沢市助）は船揚場へ引き揚げ中ワイヤが外れ、菊池泰平（21才）・菊池菊市（61才）は払われ、菊池泰平は一時人事不省となり意識を回復、菊池菊市は左足脛骨から3割切断の重傷となる。

・神湊築港第二期計画運動開始。工費 300万円、帝国議会に請願。  
・八重根漁港（江頭）：船揚場造成事業実施。 事業費 1,900円  
・八重根漁港（亡擢）：船揚場造成事業実施。 事業費 5,020円  
・樫立漁港：船揚場造成事業実施。 事業費 1,000円  
・藍ヶ江漁港：防波堤・船揚場造成事業実施。 事業費 1,500円  
・藍ヶ江漁港：船溜造成事業実施。 事業費 8,000円  
・宇津木港：船揚場造成事業実施。 事業費 240円  
・鳥打港：船揚場造成事業実施。 事業費 180円  
・青ヶ島三宝港：船揚場・防波堤造成事業実施。 事業費 7,500円

1938 昭和13年9月22日：末吉洞輪沢港で漁船降し中、沖縄県人某は誤ってロープに足を挟まれ左足に大怪我を負い足先切断となる。

- ・檜立漁港：船揚場造成事業実施。事業費 1,096円
- ・洞輪沢漁港：防波堤造成事業実施。事業費 3,000円

1941 昭和16年：藍ヶ江漁港：船溜造成事業実施。事業費10,400円。17年迄継続。

1942 昭和17年 7月13～14日：藍ヶ江港に1年振りで官有船相模丸来港、倉庫に1年近く滞貨した木炭1千表余を搬送。生産者胸を撫で下ろす。

9月：東京湾汽船会社、50余年の歴史ある社名を東海汽船と改名。一大飛躍を期す。

1943 昭和18年 7月：大賀郷前崎から矢戸方面及び大里西下に掘り込む八重根築港の調査が港湾局の手で開始。

12月：都議会において、漁港の整備に対する予算答申案に次のものが採り上げられたとの入電あり。

洞輪沢漁港：150万円。藍ヶ江漁港：80万円。乙千代ヶ浜30万円。  
七耀：50万円。底土：50万円。青ヶ島：30万円。

1946 昭和21年 6月：東京都港湾拡張事務所の調査隊一行は、5月25日入港の高千穂丸で来島、三根神湊に港湾拡張事務所を置き、東京都の伊豆漁業基地設定に基づき現地実測調査を約2ヶ月の予定で開始。島民からの期待集まる。

11月：八重根へ米軍使用の鉄製浮棧橋が漂着、暴風のため陸上に打ち上げらる。（この棧橋は翌年7月中之郷消防団の運動により、同地区の防火用水槽として活用さる。）

1947 昭和22年 2月21日：解事業者は、従来漁協の重油を使用していたが、漁獲物の供出に対するリンク制が固まる情勢の中で、八丈支庁森田水産課長は各関係者を集め、協議の結果解事業組合連合会を設立し、島の特殊事情を当局に訴え重油の確保を図ることになった。尚、同連合会は今後購買施設や資金の借り入れ、人夫の供給等について経営の合理化にも努力することになる。

2月：八丈島民がひたすら願う、安定的で効率化された航路に対して就航の新造船の名称募集で、大賀郷の寺本歳雄が応募した「黒潮丸」が1等に当選。この船は東京→三宅→八丈を13時間で結ぶもの。

3月2日：東京都港湾拡張事務所の担当者が来島、三根漁業会の裏手の台地にある3漁舎を借り上げ八丈島出張所を開設。初代出張所長に吉田清就任。神湊港の築港工事計画は次の通り。6月連合国軍の許可を得て、改装空母熊野丸(9,000t)・一等大型駆逐艦潮(1,700t)・一等中型駆逐艦矢竹(1,500t)を曳航し、矢竹は現在構築中の海岸堤の沖に沈め、熊野丸は現在の突堤の沖に沈設、潮は現在の突堤内部に密着するよう沈設して、突堤の幅員を広げ、突堤の外は高さをかなり高くする。これが完成すれば、1,000t級以内の貨客船の繫船が可能となり、将来はこの突堤を積荷、荷揚げ、旅客の乗船下船に利用できることになるので、突堤付近の空き地に2棟 200坪の倉庫を建設する。荷揚場はこの他に330m拡張、現在の荷扱い所の背後にも2棟 200坪の倉庫を建設。これらの連絡道として臨港道路を建設する。竣工は昭和24年3月中。（以上机上プラン）。

5月12日：連合軍司令部経済科学局造船課のバレンタイン・ローウエン一行が神湊港の築港状況視察に来島。

- ・檜立漁港：船揚場造成事業実施。事業費 420千円

6月27日：神湊商港の工事を請け負った清水組は、来賓25名、参列者80名で工事安全を祈り地鎮祭を開催、築港工事は本格的となる。

7月7日：東海汽船が11,000千円を投じ、播磨造船所で建造した八丈島・三宅島航路用の「黒潮丸」が午前8時10分前八重根港に入港。八丈・東京間195哩を予定通り13時間以内で、悠々と計画を達成したもの。新造船就航披露の後東海汽船社長山本盤彦は、島内各界の有志80名を招待、挨拶の中で「東海汽船は戦争により八丈航路で4隻を、全部で19隻を失い大災害を受けているが、現在なお38隻を保有し、総司令部から13隻の新造船建造命令を受け、その一環として黒潮丸・曙丸の建造となった」と述べ、次いで懇談会を開催、意見の交換を行う。

8月21日：八丈小島航路は八丈支庁の予算と大賀郷荷扱いの大きな負担によって定期便として運用されてきたが、不定期便とされ、住民からの不満高まる。このため、今後は出帆前に各地区郵便局に掲示することとなる。なお、解賃についても、燃料油が1t当たり1,700円（運賃庶掛かりを含む）で採算割れとの要望の中、当分片道10円に落ち着く。なお、慣習による顔パスは禁止さる。

11月15日：三根村の解が老朽化し、必需物資の海上輸送の確実性を期して新造船竣工。

1948 昭和23年2月：大賀郷前崎港に築港予算30万円が付き第一次計画として用地買収が始まる。

3月：神湊港の築港が本格化する中、船隻も増加を辿る三根漁業会では、築港完成迄必要な船揚場を1ヶ所新設・拡張整備1ヶ所を独力で実施、この経費33万円。

7月15日：神湊漁港に駆逐艦「矢竹（1,540t）」を沈設。防波堤の基礎となる。

9月16日：アイオン台風襲来。漁港の被害次の通り。

大賀郷：八重根30万円。ナズマド45万円。	計	75万円
檜立：乙千代ヶ浜30万円。	計	30万円
中之郷：藍ヶ江180万円。	計	180万円
末吉：洞輪沢85万円。北浦65万円。	計	150万円
青ヶ島：60万円。	計	60万円
小島：鳥打35万円。宇津木20万円。	計	55万円

・藍ヶ江漁港：船揚場造成事業実施。	事業費	320千円
・洞輪沢漁港：船揚場造成事業実施。	事業費	450千円

1949 昭和24年1月11日：神湊漁港は第一期工事・第二期工事と九良木組が落札、工事が進んでいたものの、東京都の財政の関係で第三期工事の施行が心配されていたが、新清土木の落札により続行が決定。

2月28日：大賀郷・三根の解事業組合合併問題は発起人代表持丸達吉・菊池喜久一・山田耕三等が支庁会議室に会合、この実現を図るよう働き掛けていくことになる。理由は次の通り。

- ①交互着港制度のため、高波の中で作業をする場合が多くなる。
- ②従って、貨物の破損・浸水等の被害が発生し易し。
- ③乗客等の危険が甚だし。
- ④貨物の損害が弁償されない場合が多し。
- ⑤高波の中で荷役されるため、時間を要し出帆時間が守られない。

- ⑥ 解の耐用年数が短縮されることになり、損失が多い。
- ⑦ 無用の出費が多くなる。
- ⑧ 組合員に過労を生じ非能率となる。
- ⑨ 乗客は解作業の非能率から一遍で嫌になる。
- ⑩ 荷役の時間を短縮することが出来、増便が期待出来る。

この問題は、大賀郷・三根両村の財政へ解賃の約3割が収入され、その額は夫々40～50万円となり、ややもすると天候や利用者の利益を無視する結果となると、有識者の声は高まる。

3月3日：大賀郷村荷扱所の解の新造船竣工式挙行。

7月10日：解問題について、黒潮丸船長の発起のもと両扱主任・食糧公団出張所長菊池喜久一・海運局出張所長菊池正治の6名が出席、船長の

- ① 無条件の場合船長の見込で風下につける
- ② 条件付きの場合は風力、風向に限界を設ける。という提案に対し、

・無線が自由に使用出来ない状況下、着船港が早期に判明出来ない場合、荷扱も・荷主・出迎人も全て困る。として現行の方法（到着予定日の午前3時前後両扱で協議決定、結果を気象通信で船長に通知する）を両扱の良識的運営で施行することに決定。

7月11日：港湾出張所、神湊港軍艦沈没一周年記念として、岸壁陸上工事完成につき視察並びに報告会を行う。岸壁工事は都が運輸省の補助を受け、昭和22年6月着工、公共事業として2ヶ年の歳月と、3,800万円の費用を投入完成したもの。

7月29日：島内の経済逼迫、島民生活の不安から、八丈島経済対策委員会は、海上運賃の高騰が生産・消費のコスト高の要因であるとして、来島した東海汽船の葉山専務・森下常務を囲み、支庁会議室で各村長・各村農協・木炭生産者・商組関係・紳商・家畜商・その他荷主の代表者が、運賃の予備交渉を行う。

・東海汽船の定期便は3日・23日が三宅寄港となっているが、その復便は午前10時出帆となっているのに、荷主の持込みが遅れ大きな支障となる。

9月13日：八丈島は我が国に於ける漁業の前進基地であるにも拘らず、灯台が一つも無く、東海汽船を初め各県漁業界から要望が強く、末吉・大賀郷の両村長、末吉・大賀郷・三根の各漁業会長が急遽上京、横浜海上保安庁の灯台建設会議に向け、猛運動を開始。

10月1日：灯台並びに無線方位信号所建設機運の高まる中で、建設促進に関する期成促進協議会が支庁会議室で開催され、灯台建設促進期成会を結成、会長に冲山徳一末吉村長を選出、各県漁業界と協力、関係機関に向けて運動を開始することになる。

10月1日：八丈島経済対策委員会、経済再生のため海上運賃の値下げを期し、木炭関係者・家畜商・商組各代表を運賃折衝委員に選任、8月23日便で上京、東海汽船・栗林商船・東海運の三社と交渉、東海汽船は40円を譲らず、木炭は34円の栗林商船と契約、迅速性を必要とする野菜類は東海汽船（40円）と契約することになる。尚、解賃は各村解組合とも7円となる。このため社外船として、栗林商船の第五祐進丸(250t)、第一便として入港、八重根・神湊の滞貨の木炭を8,000俵満船し出港。

・洞輪沢漁港：船揚場造成事業実施。 事業費 1,150千円

1950 昭和25年 2月15日：第二の社外船として期待された栗林海運は、昨年中は比較的木炭の輸送は順調であったが、今年に入り木炭の滞貨は増加、大賀郷農協遂に木炭 200俵を黒潮丸に積載出荷。現在の滞貨状況は次の通り。

大賀郷	6,000 俵	中之郷	3,000 俵
三根	4,000 俵	檜立	2,000 俵
末吉	4,000 俵	計	19,000 俵

4月19日：総司令部公安課ジェームス、横浜海上保安本部長桑原忠夫を滞同来島、燈台設置予定地の石積ヶ鼻等を視察、今年は大島・三宅・八丈島の石積ヶ鼻に灯台建設がほぼ決定。八丈島の場合 4,000万円の予算で建設する予定。光は20マイル・無線は800マイル到達する規格で、着工時期は見返り資金の関係で明確に出来ないと語る。中心となって奔走した末吉村長沖山徳一は、過労のため病床中であつたが、島内から賞賛の声挙がる。

5月2日：漁港法制定、第1～4種の漁港の種類が規定され、それに応じた整備促進が行なわれる事となる。

・八重根漁港：船揚場造成事業実施。	事業費	400千円
・檜立漁港：船揚場造成事業実施。	事業費	1,200千円
・洞輪沢漁港：護岸・荷揚場造成事業実施。	事業費	1,200千円
・宇津木漁港：船揚場造成事業実施。	事業費	500千円
・鳥打漁港：船揚場造成事業実施。	事業費	500千円

10月10日：去る8月末から定期就航を決めた栗林海運は、木炭の最盛期を迎え月6航海を計画、これに対し東海汽船も 250t 級の臨時船を黒潮丸を挟んで就航させるなど、社外船問題賑やかになる。

10月21日：神湊高台に第6等燈台と導灯が日本機械貿易株式会社の工事により完成、供用開始。この燈台は予算約 300万円、光の到達距離は14哩で、5秒一瞬（3秒明、2秒暗）、自動点滅、停電の場合は蓄電池に自動切換、電球故障の場合は予備球に自動切換という、近代科学の粋を集めた電化燈台。

11月10日：石積燈台、3等燈台として建設のため地鎮祭及び起工式を盛大に挙る。総工費 3,600万円。

1951 昭和26年 1月8日：奥山勝造13時30分頃神湊防波堤付近で、破甲榴弾の解体作業中誤って爆死。

6月10日：八丈島灯台業務開始。（光到達距離45km）

6月20日：無線方位信号所業務開始。

7月10日：第4種漁港に神湊漁港（商港指定昭9）・八重根漁港（商港指定昭15）が指定され、神湊漁港は東京都の管理となる。

26～29年：第1次漁港整備計画：神湊漁港修築	事業費	88,010千円
・ナズマド漁港：船揚場造成事業実施。	事業費	800千円

1952 昭和27年 6月23日：第一種漁港指定、八丈島は次の通り。

檜立港・中之郷港・洞輪沢港・ナズマド港。

6月23日：中之郷漁港（一種）・洞輪沢漁港（一種）、東京都の管理と

なる。

7月10日：八重根漁港（四種）、東京都の管理となる。

7月29日：第一種漁港指定、八丈島は次の通り。  
宇津木港・鳥打港。

8月7日：ジェーン台風の余波で洞輪沢港堤防損壊。

・底土港	：船溜・船揚場造成事業実施。	事業費	730千円
・神湊漁港	：海岸堤根固工事施行。	事業費	675千円
・神湊漁港	：掘削・浚渫工事施行。	事業費	25,000千円
・樫立漁港	：船揚場石垣・盛土工事実施。	事業費	1,368千円
・藍ヶ江漁港	：防波堤工事施行。	事業費	2,883千円

1953 昭和28年7月22日：（離島振興法制定）（漁港も適用となる。）

10月11日：洞輪沢で海中爆破に使用する火薬を梱包中、午後4時頃火薬爆発、作業従事中の末吉漁協理事沖山環（45才）死亡、沖山十代喜（45才）・沖山秀利（30才）重傷を負う。

・洞輪沢漁港	：船揚場護岸・張石工事施行。	事業費	644千円
・神湊漁港	：海岸堤根固工事施行。	事業費	4,641千円
・神湊漁港	：泊地掘削・浚渫工事施行。	事業費	25,580千円
・藍ヶ江漁港	：防波堤工事施行。	事業費	1,278千円

1954 昭和29年10月30日：第一種漁港指定、出鼻港・底土港。

・神湊漁港	：泊地掘削・泊地浚渫工事施行。	事業費	19,350千円
・洞輪沢漁港	：防波堤工事施行。	事業費	532千円

1955 昭和30年：（30～37年 第2次漁港整備計画）

・洞輪沢漁港	：修築－	22,498千円。	
・中之郷漁港	：局改－	3,592千円。	
・神湊漁港	：修築－	129,691千円。	
・八重根漁港	：修築－	170,600千円。	
・神湊漁港	：泊地掘削・浚渫工事施行。	事業費	22,690千円
・神湊漁港	：船揚場舗装工事施行。	事業費	533,400千円
・底土港	：海岸堤工事施行。	事業費	210千円

1957 昭和32年1月29日：八重根修築工事起工式。

9月17日：夜半から風強くなり、18日明け方から猛威を奮い始めた21号台風、最大風速43.2m/sec（南南西）平均33m/sec 雨量41mm、波高約10mとなり、被害約5千万円となる。水産関係は漁港船揚場に約148万円の被害。

・宇津木漁港	：船揚場災害復旧事業施行。	事業費	527千円
・中之郷漁港	：波除堤局部改良事業施行。	事業費	1,176千円
・樫立漁港	：船揚場災害復旧事業施行。	事業費	477千円
・洞輪沢漁港	：船揚場災害復旧事業施行。	事業費	1,648千円

1958 昭和33年9月29日：中之郷漁港波除堤工事において、山下清隆（18才）事故のため死亡。

- ・樫立漁港：船揚場災害復旧事業施行。 事業費 477千円
- ・洞輪沢漁港：船揚場災害復旧事業施行。 事業費 703千円

1959 昭和34年 3月18日：社外船菊丸（29t、大洋漁業KK代表者小宮山兼太）は、トビウオ運搬のため、神湊漁港に係留中、17日から吹き出した低気圧（平均速22.9m）のため、午前3時頃ロープが切れ、岸壁に衝突大破沈没。

7月26日：懸案の大越灯台建設が決定、海上保安庁、予定地の測量を開始。

11月：神湊漁港における、テトラポット海中設置の新技术の、効果が高いことから、八重根漁港（31年度～37年度、総事業費3億円）についても、大型クレーンによる、テトラポット手法が採用されることに決定。

12月10日：小宮山町長（航路標識整備促進関東地区副会長）、永郷大越灯台建設促進の陳情運動を開始。

- ・洞輪沢漁港：船揚場災害復旧事業施行。 事業費 1,029千円

1960 昭和35年 3月10日：航路標識整備促進会から、永郷大越燈台の建設が35年度事業として決定した旨連絡あり。

4月10日：南海タイムスに、M・W生の「海難救助の対策急げ」の正論的投稿載る。

5月24日：チリ地震の余波による津波、洞輪沢漁港 3.5m、神湊漁港 2mの津波観測。被害なし。

5月27日：八丈島環状道路開通・神湊漁港竣工祝賀会、都の関係者来島のもとに開催。

①八丈島環状道路

都道 335号線（通称登竜道路）、昭和23年大和建設、鉄道工業が着工、工期13年間、長さ10,800m、巾4～5.5m、総工費1億24万円。

②神湊漁港

昭和21年清水建設着工、昭和26年7月第四種漁港に指定、工期15年間、防波堤 290m、船揚場 3,140㎡（収容漁船約40隻）、泊地 9,100㎡（収容漁船約50隻）、波除堤・岸壁・物置場・物揚場・道路・護岸工事等、総工費2億74万円。

8月28日：付近地主と町側ともつれていた大越灯台、今崎越に変更かと思われたが、地主との話し合いが妥結、大越に最終決定、9月着工。

10月19～20日：24号台風（瞬間風速36.1m、平均風速 28.1m）来襲。去る5月竣工したばかりの神湊漁港の入口突堤 30m×7m決壊。船揚場のカヌー6隻全壊。

10月27日：25号台風（最大風速 28.6m）来襲、波高 10m余、藍ヶ江漁港ではカヌー2隻全壊。洞輪沢漁港ではシラ木80本流失、護岸崩壊 20m×3m、船揚場壁体洗堀20m、漁師小屋流失。

11月5日：三根漁協、神湊築港運動に一生を捧げた故茂手木八百一の胸像及び顕彰碑（建立日付は昭和35年8月1日）建立除幕式を、各界の名士の参加を得、神湊で開催。

- ・八重根漁港：防波堤・泊地浚渫修築事業施行。 事業費 37,700千円

・洞輪沢漁港：防波堤修築事業施行。	事業費	3,000千円
・中之郷漁港：石積護岸災害復旧事業施行。	事業費	225千円
・洞輪沢漁港：物揚場災害復旧事業施行。	事業費	617千円
・宇津木漁港：船揚場災害復旧事業施行。	事業費	830千円
・鳥打漁港：波徐堤災害復旧事業施行。	事業費	937千円

1961 昭和36年 4月15日：大越無人灯台、竣工点灯。所管は海上保安庁八丈島航路標識事務所。性能は、高さ14.8m 北緯33° 9' 2"、東経 139° 45' 2" 電動回転機で無等群閃白光毎13秒をおき7秒間に2閃光、光度は 百万カンでレンズは90cmビーコン、千w電球で東電が電力供給、光達距離25海里（末吉燈台と同じ）。

6月28日：宇津木連絡船海宝丸(3t)八重根で竣工。（建造費 120万円。）

9月：米軍沿岸警備隊と調達庁から係官来島、ロラン施設（買収用地18万4千坪、八丈富士と神止山の中間、鉄塔の高さ 250m）を設置のための現地視察。

10月2日：都港湾局八丈出張所において、大賀郷漁協幹部・町議・元老・支庁長・町長等が集合、八重根漁港建設につき協議、同所長に意見を具申。その主たる内容は、既に完成した神湊漁港が、その狭隘性を指摘されているのに、八重根漁港は当初計画より縮小される状況にあり、神湊漁港よりも小型であることへの不満と、理想港建設への要望。

10月10日：9日から吹き始めた24号台風、午前零時頃から本格的となり、瞬間最大風速47m、平均32.9m、雨量は 237.6ミリとなり、住宅・作物等に大きな被害を与う。内水産関係の被害は青ヶ島で沈没漁船1隻、その他漁港の被害5ヶ所で 1,932千円。

10月31日：町議会臨時会開催、八重根漁港修築工事、規模拡大方陳情決定。

11月17日：町議会臨時会開催、神湊漁港第二期促進請願に関する、各漁協組合長連署の請願全員一致で採択、実現を計って運動することを決定

11月25日：東京調達庁から町長に対し、ロラン施設の設置につき、協力方の要請あり、町は町議会全員協議会を招集、調達庁の詳細説明を求める。そのため同27日調達庁鈴木局長等来島説明に当たる。尚、同28日三根農協会議室で関係地主に対し説明。関係地主 138名のうち61名出席、関係者は榊の生産者が多く、死活問題だとして約40名退席。

11月27日：ロランC（米軍）基地を神止山麓に建設計画、島民の反対に遭い、八丈町議会でもロラン建設反対を決議。

12月4日：町議会は緊急臨時会を開催、米軍ロラン（航海用電波灯台）設置問題につき協議、この件は地主だけの問題ではなく全島民の問題だとして、態度保留。

12月7日：ロラン設置に反対する地主約20名、「軍事施設設置反対同盟」を結成。

12月7日：地区労、幹部会を開催、①軍事施設設置絶対反対 ②反対同盟を協力をバックアップすることを決議。

12月25日：八丈町議会緊急臨時会開催。米軍の航海用電波燈台建設関連

の事項を審議。その主な内容は次の通り。

- ① ロラン設置反対同盟・八丈島地区労から出された請願書採択
- ② ロラン設置協力陳情書は不採択
- ③ 電波燈台建設の反対決議

八丈町の招請により、調達庁担当官来場、詳細説明に当たる。

12月27日：八丈町議会議長・八丈町長連署で調達庁長官・東京調達局長宛「八丈島航海用電波燈台建設反対について」文書発送。

- ・八重根漁港：泊地掘削・防潮堤修築事業施行。事業費 36,000千円
- ・洞輪沢漁港：防波堤修築事業施行。事業費 4,500千円
- ・洞輪沢漁港：物揚場・護岸災害復旧事業施行。事業費 856千円
- ・神湊漁港：物揚場・根固災害復旧事業施行。事業費 3,238千円

1962 昭和37年 1月30日：町議会、緊急臨時会を開催、ロラン設置反対特別委員会（10名）を設置、反対に向けて全力投球の意向。

6月8日：八丈島における接岸港建設促進の目的で、八丈支庁会議室に、島内各界同憂の志が集まり協議の結果、全島打って一丸となった体制づくりが先決であるとして、6月18日「八丈島接岸港促進連盟」を結成することに決定。

6月14日：八丈町議会、ロラン反対特別委員会開催、在日米軍司令部第四部長スタングラ―大佐宛、町長・議長・特別委員長連名の反対申し入れ書を提出するとともに、全町一丸となって阻止するため広報活動を強化することを決定。

6月18日：八丈支庁会議室において、「八丈島接岸港促進連盟」結成大会開催。連盟を結成するとともに、規約を審議決定、役員の実施、会長磯崎八助・副会長5名、常任委員12名、事務局3名、監事2名、委員78名決定。宣言文を決定。

6月25日：八丈町議会臨時会において、促進連盟から提出の「接岸港促進に関する請願書」、全員一致で採択。

6月27日：接岸港促進陳情第一陣上京（八丈町・議会・支庁・促進連盟の関係者）。

7月13日：ロランC（米軍）基地建設、米側計画撤回を発表。昨年11月からの8ヶ月の大騒動、一件落着。

8月2日：接岸港建設促進運動に應えるための、底土の陸上地形測量・海底の深浅測量を富士測量KK落札、6月14日から測量に着手していたものが完了。

8月22日：八丈町議会臨時会開催、八丈町漁港条例（対象第一種漁港：底土・出鼻・ナヅマド・檜立・中之郷・洞輪沢・宇津木・鳥打）を採決、制定。

12月18日：八丈町議会定例会において、接岸港の設置、漁港整備、空港拡張等促進のため、港湾促進特別委員会を設置。

- ・八重根漁港：泊地掘削・泊地浚渫修築事業施行。事業費 45,000千円
- ・洞輪沢漁港：防波堤修築工事施行。事業費 15,000千円
- ・中之郷漁港：物揚場岸壁局部改良工事施行。事業費 3,600千円
- ・神湊漁港：災害復旧工事施行。事業費 2,223千円

・宇津木漁港：船揚場災害復旧工事施行。 事業費 388千円

1963 昭和38年 1月8日：八丈町議会、港湾促進特別委員会を開催、正（菊池常広）・副（合月捨松）委員長を決め、陳情日程等を決定。

1月10日：八丈島接岸港促進連盟、檜立磯崎八助会長宅に常任委員会を招集、八丈町の港湾促進特別委員会等公的機関の活動を、全面的にバックアップして行く事を決定。尚、事務局長の菊池正則、町助役就任のため、後任に小宮山善之助を選任。

6月4～5日：第七回関東・東海地区漁港大会、大島小涌園で開催、八丈島から12名参加。

7月25日：八丈町議会臨時会開催、中之郷漁港改修工事決定、従来の船揚場を廃止、玉石浜の方に堤防と船揚場を修築する事に決定。底土漁港は、接岸港の為廃止の方向固まる。（10月16日告示廃止）

12月：水産庁、ケーブル式波高計を、神湊防波堤約 100m 沖合いに設置することに決定。目的は港湾・漁港の工事設計等の参考とするため。日常管理は、八丈分場に管理委託。

・昭和38～43年：第3次漁港整備計画  
洞輪沢漁港：修築―― 110,096千円  
中之郷漁港：改修―― 55,607千円  
神湊漁港：局改―― 13,414千円  
八重根漁港：修築―― 439,369千円

・八重根漁港：防波堤・護岸・岸壁・泊地掘削修築事業施行。 事業費 485,000千円  
・洞輪沢漁港：東防波堤修築事業施行。 事業費 300,000千円  
・中之郷漁港：防波堤B・道路改修工事施行。 事業費 80,000千円

1964 昭和39年 1月9日：島民待望の接岸港、昨年三根底土に先行方決定、12月14日都の指名競争入札で宝土木が落札、起工式が関係者及び一般町民有志等約160人参列のもと実施。総工費 5,540万円、1,000t級の船舶が接岸出来るものとして、長さ54m、幅 12mを修築、39年度中に竣工予定。

4月12日：青ヶ島周辺海域は、トビウオ・カツオ・マグロの一大漁場であり、そのため漁船の座礁事故多し。同島では、漁船の安全航海のため、飛漁期の2月から5月まで、八丈島各漁協の協力を得、高所にアセチレンガス灯を点灯してきたが、経費も年々増加、運営難しくなり、灯台建設を計画、青ヶ島村・八丈町・八丈島の各漁協が連名で関係当局に灯台建設を陳情。

6月7日：青ヶ島灯台の建設促進につき、漁港大会の後、漁協幹部・漁連・支庁長・町長が、太平洋岸の各漁協組合長連署の陳情書を、下田海上保安部・第三海区海上保安本部・海上保安庁に提出方決定。

・八重根漁港：防波堤B・岸壁・防波堤・泊地掘削修築事業施行。 事業費 68,600千円  
・洞輪沢漁港：東防波堤修築工事施行。 事業費 19,500千円  
・中之郷漁港：B防波堤改修工事施行。 事業費 5,400千円

1965 昭和40年 1月14日：八丈島接岸港促進連盟常任委員会開催、底土接岸港、今年度中に一応完成するも、次に備えて存続することを決定。

8月15日：底土接岸港（神湊商港底土岸壁）全工事完了。長さ 54m、幅 8～15 m、水深最干潮時71m+5 m、2,000t級の船舶接岸可能。

8月24日正午：関係者並びに多数の島民が見守る中、東海汽船黒潮丸（500t、船長臼井正蔵）、“神湊商港底土岸壁”に試験接岸。8月26日には東海汽船椿丸（970t、船長長谷川幸雄）、乗客 170名を乗せて初接岸。

9月17日：台風24号の影響で青ヶ島三宝港で、カヌー7隻が流出。

10月2～5日：台風28号（風速平均23m、瞬間最大33.6m）の影響で、海上は大時化。波高計3日10.37m、4日10.91mを記録。底土岸壁中央部、長さ20m、幅5～6mが崩壊、年内の使用不可能となる。三根漁協漁船破損流出16隻（262万5千円）、港湾施設3ヶ所（10,200万円）の被害。

11月5日：八戸・千鳥地区に簡易水道通水、八重根漁港の利水良好となる。

1966 昭和41年9月8日：底土接岸港の災害復旧事業完了。同19日には運輸省・都財務局の検査終了。

9月24日：台風24号襲来、漁船や農作物被害甚大。水産関係・カヌー流出2隻、大破1隻、漁船大破2隻、漁港一部破損3ヶ所、漁港施設シラ流出約50本。

12月4日：島民の宿願であった神湊商港底土岸壁の竣工式典、東京都主催で岸壁において開催、祝賀会、八丈町主催により大賀郷公会堂で開催。（注）昭和38年12月離島振興計画の一環として、総工費1億1千2百56万9千円で建設、昭和41年10月完成。12月1日供用開始。岸壁の水深－5m、延長54m、幅員8～11m、道路延長60m、幅員6m、接岸対象船舶2千トン級の貨客船。

1967 昭和42年10月27日：台風34号に依り藍ヶ江港防波堤嵩上げ部分、25mにわたり破損。

・洞輪沢漁港：航路浚渫・船揚場災害復旧工事施行。	事業費	515千円
・ナツマド漁港：船揚場・防潮堤災害復旧工事施行。	事業費	275千円
・宇津木漁港：航路浚渫災害復旧工事施行。	事業費	316千円

1968 昭和43年：八重根漁港：護岸災害復旧工事施行。	事業費	1,095千円
・八重根漁港：防波堤災害復旧工事施行。	事業費	4,825千円
・八重根漁港：修築工事施行。	事業費	84,100千円
・洞輪沢漁港：修築工事施行。	事業費	15,300千円
・中之郷漁港：改修事業施行。	事業費	7,800千円
・中之郷漁港：局部改良工事施行。	事業費	11,000千円

1969 昭和44年：昭和44～47年：第4次漁港整備計画		
洞輪沢漁港：修築－	112,178千円	
中之郷漁港：改修－	47,790千円	
神湊漁港：修築－	283,322千円	
八重根漁港：修築－	380,928千円	
・八重根漁港：防波堤A・護岸B・船揚場修築事業施行。	事業費	29,273千円
・神湊漁港：泊地浚渫修築事業施行。	事業費	26,838千円
・中之郷漁港：改修事業施行。	事業費	8,200千円
・洞輪沢漁港：修築事業施行。	事業費	20,000千円

1970 昭和45年 6月4～5日：第14回関東・東海地区漁港大会、都立八丈高校体育館を会場として開催。この会は各界来賓と、一都三県から約600人の関係者が列席、盛大に挙行。

・八重根漁港：修築事業施行。	事業費	68,491千円
・神湊漁港：修築事業施行。	事業費	55,846千円
・洞輪沢漁港：修築事業施行。	事業費	20,999千円
・中之郷漁港：改修事業施行。	事業費	9,000千円

1971 昭和46年 7月16日：離島における漁港の管理につき、ここ数年来、町村から都が管理して欲しいと請願陳情あり、都は水産行政を強力に推進するため、七島の第一種漁港（岡田・若郷・野伏・小浜・湯の浜・洞輪沢・中之郷）を、8月1日を期し、東京都が漁港管理者になる事になる。この具体的な理由は次の通り。

- ①七島と三多摩の開発は、都の重要施策の一つである。
- ②七島海域は寒暖両流で魚種が多く、日本三大漁場の一つである。
- ③この漁場へは北は青森、南は鹿児島等全国から入漁している。
- ④七島は立地条件、自然条件が厳しく漁民の経営規模は低生産である。
- ⑤今後の漁業は新漁場の開発、漁船の大型化、装備の近代化等による漁業圏の拡大、広域化を図るため、蓄養・増殖事業等漁業構造改善事業を積極的に推進する必要がある。
- ⑥このため施設の早急な整備拡充は、多額の資金と高度な技術を要するので、都が管理者となり漁港行政を推進すべきである。

8月12日：八丈島接岸港促進連盟、7月中旬大型船の接岸出来る港をと、政府や東京都へ陳情を実施、その報告会を来賓多数を招き、檣立いそぎきえんで開催。大島・三宅には100mの接岸港が既に2港つつあるのに、八丈島はこれらに遅れる事33年目で、やっと54mの接岸港が一本しかない。底土と八重根の接岸港の建設を積極的に促進せねばとの意見活発。

10月13日：八丈町議会全員協議会開催、第五次計画に入っている八重根漁港の船揚場につき、大賀郷漁協から単独で東京都港湾局へ、陳情書を提出したことについて、議会に相談もなくと大いに揉める。

・八重根漁港：防波堤修築事業施行。	事業費	100.262千円
・神湊漁港：泊地掘削修築事業施行。	事業費	70.946千円
・洞輪沢漁港：泊地浚渫修築事業施行。	事業費	33.961千円
・中之郷漁港：防波堤改修事業施行。	事業費	9.950千円

1972 昭和47年 8月1～2日：八丈町議会港湾促進特別委員会、国や都に対し陳情活動を実施。内、水産関係は1漁港整備促進（各漁港対象）2水産冷蔵・貯氷施設の財政援助（八丈島漁協対象）。

・八重根漁港：防波堤・船揚場修築事業施行。	事業費	266.000千円
・神湊漁港：泊地・岸壁・道路掘削・土地買収修築事業施行。	事業費	904.200千円
・洞輪沢漁港：泊地浚渫・物揚場・道路修築事業施行。	事業費	234.100千円
・中之郷漁港：船揚場改修事業施行。	事業費	84.300千円

8月24日：青ヶ島村村営船「あおがしま丸」、連絡船として就航。総噸数48.36t、主機関380馬力X2、最高速力17.25ノット、長さ21.72m、幅5.0m、深さ2.26mの鋼船、乗船定員12名。八丈島と青ヶ島とを片道2時間30分で1週間に1回結ぶもの。この建造費3,600万円。この年には、

七島開発株式会社の弥栄丸が月に3回青ヶ島航路につき、また、24時間送電となる等、青ヶ島にとって離島の悲哀から開放の明るい未来を期待される記念すべき年となる。

1973 昭和48年 7月23日：八重根漁港工事によるダイナマイトの付近住民の家屋に対する被害が顕在化、町役場会議室で港湾局関係者と住民23名の話し合い実施。結局、被害者連盟を早急に結成、都に対して強力に陳情活動を行なうことを決定。

・昭和48年～51年：第5次漁港整備計画			
洞輪沢漁港：改修	—	194,067千円	
中之郷漁港：改修	—	152,969千円	
神湊漁港：修築	—	814,532千円	
八重根漁港：修築	—	355,039千円	
・神湊漁港	：修築事業施行。		事業費 93,950千円
・八重根漁港	：修築事業施行。		事業費 87,109千円
・洞輪沢漁港	：改修事業施行。		事業費 35,482千円
・中之郷漁港	：改修事業施行。		事業費 28,317千円

1974 昭和49年 1月21日：夕方発達した低気圧が八丈島を通過、雷を伴う暴風となる。停電・堀の倒壊等1月には珍しい気象。八重根漁港内に停泊して居た三根漁協信栄丸（船主浅沼信広、大型カヌー、1.9t、25馬力）、夜明頃モヤイ綱が切れ岸壁に激突カヌーの腕が折れ転覆。

3月30日：神湊港突堤工事現場で、作業員永瀬政弘（30才）溶接作業中、コンクリートに埋め込まれた砲弾とは気が付かず溶接、砲弾が爆発爆死。

・八重根漁港：泊地浚渫・泊地掘削・航路浚渫修築事業施行。			
			事業費 550,000千円
・神湊漁港	：泊地等浚渫・掘削修築事業施行。		事業費 1,220,000千円
・中之郷漁港	：物揚場・防波堤改修事業施行。		事業費 213,000千円

1975 昭和50年11月26日：八重根港防波堤灯台点灯、光達12.5カイリ。

・神湊漁港	：泊地浚渫・掘削修築事業施行。		事業費 230,000千円
・八重根漁港	：泊地・航路浚渫修築事業施行。		事業費 90,000千円
・洞輪沢漁港	：泊地浚渫・道路改修事業施行。		事業費 40,000千円
・中之郷漁港	：物揚場・防波堤改修事業施行。		事業費 36,500千円

1976 昭和51年10月20日：第28回全国漁港大会、長崎県で開催、峰元清次町長・笹本直衛議長・佐々木樺喜八丈島漁協組合長・沖山明治郎理事・三根漁協小栗清吉専務理事が参加。

・神湊漁港	：泊地等浚渫・掘削修築事業施行。		事業費 230,000千円
・八重根漁港	：泊地掘削修築事業施行。		事業費 92,000千円
・洞輪沢漁港	：泊地浚渫改修事業施行。		事業費 80,000千円
・中之郷漁港	：防波堤改修事業施行。		事業費 51,000千円

1977 昭和52年 6月24日：八重根港沖合に、底土港岸壁延長工事のケーソン（15m×16m×11.5mのコンクリート函、重さ1,300t）到着。25日底土港岸壁に無事沈設。これは東京港から延々黒潮を300km、曳航に依って到来したものの。この成功により今後の工事の促進が期待さる。

11月：不況感が高まる中、三根漁協では、今年に入って新船を建造したり、他県から購入したりしたのは18隻、これで常時出漁しているのは70

隻。新造船は大型船が多く、10t 以上が7隻。これは神湊漁港の拡張整備が進み、停泊も楽になったため。今年独立自立者は12人、予定者は6人。

- ・昭和52～56年：第6次漁港整備計画
  - 洞輪沢漁港：改修— 553,409千円
  - 中之郷漁港：改修— 484,761千円
  - 神湊漁港：修築— 2,055,912千円
  - 八重根漁港：改修— 415,169千円
- ・神湊漁港：道路・岸壁・護岸修築事業施行。 事業費 331,000千円
- ・八重根漁港：泊地浚渫・岸壁改修事業施行。 事業費 86,000千円
- ・洞輪沢漁港：道路・防波堤消波改修工事施行。 事業費 101,000千円
- ・中之郷漁港：防波堤改修工事施行。 事業費 59,000千円

1978 昭和53年 5月：八重根のウマノクラ岩礁撤去作業開始。岩石量は3,300m<sup>3</sup>の見積り。完了は7月一杯の予定のところ、予想以上に困難、クラブ式浚渫船では水深2mまでしか出来ず、7月5日から発破作業に切り変える。すれちあ丸が接岸するには水深6.5m必要なのに、水深5mの所が950m<sup>3</sup>もあり供用開始が遅れる見込。

7月20日：都港湾局の計画課長一行、三根漁協の会議室で、三根漁協役員・底土漁民の代表等20人を集め、底土海岸における海岸環境整備計画について説明会を開催、潜堤は砂浜より沖合150mのものを、50mに変更、地元の同意を取り付け実施方決定。規模としては総事業費9,000万円、53年度から55年度迄の3ヶ年で完成計画。

12月28日：洞輪沢漁港内に、末吉自治会の手によって洞輪沢温泉が一般に無料開放。

- ・神湊漁港：道路・防波堤・防潮堤・船揚場修築事業施行。 事業費 331,000千円。
- ・八重根漁港：泊地浚渫・岸壁・護岸・道路改修事業施行。 事業費 90,000千円
- ・洞輪沢漁港：防波堤消波・護岸改修工事施行。 事業費 108,000千円
- ・中之郷漁港：防波堤改修事業施行。 事業費 78,000千円

1979 昭和54年 1月30日：午前4時頃、洞輪沢漁港内に停泊中の貴利丸（船主中之郷沖山利男 4.64t）、南からの強風による時化のため舳が切れ沈没。

10月20日：台風20号来襲、被害甚大。中之郷漁港の防潮堤崩壊、全島の塩害甚大。青ヶ島では、漁船全壊1、一部破損3。

- ・神湊漁港：道路・防波堤修築工事施行。 事業費 437,000千円
- ・八重根漁港：泊地浚渫改修事業施行。 事業費 94,000千円
- ・洞輪沢漁港：防波堤改修事業施行。 事業費 108,000千円
- ・中之郷漁港：防波堤高上・道路改修工事施行。 事業費 102,000千円

1980 昭和55年 10月31日：都港湾局、八丈町に対し、八重根漁港の将来計画につき掘り込み泊地と、外郭施設による沖側泊地造成の二案を示し、八丈町議会港湾促進特別委員会、泊地掘り込み・岸壁延長の第三案を定め、議会の了承を取り付け、漁協及び地元関係者の了承を取り、促進方を都に陳情する事に決定。

11月28日：底土接岸港第6次整備計画に伴う漁業権の放棄につき、三根漁協、臨時総会を開催、同意する事を議決。

- ・神湊漁港 : 防波堤修築事業施行。 事業費 478,000千円
- ・八重根漁港 : 泊地浚渫・護岸改修工事施行。 事業費 94,000千円
- ・洞輪沢漁港 : 防波堤・船揚場改修工事施行。 事業費 108,000千円
- ・中之郷漁港 : 防波堤改修工事施行。 事業費 150,000千円

- 1981 昭和56年 : 神湊漁港 : 防波堤修築工事施行。 事業費 478,500千円
- ・八重根漁港 : 泊地浚渫・道路改修事業施行。 事業費 110,840千円
  - ・洞輪沢漁港 : 防波堤改修工事施行。 事業費 152,220千円
  - ・中之郷漁港 : 防波堤ケーソン製作工事施行。 事業費 117,000千円

1982 昭和57年7月11日 : 八重根接岸港で港湾作業中のダイバー心臓麻痺で死亡。

- ・昭和57~62年 : 第7次漁港整備計画
- 洞輪沢漁港 : 改修 - 228,000千円
- 中之郷漁港 : 改修 - 570,000千円
- 神湊漁港 : 改修 - 2,783,000千円
- 八重根漁港 : 改修 - 906,000千円

1983 昭和58年5月27日 : 町役場で都港湾局計画課長一行、八重根漁港拡張工事説明会開催。用地取得に対する地元の強力な協力を要請。

11月6日 : 底土接岸港で測量士波にさらわれ溺死。

7月20日 : 汐間道路交通止め区間 600m について、サーフィン客等の要望に対し、関係機関協議のうえ開放。

- ・神湊商港 : 岸壁(-6.5m)・突堤工事その他 事業費 385,564千円
- ・八重根商港 : 道路改良工事 事業費 34,900千円
- ・青ヶ島三宝港 : 船揚場災害復旧その他工事 事業費 30,462千円
- ・青ヶ島大千代港 : 道路建設その他工事 事業費 157,780千円
- ・神湊漁港 : 防波堤A・ケーソン製作・船揚場修築工事 事業費 372,080千円
- ・八重根漁港 : 防波堤・消波ブロック・護岸改修工事 事業費 90,467千円
- ・中之郷漁港 : 防波堤・改修工事 事業費 77,206千円
- ・洞輪沢漁港 : 浚渫その他工事 事業費 6,600千円

- 1984 昭和59年 : 神湊商港 : 船揚場波除堤消波・突堤消波その他工事 事業費 286,934千円
- ” 船客待合その他工事 事業費 96,600千円
- ・八重根商港 : 岸壁(-6.5m)・道路改良その他工事 事業費 309,651千円
  - ・青ヶ島三宝港 : 物揚場・護岸その他工事 事業費 47,200千円
  - ・青ヶ島大千代港 : 物揚場工事 事業費 85,074千円
  - ・神湊漁港 : 防波堤A建設改良・その他工事 事業費 341,633千円
  - ・八重根漁港 : 防波堤消波その他工事 事業費 80,250千円
  - ・中之郷漁港 : 防波堤Bその他工事 事業費 107,363千円
  - ・洞輪沢漁港 : 岸壁工事 事業費 20,950千円

1985 昭和60年3月20日 : 町議会予算特別委員会において、八重根漁港掘り込み工事による八戸地区の上水道水源につき、対応促進の発言あり。

7月4日 : 付近住民から美観・衛生・防災上非難された、八重根漁港周辺の放置廃船の処理につき、八丈島漁協事務所で、八丈支庁水産係誘導による関係者の会合が持たれ、9月の北東風の頃、焼却処理する事に決定。関係者代表は佐々木篤行。

10月21日：北東の強風を待って、八重根町有地で廃船11隻（東海汽船の舳・曳舟を含む）焼却処分実施完了。

・神湊商港	：船揚場除波堤・護岸堤その他工事	事業費	537,620千円
・八重根商港	：泊地整備護岸その他工事	事業費	141,360千円
・青ヶ島三宝港	：道路地盤改良その他工事	事業費	324,785千円
・青ヶ島大千代港	：物揚場建設その他工事	事業費	126,800千円
・神湊漁港	：防波堤A建設・護岸改良その他工事	事業費	376,350千円
・八重根漁港	：A防波堤消波ブロック・防波堤その他工事	事業費	83,800千円
・中之郷漁港	：岸壁・護岸改良その他工事	事業費	71,750千円
・洞輪沢漁港	：泊地整備その他工事	事業費	37,100千円

1986 昭和61年4月5日：神湊漁港のA堤防の神湊導灯前灯廃止（防波堤の延長により不適当となったため）後灯は地元の要望により、「神湊灯台」として存続することに決定。

4月14日：八重根商港の岸壁建設工事中に潜水士死亡。

4月23～24日：神湊漁港のA防波堤建設工事（ケーソン据え付け）現場の海底から磁気探知機を使い調査したところ、数十発の弾丸を発見、引き揚げる。大きいものは長さ1m、直径20cm、重さ30kgもある未使用弾。

10月8日：台風18号、底土港に約10mの大波襲来。カヌー揚場の防波堤が長さ約10m、幅4mに渡って倒壊。また、海水浴場の1ヶ50tのテトラポット10ヶ程流失。

10月20日：八重根接岸港供用開始。

・神湊商港	：第二次船揚場・離岸堤その他工事	事業費	364,400千円
”	：待合所解体その他工事	事業費	17,930千円
・八重根商港	：岸壁(-6.5m)その他工事	事業費	491,300千円
・青ヶ島三宝港	：道路建設・物揚場その他工事	事業費	457,500千円
・神湊漁港	：A防波堤建設・ブロックその他工事	事業費	360,180千円
・八重根漁港	：A防波堤消波ブロック・建設その他工事	事業費	100,080千円
・中之郷漁港	：岸壁・道路その他建設	事業費	67,950千円
・洞輪沢漁港	：航路整備（浚渫）その他工事	事業費	55,500千円

1987 昭和62年2月11日：檜立自治会総会において、町は利用する漁船のない第一種漁港（宇津木・鳥打・檜立）の指定解除を都に申請中である事から、乙千代ヶ浜の指定解除後の活用・安全対策につき、多くの意見が表明さる。

3月16日：八丈町議会で八重根漁港掘り込み拡張整備工事による、八戸水源の塩水化対策が論議さる。

3月26日：都港湾局離島港湾部計画課、町・支庁の水産担当職員・町議会港湾促進特別委員会委員・漁協代表者を対象に、神湊・洞輪沢・中之郷漁港の第八次整備長期計画（63～67年）につき説明会を開催、参加者の意見を徴す。尚、説明の中で漁港整備の今後につき、水産庁の意向として蓄養・養殖場の機能をも加味した整備となる事が伝えらる。八丈については第九次から導入される模様。

4月12日：南海タイムス「読者コーナー」に“八重根漁港は、商港と兼用に”との三根浅沼弥興太の投稿載る。

7月19日：南海タイムスに、八丈島出身元代議士菊池義郎（99才）の、「国会の思い出：軍艦の貰い下げに大論争」と言う標題で寄稿文が載る。神湊漁港の防波堤の基礎となった事は忘れられない事項。

7月31日：青ヶ島村の新村営船、「あおがしま（75t）」竣工祝賀会、大賀郷公民館で開催。この船は、全長31.1m、最高速力30.29ノット。八丈～青ヶ島間を今迄より1時間早い2時間で結ぶ見込。

10月29日：八丈島で5つ目の灯台「神湊港突堤灯台（底土接岸壁先端）」が点灯。この灯台は、高さ10m、光度は3,500カンテラで自動点滅式。

・神湊商港：船揚場波除堤・環境整備その他工事	事業費	553,522千円
・八重根商港：第二次泊地整備	事業費	114,570千円
・青ヶ島三宝港：道路建設・物揚場（-3.0m）その他工事	事業費	424,650千円
・青ヶ島大千代港：ケーブルクレーン改良等工事	事業費	51,700千円
・神湊漁港：A防波堤建設・その他工事	事業費	514,080千円
・八重根漁港：A防波堤建設その他工事	事業費	115,450千円
・中之郷漁港：泊地整備（-3.0m）その他工事	事業費	147,250千円
・洞輪沢漁港：泊地整備その他工事	事業費	124,700千円

1988 昭和63年：昭和63～平成5年：第8次漁港整備計画

洞輪沢漁港：改修	500,000千円
中之郷漁港：局改	100,000千円
神湊漁港：修築	3,500,000千円
八重根漁港：修築	2,450,000千円

・神湊商港：防波堤護岸・離岸堤消波ブロックその他工事	事業費	432,070千円
・八重根商港：泊地整備・護岸（消波）その他工事	事業費	175,142千円
・青ヶ島三宝港：防波堤（仮設道路）その他工事	事業費	264,903千円
・青ヶ島大千代港：物揚場・道路災害復旧その他工事	事業費	158,940千円
・神湊漁港：B防波堤建設・C防波堤消波ブロック・A防波堤その他工事	事業費	419,450千円
・八重根漁港：道路擁壁・その他工事	事業費	157,400千円
・中之郷漁港：船揚場改良・防波堤改良・護岸災害復旧その他工事	事業費	156,595千円
・洞輪沢港：防波堤ブロック整備その他工事	事業費	74,000千円

## 7 漁業の調整

- ・漁場計画と調整事項・漁業権の沿革・・・漁業調整委員会の決定・指示・動向
- ・漁場管理と生産調整
- ・漁場の秩序と安全対策・・・・・・・・・・漁業取締り・漁場利用憲章・水難対策・航海安全灯・遊漁船の動向
- ・参考資料（八丈島漁場利用憲章）

西暦	年号	特記事項
1933	昭和8年4月	とこぶしの採取禁止期間は東京府令で8月中となっているが大賀郷漁業組合では11月1日から翌年5月末迄を追加決定。
1949	昭和24年12月15日	（漁業法制定）
1950	昭和25年3月15日	漁業法政令・施行規則制定、法の期する「漁業の民主化・生産力の発展」が具体化、東京都海区も4海区（東京湾北・大島・三宅島・八丈島）となる。

6月26日：東京都選挙管理委員会久保下事務局長・鹿島選挙係長一行が23日便で来島、各村選挙管理委員と海区漁業調整委員選挙について事務打ち合わせを行なう。委員の構成は、漁民代表7名（公選）、学識経験者2名（任命）、公益代表1名（任命）。資格審査の受付は7月1日から7日迄。最終日各村の申請数について、各村の利害が絡むことから話が纏まらず流会となり、11日検討した結果当日も纏まらず。各村の選挙管理委員会で総合調査し、疑問の余地を後に残さないことで決着が付く、7月15日から選挙人名簿の縦覧、16日選挙告示、8月5日から候補者の受け付け。立候補者は次の通り。

大賀郷：稲葉又三郎・西浜義一、三根：山本林市・菊池長二郎・浅沼常道、中之郷：大沢興二、末吉：冲山寅蔵・冲山武一。

なお、有権者数は次の通り。

大賀郷：244名 三根：421名 檜立：35名 中之郷：95名  
末吉：264名 計1,059名

8月15日：海区漁業調整委員会委員の選挙が施行され、次の結果となる。

当	西浜	義一	大	147票	当	稲葉又三郎	大	133票
当	浅沼	常道	三	144票	当	冲山武一	末	132票
当	山本	林市	三	138票	当	菊池長次郎	三	131票
当	冲山	寅蔵	末	136票	次	大沢興二	中	120票

10月23日：第一回八丈島海区漁業調整委員会、八丈支庁会議室において開催、会長互選の結果、会長浅沼常道・会長代理者稲葉又三郎が決定、書記：船水勉・角谷正幸2名任命。漁場計画案について審議開始。なお、知事任命の委員は次の通り。

（公益代表）磯崎 談、（学識経験者）小林一郎・松岡光太郎、（専門委員）菊池 勇、笹本玉男、大沢市助

11月18日：第三回八丈島海区漁業調整委員会開催。都水産課の長沢久技師から漁場計画についての具体的補足説明の後、漁場計画についての私案（テングサ・トサカノリ・サイミ・ツノマタ・ノリを三根・末吉・中

之郷の地先はこの3ヶ村の、樫立・大賀郷・宇津木の地先はこの3ヶ村の共有に、ハバノリ・フノリ・トコブシ・ギインタカハマ・イセエビは、各村の専有) 提示。ことの重大さに保留となる。なお、海区の範囲決定について、水産庁長官の解釈として「青ヶ島は八丈島から遠く、交通も閉ざされており社会通念上海区に含まれない」が披露され、八丈島漁民にとってサンゴ漁業や春トビウオ等の関係から除外するのは以っての他であるとして、農林省に対して即時申請することで閉会。

11月29日：第四回海区漁業調整委員会開催。私案に賛成と、私案に拘らず独自案を作成するべきだとする意見あり、持ち越しとなる。

12月20日：漁業権補償委員会第1回開催（以降26年9月21日迄の5回で終了。委員は10名「八丈島からは菊池勇」。尚、専門委員8名、知事選任「八丈島からは沖山環」）。

1951 昭和26年 2月24日：八丈島海区漁業調整委員会開催、八丈島海区を全島一区制にする事に決定。

2月25日：八丈島海区漁業調整委員会開催、末吉村のテングサに対する生活の依存度を考慮、5月10日：末吉のみ口開、5月22日より各村一斉口開。

・春トビウオ漁業事故防止操業規約発効。

3月12日：八丈島海区漁業調整委員会、漁場計画に関する公聴会開催。末吉・三根は専有、他は委員会案を支持。

7月9日：第15回八丈島海区漁業調整委員会開催、各村共有は、ヒロセガイ・イセエビ及び末吉村今根から末吉・三根村境に至る間のテングサ・トコブシ。  
地先優先は、テングサ・トコブシ・トサカノリ・サイミ・岩ノリ・ハバノリ。

7月19日：八丈島海区漁場計画の答申決定に伴う公聴会開催、7月23日答申。（天草は末吉地先の一部を5ヶ村共有、八丈小島の3ヶ村共有、イセエビ全島共有、以外は各村専有。）8月4日公示。

7月21日：八丈島海区漁業調整委員会開催、東京都漁業調整規則を審議。

7月28日：東京都、漁業権に関する補償委員会の決定を見た個別旧漁業権毎の補償金額を公告。（8月26日決定。八丈島：専用漁業権 1,953千円、入漁権 433千円）

9月1日：旧漁業法による漁業権消滅。

9月13日：第18回八丈島海区漁業調整委員会開催、漁業免許について都知事よりの諮問に対する答申を審議決定。

10月22日：第一回八丈島海区専門委員会開催、テングサの投石・磯掃除につき審議。

1952 昭和27年 3月30日：21回八丈島海区漁業調整委員会開催、共有漁場の免許料、各村のテングサの水揚高の割合で負担する事に決定。

4月30日：第22回八丈島海区漁業調整委員会開催、共有漁場の口開け、

トサカノリ・サイミは6月1日、テングサは6月5日、トコブシ・ギンタカハマはテングサ採取状況により後日決定する事とし、天草機械潜りは5尋以深とする事に決定。

4月：トビ網事故防止のため、他県漁船の泊地を神湊・八重根・洞輪沢に限定。

1953 昭和28年2月3日：八丈島海区漁業調整委員会、大型船の操業禁止を決定。

1954 昭和29年8月15日：第3期八丈島海区漁業調整委員会委員の選出。（会長浅沼常道・副会長沖山寅蔵）

1957 昭和32年：八丈島水産界、申し合わせにより、春トビウオ流刺網漁業操業船に、全船除網装置を付ける事に決定即実施。

1958 昭和33年9月25日：東京都伊豆七島連合海区委員会に於て、翌34年の春トビウオ漁業操業隻数、鳥島近海漁場：大島より8隻（4隻の輪番）、三宅より常時3隻、八丈より同3隻。青ヶ島近海漁場：大島より輪番5隻、三宅より輪番2隻に決定。

1959 昭和34年6月28日：海区漁業調整委員会開催。共有地のテングサ口開けを7月3日とし、操業事故防止等の対策を決定。

8月24日：八丈島海区漁業調整委員会開催。大賀郷菊池勇（61才）を会長に選任。

11月6日：伊豆七島連合海区漁業調整委員会開催。昭和35年度の春トビウオ漁入漁船の枠決定。内容次の通り。

鳥島近海漁場：無線通信施設を有する20t以上船。

大島8隻（4隻の輪番）、八丈3隻、三宅3隻。

青ヶ島周辺漁場：大島5隻→6隻（輪番制）、三宅2隻（輪番制）

三宅島近海漁場：大島7隻→10隻（輪番制）

八丈島近海漁場：八丈82隻→90隻

1960 昭和35年1月23日：海区漁業調整委員会開催、意見交錯のサンゴ船枠につき従来通り、三根・大賀郷両漁協は各3隻、中之郷・末吉両漁協、各1隻と決定。

3月7日：スミスで密漁船ありの情報に、大島分場都南丸（49t）が現場へ急航したところ、密漁中の静岡御前崎港第一万栄丸（100t）を発見摘発。

4月15日：八丈島海区漁業調整委員会開催、連海区八丈代表に菊池勇を選任。

4月18日：スミス島近海で、サンゴの密漁が後を絶たず、八丈島の漁協関係者、遂に日本遊覧航空のタブ機をチャーター、密漁船を発見、東京都に対し再度取締りを要請。

4月24日：下田海上保安部、サンゴ密漁から焼津に帰港した第八大黒丸（72.2t）を逮捕。

・春トビウオ流刺網漁業漁船の調整枠、次の通り。

1. 鳥島漁場 大島8隻、三宅3隻、八丈3隻、計14隻。

2. 青ヶ島漁場 大島6隻、三宅2隻、八丈は総トン数3t以上20t未満船。

3. 八丈島漁場 八丈90隻。

7月11日：共有地のテングサ口開け。

8月3日：8月10日投票予定の海区漁業調整委員会委員選挙、立候補締め切り日の翌日（3日）菊池長二郎辞退のため、無投票となる。

当選者：沖山明治郎・沖山武一・菊池勇・西条新平・山本林市・浅沼一幸・持丸正信。

9月7日：八丈島海区漁業調整委員会、第五期委員の解任式及び第六期委員の就任式開催。新第六期委員の顔触れ次の通り。

会長 菊池 勇

会長代理者 沖山 武一

委員 山本 林市、浅沼 一幸、西条 新平、沖山明治郎

公益代表 浅沼 次作 小林 一郎

1961 昭和36年 1月28日：八丈島海区漁業調整委員会開催、サンゴ漁業操業船各地区別枠決定。三根4隻、大賀郷4隻、中之郷2隻、末吉2隻。

7月5日：第75回八丈島海区漁業調整委員会開催、共有地テングサ口開け7月12日に決定。

9月18日：八丈島海区漁業調整委員会開催、七島連合海調委提案の春トビウオ漁・サンゴ漁関連の事項を決定、七島連合海調委出席委員に会長菊池勇・会長代理沖山武一を選任。イセエビの解禁については全域とも10月1日、口止め翌年5月7日。

12月15日：八丈島海区漁業調整委員会開催、共有地のノリ・ハバノリの口開け12月23日午前9時と決定。

1962 昭和37年 6月13日：八丈海調委開催、共有地テングサ解禁7月11日に決定。

7月：伊豆七島の大海区制による海区漁業調整委員会委員選挙施行。八丈からは菊池勇、沖山武一の2名選出。

8月8日：漁業法改正により伊豆諸島各海区漁業調整委員会が統合された東京都島部海区漁業調整委員会、公選委の新陣容が決定、結果は次の通り。

田中 平雄（三宅）、沖山 武一（八丈）、大野 忠一（神津）

川島浅太郎（大島）、菊池 勇（八丈）、佐久間雅之（三宅）

出川次郎兵衛（新島）。

8月15日：島部海区漁業調整委員会委員知事選任委員、次の通り発令。

公益代表 金川道之助（八丈）

学識経験 石田徳太郎（神津）・平松岡太郎（三宅）

1963 昭和38年 2月19日：島部海区漁業調整委員会、8月31日で免許共同漁業権が切り替えることから、漁場計画について公聴会を支庁会議室で開催。

5月28日：支庁会議室において、各漁協組合長会議開催、共有漁業権は今根鼻の境界を北方のオンデガショウジに移すと、海区漁業調整委員会の報告あり。漁業権の切り替えにつき、9月1日から共有3つ、地先7つ、の全漁業権が更新さるのを受けて、申請に必要な共有漁業権の「行使協定書」の原案を審議決定。

7月：各漁協組合長会議開催、共有地のテングサ・トコブシ口開け日を

7月14日午前7時拓南丸の旗を合図に行なうことに決定。

1964 昭和39年5月：トコブシの口開け、三根16日、大賀郷17日、中之郷25日等となる。都の漁業調整規則では、殻長4,5cm以下は採捕禁止であるが、漁業者の中でも相当違反者が見られることから、支庁では監視を強め、漁場管理への意識革命を求めることとなる。

5月24日：トコブシの口開け、三根16日、大賀郷17日、中之郷25日等となる。都の漁業調整規則では、殻長4,5cm以下は採捕禁止であるが、漁業者の中でも相当違反者が見られることから、支庁では監視を強め、漁場管理への意識革命を求めることとなる。

6月7日：支庁会議室で漁協組合長会議開催、共有漁場のテングサ・トコブシ・サイミの解禁を7月1日と決定。

8月6日：島部海区漁業調整委員会委員選挙投票開票。八丈島から、菊池勇・小宮山松夫・菊池長二郎・沖山武一当選。

8月28日：東京都島部海区漁業調整委員会委員定数の改正あり、都知事選任の学識経験者は2名から4名に、公益代表は1名から2名となり、八丈から池田町長を任命。これで、委員総数15名の内5名を八丈島が占める。

1965 昭和40年12月16日：東京都島部海区漁業調整委員会開催、田中平雄会長辞任に伴ない、新会長に沖山武一を選任。

1967 昭和42年7月13日：東京都島部海区漁業調整委員会、八丈で初めて開催、都知事からの諮問事項等を審議、翌14日には漁港・水産施設・共有漁場等を視察。尚、都知事から諮問のあった水中銃（発射装置を有する刺突用具類であって、水中において使用するもの）については禁止方答申。

1968 昭和43年8月6日：執行の東京都島部海区漁業調整委員会委員選挙、立候補者が定員と同数で無投票当選となる。八丈島関係者は、沖山武一、浅沼一幸、小宮山松夫の3名。

9月5日：島部海区漁業調整委員会開催、選挙の結果、会長に沖山武一、公益代表に八丈から池田要太を選任。

9月24日：八丈島各漁協組合長会議開催、八丈島、小島一円のイセエビ漁業（ニシキ・ゾウリ・セミ・ハナサキエビを含む）の解禁は10月15日正午からと決定。

1969 昭和44年11月：黒瀬で底刺網違反操業発見（北海道の80tの漁船）。

1970 昭和45年1月29日：明神礁噴火、水柱・海鳴・海水変色・軽石浮流、静岡県御前崎カツオ漁船第二神徳丸（59t、船長原崎市夫、乗組26人）から無線連絡あり。第一回の爆発の後数回の爆発がおこり、海鳴りが激しくなったため、僚船と共に約10km西南西のボネズ列岩に緊急避難。このため4月頃迄当該海域春トビウオ漁操業禁止となる。

5月：トコブシの密漁が増加。漁業権のPR強まる。

7月：島外からのアクアラングや水中銃（エアースプリング銃）を持ち込んでの、マリンレジャー者が増加と共に、違反者も増加の一途を辿っているため、支庁の取締吏員と警察官が、海岸をパトロールして取締る事となる。

9月17日：新黒瀬漁場にソ連漁船（2,000t、巻網漁業・操業はせず）現われ問題となる。

11月10日：支庁水産係と八丈分場、指導船拓南で八丈島周辺の取締りを実施、ハゴ釣り中の違反船5隻を摘発。摘発されたのは神奈川県長井港寿丸・重勝丸・隠居丸・幸田屋丸・八造丸（30t～10t）。これらの船は檣立の八丈温泉沖僅か300mで操業していたもの。

11月25日：青ヶ島神子浦海岸約500m沖合にソ連船が出現、海流調査に泳いでいた2人が、潮に流されて泳ぎ着き駐在所に保護さる。この船は、ソ連科学調査船ヘルネット号（338t、25人乗組）、太平洋のサケの棲息状況を調査に来たもの。

1971 昭和46年 5月27日：八丈島でも遊漁関係が盛んになり、専門漁業者との問題も発生していることから、都水産課では支庁会議室へ関係者を招集、種々検討の結果、「遊漁対策協議会」を設ける方向で、関係機関へ働きかけることに決定。

7月10日：トコブシの鮮度を守るためイソガネ使用を禁止。

7月26日：漁協組合長会を支庁会議室で開催、イセエビの資源減少化に対し、各組合地先の禁漁区の設定を実施。

9月3日：去る6月都知事の諮問機関として発足の、漁場利用調整協議会の第一回の会合が持たれ、会長に冲山武一を選出。

9月13日：漁業者と遊漁者との対話の中から、八丈島で最も有効適切な、漁場の利用を模索して自主的な解決をはかり、両者の共存共栄を目的に「八丈島遊漁対策会議」が発足。構成メンバーは、三根・大賀郷・中之郷・末吉各漁協代表各1名、釣友の会代表1名、遊漁船業者代表2名、潜水業者代表1名、水産試験場代表者1名、町役場1名の計11名。座長は八丈分場長伊藤茂。

10月7日：釣船の利用者も増加、遊漁船も約30隻となったが、地区毎に料金や取り扱いが相違、遊漁者の不評をかっていることから、八丈支庁の斡旋で各地区の遊漁船業者、八丈支庁会議室に参集、協議の結果、「八丈島遊漁船組合」を結成。共通料金や安全対策につき取り決めを行なうことを定め、代表者に三根春日丸船主小崎保を選任。

1972 昭和47年 3月11日：八丈支庁会議室で遊漁船関係者が集まり、規約等を定め、「八丈島遊漁船組合」を結成。協定料金等を定めたほか、役員選挙を実施、組合長に小崎保を選任。

8月4日：投票予定の東京都島部海区漁業調整委員会委員選挙、締め切り日迄において、立候補者が定員の9人と、定員ぎりぎり、無投票。八丈からは冲山武一・小宮山松夫・浅沼一幸の3名。

1973 昭和48年 3月14日：八丈島の根付き漁業（テングサ・トコブシ・イセエビ・ノリ等）の漁業権は、この9月1日に期限切れとなるため、八丈支庁会議室で、漁場計画につき公聴会を開催。

7月：遊漁船を利用して釣りをする観光客も次第に増加、撒餌釣りも多く見られるようになる。撒餌釣りやアクアラング利用の魚介類の採捕は、何れも、都の漁業調整規則で禁止されているものであり、地元から苦情が高くなる。

10月9日：漁協組合長と海区漁業調整委員会委員との合同会議、八丈支庁会議室で開催、次の事項を決定。

① 共第25号(小島周辺)漁場は、八丈島・三根両漁協の共有であり、「イセエビ」の口開けは、10月15日正午。

② 資源保護のための禁漁区は

小島周辺：コジ根～鳥打首付根、中之郷地先：腹太～ミジリガ江  
三根地先：水試分場～イデサリ鼻、末吉地先：温泉ホテル～漁協  
大賀郷地先：前崎港～八重根港  
尚、この禁漁区では、磯魚底刺し網漁業は禁止。

1975 昭和50年 3月11日：八丈町議会、最近のソ連漁船団が伊豆七島近海で乱獲していることにつき、関係行政機関(内閣・外務・農林・自治各省)に善処方を要望する意見書を決議。

5月：漁期を目前にしてトコブシの密漁が頻発、磯根資源に頼っている漁業者の生活を脅かしているという苦情が、支庁に多く寄せられるようになる。悪質なものとしてはアクアラングを使用し密漁する者も居るらしく、好漁場である夕間や各地区漁場で相当の被害が出る。このため両漁協では関係官庁と協力、海岸のパトロールを強化、違反を発見した場合は漁業法に基づき、「漁業権侵害」で告訴も辞さないという固い覚悟で臨むこととなる。

11月26日：八重根港防波堤灯台点灯、光達12.5カイリ。

1976 昭和51年 7月：世界各国の経済水域問題で締出された日本各地の大型まき網漁船、新漁場を求めて七島海域に出没することが多くなる。台風や低気圧のため避難する漁船は、八丈島の漁港沖に停泊することが多くなり、その乗組員が集団で上陸する機会も多く、女性にいたずらしようとしたり、女性ドライバーの車を止めたり、その他ロベヤソテツ等の植木をかつげらう等、目に余る行為があり、この海賊紛いの行為に町議会も、この抑制について言及。

8月4日：投票予定の島部海区漁業調整委員会委員の選挙、7月24日の立候補受付日に定員ぎりぎり、無投票当選となる。八丈島からの当選者、冲山武一・浅沼一幸・小宮山松夫の3人。

8月25日：島部海区漁業調整委員会開催、知事選任の学識経験者：多田稔(都漁港協会長)、石野誠(東水大教授)、西坂忠雄(都漁船保険組合長)、浅沼興(三宅村議長)。同公益代表：峰元清次(八丈町長)、鈴木三郎(大島町長)の発表紹介あり。選考委員の協議により冲山武一を、連4期目の会長に選任。

12月：世界的に200カ国漁業専管水域宣言の高まりから、大型資本に依る大中まき網漁船が伊豆諸島の沿岸海域に出没、或はその周辺海域で操業するため、沿岸の漁業資源減少の傾向が強くなり、漁民の間から問題提起の声強くなる。

12月：本年度トコブシの水揚げは44tで、昨年の64tに比べてもその69%と激減。原因としてトコブシの餌料となる海藻の繁茂が悪い・冬場の荒れが続いた・と挙げられたが特に三根地先の減少が激しく、乱獲との評価も出る。

1977 昭和52年 5月1日：底土海岸で観光客5人(男3人、女2人)がアクアラングを使用、トコブシを密漁、三根漁協組合員に発見され、始末書で処理したもの、今後の対策について強い取り締まりと広報の不足指摘さる。

6月9日：漁連会長名で知事宛「八丈島周辺海域における漁業指導及び違反船の取締り強化のため、拓南の高性能代船建造を早期に実現されたい」・「有害サメ類の駆除対策を緊急に樹てられたい」の2件について陳情。

10月18日：都漁連、八丈島勤労福祉会館で北部太平洋まき網漁業船団代表と地元代表者との初の協議会を、水産庁職員・国会議員等を来賓に迎え開催。話は平行線に終始、協議後地元代表は、傍聴に詰め掛けた地元漁民約200人を交え、総決起大会を開催、試験操業全面禁止・保護海域拡大を決議。この問題は昭和39年、大中型まき網船（100t以上）が、伊豆諸島近海での漁期目前調査のための試験操業を水産庁から許可されて以来9年間、伊豆諸島の漁民は「漁場を荒らし、操業を妨害される」と、試験操業禁止の陳情を続けて来ているもの。これに対し、水産庁は耳を貸さず、漁民は、「実は試験操業の名を借りた本操業ではないか」と、怒り頂点に達しているもの。

11月14日：都漁連の佐久間会長・百束専務理事、鈴切康雄衆議院議員・小宮山松夫三根漁協組合長・佐々木樺喜八丈島漁協組合長・石野田修一神津島漁協組合長・奥山安・山本義光両町議と共に岡安水産庁長官を訪ね、伊豆諸島大型まき網船団試験操業全面禁止を、水産庁長官に厳しく申し入れる。

11月27日：第三回都議会島しょ研究会（奥山則男会長）開催。まき網漁業の禁止につき、「都議会が超党派で政府に陳情しよう」と合意。

12月11日：奥山治青ヶ島村長「領海3キロ」宣言、報道関係賑う。これは伊豆諸島の東京都移管百年記念日を期して宣言発表。内容は、「青ヶ島周辺の豊富な漁業資源を他島他県の漁船が根刮ぎ漁獲してしまう。青ヶ島は開発が遅れていることから、漁港らしき漁港もなく、漁船らしき物もなく、漁業権も設定されていない。こういう事では、青ヶ島が将来開発整備された場合の漁業資源は枯渇してしまう。」というもので、青ヶ島沖合3kmまでを領海宣言、他島他県の漁船の無断操業を一切禁止するというもの。法的根拠は無いものの、離島の平等・公平な開発を、国や都に訴えるものとしては効果抜群。

1978 昭和53年 2月15日：鈴切代議士の案内で、松本一町村会長・笹本直衛議長会長・佐久間雅之漁連会長・佐々木樺喜八丈島漁協組合長・小宮山松夫三根漁協組合長、水産庁を訪問、長官不在のため恩田幸雄次長と会談、次の対応を確認。

- ①現在12系統の試験操業の隻数を、将来全面廃止を前提に本年相当数削減。
- ②これまでの禁止区域に加え、黒瀬・八丈島・青ヶ島周辺水域の禁止区域を拡大。
- ③野島崎正南の線以東の本許可の水域についても、新黒瀬・八丈島・青ヶ島周辺において、沿岸漁民との競合を防止し得る有効な措置を講ずる。

3月6日：水産庁から豆南海域に於ける大中型まき網漁業の、昭和53年度試験操業許可につき告知を受く。内容は次の通り。

- ①許可総数6ヶ統以内（従来は、12ヶ統以内）。
- ②操業期間 4月20日～5月31日
- ③操業禁止区域 従来より拡大（詳細省略）
- ④その他 漁期中は北部まき網組合の職員を八丈島に駐在させ、理事も交代で駐在、現地でのトラブル防止に努める。

5月8日：大中型まき網漁船との3月の協定により駐在員来島、水産加工協同組合の事務所2階を借用、駐在事務所を開設。

1979 昭和54年 2月3日：八丈分場において、北部巻網漁業代表者、三宅島漁業代表者、地元漁業関係者40人が出席、協議。

7月30日：東京都島部海区漁業調整委員会、底延縄式立縄漁具使用漁業（地獄縄）の操業禁止決定告示。

1980 昭和55年 1月31日：八丈支庁会議室で島部・小笠原の海区漁業調整委員会を開催。

3月14日：北部太平洋まき網漁業の伊豆諸島周辺海域での試験操業が、4月19日で期限切れとなるため、都漁連と北部太平洋まき網漁業生産調整組合、水産庁立ち会いのもとに会合、船団6ヶ統を5ヶ統に減少することで、2年延長を決定。操業期は2月20日から5月31日迄。

4月26日：大根沖、今根沖で春トビウオ漁操業船、北部太平洋まき網船に網をそれぞれ7反・10反切断され被害甚大。また、定期貨客船の入港の支障となり、地元からの怒り大きくなる。

6月：八丈島・三根両漁協、釣り人のオキアミ使用全面禁止を求め、八丈町に対して要望する事を決定。

7月21日：既に神津島・式根島・三宅島・九州・四国等多くの県で禁止されている「オキアミ使用」について、町・支庁・両漁協・商工会・観光協会・釣り餌販売業・遊漁船組合の代表者約40人により、懇談会を開催、販売業者側の「オキアミ使用全面禁止」に対する絶対反対の声が強く、禁止推進側と平行線となり不調。

8月6日：島部海区漁業調整委員会委員選挙無投票で確定。八丈からは沖山武一・浅沼一幸・小宮山松夫の3氏。

10月28日：東京都島部海区漁業調整委員会八丈地区協議会において、「オキアミ全面禁止」を合意、本会議決定待ち。

11月17～26日：海上保安庁海難防止強調運動実施。

1981 昭和56年 2月17日：大賀郷水産研究会総会において、他県船による「メダイ樽流漁」に対し八丈島のルール（1隻当たり2樽迄）を守るよう呼び掛ける事に決定。

2月19日：八丈島地区大規模増殖場管理委員会開催、「八丈島大規模増殖場管理規程」を策定。管理委員は地元海区漁業調整委員会委員3、八丈島漁協4、三根漁協4の計11名。

6月27日：神湊漁港沖（シンガマ浜）でダイバー客、漁業権内容の貝類を採捕し警察へ突き出さる。

7月23日：ムロアジ漁獲制限とムロくさやの価格等につき、消費者サイドから、論議発生。

12月9日：町議会決算特別委員会において、北部まき網漁船による試験操業につき、56年度・57年度で計1億円の迷惑料（地元漁民への感謝料又は損害補償）を漁連が受けながら、漁民に知らしていない点、及び55年に10ヶ統に増加した点について取り上げらる。

12月16日：伊豆諸島周辺海域における北部まき網船の操業（試験操業を含む。）につき、水産庁立ち会いの下、都漁連と協定書が結ばれていたことが明らかとなる。

1982 昭和57年 1月17日：大賀郷船主約30人、組合長を囲み北部まき網事件につき協議。

3月2日：洞輪沢に台湾船18隻避難。

3月7日：八重根漁港に台湾船エンジン故障のため、僚船に曳航され入港。船体にサンゴのマークあり。9日故障修理終了、出港。

5月17日：台湾漁船乗組員急性盲腸炎で寄港、町立病院で処置、25日の空路で離島。

3～12月：八丈分場「たくなん」による地獄縄取締回数5回。

1983 昭和58年 1月27日：東京都島部海区の漁業権、今年9月1日付で10年目の更新時にあたるため、同委員会、支庁会議室で公聴会を開催。

9月8日：都水産課、地獄縄の扱いにつき地元漁協・船主代表・水産研究会代表者と話し合い開催、地元の要望は「全面禁止」。

10月17日：本年の「たくなん」による地獄縄漁業取締回数22回。

10月28日：横間海岸沖合い 200m で千葉県在住のダイバー水中銃を使用漁獲（イセエビ2匹）。八丈島漁協その悪質さに告訴に踏み切る。

1984 昭和59年 10月8日：地獄縄対策協議会開催。構成員は東京都水産課・両漁協・八丈支庁・八丈町・八丈分場。

12月20日：町議会定例会において、八丈島・三根両漁協組合長連名の「底延縄式立縄漁具使用禁止について」の陳情、採択。

12月26日：地獄縄漁業対策協議会、支庁を会場として開催、禁止区域の検討実施。

1985 昭和60年 2月24日：タイム紙上に投書「遊漁船に“一言”」と言う題で、①定員オーバー、②料金のバラツキ、③豊漁の際の釣果物の扱いにつき登載。これに対し、3月3日タイム紙上、八丈島遊漁船組合長名で弁明文登載。

3月24日：八丈島遊漁船組合に対しタイム紙投稿登載。

7月24日：八丈支庁長室で、島部海区漁業調整委員会が入漁裁定を行なった三根寄りの末吉地先海域につき、支庁長・町助役・立ち会いの下に、八丈島漁業協同組合長沖山武一・三根漁業協同組合長小栗清吉、両組合長による覚え書の交換調印式が円満に行なわれる。これによって、八丈島水産界における永年の懸案事項の一つが解決した事となる。

8月18日：八丈島大規模増殖場第一回の口開け（解禁）。

8月：底立て延縄漁業（地獄縄漁業）、許可漁業となり、八丈・青ヶ島海域に操業禁止区域設定。許可数34隻（静岡14、大分5、愛媛4、岩手・神奈川・高知各1、東京8隻。）

11月7日：全国海区漁業調整委員会第20回東日本ブロック会議、八丈島

で開催され、1都・1道・10県の代表54人、職員22人が出席、盛会。

11月20日：三根永郷クニノミチに、救命具（浮輪2ヶ・ロープ等）を警察及び有志が設置。

1986 昭和61年 2月4日：支庁会議室で「八丈島スキューバダイビング事業者協会」結成。会員は8社、事務局長は菊池盛仁。海での安全性と、漁場の秩序の維持が期待さる。

6月5日：東京都労働経済局農林水産部長「東京都海域における漁業監督吏員の漁業取締実施要領」を制定。

10月：イセエビにつき、昭和58年から3年間禁漁指定してきた、八丈小島付近と中之郷地区の2海域が解禁となり豊漁。

1987 昭和62年 1月1日：南海タイムス元旦のトップ記事に「八丈島漁場利用憲章」、漁業・マリンレジャー関係団体近く宣言へ、と八丈支庁水産係で準備を進めている動きが報道さる。

4月14日：八丈町議会議員全員協議会開催、陳情項目につき審議され、漁業違反船の取り締まり体制の強化等を決定、4月21日町長・議長・両漁協組合長、知事宛て陳情。

4月19日：今月25日からの北部まき網船の試験操業を前にして、漁業資源保護のため、試験操業の廃止を望む漁民の声高くなる。

6月18日：大賀郷公民館で両漁協・遊漁・マリンレジャー・宿泊施設・観光関係者・約50人が集まり、「八丈島漁場利用憲章」を宣言。これは、釣りやダイバー等マリンレジャーが拡大の一途を辿る見通しであり、ここで、漁業者とこれらのマリンレジャー愛好者の間でルール造りをして、漁場の秩序と安全性を確保しようとするもので、全国に先駆けてのものと言わる。尚、この会合で今後の問題として「八丈島漁場利用憲章を守る会」を結成、徹底を計って行く事となる。会長には、観光協会の清水秀夫会長を選任。

11月5日：八丈支庁長名で両漁協に「漁業取締協力依頼」文書発送。内容は漁業者の現認通報を基に都庁から司法送致等の仕組み説明。

1988 昭和63年 2月7日：南海タイムス「読者コーナー」欄に三根小崎保の「資源枯渇まねくオキアミ」の題名でオキアミ禁止の投稿載る。

4月24日：南海タイムス「ざつおん」欄に「有名無実」の題名で、水難事故防止につき、「八丈島漁場利用憲章」に触れつつ対策の強化につき意見載る。

5月29日：南海タイムスの「ざつおん」欄に「資源管理」の標題で、底もの等について管理保護の強調意見載る。

6月13日：八丈島の北西75kmの海上で台湾の順国漁業公司所属冷凍運搬船順国 306 (976t、12人乗組)の火災発生を訓練中の海上自衛隊機が発見、第三管区海上保安本部の航空機と巡視船等が現場へ向かい、11人を救助、1人の遺体を収容。また救助された内2人は、ヤケドが酷いため海上保安庁のヘリコプターで、八丈町立病院へ収容したが、1人が重症のため更に東京の病院へ移送。

8月31日：東京都島部海区漁業調整委員会、入漁裁定を下した末吉地先

(御出ヶ障子から耳ヅ根迄の漁場)の入漁は本日で期限切れとなり、三十数年ぶりです末吉漁民の専有となる。

11月9日：東京都島部海区漁業調整委員会八丈地区協議会、八丈支庁会議室で開催、引き続き春トビウオ漁の不漁に対する新漁法につき話題が中心となり、中之郷水産研究会が試験操業を実施した小型定置網漁業の成績発表や、活魚出荷のための蓄養施設等に話が及んだが、ムロ棒受網漁業との整合性につき難題を残す。底立て延縄漁業については、資源枯渇の点で難色が示さる。一方小笠原・硫黄島海域でのカツオ・マグロ漁や春トビウオ漁への入漁についても言及さる。サーファー・ダイバーとのトラブルが数件発表され、漁場利用憲章が成立しているのだから、その仕組みの中で解決すべきだとの意見も出る。夜メダイ釣りにつき、規制よりも積極参加をの意見も出る。尚、来年度からの春トビウオ漁、許可期限を1年から3年に延長、定数漁業の枠を外す方針を発表。

(参考)

## 八丈島漁場利用憲章

我が国の遊漁人口は増加の一途を辿っており、更に近年は、各種のマリンレジャーが爆発的な広がりをもって増加し、全国各地で様々な問題を提起するに至っている。このことは、我が八丈島においても例外ではなく、各種の問題が顕在化しようとしている。我々関係者はここに相集い、漁場の秩序を確立するとともに、安全を確保し、八丈島の漁場の健やかな利用を図るため、各条件について合意し、その合意事項を八丈島漁場利用憲章としてここに定めた。我々関係者は、今後一丸となって、この憲章の趣旨を体して、漁場の秩序と安全の確保に邁進し、八丈島の繁栄に寄与せんとするものである。

遊漁者・マリンレジャー愛好者及びこれらを対象とする事業者と漁業者との相互理解と協力を

果てしなく広い碧い海、雄々しく押し寄せる白い波頭、荒々しい磯と、目も覚めるような緑の山々、吸い込まれるような深い紺碧の空、一旦、眼を海中に転ずれば、日本国内でも数少ない透明度が高く、起伏に富み、巧みな生態系の配在が見られる海底、この八丈島の海は、四季折々の変化に富み、又と得難く、魅力の尽きない、人間の暮しと文化の営みに掛け替えのない自然環境の一つである。

世界的に 200海里時代が定着した今日、我が国沿岸漁業の社会的使命は非常に重大であり、八丈島においても、海を綺麗にし、自然環境を保全し、そこに棲む水族を豊かにし漁業生産を高めたいという、日本人としての共通の願いを実現するため、漁業者と遊漁者・マリンレジャー愛好者等は、今後、より一層の相互理解と協力を促進して行く必要がある。

海は、漁業者にとって生産の場であり、かつ、生活の基盤である。

漁業者は漁場環境の維持保全と資源の保護増殖のため漁場の造成・開発等に取り組むとともに、管理漁業への移行を進めるなど、生産力の増強を計り経営が安定するよう最大の努力を払っている。

一方、海は遊漁者やマリンレジャー愛好者にとって、大自然に溶け込み明日への活力を得る健全なレクリエーションの場である。しかし、遊漁者やマリンレジャー愛好者は、漁業者にとって生産の場であり、かつ、生活の基盤である海を破壊したり、漁業活動に支障が生じないように、理解と協力することによって、水族を豊かに育て漁場を維持し、秩序ある漁場利用を楽しむように心掛けなければならない。

又遊漁及びマリンレジャー愛好者を対象とする事業者（遊漁船・マリンレジャーサービス業者及び宿泊業者）も漁場利用行為の秩序維持と安全の面で重要な役割を担っている。

遊漁者及び関係者は次の点に留意して大切な海を楽しく利用しよう

### 【秩序ある遊漁を】

魚を沢山釣るのが釣の名人ではなく、狙った魚種を所期の目的通り釣るのが名人であり、自然を観察しながら釣友と事故なく楽しく釣るように心掛け、又釣った魚を売ることは、地元の魚類に関する流通秩序を乱すことにもなるので、釣り人は趣味の範囲を超えないように気を付けること。

又、磯釣り、根渡り釣り、及び船釣りを楽しむ者は、次の項目を守り秩序ある遊漁を楽しもう。

### ◎規則法規を守って

違反すると漁業取締の対象となり処罰されることになります。

- ・ 漁業法に基づく漁業権の内容となっている貝藻類等の採捕をしないこと。（例 イセエビ・トコブシ・ヒロセガイ・サザエ・アワビ・クボガイ・テングサ・イワノリ・ハバノリ・トサカノリ）

- ・ 水産資源の乱獲を防止し、資源を保護育成することを中心理念とし、かりそめにも潜水器等を使用して魚介藻類等を採捕しないこと。
- ・ 水産資源の保護育成と危険防止のため、発射装置のあるヤス等を使用しないこと（例、水中銃等）。
- ・ 網漁具（岸からの投網、たも網・さ手網を除く）を使用しての水産動植物の採捕はしないこと。又、曳縄釣（トローリング）は行わないこと。
- ・ 水産資源の育成に障害が発生するため、「まき餌釣」行為や油づけ餌を使用する釣り行為は行わないこと。又、いき餌を使用する、あかはた及びかさご釣りは行わないこと。

### ◎環境維持と資源保護を

- ・ 綺麗な海と豊かな漁場作りのため、餌の残り、ビニール、空き缶、ごみ等は海中投棄や磯・岸壁に放置しないこと。又、釣った外道等生物を潮溜りや磯・岸壁に捨て置かないこととし、これらは一人一人の責任でもって処理すること。一旦汚れた海が回復するには、気の遠くなるような時間が掛かることを銘記しよう。
- ・ 釣り場はみんなのもので、大切に常に綺麗でなければならない。帰りには必ず清掃するよう心掛けること。
- ・ 遊漁者は港の機能を十分に理解し、無秩序な駐車はやめ、港に置かれている漁具に手を触れないこと。
- ・ 港に出入りする船には注意を払い、船に投げ釣りの錘をぶつけないよう、又、仕掛けを取られないよう気を付けること。
- ・ 船釣りを楽しむ遊漁者は、漁業者が生産の主漁場としている魚礁、又は敷設してある漁具の周辺及び操業中の漁船の周辺では、遊漁を慎むよう心掛けること。
- ・ 船釣り遊漁者は、自家用として持ち帰る程度の釣り果に留めることを原則とし、大物等大量の水揚げがあった場合、当該遊漁船の利用料金総額を超えることみなされる釣り果分について、漁業協同組合で計量し、一定の手数料を同組合に納めた後持ち帰ること。

### 【安全な遊漁を】

- ・ 遊漁者は、地域の天候、海況変化の熟知者としての地元漁業者等の注意を守り、危険防止に努めること。万一、海難事故が発生すれば、漁業者及び地元の関係諸団体に、図り知れない負担を掛けることを銘記すべきである。
- ・ 八丈島の釣り場は、周囲を外洋で囲まれた超荒磯となるので、遊漁者は、グループ行動をとり、かつ、保安帽・救命胴衣を着用し十分な足ごしらえをしたり、必要に応じて命綱の使用について考慮するなど、自ら安全性の確保に努めること。万一事故のため海中に転落した場合は岸から離れ潮流に逆らうことなく、救助船の来航を信じ、心を冷静に押え待機すること。
- ・ 根渡り遊漁者は、天候や海況の急変に備えて遊漁船を近辺に待機させ、緊急時において、速やかに避難できる態勢を確保して置くようにすること。

### ◎特に船釣りを楽しむ遊漁者は、次の項目を守り安全な遊漁を楽しもう

- ・ 先ず船長の指示に従うこと。
- ・ 定員を守ることが安全への第一と考え、定員オーバーの無理な乗船はしないこと。又、定員表示の無い釣り船は利用しないこと。
- ・ 救命胴衣は必ず着用すること。
- ・ 酒類及び正常な活動や判断を妨げる恐れのある薬物は飲まないこと。
- ・ 遊漁船の航行は日の出から日没までとなっているので、夜間に於ける船釣りは行わないこと。

### ◎特に遊漁船は次の項目を守り安全性の確保を図ること

- ・ 船舶安全法による乗船定員を見易い場所に表示すること。
- ・ 出港前には、エンジン・船体等の点検を行なうとともに、航行用具・消火器・救命ブイ・救命胴衣・非常用信号器具・通信器機等の装備点検は、安全確保の上から必ず実施して置くこと。
- ・ 日没から日の出までの夜間は、釣り船を提供しないこと。
- ・ 船主は遊漁客の乗船名簿を作成し、船内及び陸上の連絡場所として漁業協同組

合に備え付けること。

- ・ 遊漁客を根渡しした場合、付近に待機し緊急避難に備え遊漁客の安全を確保すること。
- ・ 船主は、漁業者が操業中の漁場（潜水漁業・漁船漁業又は敷設してある漁具の周辺等）への立ち入りは慎むこと。

◎特に釣宿等を営む事業者は次の項目を守り安全性の確保を図ること

- ・ 釣宿及びその他宿泊事業者は島外から来島する遊漁者等に対し、八丈島での喜びを満喫して貰うための指導・助言を直接行なえる立場にあり、その責任は重大である。
- ・ この憲章に定める漁場の秩序と安全性の確保に関する事項の普及に努め、その他必要事項の周知を図らなければならない。
- ・ 遊漁者等の行動範囲等を常に把握し万全を期するものとし、島外からの遊漁者には原則として地元のガイドをつけること。
- ・ 常に関係事業者と連係を保ち効率的な接客に努め、八丈島の宣揚に努めなければならない。

マリトレジャー愛好者及び関係者は次の点に留意して海を楽しもう

【安全を確保し漁場の秩序を守って】

マリトレジャーも今や、スキューバダイビング・サーフィン・ヨット・ジェットスキー及びウエットバイク等、新分野の開拓と進出は目覚ましいものがある。八丈島漁場において、これらのレジャーの喜びを享受しようとする者は、本来の健全性を保持するために安全性の確保と、漁場の秩序を守ることは不可欠なことである。そのためには、次の項目を必ず守ろう。

◎秩序ある利用を

- ・ 八丈島周辺海域は最大高潮時海岸線から沖合1,200mの範囲で共同漁業権が設定され、周囲の洋上は、許可漁業又は承認漁業が許認可されているなど、漁業者にとって生産の場であり、生活の基盤としての漁場であることを十分認識して行動しなければならない。
- ・ 漁場を利用しようとする場合は、予め漁業協同組合と協議し、了解の元にスポット又はエリアを定めておくものとし、原則として、実施する当日、海域・人数等を届けるなどして、トラブル防止に努めるものとする。
- ・ 漁業者が、潜水漁業・漁船漁業又は敷設してある漁具の周辺等操業中の海域周辺、又は遊漁者が釣りを楽しんでいる近辺には、立ち入らないように心掛けること。
- ・ 特に遊漁者とスキューバダイバーの問題については、その利益が相反することに留意し、互譲の配慮を持って円満に対処するものとする。

◎安全なマリトレジャーを

- ・ マリトレジャーを楽しむため漁場を利用する者は、夫々の分野での標準実施要領や、地域の特性に基づく内部取り決めを順守し、安全性の確保に努めなければならない。
- ・ 行動する場合には、必ずグループで、又は最低でも複数で行ない、かつ、必ず地元の案内人の同伴を得るなどして、安全性の確保を図るものとする。
- ・ 原則として救命胴衣（BCD）は必ず着用し万一の場合に備えること。
- ・ 酒類及び正常な活動や判断を妨げる薬物を飲用して行動しないこと。
- ・ 水上でのマリトレジャーを楽しむ者は、潜水業者に危害を加えないよう配慮し、漁業権の行使を妨害しないようにすること。又、漁業者による潜水漁場での取り決めがある場合は、それに従わなければならない。
- ・ 漁業者による主漁場への航路付近には立ち入らないこと。
- ・ スキューバダイバーは、原則として海上に潜水標示やボート・フロートその他の水面用ステーションを設置し使用すること。又、ナイトダイビングは、安全性

の確保の面から極力自粛するものとする。

◎特にマリンレジャー関係事業者は、次のことを守り安全性を確認し、秩序を守る  
こと

八丈島におけるマリンレジャーの健全な発展は、漁場の秩序を守り、かつ、安全性を確保し、マナーの向上を図り、地元の共感を得ること無しにはあり得ないものと肝に銘じ、夫々の分野での標準実施要領や、地域での内部取り決め事項の周知徹底を図るとともに、この憲章内容を順守するよう啓発事業に専念するとともに、自らも関係諸団体と連係を保ち、漁場の秩序を守り安全なマリンレジャーの育成に努めなければならない。

海を生活の基盤とする漁業者は

現代における我が国の漁業は、国際的な規制強化の中で、国内沿岸での乱獲が進み漁業資源の枯渇を招き、漁場の秩序と資源保護のための、有効な対策の確立が叫ばれている。我が八丈島においても、他県船による大規模漁法によって漁業資源が減少し、漁業経済は苦境にある。そのため、八丈島漁業界は、長期的安定増産を目指して、漁場の造成や管理漁業手法の導入等に懸命である。

一方、同じ海を利用して楽しむ遊漁、又は、マリンレジャーに従事する人口は増加の一途を辿っていて、このことは、国民的欲求の現実的傾向であり、八丈島漁民としても健やかな遊漁又は、マリンレジャーであれば、これら愛好者と合意し理解と協力をすることによって、漁場の最大活用を図らなければならない。

漁業者は、この憲章に定めた事項を軸として、遊漁又は、マリンレジャーの愛好者及び関連事業者の受け入れについて、海の先達として積極的な姿勢で対処してゆかなければならない。

## 8 遭難等

- ・海上遭難・・・遭難・漂流・漂着・船上事故（マリソリヤーによるものは10章）
- ・自然災害・・・自然災害（漁港関係は6章）

西暦	年号	特記事項
-218	孝霊72年	秦の方士徐福の従者、童女 500人漂着。
1393	明德3年11月4日	明人宗閑なる僧 300人乗当前崎浦、同夜西風の悪風吹而31人即死了。
1469	文明元年10月20日	中之郷将監入道青ヶ島へ出帆行方不明。
1474	文明6年	勢州船、中之郷藍ヶ江港に漂着。
1475	文明7年	青ヶ島へ八丈島より出帆船国地へ漂着、過半死。
1478	文明10年	青ヶ島通路船便悪しく船便暫く無し。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・青ヶ島へ渡海船小岩戸にて難破溺死、1人だけ泳ぎ上る。</li> <li>・尋ね船青ヶ島へ出帆漂流中難破。</li> </ul> 12月：勢州船藍ヶ江へ漂着、この中に痢病者あり、島中伝染、翌11年3～4月頃：夥敷病死、漂流人不残死。
1512	永正9年	困窮甚だしく年貢1ヶ年分不納、依って八郎五郎、次郎三郎船頭23人島に逗留中なりしが、漁船にて注進に出島。
1523	大永3年	青ヶ島へ渡海の船2艘御蔵島へ漂着、同年4月帰島。
1526	大永6年	与次郎出島の処漂流、願いを掛け夏帰島。
1535	天文4年	春、鳥島より20人の漂流者八丈島着、その中には18年間鳥島で暮した者あり。
1547	天文16年	明僧宗感明船にて漂着。
1606	慶長10年	八丈島付近で海底噴火、火山島生成。（位置その後の模様不明。）
1616	元和2年	讃岐国の喜兵衛船(3人乗)、熊野灘で漂流、青ヶ島に漂着。（既に何人かの漂着者が居た模様）
1625	寛永2年7月	讃岐の船(3人乗)漂着。
1633	寛永10年	御蔵役船2隻、青ヶ島船1隻帰港。青ヶ島船破船。弥三右衛門預り小船乗組19人漂流、末吉名主岡右衛門の主張にて、神に祈り八丈島の山見え湊に入る。依って山を神止山または元乗山と言い湊を神湊、乗組員の姓を沖山と改正。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・青ヶ島船、八丈島へ渡海の節国地へ漂流し、帰帆に至りまた遭難、行方知れず。</li> </ul>
1644	正保元年	唐船3艘八丈沖漂流、内2艘漂着。

9月19日：代官豊島作十郎忠松の乗船、八丈三宅間において難破、溺死。

- 1671 寛文11年5月：勢州船（8人乗り）、無人島（鳥島と考えられる。）に漂着1人死亡、7人で破船の木材で箱船を造り無人島を出港、8日目に中之郷藍ヶ江港に漂着。1行は鳥の卵を多量に持参す。
- 1674 延宝2年：唐船造りの船無人島（小笠原島の事ならん）巡視航海中、三根沖に繫留。
- 1675 延宝3年4月7日：唐船造りの船（代官伊奈忠易の乗船ならん、国史に見ゆ）無人島巡視中寄港。  
4月9日：薩州船（15人乗組）八丈小島に漂着。積み荷は米。大賀郷へ曳航。  
11月11日：摂州船（船頭庄兵エ、12人乗）、末吉浦に漂着、積み荷は塩。
- 1677 延宝5年9月9日：大津波、谷戸ヶ里（八戸）迄襲う。
- 1678 延宝6年：御赦免流人御用船小島にて破船。
- 1689 元録2年11月5日：勢州船（船頭太郎兵エ乗組15人）、大賀郷浦へ漂着。
- 1690 元録3年2月15日：泉州佐野浦船（沖船頭仁兵エ乗組12人）、八丈小島へ漂着。  
2月15日：摂州船（沖船頭伝兵エ12人乗）、八丈小島へ漂着。  
2月22日：勢州船中之郷汐間へ漂着、米1,300俵陸揚げ、月末暴風に遭い破船。  
6月：御蔵役船2艘流人を乗せ着島遭難。
- 1692 元録5年2月5日：尾州名古屋船（船頭善四郎乗組12人）、大賀郷浦へ漂着。積み荷は桧材と餅米。  
12月：周防の助三郎船、三根神湊港へ漂着、積み荷はお城米。
- 1695 元録8年8月28日：摂州船（15人乗組）、中之郷に漂着。積み荷は松平陸奥守の御城米。  
9月4日：摂州船（船頭惣吉郎乗組17人）、漂着、積み荷は松平陸奥守の御城米。
- 1696 元録9年：薩州鹿兒島船（船頭四郎左エ門乗組14人）大賀郷浦へ漂着。
- 1697 元録10年：渡海役上野長右衛門、大賀郷大里薬師尊像に海上平安を祈願服籠。
- 1698 元録11年5月25日：薩州大島（琉球）船漂着。船頭ブライ。そのまま出港。
- 1700 元録13年：小島船、青ヶ島へ向け出帆行方不明。
- 1702 元録15年：種子島船、青ヶ島に漂着。
- 1703 元録16年11月22日：夜大地震、津波上がる。麦作損耗。願いにより、種麦百石払下げ。

- 1704 宝永元年：大阪の喜左衛門船（17反帆・11人乗り）青ヶ島に漂着。
- 1707 宝永4年2月1日：夜土佐国田野浦六平船中之郷へ漂着。  
・津波上る。潮上り麦作枯る。願に依り扶食穀物、他にお手当、143両3分永 150文4分下附、北米二百石許り措置仰付らる。
- 1708 宝永5年10月13日：三宅島名主惣兵エ船（乗組6人）、神湊へ漂着。
- 1710 宝永7年2月5日：尾州名古屋船（沖船頭忠左エ門乗組8人）、神湊に漂着。積み荷は米。  
2月6日：摂州船（15人乗組）、八重根に漂着。  
7月23日：泉州船（10人乗組）、大賀郷に漂着。  
・八丈島へ漂流船この他10艘、何れも登り船。
- 1711 正徳元年4月27日：肥前の国船、中之郷に漂着、積荷大豆。  
10月3日：八丈島出帆の処、この船房州新湊に漂着に付同所より陸路を江戸へ通る。  
11月：大阪の漂流船三根着、庖瘦を患う者あり各村に流行。死亡者980～990人。  
11月下旬：大阪伝法船三根へ漂着。
- 1713 正徳3年1月28日：15人乗組船、中之郷沖で破船、積荷、酒1,700樽。  
12月3日：豊前国船（七郎左エ門代官所御城米 600石積）、大賀郷に漂着。  
12月3日：美作国船（堀内六郎兵エ代官所御城米 1,200石積）、大賀郷に漂着。  
・幕府の雇船・大島船青ヶ島で破船。  
・豊後の国御城米沢山積2艘漂着。
- 1714 正徳4年7月7日：青ヶ島百姓金蔵・金太夫の息子2人（14～5才）沖の根で船釣り中御蔵島へ流され、9月25日無事青ヶ島へ生還。青ヶ島住民の記録としては唯一のもの。  
11月7日：相州内浦船（積荷薪）、三根に漂着。
- 1715 正徳5年1月3日：摂州船（船頭万之助乗組16人）、末吉浦に漂着。  
2月5日：摂州船（17人乗組）、三根に漂着、積荷は干鰯・トコロテン草・空樽。  
9月4日：大阪船（12人乗組）、漂着。積荷は木綿・油・砂糖・線香・釜・酒・仏画・書物・小間物。  
11月14日：大阪船（15人乗組）、漂着。積荷は木綿12,066反・酒・油・醤油・半紙。

- 1716 正徳6年1月1日：薩州船（19人乗組）、漂着。積荷は鍋・煙草・トウホウミ。  
 2月上旬：大阪船（6人乗組）、八重根に漂着。積荷は麻・干鰯。  
 2月3日：大阪船（17人乗組）、漂着。積荷は干鰯 300俵と煙草。  
 2月3日：芸州広島船（6人乗組）、漂着。積荷は塩 444俵。  
 2月6日：備後の国船（17人乗組）、漂着。積荷は酒 5～600 樽。  
 2月27日：大阪船（16人乗組）、漂着。積荷は干鰯・煙草。  
 ・漂着船取扱の儀により、地役人等を糺問翌享保2年罰せらる。
- 1716 享保元年7月12日：青ヶ島船年貢の紬を積み大賀郷着。鯉節も大量に積載。  
 9月：12人乗りの青ヶ島船八丈島を出港、漂流し、薩州に着く、9人死亡。
- 1717 享保2年2月12日：奥州仙台船、八丈小島沖に漂着、三根へ曳航。積荷は米及び大豆。  
 2月13日：奥州仙台船、八丈小島で破船、積荷は米 398俵、大豆 217俵。  
 ・紀州船2隻（15人乗り）青ヶ島に漂着。
- 1719 享保4年10月6日：大阪船（水主初次郎・水手14人乗組）、漂着。  
 10月6日：阿州船、神湊に漂着。積み荷は塩。  
 11月3日：紀州船（10人乗組）、中之郷に漂着。積荷は木炭・薪。  
 11月10日：奥州津軽船（7人乗組）、漂着。  
 ・青ヶ島船入島南風大時化で難破、全員溺死。
- 1722 享保7年12月：松平大隅守船、漂着。積荷は材木・大豆。  
 12月：阿州船、漂着。
- 1727 享保12年5月5日：勢州二見浦船（直乗長四郎・水主10人乗組）、三根へ漂着。  
 積荷は濃州辻甚太郎お代官所御城米。
- 1728 享保13年：玉置四郎右衛門預り船難破。
- 1736 元文元年：玉置四郎右衛門預り御船、新島において破船。
- 1739 元文4年5月1日：三根村へ武州江戸堀江町宮本晋八郎船、無人島から漂着。  
 5月2日：三根村へ遠州荒井船、鳥島漂流3人漂着、5月29日帰国。
- 1743 寛保3年12月19日：尾張の与十郎船、永道丸（5人乗）紀州長島沖で漂流、翌年元旦青ヶ島に漂着、この時先着の漂流者12名あり。
- 1753 宝歴3年12月11日：南京船71人乗八重根漂着。長楽寺に寓居、同4年3月、船の

余材にて、支那風の門を造り寺へ寄進。

- 1768 明和5年6月26日：服部源蔵預り御船、年貢積入大賀郷赤形浦にて破船、年貢無事に上がる。
- 1773 安永2年9月：山下与左衛門預り御船、八重根にて2艘破船。
- 1775 安永4年5月28日：薩摩国付琉球枝島大島西間切古志村船（沖船頭共8人・外便船重2人乗組）、八重根漂着。この船は言語和国に通用し、鬼ヶ島へ牛をかうためのもの。同年帰国。
- 1779 安永8年8月8日：青ヶ島神火見分の為青ヶ島御船年寄忠次郎出島、帰帆の処漂流江府へ着し、10月4日八丈島着。青ヶ島見分に出島帰帆中又江府へ漂着、翌年帰島。
- 1782 天明2年：無人島（小笠原）御尋ねの積もりにて、山下与左衛門預り御船惣矢ノ倉に於て島にて作事被仰付。佐藤玄六郎外参拾人乗組、3月29日御船卸し、汐繫り4月朔日出帆果さず、下田へ漂着島方乗組人帰島。
- 1783 天明3年12月8日：青木楠五郎様代官所、摂州御城米 718石余積入神湊へ漂着。  
12月：摂州河内屋平吉船、漂着。
- 1784 天明4年2月3日：摂州松尾甚右エ門船（船頭伊兵エ・親仁・甚八・水手13人乗組）、漂着。  
7月：八丈島通用船に地役人年寄役乗船出島漂流、相州小網代に着き帰帆中行方不明。
- 1785 天明5年2月14日：土佐の国、儀七船（4人乗）鳥島に漂着。  
4月18日から5月頃まで青ヶ島噴火、島民 327人の内 130～ 140人死亡。残りは八丈島へ避難。以降50年余無人島となる。  
10月9日：大賀郷城下にて御蔵役船難破、為朝明神神体同船帰島の処無事上がり、江府へ御届け申し上ぐる。菊池織部船頭服部源蔵等9人溺死。
- 1788 天明8年2月4日：大阪、金右衛門船（11人乗）鳥島に漂着。  
6月19日：三根村より鯉釣船出漁、壹艘大島へ漂着。
- 1789 寛政元年12月7日：奥州平次郎船（沖船頭四郎）漂着。
- 1790 寛政2年：日向国、三右衛門（6人）鳥島に漂着。  
1月23日：中之郷汐間へ摂州大阪織屋町小堀屋喜左衛門船沖船頭政吉、水主共に17人乗、拾い荷積入同所沖に汐繫り、浦手形を取り御届け申す。  
3月8日：奥州仙台石巻船（沖船頭吉蔵・水手16人乗組）、三根に漂着。  
8月7日：八重根鮫瀬場より内へ唐船漂着。
- 1793 寛政5年：服部預り御船神湊にて破船、郷社へ手水石奉納。

- 1797 寛政9年8月：鳥島漂着者、土佐・肥前・薩摩船々員14人八重根へ漂着。9月4日服部源五郎預り船にて帰国。
- 1804 享和4年1月10日：尾州内海浦船（直乗船頭7人乗）、八丈小島沖漂流、八丈島漂着。積荷は塩・半紙・苳・蕎麦。
- 1811 文化8年2月：出羽国船、中之郷藍ヶ江に漂着。積荷は上杉弾正預所米。
- 1812 文化9年3月：出羽国船、八重根に漂着。積荷は上杉弾正預所米。  
10月7日：江戸北新堀松葉屋十次郎船（沖船頭順蔵外8人乗組）、洞輪沢に漂着。
- 1813 文化10年：大島船、八重根に漂着。  
10月12日：土佐国高岡郡島浦船（直乗船頭外2人乗組）、洞輪沢に漂着。
- 1816 文化13年2月23日：遠州内蔵伊兵エ船（沖船頭清六）、三根垂土に漂着。  
2月25日：遠州浜松屋新左エ門船（沖船頭太右エ門・親仁左エ門・水手・炊夫各1人乗組）、洞輪沢に漂着。積荷は領地米。
- 1817 文化14年：遠州船、神湊に漂着。積荷は松平伊豆守年貢米。
- 1820 文政3年12月：奥州仙台船、八重根に漂着。積荷は古着。
- 1823 文政6年12月19日：尾州知多郡半田村喜三郎船（直乗船頭13人乗組）、洞輪沢に漂着。
- 1825 文政8年：八丈島昌栄丸破船。
- 1828 文政11年2月4日：摂州西成郡日野屋与惣兵エ船（直乗他7人乗組）、洞輪沢に漂着。  
2月8日：三州佐久島船（船頭水手共3人乗組）、三根東浦に漂着。  
9月：金右衛門船（7百石）米穀・糸・木綿積込み帰帆の処漂流、翌年7月5日江戸へ着。翌12年9月金右衛門船（沖船頭儀兵衛、13人乗）米穀・糸・木綿等積入、江戸出帆漂流後天竺之内島へ漂着記録残る。  
10月25日：摂津国八部郡神戸浦船、八丈小島に漂着。積荷は摂津国村々の去年の年貢米江戸御回米。
- 1832 天保3年11月：奥州仙台石巻忠之丞船（17人乗組）、洞輪沢に漂着。積荷は陸奥守年貢米。
- 1835 天保6年：正月：御用船行方不明。流人船難破、人に怪我なし。9月又難破。
- 1841 天保12年12月28日：阿波国那賀郡中島浦の14人乗組船、大賀郷に漂着。  
12月：安房国那賀郡中島浦角屋次兵エ船（12人乗組、外便船2人）大賀郷に漂着。  
・土佐の国漁船（船頭筆之丞外3名乗組）スズキ漁中遭難漂流、鳥島に漂着、5ヶ月後にウミガメを探しに寄港した米国の捕鯨船（ジョンホー

ランド号)に救出され米国に向かう。この中にジョン万次郎あり。

・江戸堀江町市兵エ船(前年9月14日青ヶ島に漂着、13人乗組内3人は急病のため浦賀に残置)青ヶ島から入港。

- 1842 天保13年4月25日:大阪道頓堀新大里町橋屋利八船(15人乗組)、藍ヶ江に漂着。  
7月28日:安房国那賀郡中島浦角屋次兵エ船(12人乗組)、大賀郷大越鼻で難破、1人行方不明。
- 1843 天保14年1月3日:上州幡多郡下芽浦新六船(3人乗組)、中之郷小岩戸鼻で漂流。
- 1845 弘化2年2月26日:讃州大内郡引田浦久次郎船(11人乗組)、八重根漂着。  
2月27日:江戸南新堀町甚太郎船(7人乗組)、藍ヶ江に漂着。  
12月10日:尾州知多郡古場村兼蔵船(7人乗組)、三根船居崎漂着。
- 1846 弘化3年2月24日:大阪安堂寺の乗組員12名の船、三根に漂着。  
8月24日:大阪帯屋和作船(沖船頭水手12人乗組)、三根鮫切瀨漂着。  
9月16日:奥州仙台門脇卯之吉船(16人乗組)、藍ヶ江に漂着。  
12月22日:尾州知多郡下半田村清三郎船(14人乗組)、藍ヶ江に漂着。
- 1847 弘化4年7月19日:豆州若沢郡古関村九平太船(5人乗組、前年9月1日青ヶ島に漂着)、青ヶ島から来航。  
10月23日:摂州西成郡伝法仁兵エ船(16人乗組)、八重根に漂着。  
10月25日:播州八部郡神戸浦又兵エ船(上乘小者共18人乗組)、八丈小島鳥打村に漂着。  
12月6日:薩州船(御手船々頭河野税右エ門外18人上乘松岡藤太郎外1人)、末吉川尻浦漂着。  
12月15日:播州赤穂郡富之助船(直乗船頭16人乗組)、神湊に漂着。  
12月27日:紀州日高郡日井浦久蔵船(16人乗組)、中之郷汐間浦に漂着。  
・雇船三宅島伝右衛門船積荷陸揚後出帆行方不明、長崎奉行より通知。
- 1848 嘉永元年10月25日:伊予国風早郡船与十郎船(直乗船頭水手共12人、内1人浦賀に残置)、神湊に漂着。  
10月25日:摂州兔原郡東明浦柴屋又左エ門船(15人乗組)、八丈小島に漂着、翌26日八重根に着く。
- 1849 嘉永2年4月26日:三宅島伊豆喜太郎船(船頭・水手3人乗組)、神湊に漂着。同船に同島百姓7人便船。
- 1850 嘉永3年1月8日:三州高浜の栄三郎船・竹久丸(15人乗)、13日淡州津名郡志

筑浦の九右衛門船・春吉丸（10人乗）、播州坂越浦の松次郎船住寿丸（11人乗）、14日淡州三原郡の新蔵船・福膳丸（5人乗、この船には洋上で救助した、越中国射水郡次郎兵衛船・淡寿丸の7人が同乗。）、17日大阪佐兵衛船・長栄丸（11人乗、この船には江戸北新堀松福丸の8人が救助され乗船。）、20日加賀国の島屋徳兵衛船・宝栄丸（12人乗）、以上青ヶ島に漂着。これらの船は4月16日青ヶ島を出島、同日八丈島大賀郷に到着。

1月8日：播州赤穂郡坂越浦の矢子屋彦兵衛船明德丸（14人乗組）小島宇津木へ漂着。

1月10日：大阪淡路町の錫屋庄兵衛船寿通丸（16人乗組）、三根村神湊へ漂着。讃州塩飽牛島の平右衛門船（13人乗組）、尾州常滑の忠蔵船嘉永丸（9人乗組）、中之郷藍ヶ江漂着。

1月11日：播州赤穂郡坂越浦義平船小竹丸（11人乗組）末吉神子崎漂着。

1月13日：越後国青海浦太次右衛門船観在丸（11人乗組）、摂州鳴尾半右衛門船成竜丸（16人乗組）、大賀郷八重根漂着。

1月13日：淡州津名郡志気浦春吉丸久右エ門船（直乗船頭共乗組10人）、青ヶ島に漂着。

1月13日：播州赤穂郡坂越浦松次郎船（直乗船頭共乗組11人）、青ヶ島に漂着。

1月14日：尾州常滑長次良船幸栄丸（10人乗組）小島宇津木へ漂着。

1月14日：越中国次郎兵エ船（直乗船頭共7人乗組、外に救助した淡州三原郡福膳丸乗組5人便船）、青ヶ島に漂着。

1月15日：阿州答島の善兵衛船喜栄丸（10人乗組）、小島宇津木漂着。

1月16日：紀州尾鷲浦八郎兵衛船喜福丸（12人乗組）、紀州鶴殿彦右衛門船観喜丸（8人乗組）、尾州知多郡野間一式村藤次良船春日（12人乗組）末吉漂着。

1月17日：江戸新堀孫市船（沖船頭共乗組8人、外に途中で救助した大阪船坂町佐兵エ船乗組11人便船）、青ヶ島に漂着。

1月20日：加賀国向東崎船（沖船頭長次郎共12人乗組）、青ヶ島に漂着。

1月26日：紀州和歌山御影屋市兵衛船和合丸（7人乗組）、小島鳥打漂着。

2月13日：大坂木屋市十郎船住清丸（16人乗組）、末吉巻縄浦漂着。摂州西田屋弥平次船天徳丸（17人乗組）、摂州今津利作船三社丸（16人乗組）、三根神湊漂着。

- ・「当春3月中、青ヶ島の方より人多く乗りたる船、白帆を上げ、合図の火を立て、こなたを指して漕ぎ寄するによって、中之郷の浜辺にて火を合わせつつ、末吉の海岸に火を合わせしに、洞輪沢に入るかと思えば、忽ち迷いの火群消えて、後波の泡。見る人哀れをもよほしぬ。又青ヶ島の海岸には、夜な夜な、夥しき人声にて助けを求めて叫ぶ事かまびすしく、聞く人、身の毛もよだちけり」と八丈実記に記述あり。

11月3日：三州松江の栄蔵船（8人乗組）、中之郷藍ヶ江漂着。

11月5日：摂州沢田屋十兵衛船富貴丸（16人乗組）、三根神湊漂着。

11月16日：相州六平衛船（5人乗組）、末吉洞輪沢漂着。

11月：栄力丸、青ヶ島沖を漂流、1ヶ月後オークランド号（アメリカ船）に救助さる。この中にアメリカ彦蔵こと浜田彦蔵が乗船。

1851 嘉永4年12月8日：遠州荒井鳥屋兵エ船（沖水主清右エ門、乗組11人）、洞輪沢に漂着。

12月8日：尾州野間浦甚蔵船（乗組11人）、大賀郷に漂着。

12月8日：大阪福島岩田屋市蔵船（沖水主庄十郎、乗組16人）、中之郷に漂着。

12月14日：江戸本湊町太郎兵エ船（沖水主安次郎、乗組9人、便船1人）、三根東浦に漂着。

12月14日：紀州日高郡由良之内阿戸村兵助船（乗組11人）、八重根に漂着。

12月14日：紀州大川浦弥左右エ門船（乗組10人）、八丈小島宇津木に漂着。

12月15日：紀州有田郡箕島村三郎船（乗組9人、救助せる江戸辻新堀富之助船乗組13人便船）、八重根に漂着。

12月16日：摂州大石徳太郎船（直乗船頭、乗組16人）、漂着。

12月17日：淡州津名郡相川久三郎船（乗組7人）、神湊に漂着。

1853 嘉永6年12月29日：奥州仙台差浜三郎船（乗組14人）、藍ヶ江に漂着。

1854 嘉永7年2月2日：阿州清右衛門船（3人乗）青ヶ島神子浦に漂着。5月29日八丈に来航。

2月2日：土州佐喜之浜浦住徳丸安太郎船（乗組3人）、檜立に漂着。

2月27日：防州熊毛郡府村要蔵船（乗組13人、便船2人）、八重根に漂着。

1855 安政2年2月14日：豫州野阿郡波止町岩松船（直乗船頭、乗組9人、増水手3人、上乘2人、計14人）、大賀郷前崎に漂着。

2月20日：奥州仙台石巻新七船（乗組15人）、藍ヶ江に漂着。

2月22日：江戸鉄砲洲本湊町完之助船（乗組8人）、神湊に漂着。

12月23日：紀州牟婁郡日置村三右エ門船（直乗船頭、乗組8人）、神湊に漂着。

12月23日：大阪安堂寺町八右エ門船（乗組17人）、大賀郷に漂着。

12月23日：播州赤穂義右エ門船（乗組12人）、中之郷汐間に漂着。

12月27日：暁天、阿州郡忠左衛門船（11人乗）青ヶ島ノコショへ漂着。  
翌4月29日八丈着。

1856 安政3年11月3日：房州長狭郡兵工船（乗組7人）、神湊に漂着。

12月28日：長州原狭郡藤曲浦又右工門船（直乗船頭、乗組8人）、八丈小島打津木に漂着。

1857 安政4年1月19日：奥州津軽郡青森浜町勘兵工船（乗組7人）、藍ヶ江に漂着。

2月8日：尾州知多郡野間浦藤十浪船（乗組12人）、神湊に漂着。

2月8日：遠州八十右工門船（乗組7人）、神湊に漂着。

2月9日：攝州八部郡沖戸浦二ツ茶屋太助船（乗組6人）、洞輪沢に漂着。

2月10日：安治川亀次郎船（20人乗）青ヶ島三宝浦に漂着。同船5月24日八丈島着。

3月16日：大隅国肝属郡柏原甚兵工船（乗組7人）、洞輪沢に漂着。

12月12日：摂州御影村富貴丸澤田屋中兵工船（沖船頭佐太郎外乗組15人）、大賀郷前崎沖漂着。

12月12日：摂州神戸戎丸林屋太助船（沖船頭林大、乗組15人）、大賀郷前崎沖漂着。

12月12日：大阪安治川伊勢丸新右工門船（沖船頭重太郎、乗組15人）、大賀郷前崎沖漂着。

12月12日：大阪安治川兵助船（沖船頭悦十郎、乗組15人、増水手2人、便船1人、計18人）、大賀郷前崎沖漂着。

1858 安政5年1月10日：紀州春陽丸（紀伊殿御家老水野上佐守殿手船、船頭役里地善助外6人計7人乗組）、洞輪沢に漂着。

1月12日：勢州次平船（直乗船頭、5人乗組）、青ヶ島金太郎浦に漂着。

3月22日：遠州掛須賀股引屋豊助船（沖船頭与助、乗組7人）、洞輪沢に漂着。

1859 安政6年12月3日：紀州牟婁郡下里浦亀助船（直乗船頭、乗組3人）、三根垂土に漂着。

1860 万延元年1月8日：土佐道太郎船（沖船頭丑之助、水主三次郎、乗組2人）青ヶ島金太郎浦に漂着。同船6月21日神湊着。

10月5日：越前国三国彦次郎船（沖船頭清蔵、乗組12人）、八重根に漂着。

1861 文久元年12月5日：尾州熱田宿白馬町文右工門船（直乗船頭、乗組7人）、三根船居崎に漂着。

12月9日：江戸本町四丁目伊勢屋清右工門船（沖船頭悦蔵、乗組13人）、

神湊に漂着。

12月9日：尾州小野浦忠兵エ船（直乗船頭、乗組14人）、神湊に漂着。

12月10日：淡路津石郡相川村宮次郎船（直乗船頭、乗組増水手、便船計7人）、青ヶ島に漂着。同船翌6月28日八重根着。

12月10日：江戸本町材木町和泉屋三郎船（乗組12人）、八丈小島宇津木に漂着、同日八重根に着く。

12月22日：大阪富島小西辰之助船（乗組12人）、洞輪沢に漂着。

1862 文久2年1月23日：筑前国残島次平船（沖船頭左右エ門、乗組13人）、大賀郷前崎浦に漂着。

10月12日：摂州大阪中之島塩飽屋消右エ門船（乗組11人、便船2人）、青ヶ島に漂着。同船翌6月10日八重根着。

1863 文久3年1月18日：阿州那賀郡橋浦清吉船（直乗船頭、乗組3人）、藍ヶ江に漂着。

1月24日：松前函館弁天町佐三郎船（乗組4人、増水手7人）、三根鮫浜に漂着。

2月26日：摂州兵庫鍛冶屋忠蔵船（直乗船頭、乗組11人、内1人沖合にて病死）、青ヶ島に漂着。同船翌年八重根着。

1864 元治元年11月24日：第二長崎丸（幕府がイギリスから購入した鉄船、購入前の船名がビクトリヤ）中之郷藍ヶ江に漂着沈没。ビクトリヤの名称が刻み込まれた鐘が、同所大御堂に保存。尚、船の外輪・シャフト等は港内に残るも、朝鮮動乱時金属の価格高騰の折、漁業者によって引き揚げ、売却されたとか。

1865 元治2年1月6日：松前福山小松前町吉左エ門船（沖船頭孫次郎、乗組5人）、大賀郷日之瀉に漂着。

1865 慶応元年7月31日：阿州徳島津田浦嘉平船（直乗船頭、乗組2人）、八重根に漂着。

12月2日：豆州賀茂郡富戸村惣助船（乗組7人）、中之郷大浦ヶ沢に漂着。

1866 慶応2年1月5日：和泉国談輪政吉船（直乗船頭、乗組8人）、末吉中越浦に漂着。

1月6日：紀州新宮佐五右エ門船（乗組9人）、洞輪沢に漂着。

1月6日：紀州和歌浦佐右エ門船（沖船頭甚右エ門、乗組3人）、青ヶ島に漂着。同船7月7日八重根着。

1867 慶応3年2月23日：勢州長島又左エ門船（沖船頭栄次郎、乗組10人）、末吉中越浦に漂着。

1868 慶応4年1月27日：御勘定奉行支配船（船頭役清吉、乗組9人）、末吉中越浦に漂着。

- 1868 明治元年12月27日：芸州大崎島白水村喜十郎船（沖船頭龜吉、乗組11人）、大賀郷栄花瀉に漂着。  
12月：尾州知多郡亀崎村甚七船（直乗船頭、乗組2人）、神湊に漂着。  
12月：大賀郷に泉丸・亀吉丸漂着。
- 1869 明治2年6月6日：垂土に小船転覆漂着、溺死者1名。  
10月10日：三宅島阿古村積善丸（直乗船頭、乗組漂5人、便船4人）、三根に漂着。翌年3月14日帰帆。  
11月11日：土州高岡郡ウサ奥浦政吉丸（乗組2人）、青ヶ島金太ヶ浦に漂着。翌6月9日八重根に入港。  
12月：紀州新宮島止野浦妙閑丸伝兵エ船（直乗船頭、乗組4人）、大賀郷前崎に漂着。  
12月20日：志州英虞郡片田村幸寿丸熊吉船（直乗船頭、乗組3人）三根に漂着。
- 1870 明治3年1月10日：紀州新宮熊吉船15名乗組み洞輪沢に漂着。  
1月14日：紀州新宮妙周丸（4名乗組）、漂着。  
1月14日：備後国御調郡喜十郎船（太政官御米1,080石積入13名乗組）、小島鳥打に漂着。  
1月26日：薩州開運丸8人乗組、藍ヶ江に漂着。  
2月25日：薩州島津薩摩守手船（船頭留次郎、乗組8人）、鳥島より中之郷藍ヶ江に着。  
4月14日：備後の国御調郡因島三床村大日丸喜市船（直乗船頭、乗組13人）、八丈小島に漂着。八重根に入港。  
6月9日：土州高岡郡ウサ奥浦政吉丸（乗組2人）、前年11月11日青ヶ島金太ヶ浦に漂着、八重根に回航。  
10月20日（閏）：紀州牟婁郡妙神丸3人乗組み漂着。  
12月4日：薩摩藩手船20名乗込み洞輪沢に漂着。  
・ベヨネーズ列岩小島噴出。  
・須美寿島近海噴火。南西約18km、高さ13mの新島噴出。沈下時期不明。
- 1876 明治9年12月：大麻丸、大賀郷に漂着。
- 1882 明治15年6月：七福丸（16人乗）青ヶ島より東京に航行中行方不明（積荷に鯉節200個、2,000貫あり）。  
8月：宝吉丸（33人乗）青ヶ島より八丈島に渡航中、西大風に遭い19昼夜で下総沖に漂着、船体・積荷破船損失（積荷に鯉節50個、500貫・塩辛270樽あり）。

- 1884 明治17年 8月：金比羅丸（20人乗）・順風丸（10人乗）青ヶ島より八丈島に渡航中暴風のため鳥島近海に吹き流され積荷打捨。
- 1885 明治18年 2月：三重県 秋津丸 遭難漂着。  
・金比羅丸（15人乗）青ヶ島より八丈島に渡航中、暴風のため積荷過半打捨（鯉節50個 500貫・塩辛 150樽あり）。
- 1886 明治19年 4月：順風丸（19人乗）青ヶ島より八丈島に渡航中、暴風に遭い積荷打捨て、志州鳥羽浦に漂着。  
8月：金比羅丸（15人乗）八丈島より青ヶ島へ帰航中三宅島に漂流、帰島の際神子浦で船体破損積荷流失。
- 1887 明治20年 4月25日：二見丸破損、島民2名溺死。  
7月：青徳丸（25人乗）青ヶ島より八丈島に渡航中上総沖へ漂流。その後帰航中三宅島近海で暴風に遭い、積荷打捨。  
・押送船（15人乗）青ヶ島より八丈島に渡航中、大風に遭い積荷打捨。
- 1889 明治22年 9月：青宝丸（15人乗）八丈島より青ヶ島へ帰航中、暴風雨に遭い紀州沖に吹き流され、23年 6月帰島。  
・押送船（7人乗）八丈島より青ヶ島へ帰航中、暴風雨に遭い志州に漂着。23年 5月八丈島に帰り、八丈島より帰航中再び暴風に遭い、上総小湊に漂流、同年 8月帰島。
- 1890 明治23年 5月：押送船（9人乗）八丈島より青ヶ島へ帰航中御蔵島に漂流したるも無事帰島。  
6月：押送船（10人乗）青ヶ島より八丈島へ航行中、伊豆大島に漂流したるも無事帰島。
- 1891 明治24年 1月：岡清次郎船、大賀郷に漂着。  
7月：押送船（16人乗）青ヶ島より八丈島へ航行中、御蔵島へ漂流したるも無事帰島。
- 1892 明治25年12月31日：和歌山県勝浦沖で12月26日遭難した秋刀魚漁業船63隻、乗組員 749人中、八重根へ 179人、青ヶ島31人、御蔵島19人、計 229人筏で漂着。一行は翌年 1月 6日迎えの軍艦天城で帰国。  
12月：七兵エ船、大賀郷に漂着。
- 1893 明治26年 5月 3日：東京で実施される徴兵検査をうけるため、青ヶ島の壮丁11名・船頭 1名・船方 3名・便乗者 2名、計17名の島人が乗船した帆前船が、神子浦の岸を離れて1キロメートルも沖へ出たかと思うと、濃い霧が立ちこめ、船影が隠れてしまい、数分間後に霧が晴れた時には、船は忽焉として視界から消えていたという。（この船は紀州から漂着したもので、帆柱を生木の杉丸太に取り替えたものであり、バランスを崩したものとされている。）
- 1896 明治29年：ベヨネーズ列岩新島出沒。
- 1902 明治35年 8月 7日：鳥島大噴火。島の南南西約 1 kmの海中及び島の北西岸で爆発、

後者は兵庫湾を形成、全島民(125人)死亡。

- 1905 明治38年：和歌山県牟婁郡小田町漁船（3名乗組）、洞輪沢に漂着。
- 1906 明治39年4月7～13日：ベヨネーズ列岩海海底噴火。噴煙・軽石浮流。
- 1907 明治40年4月11日：浅沼太吉持漁船強風のため沈没、1名這上がり、5名行方不明。
- 1911 明治44年10月25日：住吉丸、遭難し末吉に漂流救助を求め、大野丸赴き人命のみ救助。
- 1913 大正2年4月3日：佐々木丸、三根底土に漂着。  
4月9日：紀州丸、神湊に漂着。
- 1915 大正4年3月23日：小宮宗一船（6人乗組）、漂着。  
4月8日：伊豆大島漁船底土沖で転覆、乗組員6名の内1名救助。  
6月19日：7月1日：ベヨネーズ列岩付近海底噴火。
- 1916 大正5年2月11日：静岡県順徳丸洞輪沢に漂着。14日、船は沈没。  
6月21日：スミス岩礁付近で海底噴火。
- 1917 大正6年6月4日：高知県秀吉丸洞輪沢に漂着、人命救助。
- 1918 大正7年4月8日：小宮山謹一所有飛魚船、神湊で難破、死亡2名。
- 1919 大正8年3月1日：神湊西港の民家より出火、船小屋延焼、漁船7～8隻焼失。  
10月6日：暴風により三根で漁船8隻破碎。  
12月26日：運搬船、紀州潮岬付近で12月21日遭難し、神湊に漂着。
- 1921 大正10年1月24日：海苔採りの婦人2名（浅沼ヌタ・小宮山キセ）、長の入で溺死。
- 1923 大正12年3月21日：大増丸、三根に漂着。  
4月6日：第2南海丸（30t）、4月1日新宮より大阪向け材木運搬途中、紀州潮岬沖で遭難、三根垂土近海で破船。
- 1924 大正13年1月1日：三重県第十浜城丸（鮪運搬船、60t）、前年12月27日紀州潮岬沖で遭難、神湊に漂着。  
4月上旬：日向油津港模陵丸（材木運搬船、70t）、四国土佐沖で遭難、三根沖S E方向に漂流。
- 1925 大正14年3月30日：大賀郷漁船、檜立海岸で遭難し房州人5名死亡。  
4月5日：八丈丸（東京湾汽船、345t 大正8年5月竣工）神湊で沈没、13名死亡、1名は帆柱に攔り陸からの救援ブイで助かる。三根漁船8隻沈没、30名死亡。末吉漁船2隻沈没12名死亡。大賀郷漁船3隻行方不明。被災漁船、櫓船にして殆ど房州の季節出稼ぎ船なり、季節外は漁船を小

屋掛（船小屋）保存。

注）大正から昭和初期にかけて、飛魚漁期（3月初旬から5月中旬）には、千葉県（白浜・七浦・布良・太東）・伊豆大島等から漁師が来島、その数は毎年千人にも達したと伝えらる。

12月31日：大漁丸（鮪船、25t）、12月27日紀州潮岬沖で遭難、洞輪沢に漂着。

1926 大正15年6月21日：須美寿島西端で爆発音と黒煙・付近に降灰砂。

12月：静岡県遠寿丸（秋刀魚船、20t）、三重志摩沖で遭難、神湊に漂着。

1927 昭和2年1月20日：第3住吉丸（徳島県阿波、鮪船、30t）、1月17日紀州勝浦沖15マイルで機械故障、垂土沖に漂着投錨、修理不可能につき船引揚。

5月6日：和歌山県田辺町豊丸（鰹漁船42人乗組、70t）、八丈島N30マイルで遭難、三根垂土に漂着。

6月5日：和歌山県田辺市豊丸（60t）垂土で遭難33名救助、19名の遺体引揚げ。

1928 昭和3年1月3日：土佐安芸郡海宅丸（鮪船、18t）、前年12月28日紀州勝浦沖で遭難、末吉に漂着。

12月20日：紀伊串本町光善丸（船主小西常松・船長小森政市以下14名乗組・18t, 55馬力）、12月20日紀州潮岬S130マイルで遭難、大賀郷八重根に漂着。

1932 昭和7年4月20日：静岡県加茂郡松崎町の円福丸の漁夫関参（29才）外8名が、伝馬船で水汲みに赴く途中転覆、潮の流れが速く溺死せんとするところを、三根浅沼保男（25才）・浅沼保二（27才）・持丸武敏（29才）・小宮山才一郎（28才）が救助。

1934 昭和9年2月24日：大賀郷草刈よしわ（56才）、八重根港西口ナベイン海岸で朝から海苔採取中、過って海中に転落溺死。

5月：ベヨネーズ列岩、海面変化・海水黄変・硫黄臭確認。

9月19日：夜来よりの強風は昼頃より俄に風力を増し、関係者の出動警戒の中、八重根港に繋留中の三根村在住の本橋弥惣兵衛所有発動機船弁天丸（船籍安房）激浪に見舞われ危機に瀕するも、警鐘によって消防組員・青年団・一般村民等集合救助に当たり、引き揚げられ無事。

1935 昭和10年4月7日：神湊沖停泊中の紀州串本の漁船宝来丸（59t）、錨が切れてカトウレが鼻に座礁、須賀船長以下32名中31名無事救出、1名は、11日現現場下に打ち上げられているのが発見さる。

4月22日：末吉佐々木実蔵所有昭栄丸三根大根沖において発動機故障、朝に至るも帰港せず。連絡を受けた八丈島水産会黒瀬丸出動捜索に当たるとも発見できず。昭栄丸は自力で修理帰港。

1月22日：末吉村ふじ丸（乗組4名）、機関の故障で行方不明となるも救助さる。

- 1936 昭和11年 2月1日：神湊港停泊中の高運丸は波浪高きため洞輪沢へ避難のため錨を引上げ補助作業中の水夫金田定次（24才）墜落行方不明となる。
- 1937 昭和12年 3月9日：小岩戸で海苔採りの中の郷山本恵美（59才）波に浚われ、冲山きう（66才）発見大声を上げて救いを求め、冲山政治（50才）・山下春作（39才）飛び込み仮死状態の恵美を救助、手当を尽くして蘇生さす。この両名 9月12日警視総監から感謝状と金一封を受く。
- 3月18日：八重根沖合に帆を上げた発動機船がマストに大きな赤旗を掲げ漂着、金生丸が出動八重根に曳航。この船は和歌山県東牟婁郡勝浦町の漁船第二天理丸（20t、船頭堀部由之助以下11名乗組）で、16日母港を出港、17日潮の岬沖合 120哩の地点でスクリュウ脱落、遭難以来30数時間で救助されたもの。金生丸は 9月12日警視総監から感謝状と金一封を授与。
- 7月6日：小島から八重根港に向かい天草を満載し、発動機船徳神丸に曳航された伝馬船、大瀧浦沖合で曳綱が切断、激浪のため浸水し初め曳航船も機関故障、鈴木長松他17名は漂流し始める。当日は波高く操業船も見当たらず、一同困却するを持丸末次他15名乗組の三根漁船激浪の中八重根港まで曳航。後に警視総監から感謝状と金一封授与。
- 1938 昭和13年 1月5日：神湊に高知県幡多郡清水町の漁戒丸（船主山下鶴松、乗組3人5t）漂着。漁戒丸は昨12月26日珊瑚採取の目的で出漁するも、間もなく発動機に故障を生じ、11日間の漂流となったもの。これを救助した三根村消防組小頭小宮山才一郎・組員長田義行・川名熊雄に警視総監より6月表彰状が交付。
- 4月8日：三根西浜務所有吉祥丸（2t）は藍ヶ江付近で操業中発動機に故障を発生、折からの烈風にあおられ船体は損壊、乗組員菊池信之は救助さる。
- 5月22日：八重根の第六号金生丸（乗組員13名）の船員大山清吉は小島の北2哩の沖合で便意を催し便器を使用しようとして海中に転落、呼べど叫べどエンジンの音で聞こえず、途中で気が付いた仲間が引き返し探せど暗闇迫り発見できず。翌日の捜索を期して帰港。大山清吉は島目掛けて必至に泳げど潮が早く、永郷の方へ流れ着き午後10時頃星野徳平方に助けを求めて、介抱され一命無事。この冷え海に4時間半も耐えたことに一同感服。
- 8月4日：本島近海専用漁業権区域内に参入密漁する船が増加、大賀郷村漁業協同組合ではこの対策に腐心していたが、八丈署員・八丈現業場員の協力を得て、海幸丸で密漁船の取締に出動、八重根沖合で伊豆伊東一王丸・大分県の漁船2隻を発見、船長を海幸丸に呼び付け嚴重注意、将来を戒めて釈放。
- 9月24日：午後9時40分突如として近年稀有の大型台風襲来、瞬間最大風速60m、死者1、行方不明12、重軽傷者33、家屋倒壊300戸その他損害家屋1,400戸、農作物壊滅、漁船の被害24隻、内末吉丸（7t）神港丸（19.6t）は三根永郷沖で遭難沈没、人的被害は漁船の被害によるものを中心。末吉丸の乗組員が海中に投げ出され木片につかまって漂流している6名を、荒天にもめげず救助した三根村消防組員19名は、12月22日警視総監賞を受く。なお、怒涛逆巻く中を海中に飛び込み救助に当たった、持丸猛夫・山田孫一・金川藤造・東畑千代一の4名は感謝状のほか金一封も授与。
- 11月20日：2回に渡る台風のため青ヶ島村の舳は破損、荷役不能のため、

桐丸便の荷役は中之郷村艇組合が協力無事に完了。

11月24日：去る21日の台風で行方不明となっていた末吉平穩丸（船主佐々木武雄、船長小浜国松、19.9t）、浸水し漂流していたところを静岡県焼津の第一水栄丸（58.94t、船長甲賀栄治）が末吉村北東微東5哩の沖合で発見、乗組のうち5名は既に死亡、残り5名のうち3名はブリッジに2名はハッチに生存、生存者を救助して八重根港入港。平穩丸はその後三根消防組により曳航され神湊で機関の故障を修理、翌日三崎へ向け出港。この遭難では三根村青年団（35名）も協力。かつ、館山航空隊からは水上機2機出動。

12月11日：漁船保険組合設立のため都水産課から担当者来島、支庁会議室において関係者と協議。

・高知県の珊瑚採取船漁武丸神湊港に漂着。

1939 昭和14年 2月10日：青ヶ島東浦海岸に於て和歌山県勝浦港の第三久丸（19.9t）遭難。乗組員12名中11名救助、1名死亡。偶々伊豆浦海岸沖 300m に仮泊中の三浦三崎の吉兵衛丸に、荒天を突いて青ヶ島の佐々木徳七郎（24才）、村長の依頼文を頭上に結え船迄泳ぎつき、無事遭難者をカヌー船で2回輸送し帰郷さす。

8月17日：鳥島夕方から噴煙上がる。18日から噴火始まり住民31名、珊瑚船海幸丸（25t）に乗船周辺海域で待機。19日住民のうち5名第六神港丸に乗船八丈島へ向かう。20日住民のうち5名笠置丸で横浜へ向かう。10月2日住民7名珊瑚船山口丸で離島。この噴火は年末まで続き、牧牛51頭死亡、兵庫湾埋没。

9月22日：鳥島付近へ出漁中の珊瑚船第三伊予丸（小栗宇之助）及び漁徳丸（松本絹二）の2隻、低気圧の余波で遭難、第三伊予丸は大破して鳥島の港へ打ち上げられ、漁徳丸も港へ乗り上げる。両船共乗組員は無事、28日第六神港丸迎えに出港。

11月7日：神奈川県真鶴町ドックに陸揚中の末吉第三平穩丸（船主佐々木武雄）、午後7時出火、船体の外部だけ残し消失。

11月13、23日：南海タイムスに連続、‘一島民生’・‘一漁民生’名で鳥島近海珊瑚漁業に於ける、東京府水産係の許可の在り方に付いて猛省を促す文載る。一つは富の公平な分配を考慮し、許可は公平に広く。も一つは、珊瑚船の遭難が続いている、許可時期は台風シーズンを避けて安全性の確保を、というもの。これらは、珊瑚漁業の水揚が経済的にいかに高額で、関心の高いものであるかを示している。

1940 昭和15年 4月6日：神港丸遭難、人命は救助。

9月30日：静岡県漁船、福吉丸（140t）末吉沖白ママで遭難、56名中38名救助、18名行方不明。10月6日に至り岩陰の生存者2名を救助1名の死体発見。翌16年7月1日：福吉丸の新造代船神湊に入港、八丈全島各戸に鯉1尾宛配布、遭難当時の救助運動に対し、感謝の意を表明。

1941 昭和16年 2月7日：三根第六神港丸（登録噸数29.8t、実噸数36t、船主田代茂市・山本林市共同経営、乗組11人）、出漁し消息不明となる。この船に八丈島からの乗り込みは、中之郷沖山伊之助（40才）、末吉山本雅興（38才）の2人。大島分場の調査指導船・武蔵丸（鋼船、104.54t、250馬力）等で10日余も搜索に当たれども、発見できず。武蔵丸に八丈から乗船搜索に従事したのは三根小崎市右エ門・小崎芳樹・小栗清吉の3人。

1942 昭和17年 3月 1日：檜立で海苔採中西条広夫（21才）転落死亡。

6月30日：末吉の漁徳丸（船主松本）、青ヶ島で投錨して休憩中、疾風を受け岸へ打ち上げられ難破するも乗組員7名は無事、青ヶ島へ寄港した芝園丸で帰島。

9月7日：神湊漁港で長田時雄（25才）は、実兄の正治と底釣りに出漁しようとして出掛けたところ、船降ろし事故に遭遇、滑り下りる船の下敷きになり、直後は意識も確かであるも病院へ運び3時間後に不帰の客となる。彼は戦地より最近帰還したばかり。

1943 昭和18年10月24日：洞輪沢沖に漂流船を発見、乗組員7名救助せしが内1名（独国人）は上陸後死亡。

1944 昭和19年 2月 5日：中之郷梅原徳蔵（64才）、藍ヶ江堤防南側で釣り餌を採取中、突然の大波にさらわれ海中に転落、これを発見した山下直利・西條家安直ちに飛び込み、両側から抱えるようにして救助に努力しているのを見た、山下藤吉郎・山下種市カヌーを漕ぎ出し無事救助。

5月：大賀郷海幸丸出漁のまま行方不明。その後米軍に収容され、乗組員5名帰国のため横須賀へ上陸という情報が昭和21年11月伝わる。

1946 昭和21年 1月14日：徳島県運搬漁船藍ヶ江に漂着、船員5名全員救助。

1月20日：大賀郷菊池常次出漁中荷浦の海岸に機帆船が座礁しているのを発見。調査の結果、福岡県若松市西日本石炭輸送株式会社49号西完丸（102t）と判明。無人。

1月31日：洞輪沢の沖山磯子（18才）、昨夕迄沖合に停泊していた機帆船が汐間海岸に座礁し、しぶきをかぶっているのを発見、警防団に急報、14名の乗組員を無事救助、船中を見ると統制の島酒、椿油、木炭の闇物質。

2月10～11日：青ヶ島よりやや東方水平線上に、天に沖する火柱と黒煙が望見される。海中噴火か。

2月21日：還送物資輸送のため洞輪沢港に入港した赤倉丸（230t 三井近海機船、船長千葉義太郎）は波浪のため、ようやく乾燥野菜 3,000個の積み込みを完了後、機関に故障を起こし漂流、強い西風のため救助作業も困難を極め、3月7日三根人夫組合の決死的活動により船員9名、船客2名を全員救助。

2月25日：鳥島の気象観測所建設において、气象台職員遭難したのを奥山武光・菊池嘉雄・菊池正昭・菊池輝和、挺身救助。3月20日中央气象台長から賞状ならびに金一封を受く。

2月27日：ベヨネーズ列岩西方海上付近に新島（長さ200m、幅 150m）出現。

4月：新島更に数個出現（高さ36m）。10月新島（高さ 100m）1島のみとなる。12月：新島海面下に沈下。

6月11日：夜明八重根漁港に和歌山県牟婁郡串本町の漁船漂着。乗組員は東明（27才）・御影寅一（48才）の2人。この船は5月10日進水、未だ

船名も付けてない漁船（4馬力）。2人は串本港へ午前中に帰港する予定で出漁、天候の急変により遭難し、31日後漂着したもの。両人は米一粒も無く飲み水も無く、潮水と釣った魚を食料に、2人は16貫と18貫の体軀だったのに、見る影も無い60才以上の老人のような風体であり、その苦難の状況が忍ばれた。

1947 昭和22年 2月19日：和歌山港の第一春日丸（170t）、洞輪沢港へ漂着。同船は11日同港を出港、北海道へ石炭を積みに行く途中機関故障、西風にあおられ、青ヶ島沖迄流され洞輪沢に吹き流されたもの。ところが、同船に中国人11名が乗船。理由は、内地の汽車旅行が不便なので、東京迄船で行くのが楽だからとの言い分。

2月26日：昨年暮八重根に漂着した、和歌山県の漁船「玉丸」は応急修理不能のため現地で競売処理に付され、八重根の佐々木篤行は、秋田鯛作他2～3人の友人達と協力、8万円で落札。ところが、その後和歌山県沿岸を襲った地震と津波は、和歌山県沿岸の漁業界に大打撃を与え、玉丸の船主網中鶴吉は、和歌山水産試験場の試験船を曳航船として八重根に入港、被災し裸一貫にのなった立場から玉丸の買戻に当たる。しかし、佐々木篤行、頑として12万円を主張譲らず、網中鶴吉は付け値で購入となる。更に船降ろし経費について交渉の結果、佐々木側のサービスに落ち着かんとした時、漁業会の一幹部が「どの位経費が掛かるか分からないのに、只では困る」と横槍を入れるもサービスとなる。網中は「八丈島の同業者には情誼が無さ過ぎる」と涙を呑む結果となる。この買戻りに同行した水産試験場の白石嘉蔵指導部主任は、「八丈島の漁民諸君は水難救助の精神を欠いているのでは」と次の通り感慨を述べる。「和歌山県沿岸は地震と津波によって大災害を受け、失業した乗子の救済を凶るにも、和歌山県下では資材も資金も造船能力もなく当分造船不能の状態であって、そのため八丈島迄曳航に來た。和歌山県では水難救護会というのがある、漁民は全員入っており、県内のまた県外の漁船でも無報酬で救助に当たることになっている。八丈島には漁業者間に水難救護組織と相互扶助の精神が欠けているのではないのでしょうか」。

4月21日：八重根港ヤケンガハマで暴風のため飛龍丸座礁。暗黒と波浪のため救援の警防団・漁民手が出せず明るるを待って翌朝未明、船長片山亀吉以下18名全員と荷物共に救済。飛龍丸は350t、昭和11年進水、船名第三鮮友丸を改名したもの。八丈航路に就航して初航海での遭難。原因はクラッチ不良。

5月20日：横間海岸で山下祐市、漂着した直径5尺ばかりの国籍不明の機雷を発見、警察へ速報、22日警察・警防団出動、機雷の下に穴を掘り、ダイナマイトを多数埋め、導火線20尺を付け午前10時点火、全島を震撼させる大音響を發し爆発、無事処理を終る。

6月22日：広漁丸（下田船籍20t）は神湊漁港入港の際暗夜のため大平瀨の岩礁に座礁、波を利用し離岩し救助。

11月23日：八丈小島海域に操業した幸漁丸、帰港時小島から10数名を便乗させて、八重根漁港へ向かう途中機関故障を起し、西方へ流され、暗闇迫る頃これを望見した宇津木の住民は、村有の漁船を村民総出で進水、無事幸漁丸を八重根迄曳航。菊池光村長一同警察署長から感謝状を交付さる。

12月20日：愛知県渥美郡福江町丸芳丸（船主渡辺幸正、5t、12馬力）は、17日三重県へ甘藷を輸送の帰途機関に故障を起し漂流、三根長の入り海岸に漂着、乗組員5人泳ぎ上がり助かる。船は座礁破壊。

12月21日：千鳥丸（船長菊池長二郎39才）、永郷沖合3哩付近で底釣操業中10哩余沖に船影を発見、漂流船成りや否やの議論の末、万一漂流船なれば目覚め悪しと、帰港が遅れるのも厭わず、確認のため接近、漂流船と判明、曳航して神湊へ帰港。この漂流船は串本の久吉丸（船長知野久治）で、12月18日サンマ漁のため翌朝帰港の計画で出港、大島近海で魚群を物色中機関（焼玉 2.5馬力）が故障、3日間漂流していたもの。操業形態から飲料水や食料の備蓄も無く九死に一生と云うところ。

1948 昭和23年 3月7日：東海汽船の第三旭丸（200t、谷中船長）、木炭積取のため中之郷藍ヶ江港で繫留中、午前2時半頃約20mの風浪のため、同港東北方約500mの地点に吹き付けられ大破。中之郷村民は急遽救助に当たり全員救助するも、船長の内妻は救出後疲労の為、病院に収容加療すれど間もなく死亡。積み荷は前日大半を降ろしていたので飼料用のヌカ600俵が流失。損害は12,000千円程度。木炭の滞貨が問題化している時、木炭移出に島民大打撃。

5月23日：中央气象台観測船「夕汐丸」遭難の際、荒れ狂う怒涛の中、曳航作業に尽瘁した者に感謝状授与。大賀郷荷扱所・三根荷扱所・大賀郷村漁業会長・海進丸乗組員・金生丸乗組員・明神丸乗組員・黒潮丸船長・小林誠一・稲葉又三郎・奥山武巳・奥山敏光・西浜大吉。

9月2日：大賀郷菊池綾雄長男利明（14才）は、前崎海岸から白色陶磁器製の直径10cmの円筒形の物を拾い自宅へ持ち帰り、カマドの火に入れたところ、突然爆発、右足に大怪我を負う。

1949 昭和24年 2月22日：大賀郷村八戸菊池サトシ（66才）北ノウ海岸へノリ採りに出掛け、過って転落したらしく、その場を通りかかったノリ採りの沖山節子が、海に浮いているのを発見、人を呼び救助、蘇生を計れど適わず。潮干狩りの一人歩きは慎むよう当局より強調あり。

2月27日：青ヶ島に和歌山県串本町松原満平所有船、漂着沈没すれど乗組員は全員救助。

3月7日：三根徳風会武蔵寮収容児、17才の少年・2名がホームシックに罹り帰宅したため寮を脱出、三根漁業会の油倉庫に忍び込み、放火しようとしたがドラム缶が危険と思い、油だけ盗んで、本橋熊一の漁網倉庫内に油を撒き放火せんとしたところ、人の気配があり中止、付近に人気のない山本林一の漁網倉庫（3.75坪）に放火、同倉庫並びにサンゴ網（40反）・サンマ網（15反）・マグロ延網（28籠）・夏トビ網（16反）・春トビ予備網（19反）・その他ムロ網・カツオ餌網等時節柄貴重な資材を焼失。被害額約100万円。

7月6日：三根カトウレの鼻300m沖合で、岡本新助と息子の孝富はエビ網を引揚げていたところ、天候が急変20mの突風により転覆、三根艇組合の機関長玉置寅次が発見、曳船を出して無事救助。

8月25日：18日サメ延縄漁業に洞輪沢港を出港した第三日吉丸（船主冲山環・5.8t、乗組員8名）、クランクメタル焼損のため漂流、再三応急修理を行ない、4日目の21日三宅島大久保港に入港。機関整備のうえ洞輪沢港に帰港。

1950 昭和25年 2月11日：日魯漁業株式会社の木造機械船第二わかしお丸（船長村上長太郎32才）マグロ漁に出漁中、天候悪化八丈島へ避難中、視界不良で末吉カチガネへのし上げ大破、乗組員28名中菊池仁三郎（24才）・菊田幸太郎（32才）は死亡。同日この現場近くで、焼津漁船第五きんせい丸（30t）も岩に乗り上げ、自力で離岩、洞輪沢へ避難。更に三根底土で第六も

り丸（100t、所属不明）も舵をやられ、三根で修理、12日再出漁。

2月12日：第五金生丸（焼津）底土で座礁、自力で洞輪沢へ回航。

2月22日：第一徳栄丸（尾鷲）機関故障漂流。

2月28日：第一光豊丸（128t、尾鷲船主中村衛門）八丈小島西沖で遭難沈没。乗組員29名中漁労長中村茂理（39才）だけ救出され、小川カネオ（18～19才）は死体で収容さる。他は行方不明。当日洞輪沢港に停泊中の第五原川丸（35t）はSOSをキャッチ、友船と共に救助に向かうも激浪のため引き返す。八丈現場では小型船では救助不能と判断、洞輪沢で荷役中の黒潮丸に連絡、現場へ急行1名を救助したもの。翌1日現場付近で操業中の福田丸が溺死体を発見。この件で、4月12日黒潮丸船長・乗組員、関東海運局から表彰状伝達さる。

3月24日：第三海栄丸（4t、船主三根浅沼朝由）は、三根東浦200m沖合でトビウオ漁操業中網が浅根に引っ掛かり引き上げ中エンスト発生、突然の横波を受け転覆、船体は海岸に打ち上げられ大破。乗組員7名のうち喜田一夫（26才）行方不明。

3月26日：第八喜福丸（51t、釜石）大賀郷で座礁大破、乗組員15名中の1名（無線士）SOSを打電せんとして激浪に吞まれ死亡。

4月5日：大賀郷第一金生丸（乗組員9名、船主稲葉又三郎）・第八喜久丸（船主菊池勇）・清幸丸（船主浅沼清市）・第八漁栄丸（船主広江養松）は、青ヶ島海域に向かい出港、清幸丸・第八喜久丸は、青ヶ島に到着後天候悪化につき翌6日帰港。同夜第八漁栄丸が藍ヶ江に仮泊。第一金生丸は依然消息不明。関係者挙げて心配し手配していたところ、7日朝無事三宅坪田港に入港した旨の入電あり、一同安堵す。

12月：浜口幸助船・瀬登桂蔵船、大賀郷に漂着。

1951 昭和26年 3月5日：康伸丸（三崎・15.8t・乗組員11名）2月24日：三崎出港、八丈島近海で操業、2月末：帰港予定の所、帰港せず消息不明。

3月6日：第12太平丸（岩手）1月29日、浦賀より鳥島方面に出漁、2月8日、八丈島近海で操業中の連絡の後消息不明。

3月26日：三根村漁船海栄丸（4.5t）、天候悪化のため青ヶ島より僚船第三神港丸と共に午前7時頃八丈向け出航、魔の難所小岩戸ヶ鼻沖南南西10哩付近に差し掛かった頃、海況は更に悪化、海栄丸、午後3時頃急に針路を西に変更、第三神港丸、そのまま無事神湊港に午後7時頃たどり着くも、海栄丸、朝になるも帰らず、27日寄港中のマグロ漁船・地元の漁船総出で捜索すれど何も発見出来ず。乗組は船主浅沼朝由（45才）・機関士浅沼朝徳（18才）・浅沼源七（40才）・浅沼貞秋（40才）・浅沼庫吉（31才）・土屋喜代春（28才）・金川清秀（19才）・高橋義郎（16才）・岩崎福之助（47才）の9名。

1952 昭和27年 1月13日：第1幸雄丸（岩手）八丈島東方65哩でスクリュウーに縄を捲き込み、航行不自由となるも自力で神湊に入港。

3月19日：第7丈盛丸（下田）黒瀬でカツオ漁中、荒天となり視界全く不明、八丈無線局に監視を依頼、30分毎に同船と連絡を取り、無事御蔵島に避難。

9月17日：バヨネス 列岩大爆発新島出現。発見漁船名に因み「明神礁」と

命名。明神礁は径百数十メートル、高さ数十メートル、中・下旬に大爆発数回あり、9月23日海面下に沈下、八丈島迄も降灰・軽石の漂着見らる。9月24日調査中の水路観測船、第五海洋丸遭難、乗組員31人殉職。10月11日頃再び新島出現。

12月8日：明神礁再噴火（東京都水産試験場「都南丸」の情報を南海タイムス掲載）。

1953 昭和28年1月29日：和歌山県東牟婁郡大島村の栄丸（船主大根政治以下4人乗組・3t、15馬力）、大賀郷永郷に漂着。栄丸は串本港を26日夜半出港、27日夜半エンジン故障し漂流開始、荒天のため永郷の海岸に打ち上げられ、1人救助され、3人行方不明。

3月11日頃明神礁消滅。4月5日頃三度新島出現。9月3日頃沈下。

5月20日：小岩戸鼻と汐間の中程の崖崩壊、海中に20m位押し出し、津波洞輪沢一体を襲い、ヤーノクチで遊んでいた菊池よしか（小学校4年生9才）・浅沼三重子（小学校3年生8才）の2人大波に引き込まれ、佐々木三次・持丸和彦の2名が救助に当たり浅沼三重子は救助されるも菊池よしかは既に死亡。菊池よしかは、浅沼文雄の3女。この事故は史上稀な事故。

6月4日：宮城県本吉郡崎浜の第三日興丸、八丈で遭難、乗組員1名死亡。

1954 昭和29年11月4日：ベヨネーズ列岩噴火。

11月30日：英漁丸（九州）遭難、八丈現業場に7名収容宿泊。

1955 昭和30年6月25日：ベヨネーズ列岩噴火。

1956 昭和31年10月3日：八丈現業場拓洋丸、大賀郷日の出丸（2.07t、船主鶴沢宝造乗組6名。）が、小岩戸付近で転覆せるを発見救助。

1957 昭和32年5月2日：ベヨネーズ列岩で深海魚浮上。

1958 昭和33年8月17日：新祥丸が三根沖でテングサ採取中、午前8時頃乗員の不注意から潜水作業員1名窒息死。

9月26日：静岡県焼津市昭和漁業 第12東洋丸（船長北原豊三郎、125t、乗組員38名）小笠原方面でカツオ5,000貫を漁獲、八丈島海域で22号台風（中心風速70m、八丈島の北西を26日通過）の余波を受け、永郷大越海岸で遭難大破、乗組員1名行方不明。

1959 昭和34年2月1日：八重根港に入港した岩手県マゲロ船浦富丸（33t 船長田中亨徳）乗組員16名中10人が腹痛、集団赤痢の疑いがあり、大賀郷診療所に隔離、消毒等対応の後、3日東京向け出航。

2月28日：中之郷沖合い3,000mで操業中の末吉福洋丸（3t）の船主兼機関長の江口紀造（28才）はエンジン始動時フライホールにズボンが絡まり左足に大怪我、八丈で加療の後、黒潮丸で東京向け輸送中、出血多量のため三宅島付近の船中で死亡。

3月18日：社外船菊丸（29t、大洋漁業 代表者小宮山兼太）、トビウオ運搬のため、神湊漁港に係留中、17日から吹き出した低気圧（平均風速22.9m）のため、午前3時頃ロープが切れ、岸壁に衝突大破沈没。

5月9日：八丈島西方20マイル沖合で浸水遭難した神奈川県マグロ漁船第五香取丸（32t、尾野頭一船長、乗組員13名）を、八重根港に停泊中の黒潮丸（東海汽船、396t）風雨注意報発令中、浸水で沈没寸前の同船乗組員を全員救助。7月20日：「海の記念日」に黒潮丸（長谷川幸雄船長他乗組23名）、海上保安庁長官から表彰を受く。

6月18日：三根菊池長二郎所有千鳥丸（5t）、青ヶ島で底魚釣操業中遭難、乗組員6名中、船頭内山留吉（48才）・乗組土屋栄二郎（22才）死亡。

1960 昭和35年 1月：八丈町、2年越し水不足に見舞われる小島の宇津木・鳥打の両地区に 140石入の水槽設備工事着手。

1月12日：八丈島の東北35哩の地点（新黒瀬付近）で、岩手県漁船金比羅丸（35t、14名乗組）浸水のためSOS発信。13日巡視船及び飛行機で捜索に従事すれど、それらしき筏と釣竿を発見したのみで、人命は絶望視。

3月22日：三根出廻り海岸で宮城県気仙沼マグロ漁船第一新栄丸（船主前川稲四郎、39t）村上栄吉船長外乗組12名、マグロ延縄操業中西風（平均10m、最大23m）に吹かれ座礁、船体は大破、乗組員全員避難。尚、当日は強風注意報発令中で、神湊港内では5m～10mの高波のため、ロープ等が切断、他の漁協のロープを借りたり、遂には小学校の運動会用のロープを借り出すなどして対応、難を避ける。

3月27日：三根底土海岸で、奥山ワカエ（64才）、岩ノリ採り中波にさらわれ行方不明。

4月5日：大賀郷神子崎約2km沖合で中之郷漁船千歳丸（船主西条家安 3.7t、乗組7人）、15mの突風を受け転覆、船は間もなく沈没。乗組員は励まし合いながら漂流、4時間後に救援の静岡西伊豆田子延縄漁船妙福丸（99t、山本徳夫船長外乗組33人）が発見救助。

4月12日：中之郷漁協登喜丸（船主山下時正、乗組6人、4.1t）、トビ漁に出漁時エンジン故障、突風（東の風18.2m）に遭い岩礁に激突大破。秋田東作（27才）、宮下福男（28才）行方不明、死体となって発見。

5月24日：チリ地震の余波による津波、洞輪沢漁港 3.5m、神湊漁港 2mの津波観測。被害なし。

7月21日：午後5時半頃明神礁大爆発。噴煙 2,000m～3,000mに到達。漁船の被害無し。

12月5日：26号台風のため舵を破損、鳥島海域で漂流中の沼津漁船海洋丸（14t、乗組9人）を高知県漁船耕洋丸（36t）が発見、八丈島向け曳航、小岩戸沖で波浪が高く危険なため、海洋丸を投錨、同船の乗組員のみ収容、同夜半洞輪沢港に入港避難。翌日海洋丸を捜索すれども行方不明。

1961 昭和36年 1月25日：八丈小島 津木海岸で鹿児島県南海漁業(株)南海丸（70t、乗組19人）座礁大破、2名死亡、1名行方不明

1月31日：山形県鶴岡市第十一勝丸（84t、18名乗組）、青ヶ島西方32哩の洋上でマグロ漁中船首部分より浸水、白土丸に乗組員を収容後、海没。

2月8日：去る1月25日八丈小島海岸で遭難した、南海丸の行方不明の乗組員（上川安夫39才）の死体発見収容。

1962 昭和37年1月：漁船青ヶ島浅瀬に座礁、スクリュ破損、巡視船「しきね」曳航。

1月：清浪丸、末吉灯台下に座礁、人命無事。

4月12日：鳥島西方海上で鮪釣中の高知県漁船第七瑞漁丸（39t、恵美須勝義船長他17人乗組）、約4～50貫の大マグロをウインチで捲き揚げ中、頭部に打ち込んだカギが抜け、甲板員山崎儀康（16才）の右腹部に刺さり重体、八丈三根診療所で加療の後、海上保安庁で空輸。

7月14日：自力で全長5m、焼玉エンジン3馬力装備の小船を建造の三根漁師兼船大工広江常春（33才）、神湊港を出航、14日御蔵島寄港三宅坪田港15日出航、坪田では江ノ島か城ヶ島に行くと言っていた事まで判明しただけで、27日に至るも消息なく一同憂慮。

8月：水産庁・漁船保険中央会、昭和30年度無事故船の所有者と乗組員の表彰を実施、八丈関係は次の通り。

水産庁長官賞

菊池 和利（和栄丸・大）	小崎市右衛門（安全丸・三）
豊倉 熊吉（豊栄丸・三）	沖山 嘉司（第五清浪丸・末）
沖山富士男（第八富士丸・末）	沖山 正之（日栄丸・末）

中央会会長賞

西浜 大吉（第三幸漁丸・大）	長田 政治（貫徹丸・三）
池本 大二（吉丸・末）	沖山 末喜（ふさ丸・末）
沖山 岑一（第三みのり丸・末）	
菊池 友則（船長・大）	菊池 誠（機関長・大）
高橋 吉武（船長・三）	高橋 正（機関長・三）

9月24日：青ヶ島東浦約500m沖合で底物釣操業中の第一金生丸（6.5t、船主稲葉又三郎・7人乗組）突風の為スパンカの柱が折れ、船尾で作業していた和田峰治機関長（28才）に当たり、海中に転落、捜索すれども発見不能。

9月28日：去る7月14日八丈島を出航、行方不明であった広江常春（33才、三根）、館山から7月20日陸岸伝いに太平洋を北上、津軽海峡を通過、日本海を南下、瀬戸内海を通り、下田港に入港、海上保安庁の取調中の情報あり。八丈を出航後67日目。

1963 昭和38年1月20日：青ヶ島東浦沖合で静岡漁船栄竜丸（16t、10名乗組）、舵を破損、危険となり、乗組員2人が救助を求めて泳ぎ出すも、荒天のため着岸出来ず、溺死かと思われたものを、青ヶ島郵便局奥山欽市局長・沖山芳松・浅沼幸市の職員が力を合せて救助、八丈島警察署と連絡、遭難漁船を救助。2月28日付で警視総監賞を授賞。

4月6日：大賀郷漁協正徳丸（船主広江仙太郎・船頭佐々木将夫外乗組6人）、トビウオ漁を操業し、帰港してみると乗組の佐々木嘉一（38才）が見当たらず、航行中転落したものと見て捜索すれども発見不能。

6月4日：八丈島警察署において、佐々木篤行・持丸高男の両名、人命救助で警視総監賞授与。佐々木篤行、正栄丸船主は去る4月3日高知県漁船旭丸の乗組員、左腕切断の事故で八重根に入港した際、深夜持ち船を出動接舷、患者を救出救助したもの。持丸高男・三根高漁丸船主は、去る4月8日幼児が神湊船着場から海に転落、溺死寸前の所を着の身着

のまま飛び込んで救助したもの。

6月6日：中之郷小岩戸ヶ鼻で、宮崎県漁船福邦丸（8.6t、甲斐福三郎船長以下乗組員5人）遭難、船は大破、乗員は全員救助。

6月17日：三根漁協神栄丸（7t、小崎佐一郎船主、乗組5名）神湊200m沖合に魚雷様のものを発見、警察に急報、下田保安本部と、横須賀海上自衛隊へ連絡、その指示により三根漁協真喜丸（船主持丸真喜男、乗組6名）の協力のもと繋留、翌18日海上自衛隊第一駆潜艇「わし」が急航調査した結果、国籍不明の魚雷と判明。この魚雷は、長さ3m、で自衛隊で引き取り解体調査。

1964 昭和39年 2月6日：午後1時頃小島宇津木菊池昇（61才）、同島南側一ノ根付近を漂流している巨大な物体を発見、大賀郷漁船広丸（船主刈草忠一）、梅丸（船主小宮山春光）に通報、途中小島定期船昭和丸、蛭子丸（船主金児種三）、宇之丸（船主小栗清吉）の応援を得、八重根へ曳航、調査の結果、工専用ダルマ船と判明（長さ20m、幅7m、高さ1m30（中央1m90）、約35tもの木造）。

8月29日：小笠原方面のサンゴ漁から帰港した第五幸栄丸、岸壁に激突、船首マストに登っていた藤田東吾（37才）船員、その衝撃で岸壁に落下、頭を打ち内出血で9月1日死亡。

10月：八丈島の海上輸送の一端を担う八丈交通（社長清水丑之助）貨物船第一清和丸（80.1t・林良船長等乗組5人）、日の出棧橋でガソリン木材、セメント、紙類、諸雑貨を積込み、品川埠頭付近を航行中急激な浸水事故発生沈没、乗組射全員無事。

1965 昭和40年 11月13日：日本気象観測最南端の鳥島、強い地震が頻発、火山爆発の恐れあり、16日朝現地到着の観測船凌風丸（1,200t）に宮崎東一郎所長等55人（所員37人、作業員15人、調査官3人）を全員収容、17日午前1時八重根港に入港。一行の話によれば、再開観測に備え、機械類は整理、鶏や豚は放して来たとのこと。

12月1日：海難事故防止のため、第三管区海上保安本部、今年から八丈島近海に、常時巡視船をパトロールさせることとなり、その第一船として「のじま」が横浜港を出港、八丈を中心に三宅から小笠原諸島にまたがる半径約450kmの海域を重点パトロールすることとなる。

1966 昭和41年 2月22日：大島を北東進の低気圧、八丈島付近で急速に発達、大時化となり、午前1時半頃大賀郷八重根新港入り口付近で、大賀郷漁協漁恵丸（8.45t、船主・船頭関本栄一乗組8人）、防波堤突端の暗礁に乗上げ転覆大破、関本栄一（44才、大）・田代清春（57才、機関士・三）・奥山輝久（38才、大）・菊池稔（26才、大）の4人行方不明。島内関係者約500余名、馳せつけ捜索に当たるも、時化で海水が濁り難行、午前10時頃、風次第に凪ぎ漁船4隻も出動、12時半頃防波堤沖100m、深さ18mの海底で菊池稔の死体発見収容。午後1時半頃には巡視船「げんかい」も到着、約500m沖から捜索、午後3時半頃遭難場所で遺体発見、同4時半頃潜水機利用、奥山輝久・関本栄一・田代清春遺体で収容。関本栄一氏は春トビウオ増産競技会において、4年間連続優勝の漁業のベテラン、各界から惜しまる。遭難時は33mの突風。乗組員4名は無事。

3月19日：高知県室戸のマグロ漁船光慶丸（39.61t、船長山下利男、乗組員8名）神湊に避難中岸壁に激突船腹に穴があき、応急修理後洞輪沢漁港に避難、21日に試運転、室戸に帰港しようとしたところ、浸水が酷く、乗組員の生命と漁具を助けるため夕間に座礁。この遭難に際し、消

防団末吉分団沖山尚克・服部友二・沖山守一・山田一章・沖山則光・一般漁民沖山高、強風波浪注意報の出ている悪天候下に危険を冒して救助に当たる。この者達は、11月人命救助で、警視総監から感謝状(2級)・記念品・金色メダルを受賞。

5月14日：三根漁協第五幸栄丸(30t 船主浅沼一幸、船長小宮山兼太外乗組6人)、千葉県千倉港約40m 沖合で座礁遭難。乗組員は全員無事。

9月24日：台風24号襲来、漁船や農作物被害甚大。水産関係・カヌー流出2隻、大破1隻、漁船大破2隻、漁港一部破損3ヶ所、漁港施設シラ流出約50本。

1967 昭和42年 9月14日：台風22号、午前2時から10時頃迄の間八丈島に最も接近しながら、島の南東部を通過、大きな被害を残す。八丈島測候所の観測では、平均風速28m 瞬間最大風速42.6m 同空港分室では、平均風速40m 瞬間最大風速64m を観測。被害の内、水産関係は、大賀郷漁協の荷捌き所の半壊。

1968 昭和43年 4月9日：午前1時40分頃末吉漁協福寿丸(6.7t、船主沖山明治郎、乗組6人)、小岩戸鼻200m沖で春トビウオ漁操業中、三角波を受け転覆、船内に残った機関士沖山卓夫を約3時間もかけて船底を破り救助、その瞬間船は沈没。午前5時半頃たまたま航行中の三根成丸(船主石田種男)これを発見全員救助。同船は機関部に大損害を受けるも、八丈分場拓南、曳航し神湊へ入港。7月10日成丸(船主石田種男)、この件で警視総監賞を受ける。

8月6日：青ヶ島海域で新栄丸機関士高橋正、約120kg もあるカメを鉗いで突いたところ、鉗の紐が足に絡まり30m も引き込まれ溺死。

12月26日：八丈小島の西方海上約16km沖合で、愛媛県三崎港所属カツオ漁船進漁丸(20t、山下徳太郎船長外4人乗組)、船底から浸水沈没。乗組員、三根漁協住吉丸(船長西井弘)に全員救助さる。

1969 昭和44年 6月1日：大賀郷漁協清漁丸(20t、船主宮沢敏夫、船長宮崎泰光外3人乗組)、船体修理のため千葉県千倉港向け航行中、黒瀬付近から浸水が酷く航行不能となり、御蔵島漁船春日丸(船主栗本幸雄)、全員救助。清漁丸は漂流後沈没。

7月9日：神湊沖で漂流中のカヌー船を三根稲田俊夫(42才)・森許展(31才)救助、10月警視総監賞を受く。

12月7日：永郷沖で第八幸栄丸浸水遭難の処、三根高漁丸(船長持丸徳一)発見、乗組員を救助するとともに同船を神湊漁港まで曳航。このため高漁丸船長持丸徳一、翌年3月下田海上保安部長表彰。

1970 昭和45年 1月29日：明神礁噴火、水柱・海鳴・海水変色・軽石浮流、静岡県御前崎カツオ漁船第二神徳丸(59t、船長原崎市夫、乗組26人)から無線連絡あり、第一回の爆発の後、数回の爆発がおこり、海鳴りが激しくなったため、僚船と共に約10km西南西のベヨネーズ列岩に緊急避難。このため4月頃迄当該海域春トビウオ操業禁止。

12月17日：八丈島の南南東227il 海上で大島のサバ漁船吉栄丸(39t 船長松本亮一)が操業中、機関部員の榊長喜(52才)、洗水用ポンプのベルトに巻き込まれ、頭を打ち全治不明の重症、神湊に入港、町立病院に収容。

1971 昭和46年 3月18日：ベヨネーズ列岩海水変色。

4月28日：三根漁協啓愛丸（船主奥山夫男雄、3.6t）、船頭浅沼清隆・乗組小崎頼孝・大沢弘也で、固定式刺し網漁のため八丈小島一之根へ出漁したまま帰港せず、関係者は遭難したものと強風波浪注意報発令の中を漁船6隻が出動、捜索したが発見出来ず。翌日は巡視船（しきね）・（げんかい）に応援を依頼、漁船6隻が出動、捜索に当たり、海上保安庁の哨戒機も空から捜索に当たれども発見出来ず。処が翌30日午前2時頃啓愛丸、乗組3人とも元気で帰港。原因は網をスクリュウに絡み漂流、三宅島のイナンバ付近まで流され、翌日海が凪たのでスクリュウに絡まった網を除去、帰港したとのこと。35時間振りの奇跡の生還と一同喜ぶ。

1972 昭和47年 2月9日：八丈沖合50kmで、宮城県曳縄漁船勇漁丸（48t 船長小松利光、乗組13人）、船火事発生、まもなく鎮火。原因は機関室の配電盤がスパーク、油に引火の様様。

2月29日：午後6時23分八丈島、震度6の烈震に襲われ、被害甚大。八丈島測候所開設以来の記録。（注）漁船3隻被害。坂下地区水道管破損、陸上自衛隊の応援活動で、12月6日には断水も解消。八丈島近海地震と命名。後日被害調査の結果震度6は5に訂正。

4月30日：三根明神丸船主玉置吉清（67才）、夕方カヌーでイカ釣りに出掛けたまま帰港せず消息を絶つ。八丈分場の拓南や、地元漁船数隻が出て捜索するも発見できず、翌5月1日は風雨強く三根漁船数隻で探すも依然として不明、2日は全地区の漁船40隻が出動、海上保安庁の「すみだ」やYS11機2機も空から捜索、3日には「すみだ」と三根漁船十数隻で捜索すれども不明、捜索を打ち切る。

5月26日：中之郷藍ヶ江で、漁業石井興洋（25才）、ヤドカリを採ろうとして、漁協事務所裏の約30m下の岩場へ転落、背骨と頭を打って即死。同人は八丈太鼓の早打ちの名手で人気者。

9月16日：八重根沖で茨城県マグロ巻網漁船、鹿島丸（111t 乗組員23名）、第二鹿島丸（40t 乗組員7名）が午後10時20分頃台風20号による高波に吞まれ、24名死亡、2名行方不明、1名だけ救助と言う、大海難事故発生。（注）9月23日八重根漁港第二堤防付近で行方不明の1遺体発見。

1973 昭和48年 7月25日：三根神栄丸（14.41t、船主小崎佐一郎、4人乗組）、底魚一本釣りのため鳥島向けに南下中、小岩戸鼻南約1マイル沖合で浸水が激しく、同船と南下中の住吉丸・友丸・竜神丸に救助を求め、曳航されて八丈へ向かうも浸水激しく、乗組員は僚船に乗り移り船は間もなく沈没。

1975 昭和50年 10月5日：台風13号八丈島を直撃、最大瞬間風速67.8m という観測史上初の風力で、時速60kmで通り抜く。このため全島停電、電話線2,200回線不通、水道断水、家屋全壊2,011戸、負傷者80人、農業施設等被害総額は40億を超えるもの。都は災害救助法の適用を決定、警視庁レスキュー部隊や自衛隊200名の来援あり。

10月15日：東海汽船の台風13号救援物資を積載し、来島した貨物船（金力丸・493t）、底土で座礁沈没。

1976 昭和51年 8月9日：神湊軍艦堤防先約15m 沖でギンタカハマ採取中の、三根永田光誠（39才）、心臓麻痺で死亡。

- 1977 昭和52年 6月28日：三根松代昭仁（21才）、永郷灯台下へトコブシ採りに行くと出掛けのまま帰宅せず、地元漁民・消防団が捜索したところ、約 150m 沖、深さ 8 m の海底に遺体発見収容。死因は心臓麻痺か。
- 7月22日：末吉北浦海岸でテングサ採取に従事していた佐藤富士雄（69才）疲労により死亡。
- 10月10日：八丈島漁協清洋丸(8.5t)船主小宮山清次（54才）、息子の日出男と底釣中海中へ転落行方不明。付近で操業中の三根のムロ漁船等16隻で捜索、翌日5～60m の海底に遺体を発見。
- 11月1日：青ヶ島大根潟沖約5～600mで、三根神天丸（船主石田武徳・10t、乗組6人）、ムロ棒受網漁業の準備中潮に流され、同島岸約20mで座礁大破、乗組員は全員無事。
- 1978 昭和53年 4月3日：青ヶ島西方 50マトルで静岡県カツオ漁船・神通丸（70t、船長永島賢、22人乗組）、操業中波が高くなり、荒天準備を始めたところ、大きな横波を受け転覆寸前となり、その際甲板員の古田実（49才）は、甲板に叩き付けられ死亡。
- 1980 昭和55年 5月20日：富佐丸（千倉・59t）、神湊港内で座礁。
- 9月27日：台風18号により、最大波高8.27m を記録。
- 11月15日：明神礁活動再開の状況を示す現象を操業中の漁船発見。
- 1981 昭和56年 4月2日：三根漁協第二稻荷丸（15.93t船主浅沼信広）、石積沖5マトルで高波により沈没。同船は鳥島・スミス海域で約2万尾の春トビウオを満載の帰港中。漁協の指示により、第五貫徹丸・雄飛丸・第三稻荷丸・第五多摩丸・八丈分場の「たくなん」が救援に向かい、第五貫徹丸（船主長田義治）が発見、瞬間風速30mの悪天候の中で乗組員8名全員救助。
- 1982 昭和57年 3月31日：青ヶ島三宝港でライトバン、少女を乗せたまま海中へ滑り込み、救助に当たった叔父死亡。
- ・神天丸（19t 船主、石田武徳）、御正体根付近で出火、今根2.4km付近で沈没。乗組員全員救助。
- 4月8日：台風21号八丈本島直撃、海陸共に被害甚大（瞬間最大49.3m）。被害総額298.550千円。
- 8月23日：曳縄中の三根漁協真喜丸（船主持丸真喜男）、漂流中の丸木船（全長3.85m、深さ25cm、幅65cm）を拾得。
- 1983 昭和58年 7月17日：那智勝浦町遺族連合会の110人海路来島。92年前のサンマ漁船遭難時の八丈島の好意に対して、謝意を表するため。
- 10月11日：台風13号（瞬間最大49m）来襲。
- 11月17日：末吉小岩戸沖9km付近で三根漁協第八住吉丸（19.33t）船主西井弘）荒天のため転覆、乗員7名のうち2名は翌18日救助、残りの5名は行方不明。
- 12月19日：太洋ホテル沖10mのマルイシで下田漁協登志丸（12.9t、船長山中登志）転覆、乗り組み2名中1名死亡。

1984 昭和59年 6月13日：鳥島の北西約 100kmの海底でマグニチュード 5.8の地震発生、震源は40kmと浅し。このため津波の兆候、八重根漁港内で明確に見られる（1m50cm）。

1985 昭和60年 2月26日：東京都漁船保険組合、漁船事故防止施設事業として、中之郷小岩戸ヶ鼻に標識灯（到達距離6.1km、全高1.6m、投光色黄色、4秒間に0.5秒点灯3.5秒休止、電源は太陽電池）を設置。八丈島漁協で保守管理を実施、漁民に喜ばれていた処、昭和62年1月13日高波のため破損滅失。

9月7日：三根漁協神栄丸（船主児玉福男 15.88t）、御蔵島南沖合約100mの横塚根付近で座礁転覆、乗組員7人無事救助。

1986 昭和61年11月23日：永郷、大越灯台下の入江（通称ヒラエ）で、ダイビング中のダイバー、100m沖合の水深15mの岩陰から、乳白色の液体が3ヶ所噴き出ししているのを目撃。此に対して、約10年前にも確認している事の証言あり。尚、今回は事後確認時には消滅。

1988 昭和63年 1月13～14日：三根漁協漁運丸（18.1t・船主小宮山行男）鳥島の北側兵庫湾の上の溶岩台地が長さ30～50m・幅3～4mにわたり積雪状に白くなっているのを確認。

1月24日：青ヶ島北東海岸神子ノ浦四ツ石付近で、静岡県下田の漁船第五大祐丸（97t・船長出口須奈生外乗組6人）、海岸から約10m離れた岩場に座礁、同船からの連絡で下田海上保安本部、青ヶ島漁協の菊池松太郎（34才）に救助を依頼、渡辺巡査と二人で船と岸をロープで結び、3人を救助すれど強風と波浪のため一時中断、役場職員・消防団の応援を得て残りの4人を救出。この件で2月15日青ヶ島村役場・青ヶ島村消防団・菊池松太郎に対し警視総監の感謝状を伝達。更に19日には第三管区海上保安本部から本部長表彰を伝達。

5月28日：青ヶ島南側の金太ヶ浦で漁船、岩場に乗り上げ、近くの岩で助けを求めている男性を、航行中の八丈島漁協弁天丸（船長広江佐喜夫）・栄丸（船長菊池正直）が発見、現場は波が高く近付けない為、漁業無線で八丈島警察署に通報、青ヶ島消防団12名が救助隊を編成、現場へ急行救助。この遭難船は静岡県焼津の八幡丸（14.98t）救助されたのは門田直茂（52才）。門田は一人で18日に焼津港を出港、ハロース付近で曳き縄漁を行ない、26日午後自動操舵で帰港中での事故。

6月13日：八丈島の北西75kmの海上で台湾の冷凍運搬船順国 306（976t、12人乗組）の火災発生を訓練中の海上自衛隊機が発見、第三管区海上保安本部の航空機と巡視船等が現場へ向かい、11人を救助、1人の遺体を収容。また救助された内2人は、火傷が酷いため海上保安庁のヘリコプターで、八丈町立病院へ収容したが、1人が重症のため更に東京の病院へ移送。

## 9 水産生物等のトピックス

西暦	年号	特記事項
1766	明和3年	三根浦新崎へ寄鯨有之神湊へ引込み切上げ割賦。
1774	安永3年12月17日	三根浦へ寄鯨有之神湊へ引込み切り上げ割賦。
1776	安永5年12月24日	大賀郷前江崎へ寄鯨有之、八重根へ引込み切り上げ割賦。
1784	天明4年正月23日	三根浦へ寄鯨有之神湊へ引き込み切り上げ、村々へ割賦。
1836	天保7年正月23日	中之郷へ寄鯨有之。
1921	大正10年1月11日	八重根に長さ12間余の寄鯨あり児童見学。
1933	昭和8年6月1日	三根の村上市右エ門・松岡光太郎、早朝沖釣に出漁、鯨群に遭遇、25貫余の大鯨7尾釣揚ぐ。
1936	昭和11年12月5日	三根の浅沼籐八、山田小一郎と4日の晩、長さ35間、幅1丈5尺の夜網を置き、翌5日出掛けてみると長さ8尺4寸8分、胴回り6尺2寸目方100貫、更に長さ7尺5寸9分、胴回り6尺7寸、目方80貫の2尾の鯨が掛かり、校長先生が生徒に見学させるなど、大いに賑う。価格は2尾で188円。
1937	昭和12年2月8日	青ヶ島へ大鯨漂着。
1938	昭和13年6月8日	末吉北浦海岸に大亀が出現、これを発見した天草採取の5～6人が取り巻き、菊池力弥(43才)が組み付き捕獲。重量は18貫の大物。
1939	昭和14年5月29日	中之郷藍ヶ江で延縄にヒラガシラ鯨53貫の水揚げあり。腹が何時迄もピクピク動くことから、開腹した処、800匁位の子鯨12匹出てくる。
1943	昭和18年3月	寒流の為トミヤムツゴ等磯に打ち上げられ賑う。 (注)総括 1,924尾、161貫 650匁。 ウツボ・カワハギトミ・ウチワトミ・沖トミ・黒トミ・キヌ・トミ・ヂトミ。
	6月25日	末吉、長さ6尺、30数貫の大魚(鯛類)漂流し水揚げ。
1947	昭和22年4月4日	春トビウオ漁不振の折、神湊から新池・出回りにかけて、ゴンドウクジラ 85尾10,020貫(204,000円)打ち上がる。大きいのは長さ2間半位、重量470貫。この内12本を島内消費に、73本(7,772貫)を内地へ出荷、この価格が約15万円。この時の東海汽船運賃が13万円。三根漁業会この運賃に啞然とす。リンク油は900貫で1t割合、200ℓドラム缶で5本半。総計47本が配給となる。
	5月16日	藍ヶ江沖で大沢市助の船方が30尋の海底に布設した4反の麻製の底網に長さ1丈3尺、目方概算130貫のモウカ鯨(一名法玄鯨)が水揚げさる。
1948	昭和23年4月	イルカ大群来遊漁獲。

- 1949 昭和24年3月30日：大賀郷幸漁丸（船主西浜大吉）八重根沖でトビウオ漁作業中、得体の知れない怪魚が50間もある2反の網に包まれ大暴れ、鉋打ちし、尾にロープを結び曳航し水揚げしてみると、800貫以上もあり、鯨にしては潮吹きが無く、鮫にしては歯が無く、島では初見参のもの。支庁水産課の見立てで、「象鮫」か「ウバザメ」。
- 1952 昭和27年9月：八丈現業場、食用蛙養殖試験を三根泉53匹、檜立塔ノ沢10匹、同イブリヤ10匹、中之郷安川84匹、洞輪沢水源18匹の計175匹を放養。
- 1953 昭和28年11月：八丈現業場、住民から「水田で食用蛙の仔蛙を見た。」との通報に極力調査すれども確認出来ず。
- 1954 昭和29年：底釣で釣れる通称「ケンケン」なる魚、阿部宗明博士の研究で新種と分かり、この魚に注目した八丈現業場の草苺正の名をとり「クサカリ・ツボダイ」と命名。
- ・国立科学博物館滝庸、巻貝新種ハチジョウユキスズメを発見、採集地は末吉石積。
- 1955 昭和30年6月9日：食用蛙調査実施。安川・2～3匹の鳴声を聴く。塔沢・イブリヤは鳴声を聴かず、産卵の状況は未確認。
- ・10月24日：八丈現業場、食用蛙を安川に186匹（変体後1ヶ月程度のもので、水産試験場本場から送付を受けたもの）を放流。
  - ・国立科学博物館滝庸、巻貝新種ハチジョウチチカケガイを発見、採集地は大賀郷大瀧浦。
  - ・三根神湊沖水深40尋で、第二次大戦の遺物である葉きょう引き揚げ作業が行なわれ、南方系の貝であるアツソデガイ・サソリガイ・ゴホウラ・マイノソデ・スイジガイ・トウカムリ・ショッコウラ・アンボイナ等採集され、一部は八丈分場に保存展示。
- 1956 昭和31年3月：中旬より冷水塊（14.5～16.0℃）、黒瀬付近にまで及び、磯魚（主にトミ）の斃死を相当確認。
- 1959 昭和34年4月26日：中之郷沖で第八正栄丸（船主佐々木篤行）、オサガメを捕獲、八丈分場に寄贈、剥製展示品となる（体重約240kg、全長1.55m）。
- 7月～8月：各地区に食中毒患者発生。保健所の調査で、トミ・ケンケン（ツボダイ）が原因と報告があったが、原因はムロアジの鮮度不良。地区別発生状況：三根123人、大賀郷11人、檜立10人、中之郷2人、末吉1人。
- 8月24日：三根漁協神天丸（4t、船主石田武徳）ムロ棒受網作業中、大アオザメを漁獲（長さ5m、重さ375kg）。
- 8月：中之郷安川で7年前に放流した食用蛙のオタマジャクシ多数発見。
- 1960 昭和35年：35年のサンゴ漁において、八丈分場、各サンゴ船に対して、ホルマリン入1斗缶を渡し、珍しい動植物の採取を依頼した処、数多くの品種を採取。主なものは次の通り。  
ドングリキダリス・ベニオキナエビス・ヒメアカグツ
- 10月31日：八丈島でシロアオゼと呼ばれているアオダイの異種、東海区

水産研究所阿部宗明博士によって「シマアオダイ」と命名、学会に発表。

- 1961 昭和36年 2月4日：低温水域広がる、中旬16℃台、下旬15.5～16.3℃。タチウオ・カワハギ類、斃死。
- 7月：6月以来干天続きで水不足状況となった折、中之郷灌漑用水池も底を突き、2匹の大うなぎ捕獲。長さ175cm、太さ約50cm、重さ13.5kg、八丈島ガーデンで客寄せの池で飼育するも、2匹とも数日後に死亡、1匹は八丈分場で剝製陳列。和名「オオウナギ」別名「カニクイ」。天然記念物の指定品。
- 10月13日：三根農協、いづみに、水試水元分場から取り寄せたコイの稚魚2,000匹を放流。
- 1963 昭和38年 1月中旬～2月中旬：低水温（13.5°）でカワハギ類など多数の斃死魚打上がる。シラヒゲウニ・ジンガサウニ・クロウニ・ハナヒラダカラ・ハナマルユキ等ほぼ全滅。ウニの死空殻。水中の凹所に山をなす。
- 3～6月：神湊港でサバ・マアジの稚魚が釣れ、連日大賑い。
- 5～6月：三根フカミでアカイカ（ケンサキイカ）が釣れ連日大賑い。
- 9月：オオミズナギドリ（カツオドリ）の動きと魚の回游につき、日米合同の調査が開始され、日本側では東海区水産研究所が中心として取組む事となり、八丈島での棲息地（大根）で、カツオドリの親6羽と雛3羽に番号標識を付けて放鳥。
- 1965 昭和40年 3月6日：底土湾で重さ40～50貫もあるイルカを捕獲。このイルカはシャチに追われ、手傷を負い弱り切って居たもので、カヌー船2隻により捕まる。
- 8月10日：底土海水浴場浮旗内をサメが2～3匹背鰭を見せて泳ぐのを発見。冷水20℃～21℃が押し寄せた影響の様様。
- 8月：潮の引が激しく各海岸は、潮干狩りで賑う。垂土海岸の水溜では、メジナの300匁～500匁のものが手摺み状態。
- 1966 昭和41年 3月13日：八丈支庁西村和久、昼休みに干潮の大賀郷大瀧浦海岸で珍種「ヒトエガイ」を生体採捕。この貝は本州の中部以南の40mの深海に棲む珍種。約1日で死亡。
- 9月18日：大賀郷荷浦海岸の夜釣で大賀郷上野幸一郎、体長1m60cm、太さ60cm、重さ11kgもある、ニセゴイシ（アナゴ科・分布は宮古島や印度方面）を釣り揚ぐ。この魚はあまり美味でなく、八丈分場で剝製。
- 1967 昭和42年 1月3日：三根長根ガヒジで、イズスミ釣り中の山下定保、ブリの大群が押し寄せたので、手持ちの疑似針に切り替えたところ間もなくかかり、20号の道糸約100mをやり取りして、ようやくにして釣り揚ぐ。このブリは長さ96cm、重さ7.5kgの新春初の大物。
- 3月2日：神湊漁港青灯防波堤内側中間で、斉藤芳樹、長さ90cm、重さ7.4kgのシマアジを釣り揚ぐ。道糸26号、ハリス25、釣り目盛り1寸8分。
- 8月6日：南海タイムス「釣りだより」欄に山下定保の“石ダイ情報”載る。内容は、「従来八丈島の海には、石ものは少ないと言われてきた

が、そうではなく、非常に豊富であることを、八丈・小島の釣例を挙げて説明、石ものは釣り愛好家の渴望のもの、宣伝によっては観光客の誘致にと力説。魚体解剖の結果、餌はエビ・ウニ・カニ・貝類。

8月13日：東京から取り寄せたマグロで、食中毒患者35人発生。一時は赤痢ではないかと心配するも、検査の結果ビブリオ菌に因るものと判明。

1968 昭和43年 3月：東京都教育庁八丈出張所葛西重雄、八丈島動植物目録を発行。

5月12日：築港中の八重根漁港へ層の厚いアジ・サバが入り込み、家族連れの釣り客で賑う。アジは体長5～10cm、サバは10cm以上で上物。この傾向は9月に入り藍ヶ江・洞輪沢にも及ぶ。

6月30日：アジ・サバの来遊に伴い、ヤリイカ・バショウイカが入り込み神湊軍艦ではイカ類が大漁。

11月4日：藍ヶ江港で、初心者の冲山光邦これまでの記録を上回るシマアジを釣り揚ぐ。重さ9kg・長さ92cm・道糸26号・仕掛10号・餌はムロアジ半身2cm切り、手鉤を使い二人でようやく引き揚げる。

11月：先月末から八重根漁港へアジ・ムツ・カマス・タカベが入り込み、同港は昼夜にかけて家族連れの釣客で賑う。

1969 昭和44年 3月16日：藍ヶ江で中之郷の中島勝久、長さ81cm、重さ6.5kgのシマアジを釣り揚ぐ。

3月26日：底土沖約1,000m沖で春トビウオ漁操業中の三根幸丸（8t、船主田村一雄）の網に大亀掛かる。この亀は「オサガメ」で、長さ1.85m、肩幅1.05m、重さ400kgのもの。島で捕れた亀では最大。池に入れ観光客に見せることとなる。

4月6日：南原のタテヅで大賀郷細川国光、5kgもあるインダイを釣り、リールで揚げ切れず、手でようやく引き揚ぐ。開腹して見るとウニが90%、カニが10%で、また11日にも同場所で東京の釣師が6kgと、4kgのインダイの大物を釣り、八丈島のインダイも漸くにして表舞台に躍り出る。

4月8日：南原で大賀郷菊池久雄、長さ1.80m、重さ28kgもある大ウツボを発見、銚で仕留める。今迄に例のない大物との評。

4月29日：末吉水源下流の水溜りに大ウナギが居るのを、山帰りの冲山玉治発見、冲山良博・長戸路真・冲山直喜の3人、大格闘の末捕獲、このウナギ長さ1.20m、重さ5.5kg。「名古の展望」に陳列。

5月：小サバの大群が各港へ押し寄せ、家族連れの釣師で賑う、特に八重根新港は大賑い。

1970 昭和45年 1月13日：神湊軍艦で三根長田一市、水温低下でフラフラの大イカを発見捕獲。このイカは重さ15kgもあるアカイカの大物。

1月15日：神湊軍艦で三根石野正二、10.2kgの、また、菊池勝12.4kgのアカイカを釣り揚ぐ。

1月25日：ハンゾウで榎野伝一、25kgのイカを釣り揚ぐ。

1月：大賀郷松岡美文、三根ヨノモウで5.5kgもあるインダイを釣る。

5月24日：末吉漁協のトコブシ口開けに、「アワビ」がトコブシに混ざり漁獲。これは300g～500gもの3ヶ。種類は「アワビ」の内の「メガイ」。

9月2日：八丈小島コウダテで東京の釣師春本周作、27kgのアオウミガメを釣り揚ぐ。仕掛けは道糸18号、ワイヤー38号30cm、錘30号、餌はアオムロの切身。アオウミガメが魚の餌で釣れたのは珍しい現象。

9月15日：大賀郷赤間辰雄宅で子亀3匹誕生。これは去る6月23日の船で小笠原からアオウミガメを捕獲帰島、料理した処40～50個の卵があり、15～16個の卵を砂箱に入れておいたところ、孵化したもの。孵化は通常熱砂の中で58日と言われているが、81日を要す。

9月26日：神湊漁港青導灯下で、三根玉置統、長さ1m、重さ9.6kgの青ぶり（ヒラマサ）を釣り揚ぐ。これまでの最高。道糸アミロン60号、ハリス40号、釣タルメ26号、餌はムロアジ1本刺し。

11月9日：八丈小島カンナギ西沖約2kmで船釣り中の東京の釣り人貝方士栄二、全長157cm、重量52.2kgのモロコを釣り揚ぐ。道糸スーパートト50号、ハリスはワイヤー30号、針はクエ50号、孫針35号で、餌はソーダカツオ1本付け。

12月：八丈分場、学校プールの休閑期を利用し淡水魚を飼育してはと、都水試の温水魚研究部から試験的に、マゴイ200匹・ニシキゴイ100匹・キンギョ（ワキン）100匹の計400匹を取り寄せ、大中・三原中・富士中・末吉小の4校に配布。

・三根小宮山利男南原沖でハサミを持つエビを捕獲。このエビはインド洋等の暖海に生息していることで知られているが、日本では最初のもの。ハサミが弓を引くのに似ていることから、「タメトモエビ」と和名を与えられ、八丈分場にホルマリン漬け陳列。

1971 昭和46年 1月6日：八丈島釣の友会員沖山芳信、八重根ハヅルで14.2kgのブリを釣り揚ぐ。道糸は30号、衤り22号、ちか結び、餌はムロアジ半分ぶつ切りの頭に針を刺し、浮き無しの投げ込み。

1月31日：末吉石積ヶ鼻ジョウデイ磯で、三重県アングラクラブ18人組の岩田貞夫、モロコを狙い全長1m32、重さ24kgのブリ（ヒラマサ）を釣り揚ぐ。道糸オキロン100号、ハリスはワイヤー32号、針は衤り50号、餌はムロアジの1本刺し。

4月：末吉の武洋丸、小岩戸ヶ鼻沖でオサガメを捕獲。剥製にし、八丈島空港に展示された後、昭和57年小笠原海洋センターに移管。曲甲長172cm。

4月21日：大賀郷・末吉の両漁協は八丈分場の斡旋を受け、アサリの種162kgを、八重根漁港内に125kg、洞輪沢漁港内に37kgを夫々移植。

9月11日：八重根新港沖合で青梅市国際ダイビングクラブ・潜水教士師下良之、潜水の指導中水深7mの海底に、ばかでかい魚を発見、6人がかりで銚を打ち込み、約1時間かけて引き揚ぐ。この魚はハタ（別名モロコ）体長205cm、重さ170kg。

11月3日：神湊港においてゴンドウクジラ（長さ3m、重さ200kg）を、船橋睦夫・土屋鉄男発見、岸壁から銚で仕留め、ふたり掛かりで約1時間の格闘の末引き揚ぐ。肉は柔らかく美味で運動会の夜の部落での慰労

会の卓上を賑す。

1972 昭和47年 2月 9日：南国温泉ホテル、八丈分場を通し奥多摩分場より、ニジマス卵 1万粒移入。

1973 昭和48年 12月 4日：末吉石積海岸で八丈島釣の友会の高橋洋介、友人 2人と磯釣り中、重さ 32.3kg、長さ 1.26m もあるモロコ（学名クエ）を釣り揚ぐ。竿はワールドモロコー 1号、リールがセネター 4、道糸 40号、ハリスはワイヤ 34中、鉤が丹吉クエ 35号、餌はムロアジ半分ぶつ切り、3人掛かりでギャフ 2丁掛けして 2～30分かけてようやく引き揚げたもの。

1974 昭和49年 2月 19日：中之郷ナカッチョ海岸で伊勢崎全弘、1時間でバショウイカ 3匹も釣り揚げ、中の 1匹は重さ 4kg もある大物。

2月：八重根堤防や永郷クニノミチでイシダイ続々揚がる。中でも八重根の場合は本イシ 4.2kg。

6月 18日：底土海水浴場上の砂利置場を約 100kg もあるアカガメが、散歩しているのを発見。腹がへこんでいることから、恐らく産卵のための上陸ではないかと推測。三根漁協では可哀想だと、酒を飲ませて大海に放流。

1977 昭和52年 1月：大賀郷幸吉丸船主田村忠烈・弟の武烈・伸、「島でワカメが出来たら」と昨年 12月 6日に館山から 2万円で仕込んだものが推定 30kg 収穫。このワカメは全長 30cm から 70cm（日本海や東北では 1m～2m）。

2月：八丈分場三木誠・浅井ミノル、珍魚ガーデンイールの群生を横間海岸沖 500m と小島沖（水深 20m）の海底で一昨年発見、魚類研究家阿部宗明博士に研究を依頼したところ、これは新種で、今のところ八丈島だけでしか発見されていない珍品。阿部博士により「シンジュアナゴ」と命名。地元のトコブシ漁等で潜水する機会の多い漁業者からは従来「ウナギのような変わった魚が多数居る。」と噂されていた事が解明。

7月 12日：NHK総合、番組ニュースセンター 9時で「シンジュアナゴ」放映さる。

1978 昭和53年 3月：久保田房男、神湊近くで夜網で漁獲した魚、イシダイとイシガキダイとの自然交配種であることが判明。この珍魚はイシガキダイの斑点模様とイシダイ独特の横縞模様あり。

4月 4日：八丈島漁協曳縄船富丸（船主佐々木将夫）、巨大なイカを捕獲。体重 62.8kg、身体の一部が無いと推定で体重 70～80kg、全長 3m。名称はミズイカ。これはダイオウイカの一種、イカ類中最大のもので、全長 6m 余に及ぶ。大西洋には全長 18m ものまで知らる。マッコウクジラの好物の一つ。

4月 19日：大根沖で三根天恵丸（船主浅沼重信）、マッコウクジラ死体を発見曳航。大根沖でトビウオの流し網操業中発見したもの。

7月：伊豆大島で初めて発見されたスマレヤッコが 2匹（体長 4cm と 5cm）生体で捕獲さる。奥野忠夫（32才）が、水深 25m の所をダイビング中発見捕獲。水槽内で間もなく死亡、ホルマリン漬けにして、東京水産大学へ発送。

10月 1日：南海タイムスに八丈分場の参観用水槽で飼育している、オニダルマオコゼの紹介文載る。このオコゼは全長 20cm、背鰭の根元に猛毒

の出る毒腺を持つ。

10月21日：藍ヶ江漁港で、古山一二三、重量8.02kg、体長84cmのシマアジを釣り揚ぐ。

11月12日：大賀郷みどり丸（船主佐々木孝夫、3.55t）は、小島西の水深540mの所で「リュウグウノヒメ」・「ムネエソ」を釣り揚ぐ。ムネエソは典型的な深海魚で、八丈では初めて。深海には多い魚。体長8.3cm、腹の下部に発光器が並び、眼は上方を狙っている。リュウグウノヒメは、相模湾・山口県萩沖・ミッドウェイの北西海岸・秋田県沖等で知られているだけで、八丈島が5ヶ所目となる。体長22.4cmと小型であるが、背鰭・臀鰭がよく発達し、マントのように長くなっている。この2品はホルマリン漬けで八丈分場に保管さる。

1979 昭和54年 1月26日：あかす（夜魚突）でアカイカ（ソデイカ体長69cm、重さ12.5kg）が漁獲され、2月4日永郷海岸でも1パイ漁獲。産卵後の心中イカと言わる。

4月23日：9本足のミズダコ（雄 900g、体長1m）三根丸石付近で漁獲。

10月18～19日：台風20号の接近で、神湊漁港フカミで、シマアジ大漁。釣り人喜ぶ。

1980 昭和55年 1：ツラナガガコビトサメ（体長20.3cm、重さ45kg）1尾、中之郷の岡野丸（船主岡野洋明）が、八丈島南約30km沖の合之瀬で漁獲。水深300m深海に生息する珍魚。

4月初旬：「ハラダカラガイ」永郷で採集。

4月3日：小平市河野和昭、小島小地根の水深27mの岩場でダイビング中ヤコウガイ（殻の高さ13.2cm、直径12.5cm、重さ609g）を発見、八丈分場へ寄贈標本陳列。

4月12日：八丈分場、中之郷自治会の要請により、中之郷農業用水に、都水試本場産マゴイ5,000匹（魚体4g）・ニシキゴイ800匹（魚体6～7g）を取り寄せ放流。

5月26日：三根永郷オヨギドでシノノメサカタサメ（体長1.53m、重さ33.4kg、エイの仲間）底刺網で漁獲、本州沿岸では珍魚。

6月：カブナメ（ウミネコ）の春トビウオ流刺網漁業への加害、及び空港における飛行機への障害について世論大。

9月15日：末吉北浦で黄金色のササヨ（体長37.4cm、重さ1.38kg）釣り人に釣らる。

11月5日：サンシャイン国際水族館、3匹のアオウミカメ（同館で飼育していたもの）を底土海岸で放流。

1981 昭和56年 1月20日：神湊水温14.6℃、平年度より3～4℃低い冷水塊の影響で、アカヤガラ・ヒシダイ・サクラダイ・カワハギ等雑魚浮上死の状況観察。

6月1日：末吉石積ヶ鼻で25.5kgのヒラマサ（体長148cm）釣り人が漁獲。記録としては1位。

7月26日：クラゲ（カツオノエボシ）増加、海水浴客被害（水温7月10日頃より28～29℃となり異常気象）。

12月20日：八丈町・三原山系の河川に、都水試奥多摩分場産のヤマメ・アマゴ約1,000匹放流。

1982 昭和57年10月6日：八重根防波堤沖に置いた夜網に体長44cm、重さ1.55kgのササヨの珍魚、赤間憲夫水揚。和名未定。

1983 昭和58年2月3日：底土港岸壁で、磯釣りの記録では日本一と言う、ヒラマサの大物を釣り揚ぐ。釣ったのは浅沼弘毅（三根、25才）。ヒラマサは体長142.5cm、体重28.5kg。

7月28日：末吉水産研究会、ヒトデの大殲滅作戦を展開。成果はヒトデ約39kg（2千数百匹）。

（注）このヒトデは“ヤツデヒトデ”で、昭和55年以降冷水塊が移動してから急激に増加、トコブシの天敵。

12月10日：中之郷藍ヶ江漁港で150kgのメカジキ磯釣り客の釣りに掛かる。（底延縄船の釣り落した品か。鮮度良し。）

1984 昭和59年1月20日：冷水塊の影響で、垂土・底土・東浦海岸にハクセイハギ・スズメダイ・アカヤガラ・ニザダイ・サンマ・ウスバダイ・ウニ・カニ・貝類等32種相当数、打ち上がる。

7月5日：中之郷水産研究会、夕間のヤツデヒトデ退治を実施。収穫は8kg(700匹)。

10月20日：9月29日姿を見せたトド、藍ヶ江に出現したのを最後に姿を消す。

12月31日：三根垂土で体長75cm、体重17kgの大イカ（ソデイカ）捕獲。

1985 昭和60年5月：八丈温泉ホテル、温泉熱利用ティラピアの養殖開始。

10月18日：神湊漁港内で泊地浚渫工事をした処、アサリが1日30kg以上も採取され話題となる。

10月：南国温泉ホテル、温泉熱利用スッポンの養殖開始。

1986 昭和61年5月8日：定地水温16.5℃（平年より3.6℃も低い）、カツオノエボシ島内全域の海岸に打ち上がる。

1987 昭和62年8月：7月下旬頃から三根泉で「マミズクラゲ」の大量発生を確認。これは4年前にも泉で確認されている。八丈分場の見解では「水鳥に付着して運ばれたポリプ（クラゲになる前の個体型）が繁殖したもの」と認定。

11月8日：南海タイムスで八丈分場の観察用水槽で飼われているタツノオトシゴ・オニイザリウオ等について紹介。

12月：八丈分場が三根大川上流で試験捕獲した「ヤマメ」は、体長21.7cmで、抱卵中のもの。この「ヤマメ」は昭和56年12月に放流したものの後裔。「ヤマメ」の寿命は2～3年ということから推測すれば、二世か三世。

1988 昭和63年 5月19日：藍ヶ江漁港で畑見勝彦（47才）、重さ20kgのソデイカを釣り揚ぐ。

9月：体長5.5cm のまだ甲羅も柔らかいアカウミガメの子亀を三根持丸一男（38才）が発見、飼うのを諦め海へ放流。（注）子アカウミガメの捕獲は以前にも散見されている。

10 その他

西暦	年号	特記事項
1797	寛政9年	寛政年間「オランダ新訳地球全図」に「八丈シマ」・「ヲガシマ」(青ヶ島)の二島のみ載る。
1810	文化7年	幕府刊行「新訂万国全図」に大島・三宅島・八丈島・青ヶ島の四島記載。
1853	嘉永6年6月	(アメリカ艦隊司令官ペリー、軍艦4隻を率い浦賀に出現)
1861	文久元年8月19日	幕府御用イギリス測量船洞輪沢入港。
1866	慶応2年	幕府軍艦「朝董丸」藍ヶ江に入港。
1932	昭和7年4月20日	館山海軍航空隊戦闘機 108号、三根沖5哩の海中に墜落、静岡県加茂郡田子村の大勢丸の船長代理藪田辰男他乗組員31名は、搭乗者2名を救助。
1934	昭和9年2月21日	八丈島近海で戦闘訓練中の館山航空隊所属 352号、機関故障のため墜落。解荷役中の人夫発動機船で急行、搭乗員3名を救助、機体は同演習に参加中の駆逐艦(ツバキ)に引き渡さんとして、ロープを掛けて曳航中ロープ切断沈没。翌日引上げるも機体は全壊再用不能。
1935	昭和10年7月	三根村浅沼源七、外道付近の青年28名を誘い底土ヶ浜海水浴場の玉石を片付け、住民から感謝さる。 8月12日：中之郷高橋助太郎(69才)、3人連れで夜釣りに出掛けるも漁無く、引上げようとの意見を聞かず、波打ち際へ出たところ高波にさらわれ海中に転落、同行の吉田豊八危険を侵して飛び込み救助するも死亡。
1936	昭和11年5月12日	海防艦春日(7,080t、速力20ノット)神湊に入港。横須賀鎮守府司令長官米内光政中将以下30名の幕僚上陸島内視察。 10月18日：「飛行艇1機八丈島の北東5哩沖合に不時着せる模様につき救助方手配乞ふ」との電報が八丈支庁に飛び込み、島内各関係者は、救助体制をとると共に、試験船初め漁船8隻を海上捜索に出動さすも、当夜は波も高く発見できず。19日は低気圧の影響で波が高く出動できず、駆逐艦狭霧遭難現場に急行、捜索に当たるも発見できず。20・21日は低気圧のため波荒く捜索不能。21日横須賀鎮守府から支庁長に「遭難者8名全員青ヶ島に無事生存」の電報着電、関係者一同安堵す。この救援活動に対し11月10日横須賀鎮守府副官から謝辞と各種団体の基金とされたしと700円の交付あり。青ヶ島200円、三根村180円、末吉村150円、中之郷村70円、大賀郷村70円、樫立村30円の配分となる。
1943	昭和18年5月27日	三根国民学校で、かねてより海洋少年団を結成、大日本海洋少年団に加入、心身の鍛錬と海事思想海防観念の普及徹底に励んでいたが、短艇2隻の進水式を底土浜で挙行、「富士」・「三原」と命名。この壮挙には三根海軍会の後援大。
1946	昭和21年1月12日	徳島県人元海軍少佐玉有勇(40才)・妻ミサオ(40才)及び機関士谷川経光は、玉有の復員荷物を約4tのモーターボートで輸送帰郷のため呉市川石港を1月3日出港、小松島北4~50マルでエンジン故

障、強い北風に吹かれ檣立神子崎海岸にのし揚げ、檣立駐在に救いを求める。

- 1950 昭和25年 5月16日：八丈現業場付近の海中から子供達が高射砲弾を発見、10才の子が薬莖に火を点けた瞬間、大音響と共に約 150m も吹っ飛び現業場の屋根を破って落下。周囲にいた子供達約10人には、奇跡的にも怪我なし。
- 1955 昭和30年 7月25日：東海区水産研究所、川名博士来島、水中撮影の打合せ。  
7月29日：毎日新聞社来島、夏トビウオ水中撮影の計画。
- 1959 昭和34年 1月31日：午後2時頃洞輪沢港に米軍の双発水上艇が不時着。左給油管故障のため、翌2月1日同僚機が飛来、同機とも同日飛去。  
3月：七島海運(株)3月末から社外船として同社所属船第二大衆丸(30t)東京・八丈間に就航決定。  
7月26日：小島と八丈島の間で、曳縄中の三根水神丸(2t、石田光春船頭)、漂流中の瓶(長さ30cm、直径15cm)を拾得、中に写真と通信文あり、流した人はニューヨーク市マスタス・ウエイチス。  
8月8日：八丈町は、工所用砂の不足に対応するため、底土海岸でサンドポンプ(バスエンジン20馬力)による揚砂試験を実施、好成績を納む。  
10月28日：三根永郷国の道で、釣り中の武田嘉吉(36才)・重田守道(40才)、大波にさらわれ転落、武田嘉吉は自力で海岸へ這上がり助かり、重田守道は行方不明となり、捜索の結果翌日三根天恵丸(船主浅沼重信、4t)、約 100m 沖合の海底で発見収容。
- 1960 昭和35年 3月28日：末吉洞輪沢で沖山規矩太郎七男規矩雄(12才)、釣り遊び中転落、死体となって発見。  
9月1日：洞輪沢港1,500m沖合に国籍不明の大型汽船停泊、翌日も動かぬため、島内で憶測しきり。この船は南鮮の極東海運所属船「朝鮮号6,800t」、機関の故障で修理中のもの。
- 1961 昭和36年 7月16日：神湊漁港に名古屋大学のヨット部OBタチグループ(1.3t、艇長6m 速力5ノット)来航。このヨットは、7月13日午後9時に愛知県鬼崎港を出港、大王崎を経て350kmを正味53時間で走破、16日午前5時に到着したもの。  
8月26日：午後五時頃、檣立伊勢崎弘(18才)、友人達と乙千代浜で磯釣中波のため転落、約 100m 沖合で漂流中、急報を受けた中之郷第五栄進丸(4.6t、船長石井栄一外乗組員9人)、無事救助。
- 1962 昭和37年 2月17日：三根奥山三右衛門(57才)、長の入海岸で磯釣中海中に転落行方不明、捜索の結果溺死体で発見。
- 1963 昭和38年 2月15日：青ヶ島大名古ヶ鼻へ、磯釣りに出掛けた広江清松(25才)広江俊信(14才)、夜になっても帰宅せず、翌16日同海岸沖20mの水深15mの海底で発見、俊信は収容したが、清松は岩に挟まり収容出来ず、八丈島正栄丸(船主佐々木篤行)の応援を得て20日に潜水器を使用収容。  
6月2日：南海タイムスに三洋生の「八丈島漁業の現在と将来」の投稿

載る。

10月31日：末吉石積ヶ鼻海岸で、理科教材用にプランクトン採集中の、末吉中学校事務職員沖山義人（24才）、高波にさらわれ転落漂流、これを綱と浮標で、浅沼幸光（31才）等が救助、12月24日人命救助で警視総監賞・警察署長賞を受賞。

1964 昭和39年 3月9日：午後2時40分頃、中之郷藍ヶ江港堤防で磯釣り中の秋田勇太郎（69才）、澁谷区徳永忠雄（55才）、8m以上の突然の大波にさらわれ港内へ転落、石井興洋（17才）らが発見、浮環を持って飛び込み救助。4月27日警視総監賞を受賞。

3月10日：八丈島における磯釣りも年々盛んになり、釣り同好者が釣り技の向上と、釣り道の向上を図ることを目的として、「八丈島釣りの友会」を結成、初代会長に高崎武司就任。

8月：島内で初めての活魚料理店「むらさき」開店。メニューは、ウナギ・コイこく・コイあらい・柳川鍋。

9月29日：北多摩郡音楽家池野成（33才）・船員功（31才）兄弟、9月26日自前のヨット（とびうお号三世・長さ217フィート、幅67フィート）で三崎油壺を出港、一路八丈島に向けて帆走していたが、同日夕刻神津島を通じた頃から強風となり、マスト折損、更にエンジンの調子悪く、3日3晩漂流、八重根に漂着。

10月31日～11月1日：八丈島釣の友会（会長高崎武司・会員90名）第1回磯釣り大会を開催。

12月11日：神湊沖で荷役作業中の東海汽船株貨物船、丸神丸（160t、根本船長他乗組8名）、八丈島測候所高層気象観測気球用の水素ボンベ荷役中、火災発生、八丈町消防団が消火に当たり鎮火。同船には水素ボンベ約160本積載、危機一髪の状態、関係者一同ほっとする。

1965 昭和40年 1月11日：（大島元町大火。340戸全焼。）

3月7日：八丈島釣の友会主催による冬釣り大会開催。

8月29日：京浜釣友会の面々150人釣り大会開催、一行は夕刻帰京。

10月17日：八丈島釣の友会総会開催、役員改選の結果、全員再選。

1966 昭和41年 2月13日：八丈島磯釣友の会主催「冬季磯釣り大会」開催。

5月28日：小島の住民、全員引き揚げたしと八丈町議会に対し、「移住促進助成に関する請願書」提出。議会では22日の定例町議会で採択。

7月17～18日：全日本スピアー・フィッシング選手権大会、約100人（東京・神奈川・静岡・豊橋・名古屋・等26チーム）が参加、潜水区域を八丈島燈台から底土間に指定、17日は素もぐり・18日はスキューバ潜水の2部門で日頃の腕を競い合う。

7月30日：三根持丸忠登（14才）、水中銃の操作を誤り底土の海で死亡。

1967 昭和42年 8月13日：八丈島釣の友会、夏期釣り大会開催。

10月14～15日：八丈島釣友会（会長高崎武司）秋季磯釣大会開催。「磯を汚さないよう・安全第一」について磯釣マナーの向上につき決議。

1968 昭和43年 2月18日：三根永郷通称メカタ海岸で、同僚達と磯釣中の全日空乗務部三課長柴田昌（44才）、約15mの高さから転落漂流中を三根漁船3隻が出動、収容し手当を行なうも蘇生せず。

7月25日：中之郷藍ヶ江漁港堤防突端で遊んでいた、日本女子医大レントゲン技師高山勲（21才）、突然の大波にさらわれ転落、頭や背中に大怪我、気絶寸前をカヌー船で救助。また、大賀郷千畳敷海岸で友人と磯釣中の、豊島区の渡辺良（20才）、高波にさらわれ行方不明。

10月16日：昭和41年3月から協議が続けられた小島住民引揚、午後7時15分各条件について妥結。

10月19～20日：八丈島釣の友会主催の秋季磯釣大会開催。

1969 昭和44年 2月19日：八丈島釣の友会主催、イズスミ釣大会開催。かつ、総会開催、役員改選の結果、会長に長戸路義光、副会長に菊池德行を選任。

5月25日：神奈川県佐藤明一、三根イデサリで友人とアクアラングで水深約50mへ潜水、浮上したところ潜水病となり、三根漁協若い衆達の指導で神湊沖で、もう一度潜らせ治療した処、命を取り留める。

8月26～27日：第9回ブルーオリンピック（水中魚採り競争）、外国選手9人を含む120人が参加、共有漁場で開催。静岡県東部ダイビングクラブの黒柳英雄選手、34.1kgで優勝。尚、この時競技中の江戸川区田島敏明（27才）、深さ10mの海中の岩に挟まり死亡。この選手は大会の優勝候補者として目されていたが、腰に付けていた刺し綱が岩に絡まった模様。

10月18日：八丈島釣友会主催、秋季磯釣大会開催。

11月2日：三根栄徳丸（船主浅沼和仁）、大島波浮港へ魚を運搬の帰途、磯釣中転落溺死寸前の人を発見救助。このため翌年3月警視総監賞を受賞。

11月3日：三根漁協神天丸船主石田武徳、文化の日を記念、お年寄達に馳走したいと、手製のくさやを八丈老人ホームへ寄贈、大変喜ばる。

1970 昭和45年 2月1日：折柄の寒風吹き荒ぶ中、末吉台ヶ原で東光丸殉職者慰霊碑の除幕式、大勢の参列のもと執行。この碑は25年前の昭和20年4月、太平洋戦争本土決戦を控え、八丈島からの最後の強制引揚船東光丸（800t）16日午後3時頃島民と戦傷病兵約120人を乗せ、本土向け八丈島を出港、御蔵島南方海上20マイル付近に差し掛かった頃、敵潜水艦に捕捉され魚雷攻撃で、瞬時にして沈没、乗船者の大部分の者が死亡したもの。同船で重体患者輸送の任に当たり数少ない生き残り者、元衛生上等兵豊田市三（58才、養殖業静岡県引差郡細江町）、八丈の知己である沖山正智（末吉郵便局長）と文通を重ねる内、慰霊碑建立につき意気投合、両人の義挙で実現したもの。碑は裏面に殉難者118人（八丈関係者64人「三根14人、大賀郷16人、樫立1人、中之郷2人、末吉31人、」軍関係者34人。乗組員20人）の名前が刻まる。

4月5日：島で初めてのフィッシングセンター開設。これは樫立協和産業(株)（社長佐藤善太）、高島屋ストアチェーンと提携し始めたもの。

8月28日：八丈島における磯釣の状況、インダイの大物が続々と釣れ、俄に内外に有名となり、釣友会・観光協会・漁協・(株)産報・月刊フィッシングの人達の手で、10.5kgのインダイの魚拓をそのまま御影石に彫り込み、「魚の碑」を建立、流人祭りの日に除幕式を執行。

9月17日：新黒瀬漁場にソ連漁船（2,000t、巻網漁業・操業はせず）現われ問題となる。

10月1日：日本で初めての魚の剥製博物館、三根矢崎にオープン。これは今年の5月に来島した中田良一（39才）が経営するもので、700坪の敷地に円形の近代的な建築60坪、その中に15の陳列ケースが並び、八丈近海初めその他海域から捕れた、大小各種類の原色の魚の剥製約130点が陳列さる。特徴は、無着色の自然色であり、水の無い水族館は珍し。

10月10日：大賀郷長崎海岸で神奈川県今井博（29才）、友人4人と磯釣中足を踏み外して海に転落溺死。

10月19日：三根イデサリ海岸で、三根阿久津文男（27才）、磯釣りの餌に小アジを採ろうとして海に転落溺死。

10月31日～11月1日：八丈島釣の友会主催の秋季磯釣り大会開催。

1971 昭和46年 2月6日：末吉石積ヶ鼻で、江東区原島勇（26才）、同僚6人と一緒に磯釣中、突然の高波にさらわれ海中に転落、末吉漁協の漁船4隻が出て捜索、磯から約25m沖合、深さ15mの海底で遺体を発見容。

6月3日：八丈島海浜運動公園の造成工事、4月13日陸上自衛隊第一師団第一施設大隊第三中隊八丈島作業隊（飛田隊長以下36名）、着工以来難工事と取組み44日間で完成、第一師団原寿満夫陸将補・第一施設大隊長安達亮造二佐一行が来島、完成引渡し式を挙げる。この海浜プールは、18,715 m<sup>2</sup>。

6月9日：竹田八丈島警察署長、署員20名を従え底土海岸で、救命具・酸素吸入器・警備用モーターボートを駆使、溺者救助要領・人工呼吸・搬送その他の訓練を実施。また遊泳客への警告・指導を活発に行ない事故の防止を期す。

6月15～20日：海水浴シーズンに備え、日本赤十字社東京支部、八丈島青少協後援の「水上安全講習会」を各地区巡回で開催。

7月15日：石積ヶ鼻で三村博史（19才）、磯釣り中海に転落溺死寸前を、沖山慶喜（59才）・沖山孝光（19才）・沖山好（16才）・沖山弘光（43才）・沖山泰彦（17才）が協力して救助。この5名は11月13日付けで警視総監から感謝状を受く。

（注）この沖山好・沖山泰彦、翌年5月27日明治神宮参集殿で社団法人善行会から晴れの表彰を受く。

7月28日：中之郷藍ヶ江漁港の堤防で、海を眺めていた東京の佐々木篤子（21才）・清水正子（22才）、突然の高波によりさらわれ転落、溺死寸前を鈴木利康（21才）・山下貞夫（36才）・菊池浄文（38才）・山下淑永（43才）が救助。この4名は11月13日付けで警総監から感謝状を受く。

8月15日：八丈島の釣キチグループ、備船して釣大会開催、その釣果を、お盆中とあって老人ホームへ寄贈、お年寄達を感激さす。

8月21日：大賀郷南原海岸で、長野県飯田秀雄（22才）、同僚と海辺で、波を眺めているうち大波にさらわれ行方不明。急報により警察・地元漁船2隻等が出動捜索に当たり、磯へ流れ着いた溺死体を発見収容。

10月2日：八丈島釣の友会主催、磯釣り大会開催。終了後定期総会開催、役員改選の結果、全員再選（会長・長戸路義光）。

10月10日：三根の釣天狗連は、悪天候のため釣大会が出来ないため、富士中校庭で遠投競技を実施、97m 投げた石田武三1位となる。因にルールは、竿：自由、リール：スタードラック、道糸：20号、オモリ：30g。

10月23～24日：全磯連主催の全日本選手権磯釣大会、好天候に恵まれ開催。神奈川県支部の第一次予選に8名が入賞。

1972 昭和47年 7月25日：都民室から青葉次長等一行が来島、八丈町で婦人会・明るい環境を守る会・町議会議員を集め都民相談会開催。その席でヌードスタジオの他、廃油公害・商港の整備につき強い意見要望出る。

8月28～30日：流人祭りの一環として、観光協会・釣の友会共催の第一回八丈島釣選手権大会、八丈島の各海岸で開催。

9月14日：大賀郷カマノ下海岸で、波をバックにして写真を撮ろうとした、長野県秋山千明（37才）・藤森久（24才）、大波にさらわれ転落、藤森は自力で岸に上がり、秋山は行方不明、八丈島漁協大栄丸、漁民8名を乗せ捜索に当たれど発見出来ず。翌15日溺死体を発見収容。

9月：三根神湊の伊勢崎造船所（代表伊勢崎和鶴・40坪）からの硝子繊維の粉塵と溶剤等の悪臭による苦情が付近住民から発生。悪臭はパーメックNと言う溶剤（含有物：メチル・エチル・ケトン・パーオキシサイト・ジメチル・フターレッド等）から発するものであり、粉塵は切断や研磨の際に発するもの。付近には児童遊園地があり、また町営住宅3棟（12戸）が建築中。八丈支庁で指導に乗り出す。

11月21日：三根、勝栄丸（3.4t、船主佐々木繁）、釣客6名を乗せ八丈小島からの帰路、強風雨のためSOS発信、八丈分場拓南丸、急遽出動急航、激しい波浪のなかで釣客を全員収容、夕方勝栄丸と共に神湊に帰港。当日は漁業無線局を通じ、前線通過に伴う天候悪化の警告が出されていた下の出来事。

1973 昭和48年 2月4日：八丈島釣の友会主催「イスズミ釣大会」開催、約50人の会員が参加、生憎の冷雨の中で腕を競う。

5月6日：南国温泉に宿泊中の新宿区の野口則義（21才）、末吉石積鼻へ釣りに出たまま帰らず、翌日捜索、所持品や釣り竿等は見付かれども発見出来ず。翌々日も見当たらず。

8月16日：大賀郷千畳岩で岩熊夏代（8才）、台風10号の余波の大波にさらわれ転落、横浜市の中村訓久（27才）が大波中救助すれど町立病院で死亡。

10月10日：体育の日を記念し、釣りキチによってポイント投てき競技を開催。この競技は50m～70m 先の中心へウキつきの錘30錘30号を釣り竿で投げ込み競うもの。

11月10日：全磯連神奈川県支部の懇親磯釣大会一行 130人余、来島、磯釣りを満喫、翌日帰京。

1974 昭和49年 1月5日：末吉石積海岸で約30人が磯釣り中、突然5m近い大波が押し寄せ、全員が足をさらわれ、殆どの人が岩にしがみ付くなど、または自力で岸に泳ぎ付くなどすれど、神奈川県山本賛二（50才）、深沢欣一（35才）の二人が行方不明。このため警察署は八丈島漁協に依頼、付近を捜索した処、水死体となって発見。

1月24日：三根新池海岸で釣り仲間5人で磯釣り中の大賀郷沖山安彦（八丈町勤務・38才）、高波にさらわれ行方不明、翌25日同付近から遺体となって発見収容。

6月15日：檜立湯浜海岸で、仲間と遊泳中の浮田豊（勤労福祉会館勤務・26才）溺死。原因はシュノーケルの操作未熟に依るものと推測。

8月20日：大賀郷千畳岩先端で5人の釣り人の内、3人が高波にさらわれ、1人は岩にしがみ付き無事。2人は海中に転落、内1人は自力で岸に泳ぎつき助かる。残りの1人は泳ぎが余り出来ず、そのまま沈んで溺死。直ちに大賀郷漁船松丸が出動、沖合40mに漂流しているのを収容。溺死者は大賀郷千葉克彦（29才）。

11月4日：八丈島釣の友会、秋の磯釣大会を開催。

1975 昭和50年 2月16日：八丈島釣の友会主催、春季ササヨ釣大会開催。

5月11日：全磯連神奈川県支部の傘下として、八丈島磯釣クラブ（通称「底土磯」会長土屋一郎）結成、既に加盟済の八丈磯釣クラブ（会長長戸路義光）と、八丈島カシカミ会（会長奥山守治）が揃って活躍することとなり、底土磯の誕生を祝って、3クラブ合同の懇親磯釣大会を開催。

7月12日：八重根新港で友人と一緒に波を見ていた、東京の矢沢博光、大波にさらわれ海中に転落、西浜惣五郎これを発見、110番す。一方菊池忍（41才）・佐藤謙二（31才）の2人はロープで身体を結わえて飛び込み、溺死寸前の矢沢を救出。

7月20日：底土港において、八丈島連合青年団（団長大沢力）主催、八丈島警察署指導の「水難救助講習会」開催。

8月13日：大賀郷国際観光ホテル前の岩場で、友人達と釣をしたり泳いでいた埼玉県の佐藤裕之（16才）、高波にさらわれ行方不明。翌日八丈漁協の漁船や消防団が捜索すれど発見出来ず、翌々日溺死体で発見。

1976 昭和51年 3月26～27日：第10回フリーズ祭りの一環として、磯釣り大会開催。

3月29日：末吉石積ヶ鼻で、仲間4人と磯釣り中の市原市在住の大杉憲一（23才）、突然の高波にさらわれ転落、幸い救命胴衣を着用のため、沖合約20mの波間で救助を求める。そのため仲間達は、ロープを投げて救助に当たりつつ急報に当たる。巡回中の末吉駐在新関博士（26才）・中之郷駐在大阿久清（27才）の両巡査、八丈島漁協末吉支所に漁船の応援を求めた後、ロープで必至に救助に当たっていたところ、不幸にも第2、第3の高波に襲われ、新関巡査も波に引き込まれ、両名とも行方不明。救援に馳せ付けた漁船に遺体で収容。新関巡査、壮絶な殉職。

4月18日：南海タイムスに「海水浴場をみんなの手で」という題名で八丈島青年の会の解決策として「島民が力を結集し、奉仕活動で」の主張載る。

4月21日：八丈島青年の会（幹事長小宮山善仁）、三根公民館に各団体の海水浴場整備に賛同する有志を募り、支庁長・町長・署長外多数のオブザーバーを招き懇談会を開催。海水浴場整備促進実行委員会を結成（実行委員長佐々木正光）。

5月4日：海水浴場整備促進実行委員会、4月27日八丈支庁・八丈町と協議会を開き、海水浴場整備の法的規制等につき打ち合わせを行ない、その結果に基づき実行委員会を開催、作業計画・日程等につき協議。その内容は次の通り。

- ①保安林を含め約 6,500㎡の砂浜を造成する。
- ②作業日は、5月23・24・30日の3日間とする。
- ③周知方法は、折り込み・ポスター等でPR、父兄と子供達にも参加を求める。
- ④清掃作業をすることによって、物を捨てない心を育て、海水浴場の整備とともに、町を奇麗にする運動にも発展させる。

5月16日：南海タイムスに「海水浴場整備に御支援・御協力を！」の題名で、整備促進実行委員会委員長佐々木正光の投稿載る。

6月30日：海水浴場整備促進実行委員会に依る海水浴場整備、5月15日早朝から作業を開始、朝5時から8時迄の作業を5日間、午前9時から午後4時迄の作業を3日間行ない、総延人数820人の汗の奉仕作業により、松林の害虫駆除・下刈・砂浜の造成を行なう。作業には山本支庁長・菊池警察署長・峰元町長や各地区婦人会・各学校のPTA・家族連れの子供達まで自主的に参加、計画通り達成。これは住民参加の好例、今後を期待さる。

6月22～25日：日赤八丈支部、夏に向い水難事故を未然に防ぐため、「水難救助講習会」を勤労福祉会館で開催。

7月27日：午後1時から5時迄中之郷藍ヶ江で、第2回カメカメ祭り開催。これは一般参加者に島酒・カメ料理・魚料理等の、食べ放題のサービスを行なうもの。

7月：八丈町商工会青年部30人、剝製のウミガメを背負い、銀座歩行者天国で大行進を行ない都民に大受。

8月10日：中之郷ナカッチョで磯釣り中の三留吉弥（72才）、高さ3mの崖から海中に転落死亡。

8月18日：乙千代ヶ浜まつり実行委員会（委員長佐藤善太）・乙千代ヶ浜海水浴場運営委員会（委員長磯崎光弥）・民宿協同組合樫立支部（支部長山下雪雄）主催、樫立小PTA・樫立青年団協賛による「乙千代ヶ浜まつり」を開催、来賓や住民約300人が参加賑う。

11月17日：末吉石積ヶ鼻で仲間5人と磯釣り中の釣客浅野勝美（34才）大波にさらわれ転落、約10m沖合に流さる。5人は近くに設置してある救命浮環を投げ救助。この救命浮環は、末吉消防団がこの4月に、ロープと共に設置したもの。今回の救助の成功は、この救命浮環と本人が救命胴衣を着用していたことに依る。

1977 昭和52年3月4日：午前3時頃、八丈島灯台の東500mの海上に、日の丸を掲げたソ連船出現。これはソ連アカデミー極東センター火山研究所所属の、科学調査船ブルカン-ログ号。通報を受けた海上保安庁巡視船「いず」夜灯台の東北東2.7kmの領海内で捕捉。通告や承諾無しに、領海内に侵入した理由を究明の様。目的は火山新島か。

3月18～28日：国際的に経済水域・領海論議が高まる中、八丈支庁（支庁長山本義光）所管である鳥島について、全庁的なプロジェクトチーム（角谷正幸・菊池邦男・中山恒輔・山本拓次・千葉英彬）を編成、  
①国土保全（環境保全・海岸保全・砂利採取の適否・植生調査）  
②鳥類の保護（アホウドリ等鳥類の現況確認・保護区制札の設置）  
③漁船操業の状況把握

等の目標を立て、東水試大島分場（分場長草莉正）の調査船「みやこ」（127t、青沼船長）の、鳥島における春トビウオの調査行に便乗、「火の島」として名高い鳥島の現地確認調査を実施。

5月8日：南海タイムスに「アホウドリの夢」の題名で東邦大学の長谷川博の海鳥保護の寄稿文載る

6月7日：山口県宇部市の岡村精二（23才）の0.5tのヨット（シンシア3号・アルバイトの収入1,200千円を注ぎ込み4ヶ月掛けた手作り）、神湊漁港に入港。太平洋単身横断のため9日一路サンフランシスコ向け出港、航海予定は150日、食料250日分、水200リットル、本50冊、無線・エンジン無しで、漁業者を心配さす。同船は風のため転覆し荷物の一部を濡らすも、ストームジブ（荒天用の帆）に切り替え、宇部港を出てから46日目にサンフランシスコに到着。神湊港を出てからは123日目。

7月30日：中之郷藍ヶ江で第3回カメカメ祭り開催。約千人の人出。

8月4日：第2回石積ヶ鼻釣人遭難予防対策会議、支庁会議室で開催、同海岸に連絡用緊急電話を、地元有志の尽力と、報話局の指導で設置決定。機械はマグネット式直通電話。

10月10日：大賀郷千畳敷海岸沖合50mの海中で、スキングダイビングをしていた太田区門坂昌美（21才）、突然見えなくなり同行の友人が5分後に海底で発見、人工呼吸をすれども意識回復せず。彼女達は昭和大学医学部の生徒7人。

12月2日：大賀郷横間海岸で薪拾い中の田村義男（33才）、波打際でブイを拾得、よく見ると「危険物ではありません、楽しいプレゼントが入っています。」と書いてあるので、開けてみると中から「このカラブイは、1974年6月マリアナ諸島海域で投下したものです。」と書かれたカードや1975年に開催された沖縄海洋博のメッセージと記念バッジ・腕時計の引替券・当時新潟県立糸魚川高校の1年生であった水嶋英知の作文が封入。このブイは、シチズン商事主催、沖縄海洋博覧会協会・水路協会後援で、海洋博覧会の紹介と、海流調査・国際親善を兼ねて、沖縄・マリアナ諸島・コーラルシー・シンガポール・メキシコの海域に投下したもの。今回のものは3年がかりで到着。

1978 昭和53年5月1日：アウトリIGGER式カヌー「野生号Ⅱ」、底土から東京向け記念航海のため出航。この船は、黒潮が果たした歴史的、文化的役割を探ろうと、黒潮文化の会（角川春樹会長）、文化庁後援で、昨年5月16日から6月28日迄フィリピンルソン島から鹿児島に至る、約2,500kmの航海に成功したもので、東南アジアから南太平洋に向け、今でも広く使用されているもの。この航海が終れば、東京の船の科学館に収納展示される予定。伴走船は第十二共勝丸。

5月26日～6月19日：伊豆諸島東京都移管百年記念行事の一つとして、八丈島釣競技大会（会長稲葉修元法相）、本島周辺・小島海域で開催。参加者は、都23区・都下市町村の釣天狗連1,584名。

8月3日：八重根商港突堤で波を見物中の府中市石井幾仁（19才）大波

にさらわれ転落行方不明。海上は台風の余波で海が荒れ、陸からの捜索が続けられたが発見出来ず、波が静まった5日、潜水捜索した処、現場付近の海底で遺体を発見収容。この件で9月3日警察署長、消防団大賀郷分団・折田文男・佐藤謙二・浅沼重仁・浅沼公・菊池盛仁に感謝状を贈る。

10月21日：藍ヶ江漁港で、江戸川区森和夫（29才）、大波にさらわれ転落、たまたま釣り客を案内して来たハイヤー運転手奥山次男（34才）、荒海中へ飛び込み救助、警察署長から感謝状が送られ、警視総監賞も授与。

1979 昭和54年 1月1日：南海タイムス新年号に、各界代表者の年頭の辞として、持丸真喜男（水産研究会会長）の「漁師冥利」登載。

1月14日：南海タイムスに小栗清吉の談話載る。概要次のとおり。船祝いの料理「鳥肉は使ってもよいが、四つ足の肉は使うな。」（注）鳥はトリ込む（大漁）を意味し、四つ足は四つん這い（相撲では負け）を意味する。「船内に持ち込む食料についても、酢の物（夏みかん等）は積み込むな。」（注）酢は素戾り（魚が死ぬ）を案じたからである。「船霊様（船の守護霊）は初潮前の女兒か老婆になる事が出来、船霊様の毛髪と着物の端切れ・粟・サイコロ・12円・豆・鏡・はさみ・櫛等12品目が神体として納めらる。

1月30日：科学技術庁の資源調査会、「黒潮を発電等に開発利用出来るよう、調査研究を進めるべきだ。」とする調査報告書を纏め長官に提出、候補地5ヶ所の内に八丈島大越鼻沖も入る。

1月31日：三根クニノミチで釣り客1名遭難、行方不明。

7月10日：水槽5、カメ池1、冷暖房設備、水温調節機構、濾過機構を有する水族館、三根に(株)八丈亀屋によって、入場料無料、新装オープン。

1980 昭和55年 7月20日：南海タイムス特別企画で「おやじの海」掲載。中之郷奥山度泉、三根長田善之両人紹介。

7月27日：南海タイムス特別企画「おやじの海」で、末吉冲山末喜・大賀郷西浜晴美両人紹介。8月3日南海タイムス特別企画「おやじの海」で大賀郷大沢啓・三根持丸真一郎両人紹介。

11月27日：三根アライケの釣り場で小宮山国男（59才）、高波にさらわれ死亡。三根オオサリの釣り場で金川弘次（56才）、高波にさらわれ転落、頭蓋骨々折の重症を負う。

12月27日：三根永郷クニノミチで、釣り客大波にさらわれ転落、行方不明。（56年1月2日遺体発見、5日収容。）

1981 昭和56年 1月1日：八丈小島宇津木の横瀬根で、ダイバー客11時30分頃行方不明、同日18時30分頃オオサリ海岸に無事流れ着く。

1月2日：昨年12月27日クニノミチで、行方不明となった釣り客、遺体で発見、5日収容。

2月1日：八丈小島の一ノ根で、高波のため3人の釣り人孤立、翌日17時間ぶりに海上保安庁、救難ヘリで救出。

2月9日：八丈島警察署の呼び掛けで、関係団体の代表者約20人が集ま

り、「水難事故対策協議会」を開催。事故防止に向け、島一丸となって取り組む姿勢を確認。

水難事故件数		(警察署調)				
54年	死者	2人	重傷	0人	軽傷	1人
55年	死者	3人	重傷	1人	軽傷	7人

2月17日：御蔵島沖で大波のためマストを折られた、水野夫妻のヨット（バミス号）、八重根漁港に入港避難。

3月27日：去る2月17日八重根漁港へ遭難寄港したヨット（バミス号）破損したマスト・シール・ステー・自動操舵機等の修理を終え、22時10分世界一周セールを目指して小笠原向け出港。

4月5日：イカの夜釣りに出掛けた釣り客1名行方不明。4月17日溺死体、三根永郷のツクズネ海岸沖約150mで発見。

4月24日：NHKテレビ「今日の料理」番組で、ふるさとの味「八丈島の飛魚寿司」放映。

5月4日：永郷ナズマドでダイバー客、強い潮流に約200m流され、岩場に漂着、救助さる。

7月19日：八丈島の南方154kmに位置する、スミス島（海拔134m・面積0.03平方km）において、ロッククライミング一行9人の内1名転落死亡。一行は登山のベテランで指導員級。

11月8日：大賀郷ナカノママ海岸で、3名の釣り客のうち2名、高波のため転落、1名は翌日死体収容、1名は行方不明。

1982 昭和57年2月22日：中之郷小岩戸鼻の釣り場において、大賀郷、細川国光（38才）・菊池正吾（40才）大波にさらわれ死亡。

5月2日：小笠原父島向け砂利・砂を満載した貨物船第十鳳生丸（479t）、大賀郷永郷荷浦の南方200mの海上で座礁沈没。乗組員6名は全員救助。

6月5～6日：「マリニック82」オープン。ヨットレース底土で開催。参加艇は27艇（シーポッパー13、レーザー7、ホビーキャット16-1、ホビーキャット8-2、ナクラ1、z 1.9等）

6月：「八丈島海洋レジャークラブ（代表石井弘正）」結成。

1983 昭和58年1月14日：末吉石積鼻で大阪の釣り客転落、救助。

1月16日：末吉石積鼻で立川市からの釣客1名転落、500m沖合で溺死体で発見。

6月4～5日：“マリニック83”のファイナーレのイベント、ヨットレース底土海域で開催、ヨットスクールも開かる。参加艇は20艇。

6月7日：米国人の豪華クルーザー（長さ15m、幅4.6m）、八重根・神湊漁港に寄港。入港拒否の管理事務所の措置に抗議しながら、横浜向け出港。

9月14日：BOC世界一周レースで優勝した、多田雄章（53才）の「オケラ五世」、神湊港に入港、米国からの帰路。9月17日朝三崎向け出航。

11月3日：末吉石積ヶ鼻沖 350m で潜水中のダイバー、エアー切れで死亡。

1984 昭和59年2月29日：末吉石積鼻で高波のため大賀郷横山光郎（48才）死亡。

4月11～12日：マリニック84”底土海岸沖でデインギー（ヨットレース）を開催。参加艇14、選手は19人。

6月9日：米軍の艦載機鳥島近海で墜落。八丈島漁協栄丸（船主菊池正直、9.98t）米軍パイロットを救助。6月11日在日米海軍マッカーシー大佐一行3人、防衛庁職員2人と来島、栄丸乗組員3人に感謝状と記念品を贈る。

7月20日：汐間道路交通止め区間 600m について、サーフィン客等の要請により関係機関協議の上開放。

1985 昭和60年3月5日：八重根港近くの岩場で、釣り客1名転落、八丈漁協松丸（船主広江勝之進、9.33t）が救助。

4月27日：青ヶ島大千代港先海岸で釣り人2名転落、1名救助、1名溺死。

6月：汐間海岸のサーフィンにつき、赤と黄色の旗区分で安全策樹立、実施。

7月19日：神湊漁港にアメリカの豪華ヨット（NABOB II、全長17m）、優雅な世界一周の途次寄港。4日後の22日横浜向け出港。

8月16日：樫立乙千代ヶ浜でダイバー初心者溺死。

9月14日：リベリア船籍タンカー・シノダ号（16,423t、23人乗組）爆発炎上、八丈北東沖約15kmで沈没。22名は救助され、1名は行方不明。同船はナフサ船であるが、幸いに空積みであり、八丈への被害皆無。

11月11日：永郷クニノミチ近くの岩場メカタで、釣り客1名波にさらわれ転落死。

11月23日：大賀郷長崎海岸に、有志により海難事故者慰霊・海の安全祈願碑建立有志代表菊池盛仁。

1986 昭和61年2月4日：支庁会議室で、「八丈島スキューバダイビング事業者協会」結成。会員は8社、事務局長は菊池盛仁。海での安全性と、漁場の秩序の維持が期待さる。

3月21日：底土海水浴場堤防とテトラポット間で、ダイバー客流される仲間を救わんとして自己溺死。

3月30日：新婚旅行で来島した新郎、三根油戸で釣り中、高波にさらわれ行方不明。4月3日溺死体で発見。

3月31日：油戸（太洋ホテル下）で釣客転落。

5月3日：大賀郷永郷のナズマドで、スキューバダイビング客1名、200m沖へ流され、約30分後通り掛った大分県の栄丸（船主木元潤一郎）救助。日没時の事で間一髪的事件。

5月17日：マリニックの今大会の新種目、ブギーボード競技が選手22人によって汐間海岸で開催。また、フィッシュウオッチングは、16～17日八重根において参加者35人によって実施。

6月16日：大賀郷ヤケンガ浜沖 200m・水深20mの海底に、海難事故者慰霊“地蔵尊”を、海底地蔵尊設置有志会（代表菊池盛仁）が設置。

7月24日：神湊漁港内でダイビング中の初心女性溺死。

7月25日：初心者ダイバーの度重なる事故発生に対し、警察署、関係者を集め緊急会議を開催。

8月11日：八丈小島沖 100mの首付根で、スキューバダイビング中の女客2名、水深15mの海底で溺死体で発見。

8月17日：底土のテトラポット沖で、ダイバー2人が流され、漁船10隻出動、第五宇之丸（船主小栗清吉14.43t）が救助。

8月24日：八重根商港内で、海水浴客1名波に吞まれ溺死。

11月22～23日：底土海岸で「第2回マリンフェスティバル・イン八丈」100人のダイバー参加のもとに開催。

12月13日：去る12月2～3日に青ヶ島三宝港で流出漂流したヨット、青ヶ島東南東111kmの海上で操業中の九州船籍漁船に発見され、八丈島待機の石津ハツエ（38才）に海上保安庁の巡視船から引き渡され、ネコモニワトリも無事。

12月15日：ヨットマンの多田裕幸（56才）と、オケラ号の産みの親齊藤茂夫（44才）同乗の「オケラⅦ世」八丈に寄港、17日太平洋横断レースに出場するためオーストリア向け出港。

1987 昭和62年 5月15～16日：今年で6回目を迎えた“マリニック87”（主催都観光連盟など4団体）がフィッシュウオッチングとブギーボードの2種目を開催。

5月13日：汐間海岸のサーフィンの障害となる岩、八丈町の手配により撤去。

5月20日：八丈島観光協会、海のクリーン大作戦本部（代表長瀬満）、1回目の海底清掃をアブラド・ナカノママ・クニノミチ・南原の4ヶ所で実施。

5月28日：八丈島観光協会「海のクリーン大作戦」中之郷藍ヶ江の一带を実施。海底のゴミ・ワースト1は藍ヶ江との評価。

7月6日：八丈島観光協会、海のクリーン大作戦本部、小島のカンナギ・一ノ根等のポイントのクリーン大作戦を展開。従事した者は、「クモの巣を張り巡らしたような、ナイロン・ワイヤー、それに空缶・釣り針・錘り・腐ったコマセの堆積」と語る。

7月16日：八重根漁港の新泊地工事現場から、縄文時代の土器の破片大量に発見。これまでの八丈島の遺跡は、樫立の「湯浜」と「倉輪」の2ヶ所、今回のものは「弁天山前遺跡」と名付けらる。都教育庁文化課では「現場は今後、少なくとも2ヶ年間位は手を付けられない」と表明。

7月19日：南海タイムスに「八丈小島小地根の海鳥たち」と言う標題で、東邦大学の長谷川博の寄稿文載る。

7月23日：三根垂土沖約 800m でボートダイビング中のダイバー 5人、潮流に流され、約40分後約 2 km沖合で救助。

10月2日：漂着した北海道から再度小笠原へ向けて航行中の、石津はつえ(39才)のヨット「ハツエ・カカヒアカ号」、宮城県金華山沖で舵が故障、漂流中を救助され、海上保安庁巡視船の曳航で、塩釜港に入港。

11月7日：八丈小島の野生山羊につき、支庁・町で昭和58年以降継続の調査、今年は8月4日に実施。その結果についての打ち合わせ会開催。その中で「小島西側で多く見られる崖崩れ、土砂が漁場に流出、トコブシ・イセエビ・テングサに被害が出ているのではないか。これも山羊の繁殖の故」との意見も出る。

11月22～23日：第3回マリンフェスティバル(主催八丈島観光協会・八丈スキューバダイビング事業者協会)開催。島内外から集まったダイバーは、連休と言う事もあり約 1,000人と盛大。

1988 昭和63年 2月14日：午前9時半頃、大賀郷永郷ナカノママの釣り場で、三根杉林輝美雄(36才)、無人の磯場に背負い籠・落とし網等が放置されているのを発見、不審に思い 110番通報。警察では調査の結果、本日午前3時頃ナカノママへ釣りに出掛けた、大賀郷石田綱十(63才)と断定、捜索を開始。現場では海難救助隊らダイバー6人・漁船7隻・署員30人が出動捜索に従事、ナカノママから南へ約 500m 離れた、ナズマドの水深約 5mの海底で溺死体を発見。

・(注)釣り人の海難事故

(年度)	(海難事故件数)	(死亡者)
57年	11 件	4 人
58年	15 件	4 人
59年	9 件	5 人
60年	10 件	3 人
61年	16 件	8 人
62年	3 件	0 人

4月8日：中之郷藍ヶ江漁港で釣りをしようと堤防先端に向かっていた釣り客、7人の内3人が高波に足を取られ、湾内側に転落、1人は救助され、田無の菊池敏郎(40才)と杉並区の越川朗(63才)の2人は溺死。

6月23日：スミス島付近で三根神天丸(船主石田武徳)、スノーピーの絵が書かれたバレーボールを拾い、八丈分場へ届ける。このボールには更に住所と電話番号が記入されているため、八丈分場では早速送り届ける。(注)この送り先は淡路島、大江瑞穂(小学校5年生)。朝日新聞「小さな掛け橋」欄に8月9日報道さる。

6月28日：朝小岩戸ヶ鼻の南南西約 7 km沖合で、二人の外国人が乗ったヨットが漂流しているのを、八丈島漁協所属の日光丸(4.9t、船主浅沼政定)発見、ロープで藍ヶ江漁港に曳航。このヨットはオーストリア船籍の「ヒロンデレ号 9t」で、乗り組んでいたのは、スイス人のビレット・ローラン(35才)・妻のアメリカ人ギャラタナ・シエラ。同船は6月17日に東京向け沖繩を出航、台風4号の影響を受けて、マストの一部と帆を破損して漂流したもの。4日間修理のため係留した後、東京向け出航。

8月7日：南海タイムスに、平山昭一作「貝（アブキ）の唱」掲載。

8月7日：南海タイムスに、ダイビングクラブ「ユウゼン」紹介記事載る。

8月15日：榎立乙千代ヶ浜沖で、埼玉県所沢のダイビングショップ「フロート」主催ツアーの一行18人、台風11号の影響による高波のため岸に上がれなくなり、このうち14人は、岸に居た榎立の笹本訓司（39才）・笹本勝彦（36才）・岡田和久（40才）・伊勢崎明俊（46才）等が投げた浮環に捕まって陸に引き上げられ、4人は沖合へ流され、訓司等3人は浮環を持って飛び込み、浮環に捕まらせて約30分後、八重根から急行した、いち丸（船主菊池一朗）に収容。内5名は衰弱のため町立病院へ入院。この事故を重く見た八丈島スキューバダイビング事業者協会（事務局長菊池盛仁）、翌16日に会議を開き、海況によるポイントの閉鎖等を検討。

8月21～22日：底土海水浴場では、相次いで海水浴客が激しい潮流に流される事故が頻発。救助された者は14人。

8月28～29日：第16回八丈島島民大学講座が開催され、東邦大学理学部講師長谷川博を講師に、「アホードリの生態と保護」・「伊豆諸島の海鳥類」についての講義が行なわれる。

9月20日：自治振興委員・納税貯蓄組合長の集いで大潟浦海岸にプール整備の要望出る。

9月28日笹本訓司・笹本勝彦・岡田和久・伊勢崎明俊・菊池一朗の5人に警視総監感謝状を伝達。

11月20日：三根ホテル・ローヤル前のアライケの釣り場で、三根伊勢崎弘一（八丈支庁勤務・46才）、長男と磯釣り中高波にさらわれ転落、長男の通報を受けて急航した正丸（船主高橋正男）搜索、約150m沖合を漂流しているのを発見収容、病院で手当を受けたが25日死亡。

11月22日：「第4回マリンフェスティバル・イン・八丈」（主催八丈島スキューバダイビング事業者協会）、底土海水浴場で開催。参加者約100名で賑う。

1989 昭和64年1月1日：南海タイムスに椎名誠の「海を見にゆく」の文掲載とともに、海の風景に文章を付けた写真集「海を見にゆく」の紹介載る。

（1月7日：天皇陛下、午前6時33分御崩御、昭和から平成と年号が変わる。）

## 11 使用文献

- 伊豆七島水産経営事業報告。大正7年～昭和2年（昭和4年）：東京府  
伊豆七島水産経営事業報告。昭和7年～昭和11年（昭和17年）：東京府  
東京府水産要覧（昭和3年）：東京府  
趣味の八丈島誌（昭和12年）：永久保 満  
南海タイムス。昭和6年～：南海タイムス社  
七島新聞：昭和27年～：七島新聞社  
八丈現業場業務報告。昭和23年～：東京都水産試験場  
八丈分場ニュース。昭和37～46年B5冊子プリント：東京都水試八丈分場  
八丈分場ニュース。昭和46年～ B4 壁新聞：同上  
三根漁業協同組合決議録綴。大正元年～昭和24年：三根村漁業協同組合  
都の水産情報。昭和26・27年：東京都水産課  
東京都の水産。昭和24年～：東京都水産課  
八丈支庁管内概要。昭和24年～：東京都八丈支庁  
東京都水産試験場事業報告。昭和25年～：東京都水産試験場  
八丈島近海海況旬報。昭和27年～37年：東京都水試八丈分場  
八丈分場海況速報。昭和37年～：東京都水試八丈分場  
漂着船（プリント）（昭和31年）：菅野 裕  
八丈島誌（昭和48年）：八丈町  
伊豆諸島水産物方言集（プリント）（昭和50年）：東京都水試八丈分場  
東京都水産試験場50年史（昭和53年）：東京都水産試験場  
青ヶ島島誌（昭和55年）：小林亥一  
伊豆諸島東京移管百年史（昭和56年）：東京都島嶼町村会  
青ヶ島の生活と文化（昭和59年）：青ヶ島村  
伊豆大島漁業史料（昭和59年）：東京都水産試験場

## 編纂を終えて

史料を編纂すべく関係文献を調べ始めると、まず船の遭難の多さに驚かされた。このため遭難のみで一章を設けたが、紀元前 218年（孝霊72年）徐福の従者、童女 500人の漂着は別格としても、1393年以降、中国船の漂着も記録されている。江戸期に入り、江戸の経済力の充実を示すように、登り船と称する荷を江戸に運ぶ船の遭難が目立ち始め、その船籍も紀州から沖縄にまでおよんでいる。これらの記録は、島周辺の海の荒さとともに、八丈島に向かう強い流れ（黒潮）があることを示しており、漂着船からその当時の黒潮の勢力を解析することも可能であろう。

漁船の遭難は1841年（天保12年）土佐のスズキ漁船の鳥島漂着が古いが、隻数が増えてくるのは明治以降である。特に1892年（明治25年）和歌山でのサンマ船63隻（749人）の遭難では、内 179人が八丈島に、31人が青ヶ島に漂着している。八丈漁船の漂着も時代とともに増えてくるが、近年の大きな遭難として、1966年（昭和41年）の漁恵丸、1983年（昭和58年）の住吉丸がある。この間、遭難防止に向け、例えば、藍ヶ江港開拓（1835年）・測候所開設（1906年）・焼玉エンジン導入（1927年）・石積ヶ鼻と神湊に灯台完成（1950年）・小型無線機搭載（1957年）・漁業用海岸局 S S B 2 MHz開局（1969年）・漁業用海岸局24時間開局（1985年）等の対応が進められた。

漁業の内容については、大島では1687年頃（貞享の頃）まで七島貢租として、塩と干魚を上納したとあるが、八丈島には、このような記録はない。これは、八丈島は水が豊富で稲作が行なわれたことや黄八丈の生産があったことにも関係しよう。青ヶ島では1715年（享保元年）八丈島に漂着した年貢船に、鰹節を大量に積載していた記録があり、明治初年には、年間5万から10万尾の鰹漁がなされている。しかし、1887年（明治20年）ドットコ船（動力船）の出現により鰹漁業は衰退し、逆に、八丈島の漁業が記録に表われてくる。このことは、

八丈船は動力を得ることにより、はじめて黒潮の直接当たる荒海での漁業が可能になったと考えられる。

漁獲物については、1708年（宝永5年）ムロアジ等を網で初めて獲った記録があるぐらいで、その実態は不明である。ただし、1835年（天保6年）の青ヶ島における水産物として上げられている30種（魚類15・貝7・海藻4など）を調べると、現在も島の周辺に見られるものであり、鯉のような回遊魚を含め食用となるものは有効に活用されたのであろう。

明治に入り食料増産は、国策の一つの柱であり、1906年（明治39年）開始の小笠原水産経営事業及び1918年（大正7年）開始の伊豆七島水産経営事業が内務省により行なわれた。この事業により、大島波浮港を基地とする指導船「知音丸」（51t）・「青雲丸」（19t）と現東京都水産試験場八丈分場の前身となる八丈現業場が発足した。これら指導船は、補助機関付きのスクナー型帆船で、カツオ・マグロを主体に、サンマ・底魚・サンゴの漁業調査と、漁業者の養成を行なった。

八丈現業場では、指導船の漁獲物を主体に、節類・缶詰類の製造試験に取り組んだ。この加工試験は、市場が遠く運搬手段が限られていたための対応で、現在高級魚であるアオダイ等の底魚も、1951年（昭和26年）頃まで粕漬等の加工試験が実施された。

現在、伊豆諸島を代表する加工品である「くさや」については、大島では1644年頃（正保年間）よりあったとされているが、八丈での記録はなく、1918年（大正7年）塩抜きを必要とする「くさや」（半くさや）を製造試験しているので、その歴史はさほど古くないのかもしれない。

1937年（昭和12年）頃より大型船が竣工（神港丸 19.1t・海幸丸 19t・第6海幸丸 29.7tなど）しているが、当時の漁港状況を考慮すると保守管理の労力は多大であったと考えられる。

1938年（昭和13年）鳥島の水深 180尋で底魚一本釣に従事中 400匁のモモイロサンゴを釣り上げた記録があるが、この頃よりサンゴ漁業が活発化し、1941

年（昭和16年）の漁獲量は28千貫、818千円に達したが、第二次大戦のため同年12月をもって操業中止となった。

戦前の漁業は、上述のサンゴの他、天草・春飛魚・底魚が中心であった。

1946年（昭和21年）八丈支庁に水産課新設、同課内で八丈現業場執務開始。八丈島漁船51隻（伊豆七島163隻）。魚介類供出割当90千貫、昭和22年水揚138千貫（魚類77千貫・天草45千貫・広瀬貝2千貫・製塩6千貫など）。

1950年（昭和25年）製氷能力30tの製氷会社が三根で事業開始。八丈島の電力不足のため2億円でダムを建造。従来2ヶ所の製氷所があったが、何れも製氷能力2t 足らずで、漁船が満足に使用できない状態だったため、以後魚の鮮度が向上し、東京市場でも高値で取引されるようになった。

八丈現業場、底魚地形推定図作成配布。好漁場順位は、①洞輪沢沖漁場 ②成金漁場 ③浅礁漁場 ④地山漁場 ⑤東山漁場であり、底魚の漁獲が春トビウオ漁獲を凌ぐほどとなり、漁船の増加により漁場が狭隘となり新漁場開発が進んだ。1959年（昭和34年）「中の黒瀬」発見、八丈漁船40隻・他県船10～15隻出漁。八丈分場拓南丸（1957年八丈現業場組織改正、同年拓南丸竣工）方向探知機・魚群探知機の無い小型漁船を誘導、魚群探知機利用の関心著しく高くなった。

1958年（昭和33年）八丈分場、製造試験部門を廃止、増殖部門に力を入れることとなる。同年大島よりサザエ移植試験実施。

漁業生産基盤の充実面では、1953年（昭和28年）離島振興法が制定され、漁港も適用されることとなった。また、東京都水産課では、テングサ・トコブシの漁場改良投石事業（1953～）・並型魚礁設置事業（1955～）・イワノリのコンクリート面造成事業（1962～）・沿岸漁業構造改善事業（1964～）・沿岸漁場整備開発事業（1974～）・トコブシの大規模増殖場造成事業（1980～）・人工礁造成事業（1981～）等の事業を積極的に実施した。

また、新技術の導入としては、曳縄漁法導入（1961～）・中層シャビキ漁法導入（1962～）・揚網機全船装備（1964～）・棒受網漁業代用餌料（1966～）

・メダイ樽流漁法導入（1970～）・リール式底魚巻揚機開発（1972～）・表層浮魚礁開発（1983～）などがあり、鮮度保持研修（1979～）などとあいまって漁業発展が見られた。

漁業協同組合は1973年（昭和48年）に合併が成り、八丈島漁業協同組合と三根漁業協同組合の2漁協となったが、この年の水揚量は、三根漁協が約5億1千万円で伊豆七島の第一位、八丈島漁協が約3億円で同第2位となった。

戦後順調な発展を続けた八丈島の漁業であるが、同年の石油ショックは日本経済に大混乱をもたらし、漁業にとっても燃費や資材の高騰という影響が生じた。また、この頃より廃油の漂着が甚だしくなり、漁網や海水浴客の被害が増加し、限りなく広いと信じられていた海に、何かが起こっていることを暗示する被害であった。

世界的な200カ国漁業専管水域宣言の高まりで、戦後、沿岸から沖合、沖合から遠洋へと漁業生産を伸ばしてきた日本の漁業は、その漁場を失い1976年（昭和51年）大型資本による巻き網船団が伊豆諸島海域に出没し操業するのに対し、資源減少を憂える漁民の声高まり、水産庁に全面禁止を陳情。

1978年（昭和53年）青ヶ島、「領海3km」宣言、法的力は無いものの、島外船に漁業資源を荒らされることへの怒りの声でもあった。

1979年（昭和54年）東京都島部海区漁業調整委員会、地獄縄（底延縄式立縄漁業）の操業禁止を告示、都の許可漁業となる1985年まで、違反操業をめぐる他県漁船とのトラブルが続くこととなる。

1980年（昭和55年）資源保護及び漁場保全の観点から出されていた「オキアミ使用全面禁止」について、漁業者・釣餌販売業者・遊漁船業者・観光協会等の懇談が持たれたが、禁止に対し島内の合意は得られなかった。1985年（昭和60年）のサーフィンとの安全策の確立、1986年（昭和61年）スキューバ・ダイビング協会の設立、更には1988年（昭和63年）八丈島漁場利用憲章の宣言などの一連の流れは、従来漁業者の生活の場としての海が、漁業者だけのものではなくなりつつある出来事ではなかろうか。

国民の余暇時間の増大は、マリレジャーも活発化してきたが、海を汚さず魚類等を減らさず、しかも人命の安全を守るルールづくりが早急に求められている。

漁業においても、200カワの定着以降、「獲る漁業から作る漁業へ」の栽培漁業構想が推進され、トコブシの人工種苗の放流を始め、ギンタカハマ（1978年）アサヒガニ（1936年）等の人の手による生産試験も成果を上げつつある。また、漁業についても、資源を減らさないように漁獲する資源管理型漁業の調査が開始されている。

カツオ・ハマトビウオ等の回遊魚は、黒潮の動向が大きく豊凶を左右する、このため、海況把握に飛行機や人工衛星も活用する時代となった。しかし、平年 200万尾、良い年には 470万尾も獲れたハマトビウオが、6万尾（1986年）・9万尾（1987年）しか獲れておらず、不漁という言葉も使えない程の不漁となった1984年以降、既に7年を経過している。この間トビウオに適する海況の出現した年もあったが、トビウオ漁の復活はない。現在水試で行なっている不漁原因の解明調査は、トビウオの回遊路とみられる三陸から薩南諸島にまで及んでいる。

ハマトビウオは一つの事例であるが、これからの漁業対策は八丈島のみでの解決は困難で、広い視野からの情報を入手し、対応して行く時代となってきているようである。また、定置網漁業（1915年）・ウツボ鞣皮加工（1937年）・三重への活魚出荷（1969年）・水の無い水族館（1970）・鹹水蓄養殖施設稼動（1972年）・アオリイカ産卵巣設置（1978年）・など現在も話題性のあるものの、その後の進展が史料では出現しないものも数多く見受けられた。

以上が史料編纂を終った感想であるが、史料は読み手により、いろいろな読み方ができるはずで、是非読後の感想をお聞かせ願いたいものである。

終わりに、本史料の編纂に当たり元公立中学校校長葛西重雄氏、三根漁業協同組合小栗清吉組合長、八丈島漁業協同組合沖山明治郎組合長、八丈島測候所

井部良一元所長、東京都港湾局丸山了元離島港湾部長始め職員の方、東京都水産試験場八丈分場三木誠分場長及び職員の方、元八丈分場研究員大沢平四郎氏のご協力に深謝致します。

Publication of The Tokyo Metropolitan

Fisheries Experiment Station No.364

Memoir of The Tokyo Metropolitan

Fisheries Experiment Station No.203

平成3年3月

印刷物規格表第2類

印刷番号 3(3)

東京都水産試験場調査研究要報No. 203

八丈管内漁業関連史料

編集・発行 東京都水産試験場 技術管理部

〒125 東京都葛飾区水元公園1番1号

電話(03)3600-2871

印刷 原口印刷株式会社

〒101 東京都千代田区猿楽町1-5-19

電話(03)3291-8819